
~ Devil May Cry 《storys MID-CHILDA》 ~

k i d

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『 Devil May Cry 』 stories MID - CHI
LDA 』

【Nコード】

N1756J

【作者名】

kid

【あらすじ】

遂に始まる戦闘機人、悪魔、そして天使との戦い。込み上げるのは、奥底に閉じ込めたもの。蒼白の魂を黒に染め、真紅の魂は遥かなる高みへと誘う。受け継いだのは誇り高き魂。その手にあるのは一振りの剣と断ち斬る力。

S e c t i o n : ~ O u t l i n e ~ これまでの話 ~ (前書き)

本当の戦いの幕開けに、その産声は上がる…

Section:O〰Outline これまでの話

導きの元に…

「あの石!」

「どこだここ?」

辿り着いた世界…

「かんべんしてくれよ…」

出会った魔導士と騎士…

「あんたが俺に勝ったら連れて行くってのはどうだ?」

「いいだろう」

若き騎士ネロ…

「ネロだ…」

秘められた力…

「貴様… それは!？」

「こいつを使うとはな…」

悪魔の右腕…

「大したもんだよ…」

自分を必要とする者…

「お願いします… 力を貸して下さい…!」

「見てみぬフリなんてできねえんだよ…」

同じ血を持つ者…

「しっかり受け取れよ?」

最強の悪魔狩人…

「刺激があるから人生は楽しい」

彼らをつけ狙う者…

「あれがドクターのさがしもの…?」

「そうだよ…」

彼らの目的とは…

「バイバイ… 魔剣士さん…」

狩人を知る者…

「俺は魔剣士じゃないぞ」

人と悪魔の間…

「嫌な予感がする…」

その出会い、偶然ではなく必然…

「俺達は悪魔だ」

「お前は人間だよ。誰よりも人間らしいやつだ」

再会した《魔剣士の血族》…

「もつと力を…！」

叫び続ける魂…

「キリエを守る為の力を…！！」

物語は新たな局面へ…

S e c t i o n : O ~ O u t l i n e これまでの話 ~ (後書き)

さあ、これまでの話 (Magical Trigger 参照) のお
さらいですが、気長にお付き合い下さい。

Magical Trigger に書いた第二章の予告と、新小説
の予告を繋いで下さい。軽いネタバレ… みたいになってたんです
が、改変してしまいました。すみません。

では、次回まで。

S e c t i o n : 1 } U n h e a r d - o f 逸する存在 } (前書き)

更なる飛躍と共に、二人の狩人は新たな一日を向かえる…

Section: 1 Unheard-of 逸する存在

蒼の空の遙か上。朝日は昇り、雲の切れ間から朱の光を照らしていた。

「あゝ…にしても、昨日は大変だったよね」

「あんた、本当に大丈夫なの？」

「何が？」

その光に照らされながらも早朝の訓練に向かうスバルとティアナが話していた。

「何がじゃないわよ。悪魔の中に飲み込まれちゃったし…」

「平気平気！ ちょっと危ない目にあっただけど、ダンテさんに助けられたし！」

キョトンとした顔でいるスバルに少し眉をひそめながら言うティアナ。

だが、スバルの体に何処も異常はない。彼女はそう言いながら左肩を回す。

「それに、ネロさんに…」

——ドンッ！！！！

ティアナに心配させまいと喋っていたスバル。

彼女はネ口の話題を出した所で少し顔を俯かせてしまいが、突如として聞こえて来た音に反応し、

「え？」

「なに！？」

そちらに顔を向ける。

そこにいたのは…

「……ネ口…さん…？ 何やってるんだろ？」

ネ口だった。緑の葉が生い茂る木の幹に叩き付けた右足を下ろしながらも、彼は悪魔の右腕を露にし、左手に鞘に納まったままの閻魔刀を握っている。

不意に口を開いたスバルとは対照的に何も言わないティアナ。

「あの… おはようございま…！」

「シッ！！」

一度、心の準備をしてから挨拶しようとするスバル。
しかし、彼女が言い終わる前にネ口は鞘から刀を抜き、

「……す…」

落ちてくる葉を斬り裂く。

「あの…」

スバルはまだ声を掛けようとするが、ネロ自身は舞い落ちる葉を凄まじい剣捌きで次々に斬り裂き続ける。

そして…

「…おはようございます」

舞い散る葉が無くなり、一度刀を振り払った後に鞘に納め、振り返ったネロにスバルは景気よく挨拶する。

「……………おはよう……………」

彼も少し間が空いてから静かに言葉をかわし、右腕に閻魔刀を吸収すぐにその場を去ろうとする。

「デバイスの方はどうなったんですか？」

「パーツが足りないし、大体、一晩じゃ無理だつてさ。直すのと強化するのにまたかかるってよ」

自分達の横を通りすぎるネロの背中を見送りながら、『あゝ…やっぱり…』と言うカンジにスバルが苦笑する。

「あ！ これからの朝の訓練が…」

「気乗りしないから止めとく」

「いや、それだとなのはさんに…」

これからまさに早朝の訓練が始まるうとしているのだが、ネロは適

当な口実を言い、その場から去ろうとしている。
だが、スバルの隣にいたティアナが駆け出し、

「…何か用か？」

早速、歩きながら右腕に包帯を巻く作業をしていたネロの前に来る。

「無いんだったら…」

「昨日は…」

束の間の沈黙を破り、バツの悪そうな顔をしたネロは歩き出そうとするが、ティアナは彼を直視出来ずに口を開く。

「スバルを助けて頂いて… ありがとうございます…」

彼女の言っている事が何かは分かるが、ネロは小さく息を吐き、

「その礼はダンテに言えよ。俺はあいつの魔力を頼りに動いて、悪魔に斬り掛かっただけなんだから…」

「記録映像を見ました」

礼ならば悪魔に飲み込まれたスバルを救い出したダンテに言うべきだと気だるげに言う。

しかし、ティアナは喋るのを止めない。

「悪魔に飲み込まれそうになったスバルを助けようとしたり… 私達が隠れている建物を守ってくれていたのも…」

「……止める……」

「スバルの怪我を直す為に無茶して… その時に…」

「止める…!!」

ボソツと言った一度目の言葉はティアナに聞こえていなかったが、二度目の言葉は流石に聞こえる程の声だった。

「助ける事も出来なかったやつに礼なんか言っな」

昨夜、ネロはナイトメアの核を拳で打ち抜き戦闘は終了した。だが、ナイトメアの最後の抵抗で彼は腹を抉られてしまい負傷。怪我は僅か数分で完治。

「俺みたいなのやっなんか…」

たかが“あの程度”の悪魔からスバルを守る事が出来ず、ダンテの力を借りた情けない自分に… 再び歩き始めるネロ。

一歩一歩、《悪魔》に近付いている自分に、それでも彼女達は頭を下げていた…

…

「あ、もういいんですか？」

「ああ」

デバイスルームに戻って来たネロに声を掛けるシャーリー。
夜通しでデバイスを弄り、分解、解体したが、更なる問題が発生していた。

「流石にここじゃどうにも出来ませんよ」

また壊れてしまったレッドクイーンのエンジン部分を弄り始めたネロに呆れた様子でいるシャーリー。

「レッドクイーンの修理と強化」

テーブルの上には焼き付いてしまったレッドクイーンの燃焼機関と一体化している柄と、

「ブルーローズの“傷んだ銃身”の修復と強化は本局じゃないと」

分解されているブルーローズがあった。

「簡易デバイスなんですから、魔力砲撃が撃てるようにまで改造してなかったんですよ？」

昨日の昼間での戦闘。そこでネロはなのは程ではないにしろ、スバルが使うデイベインバスターよりは強力な砲撃を撃ち出した。

「まあ、これを機会に何とかしますけど…」

昨夜にまさかと思い、シャーリーが解析してみた結果、ブルーローズの銃身内部に亀裂が生じていた。
破損した後、単純な魔力弾を撃つくらいだったから問題なかったが、

また魔力砲撃を撃っていたらレッドクイーンと同様な事になっていたかもしれないらしい。

「AI機能は着けません、部隊長がバリアジャケットの装着機能は着けるようにって… あれ？」

顔に手を当て、はやてに頼まれた事を愚痴っていたシャーリー。だが、彼女は指の隙間から見たものは、一切手をつけられていないネロの夜食（夕食）。

「食事… しなかったんですか？」

「いや」

「でも、一口も食べてないんじゃない？」

シャーリーが声を掛けた時に『後で食べるから先に食べる』とネロは言い、壊れた剣と銃をただ弄っていた。

今更気付いたのだが、シャーリーは昨日の昼から一切食事をしていないネロに目を向ける。

そんな彼の口から発せられた台詞は…

「さつき、水飲んだよ」

外から今いる部屋に戻って来る最中に口にした物を何気なく言う。

「それ、食べたじゃなくて飲んだって言うんじゃない…」

「一緒だよ」

若干、顔が引き吊るシャーリー。

ネロはブルーローズを手に取り、銃身の内部をライトで照らしながら覗き込む。

そして彼女は小さな溜め息を吐き、

「…別に変なものなら入ってませんよ?」

もしやネロは食事の中に何か混入され、警戒しているのではないか。そう考えたシャーリーが彼女なりに勇気を出して言うが…

「そんなのが怖くてやってられるかよ。変なもんが入ってるって考えたら、ダンテに食わせてから食うよ」

「え?」

鼻で笑うネロがブルーローズをテーブルに置きながらそう言う。

彼の言っている事は、ダンテを実験に使うと言う事なのだろうか。シャーリーが不意に声を出すか、

「いや、鼻で嗅ぎわけてもらうか…」

「鼻?」

「あ! いた!」

ハッと思い出したネロの言葉をもう一度聞き返してしまった。

その所で丁度ドアが開き、フェイトとシグナムの二人が入って来る。

「フェイトさん、シグナム副隊長。おはようございます」

きつちりと挨拶するシャーリーに二人も軽く挨拶する。

「部屋には戻らなかったようだが、ずっとここにいたのか？」

「そうだ」

聞いて来たシグナムに向けて、ネロは包帯を巻き、グローブを着けている右手を頬に当てながら応える。

「食事もしていないようだが…」

「水なら飲んだ」

ネロはポーカーフェイスだが、これ以上話しても無駄だと察し、シグナムは溜め息を吐いた後に次の話題を出す。

「これから早朝の訓練…」

「行かない」

シグナムが喋り終わる前にネロは即決な意見を出す。

「だが…」

「イヤだ」

昨日の事が原因で、ネロは妙に態度が悪いが、今度はフェイトが声を掛ける。

「ネロ。昨日も言ったけど、気にする必要ないよ。みんなビツクリ

してたけど、時間が経てば…」

「時間って、2000年くらいか？」

言った瞬間に、その部屋は気まずい空気に包まれる。

「いや…」

「それよりもお前に頼みがある」

フェイトでもお手上げ状態になってしまいが、またしてもシグナムが入り込む。

「頼み？」

「そうだ」

今のネロからはやる気が感じられないが、シグナムが持ち出した話とは…

「ダンテを起こすのを手伝え」

そう言う要望だった。

「斬り掛かればいいだろ」

「ちょっと！」

平然と言っのけるネロに慌てるフェイト。

その後…

『シグナム…』

『なんだ？』

訓練場に向かうフェイトと、ネロと共にダンテが寝ている部屋に向かうシグナムが念話で話す。

『もう少し、ちゃんと話した方が良かったんじゃないですか？』

『仕方あるまい。今のこいつは聞く耳を持たんだろうし、既に昨夜、実証済みだ』

「この部屋だ」

そうこう話している内に、二人はダンテが借りている部屋の前に辿り着く。

「ダンテ。入るぞ」

シグナムが一応は声を掛けてからノックしようとするが、その前にネロが速攻でドアを開け、中に入る。

「起きる時間だぞ…」

駆け足で眠っているダンテに近付きながら、ネロは拳を固く握り締め、グローブの皮が軋む音を立たせ、

「クソ野郎！！」

ダンテの顔面に叩き付けた。
眠っているダンテの顔は枕に沈み込み、反動で体と布団の方が一瞬だけ浮き上がる。

「おい！ 何をやって…！」

「…坊やか…」

止める事が出来なかったシグナムがすぐに駆け寄るが、ダンテはネロの腕を掴み、払い除ける。

「いま何時だ？」

「朝の5時だよ」

「あと4時間は寝かせろ。俺は夜型なんだし…」

「もう十分寝ただろ？」

ネロの額には青筋が浮かび上がっている。

ダンテが『年頃の男の部屋に大人が入るものじゃない』『ベッドの下にポルノ雑誌を隠しているだろう』と言ってはやてから無理に違う部屋を借りたとシグナムがネロに話した為だった。

実際にダンテはそう言ったのだが、うだつの上がないネロを動かす為とは言え、思いの外に発破を掛け過ぎたらしい。

その日、凄まじい騒動と共に機動六課の一日が始まった。

これから始まるであろう戦いが、刻一刻と迫っているとも知らずに…

…

「それじゃあ、次は…」

フォワードメンバーに指示を出しながらも訓練をしていたのは。彼女の隣にはヴィータとフェイトもいるが、遠くから聞こえて来た音に喋るのを中断し、

「え？」

「何の音だ？」

そちらに注目する。

そこから彼女達に迫る影が一つ。

「うらあああっ！！」

いや、二つ。

「ネロ！？」

突如として飛び込んで来たのは、ダンテとネロ。

声を上げたフェイト達の前を二人は通りすぎ、素手による取っ組み合いが始まる。

「ハハッ！ 相変わらず血の気が多い奴だな！」

「ほざいてろ！！」

二人とも下の服は一緒だが、ダンテは上着は着ていない。

「え！？　ちょ、ちよつと二人とも！」

「テストロッサー！」

「シグナム！？　一体なにが…」

ネロの凄まじい拳と蹴りを捌き、時にはぶつかりあうダンテに慌てる皆の所にシグナムが駆けながらやって来る。

「いや…」

「おらあああつっ！！！」

「昨日、ダンテが言った事をそのまま話したんだが…」

シグナムがやたらとフェイトとなのはから目を反らすが、巻き上がる土の欠片と砂埃が飛んでくる。

「死ねええええっっ！！！」

「それ、不味かったんじゃないの？」

物騒な言葉を吐き捨てるネロを見た後に、ヴィータが冷ややかな目でシグナムを見る。

「どうも煮え切らなくなっていたから…」

「元気付けるところか、逆効果ですよ？」

トドメとばかりになのはも加わる。

だが激しい音が止み、目を向ければネロの両足が掴まれ、ダンテに振り回されていた。

「坊や！ 最初に食らったキックの方が効いたぞ！」

勢いは増し、ネロも抵抗しているがダンテの束縛からは逃れられないでいる。

「止める！！ ネロは先ほど外れた肩を入れたばかりなんだぞ！！」

「「ええっ！！？」」

「肩が外れたんですか！？」

「ああ。左肩だったが、自分で入れた」

「自分で！？」

シグナムの張り上げた声に反応し、驚きの声を上げるエリオとキヤロ。二人の隣にいるフリードがやたらと唸っているが、聞いて来たスバルに即答。

「隊舎の中で一悶着あつてな。すぐにはめたが、あいつでも苦悶していた。いい加減にしろ！！」

次に聞いて来たティアナにも応えながらも、止めようとするが、その瞬間にネロはダンテから解放。

「ネロ！！」

「ちっ！」

フェイトが声を出す、彼は両手に魔力を集中させて《エア ハイ ク》を展開。それを足場にして体勢を立て直す。

「やるな」

「あんたに誉められても嬉しくないね」

ダンテが口笛を吹いた後に言うと、ネロは嫌そうな顔をした後に飛び掛かるうとする。

しかし、彼の前に空を切る音と共に銀色の物体が割り込み、邪魔されてしまう。

「気分も乗ってきた事だし…」

大きく弧を描き、その物体はダンテの手に飛び込んで来た。

「眠気覚ましに遊ぼうぜ。坊や」

銀色の物体の正体はダンテの愛剣リベリオンであった。

彼はそれを肩に担ぎ、ネロを見据える。

「遊びじゃない… 真剣勝負だ」

「ああ、そうかい。じゃあ真剣勝負って名前の遊びやろうぜ？」

肩にある包帯の結び目をほどき、露にする悪魔の右腕から閻魔刀を出現させるネロに向けて、ダンテはふざけながら喋り続ける。

「おい!!」

「ほざけ… 第3ラウンドだ…!」

シグナムの静止も聞かず、ネロが構える。

「そうだったな…」

「ネロ、止めて!! ダンテさんも!!」

「止めるなよ姉ちゃん」

ダンテは思わず笑みが零れ、剣の切っ先を地面に突き刺し、柄の部分をネロが使うレッドクイーンのカリツプのようになねる真似をする。フェイト達が止めようとするのも聞かずに、彼はまた笑ってみせた。

「…前に言つてたな…?」

距離を取り、抜き身の閻魔刀を向けられているダンテが唐突に口を開く。

「コイツは飾りじゃないんだろって?」

それは、一年前の事。ネロがダンテに向けて言つた言葉であつた。その言葉を聞き、ネロも口を開く。

「違ふんだろ」

「ああ、違ふ」

ダンテは地面から剣を抜き、切っ先に着いた土を振り払い、なおも喋り続ける。

「…コイツは俺の魂だ」

またしても肩に担ぎ、ダンテは自分の魔力を体現化している父親の形見の剣を誇らしげに語る。

「言い方を変えれば…」

そしてようやく構え…

「お前にとつての閻魔刀だよ…！」

二人の剣が火花を散らした。

…

そこから僅か1分足らず…

「あー…」

周りの木は薙ぎ倒され、地面の土は激しく抉られた跡がある中で、俯せに倒れ、右腕に閻魔刀を吸収されるネロにダンテは目を向けずに言い、

「…シヨボいな」

背中にリベリオンを背負い、六課の隊舎に向けて歩き始めた。

「うそだろ……」

声を漏らしたヴィータの隣を通りすぎるダンテ。

彼女は驚愕していた。何せ自分を素手で打ち負かした男が手も足も出せずに得体の知れない男に負けたのだから。

「ネロ!!」

「メシ、食って来るよ。坊やのせいで腹が減ったし」

倒れているネロに駆け寄るフェイト達に軽く手をヒラつかせるダンテ。

その背中を見送るのはもネロの所に行くが、彼女は気付いた。倒れているネロが右手の中指を突き立てている事に。

…

「さうて、今日も張り切って行こか」

「はいです。はやてちゃん」

廊下を歩くはやてと宙を浮くりインが己に活を入れながらも朝食を取りに食堂にやって来る。

「昨日の報告書は書くの大変やったけど、これからも忙しくなりそ

うやし… あ！

ようやく食堂に着いたのだが、彼女の目に飛び込んで来たのは、銀色の髪。

「ダンテさ…！」

景気よく挨拶しようとするも、彼女は絶句してしまう。
何故なら…

「ピザ出せよピザ。部隊長の嬢ちゃんに聞いてるだろ？ 腹減ってんだよ」

上半身裸のダンテが料理を受け取る場所でスタッフに文句を言っていたのだから。

「オリーブ抜きをやつだよ。あと、ストロベリーサンデーとジントニックも…」

「ダンテさん…！」

「おお、ちっこい嬢ちゃんと妖精の嬢ちゃんか。おはよう」

はやての声に反応してそちらに顔を向けると、ダンテは軽快に挨拶した。

「何しとるんですか！？」

「何って朝メシを… 嬢ちゃん、部隊長なんだろ？ 言ってやってくれよ」

「その前に服を着て下さい!!」

まるでその格好を気にする気配もなく言うダンテ。

彼に向けてはやてが顔を赤くしたまま言うが、当の本人は平然としている。

「なんだ？ 坊やの裸は平気なのに、俺みたいな大人の裸は刺激が強すぎるか？」

「そう言う問題とちやいます!! 服を着て下さい!! それと、あれは別にそう言うつもりで見てたんやのうて…とにかく!!」

昨夜に髭を剃ったらしく、無精髭の無くなった顎を触るダンテに詰め寄るはやて。

これ以上話しても無駄としか思えずに彼女は強行突破しようとする。

「早く部屋に戻って下さい。今のままだと、犯罪者の仲間入りになってしまうんで…」

顔に手をあて、我を落ち着かせようとするはやてと彼女の隣にいるリン。周りの人間を見たダンテは小さく息を吐き、借りている自室に向かう。

「分かったよ。そんじゃ、後でな」

手をヒラつかせ、マイペースに歩くダンテを見送り、溜め息を吐くはやてにリンが寄り添う。

「大丈夫ですか？ はやてちゃん」

「あー… 平気や。朝からバテるのは御免やしな…」

次第に遠くなつて行くダンテの姿。

彼とすれ違う人間は色んな意味で驚いていた。

（部隊長やってても、やっぱり中身は嬢ちゃんだねえ…）

頭の後ろに手を回し、物思いにふけるダンテ。

彼女達は知らない。彼が嘗て、素肌にコートを着るような服をマイブームとしていた事を。

それも若気の至りか、正式に便利屋を始めた頃に止めたのだが、ネロや六課のメンバーを見ていると若い頃に戻ってみたいになっていた。

…

「…いま、何て言いました？」

ちゃんと上着を着てはやてやフォワードメンバー達と食事を取っているダンテ。

「え？ 何が？」

聞き返して来たはやてに目だけを向け、ひたすらにピザを食べるダンテ。

彼は訓練場に残っているネロ以外のメンバーと食事をしながら何気なく会話していたのだが、そこでピザと同様に朝からどうかと思う

ジントニツクを飲み、はやてを見る。

「ですから…」

はやてはそこで一度区切り、

「…お母さんは人間なんですか？」

「そう言っただろ」

躊躇いつつも聞く。

しかし、その事をダンテはまたピザを食べながら応えた。

「いや… 言いましたけど…」

「悪魔の父親と人間の母親の間に産まれたって」

他のメンバーは完全に絶句しているが、この二人以外に今のところ喋ったのは挨拶したスバルと、聞きたい事があると話を持ちかけたなのはとフェイトだけ。

「…なんだ？」

食堂が完全に沈黙に包まれているが、ダンテは視線に気付いて顔を上げる。

いや、椅子に凭れ掛かりながら食べているが、天井を見上げていた状態からパツとはやて達を見た。

「その…」

「びつくりしちゃって…」

「なんでだよ？」

何とか口を開いたフェイトとなのはに問い掛けるダンテ。

「昨日、ちゃんと話しただろ？」

「そうですね…」

『どないしょ、みんな…』

何故、驚いているのか分からないダンテ。
彼に向けて引き吊った作り笑いをするはやて。

『私、“悪魔の血を引いてる人間”やのうて、“スパイダの血を引いてる悪魔”やと思うとった…』

『はやてちゃんも…？』

『あれ… なのはも？』

念話を使い、今更ながらの事をなのはとフェイトと話すはやて。

『フェイト隊長もですか？』

『あれ？ エリオも？』

『私もです』

念話に加わるエリオとキャラ。

『あー… みんな、そうやって解釈しちゃったんだ…』

『あんたはどうなのよ?』

『え? 私?』

スバルに向けて念話を飛ばすティアナ。
彼女からの問いにスバルは…

『…みんなと同じ』

『でしょうね? あんな話じゃ、そう思うわよ。大体、昨日話してくれた時は、母親は人間だなんて言わなかったんだし…』

『ティアアは?』

『私も一緒よ』

思わず苦笑するスバルに呆れるティアナ。
話を聞いて、自分はどう解釈していたのかと言う問いに顔色一つ変えずに応える。

『未知の魔導生物と… 人間の間に産まれた存在と言う事か…』

『そう言う事だな』

「おい! メシ食ってるんだし、盛り上がるうぜ。朝はちゃんと食っておかないと、一日は元気出ないって言うしょ? 坊やはどうした?」

結論に結び付いたシグナム。

なのはやフェイトから昨夜聞かされた事を思い出す。

“半魔”…

スカリエツティがモニター越しに言ったセリフである。

『人と… 悪魔の間にいる存在…』

彼女の隣に座るヴィータが腕組みしたまま朝からテンションの高いダンテを見詰めていた。

はやての前でテーブルに乗っているリインが一人考え込む。

「あの、ネロはまだ訓練場に… 一人にして欲しいって…」

「またか？ … ったく、これだから今の若者は分からないんだよ」

静寂を破り、フェイトが教えるがダンテは呆れたように背凭れに身を任せた。

「昨日のやつで塞ぎ込んでんのか… それとも…」

傾いた椅子の脚が派手な音をたてて地面に着く。

それと同時にダンテはテーブルに頬杖を突いて皆を見る。

「嬢ちゃん達がおっかないのか…」

「え？」

「私達が… ですか？」

「ああ」

思わず声を出すはやてとなのは。
そんな彼女達を見ながら女運の悪いダンテは次々に指摘する。

「いきなりぶつ放して来る嬢ちゃんだろ？」

「私ですか？」

まず指名されたのはティアナ。

昨日の地下道でレリックを持っていたダンテに彼女は魔力弾を撃っている。

結果は命中していないが。

「そっちのドラゴンも… そいつ、雌か？」

テーブルから覗くキャロの足元にいたフリードを見るダンテ。

フリードは雌かどうかはさておき、ダンテは昨夜噛まれたうえに振り回されてしまった。

「まあ、結構楽しかったけどよ…」

「キュッ…」

フリードの顎力を容易く上回る腕力だけで彼は抜け出し、噛まれた時の傷は再生能力で瞬時に癒えている。

ダンテに警戒を止まないフリードは小さな唸り声を上げて睨んでいた。

「…で、極めつけがそっちの二人な？ 斬り掛かって来た姉ちゃん

とハンマーで殴り掛かって来た嬢ちゃん」

「あれは仕方ねーだろ」

最後に指されたのはシグナムとヴィータだった。

ヴィータは昨日の昼間と夜に一回ずつ、シグナムは夜に一回ダンテに攻撃を仕掛けている。

「一回目のも危ねえけどよ、二回目のはなんだよ。俺だって分かれよ」

「分かんねーよ!」

「よせ、ヴィータ」

若干苛つき始めたヴィータをシグナムが制しながらも話は続く。

「能無しで掃き溜めの悪魔が普通、怪我してる嬢ちゃん助けるか？
助けないだろ？ あいつら、暴れる事しか考えてない魂も持たないバカなんだから」

悪魔の事となるとトコトン悪く言うダンテ。

「……まあ……」

そこで彼はまた天井を見上げ、

「眉間に弾、ぶち込んだり… 腹、撃つたり… 剣で刺して電撃、喰らわすのよりはマシか……」

今までの実体験の事と比べれば、“大した事はない”と自分を慰める。

「え…」

「あと、転んだ嬢ちゃん心配して近付いたら蹴り、喰らったり…」

それは女性ではなく、“男”にやられたのだが…

「坊や、何処にいるって？」

唐突に口を開き、脚組みしながらもダンテは聞く。

「…思ってたんですけど、なんでネ口を“坊や”って呼ぶんですか？ 私達の名前もちゃんと呼ばないし…」

「あいつ、ちゃんとメシ食ってるのかよ？」

聞く耳を持たないので、仕方なくフェイトはネ口のいる場所を教える。

「昨日から何も食べてないみたいですが… 場所なら外に出てから右です」

「どうもな」

「昨日みたいに無理に連れて来ない方が…」

取り敢えずは訓練場の場所を教え、椅子から立ち上がるダンテを見ているフェイト。

だが、彼は食事を適当に皿に盛り、食べかけのピザを持つと…

「いや、今日は空の下で悩める10代と語ってくる」

そう言い、ダンテはフェイト達にウインクすると、颯爽とその場から立ち退いてしまった。

Section: 1 Unheard-of 逸する存在 (後書き)

第2節予告

talking: シグナム

何気なく聞いてはみたものの… ダンテは半分は人間、半分は悪魔
と言う事が…

“あの姿”に至っては、完全に…

まあ、それよりも… 度が過ぎたな。ネロにありのまま伝えたのは
不味かったか。外に出ていないのだから、部屋にそのようなものが
あるワケもないだろう。

大体、騎士がそのような物を… いや、すまん。“騎士”ではなく
“狩人”だったな。

しかし、普段は澄ましているお前もダンテには容赦ないな…

Section: 2 } Loneliness Black cat 孤独な黒猫

ある赤ん坊が拾われたのは、雪の降る寒い朝…

黒い布にくるまれていたその子は、名前をつけられた…

NERO（黒）と言つ名を…

片手にピザ、片手に料理が盛られた皿を持っているダンテ。

彼は少し先で地面に座り、胡座をかいているネロを見ていた。

（さて、どうするか…）

ガラにもなく考え込むが、そうこうしている内にネロのすぐ後ろにやって来る。

（考えても仕方ないし…）

取り敢えずは行動するべきと思い、彼は声を掛けようとした。

「よう。坊…」

「何しに来た」

しかし、言い終わる前に割り込まれてしまふ。

（…またこれかよ）

「何しに来たじゃねえだろ。一人ぼっちのお前の為に俺がわざわざ朝メシ、持って来てやったんじゃねえか」

つくづく分からない奴だと思い、呆れて溜め息しか出ないダンテ。

彼はそう言いながらネロの隣に座りながら地面に皿を置き、腰に突っ込んでいた酒の瓶を置く。

「そんなの頼んでないね」

「ああ。だから俺が勝手に持ってきた」

右手を見詰めていたネロ。彼はその拳を握り締め、ダンテからそばを向くように地面に寝転がる。

「まあ、持ってきたワケだが… 食べ」

「いない」

背を向いて寝ているネロを見ていたダンテがフツと笑い、ピザを一片取るとネロに差し出した。
だが、彼は率直に断る。

「おいおい。食わないと力が入らないぞ？ それとも、腹が減つたのを俺に負けた理由にする気か？」

そう言うと、ダンテは手にしていたピザを食べ始める。

束の間、沈黙が続くが…

「どうだ？ 最近の調子は？」

唐突にダンテが喋り始める。

「…何がだ？」

「色々」

ネロは未だに顔を向けないが、彼がボソリと言った言葉もダンテは

即答する。

「体の調子もそうだが… 便利屋の方は？」

「もう話しただろ」

「まあ、そうだが…」

まず世間話から始めようとするダンテ。そんな彼に向けてネロは無愛想に返すと、またしてもダンテは短く笑って話を続けた。

「先月はどのくらい稼いだ？」

まさかの収入の話。何やらネロが首を少し傾げて右手の指を折っている。

彼が何と言うのかダンテが期待していると…

「…………… 700ポンドくらい」

「少なえな！！ おい！！」

聞いた瞬間にダンテが吹き出し、彼の笑い声が響き渡る。それにネロも苛ついたのか、流石に上体を起こした。

「じゃあ、あんたはいくらなんだよ！！」

「ハハハ… ああ… 俺？」

ネロが思わず右手の拳を握り締め、ギリギリとグローブの皮が擦れる音を鳴らす。

ダンテも腹を押さえて爆笑している自分を落ち着かせ、酒の入っている瓶を一口飲んだ。

「あー…俺はだなー…」

無精髭の無くなった顎を触りながらも記憶を探るダンテ。彼がなんと応えるのかネロは待っていたが…

「……300だ」

あり得ない数字が出てきた。

「…え？」

「だから300ドルだよ」

ダンテの言っている意味が分からずにネロは思わず聞き返してしま
うが、ダンテの先月の収入は「300ドル」らしい。

「…悪い。聞き間違いだよな？ いま、あんたが先月は300ドル
しか稼いでないって聞こえた気がして…」

「だからそうだって」

「おい!!」

ネロがそれはあり得ないと言わんばかりに首を振りながらダンテの
肩を左手でポンポンと叩きながら言うが、ダンテは「耳の調子も悪
いのか？」と言いたげな顔で応えた。

その瞬間にネロが思わず声を上げてしまい、近くにいた鳥たちが一

斉に飛び立つ。

「ヤバすぎるだろ!! 300!?!」

「ああ」

「甲斐性がないにも程があるだろ!!」

つい我を忘れてしまうネロ。そんな彼を見ながらダンテは不敵に笑ってみせる。

「そんなに誉めるなよ。照れるぜ?」

「誉めてねえよ!! つか、なんで照れるんだよ!?!」

ガクガクと揺さぶられながらもまだ顎を触っているダンテ。彼の考えが全く分からないネロが更に疑問の声を上げた。

「いいじゃねえか。ちなみに悪魔は何体くらい倒した?」

「話、逸らすなよ!!」

「何体?」

ネロの腕を払い、またピザを手に取りながら聞くダンテ。いくら言っても空を切り、ネロが小さく溜め息を吐いた。

「……………先月は外界に出た時に10くらいとフォルトウナで50くらいだよ…………」

「なるほど」

その応えを聞き、ダンテは納得するように頷いた。

「儲けは外界の仕事の分か？」

「まあな… 旅費で減ったけど、取り敢えずは… あんたは？」

「俺は…」

先日、「街の住人から金を取れるか」と言っていたから収入は外界からの仕事だと察するダンテ。
ネロは水平線を見詰めていたが、ダンテの方に顔を向ける。

「あー… っと…」

暫し考え込むが、

「数えてない」

「え？」

自分から聞いて来たくせに返答は「数えてない」だった。

「一々数えてなかったんだよ」

「なんだよ、それ…」

呆れるしかないネロ。

そうしていると、ダンテはピザの盛っている皿をネロに差し出して

来た。

「食えよ」

その食べかけのピザは、元は結構な大きさだったのだろう。皿自体は大きい。察するにラージサイズ。

「ほら」

だが、もやは残りほ3欠片しかない。そのような物を出されてネロも少し考え込むが、一つ手に取り食べてみる。

「……うまいな……」

「だろ？」

小さく呟いたが、ダンテには完全に聞こえていた。

距離も近いのだが、ダンテは水平線を見渡しながら酒を飲む。

「……ピザって、こんなのなんだな」

唐突にネロが言う。

「食ったのはじめてか？」

「いや、食った事はあるけど味も具もシヨボいし……」

ネロはピザをはじめて食べたワケではなかったが、彼の故郷は外界とは遮断された島……大陸湾岸部にある城塞都市だった。

ピザをまじまじと見ているネロにダンテはまた声を掛ける。

「お前、ピザ発祥の地のすぐ近くに住んでんだろ？」

「そうだけど、フォルトウナって完全に独立した島だし、外界から物資が入って来てる最近でも田舎……」

今までお前は本当のピザを食べていなかったのかと言うようにダンテは顔をしかめるが、話していたネロも突然、喋るのを止めてしまう。

「……なんだ？ どうした？」

「いや……」

とにかくダンテは聞いてみた。
ネロはまた遠くを見詰めてしまう。遠い目をしながら……

「まだ…… 街も壊れたままだったの思い出してな……」

自嘲気味に笑い、またピザを一口食べる。

「……」

また沈黙してしまう二人。

「…………… 475人……………」

しかし、唐突にネロが口を開いた。
ダンテもネロの方に顔を向ける。

「一年前の“救済”の… 死者と行方不明者を合わせた数だ…」

話を続けながらもネロはまたピザを一口食べた。

「ただでさえ1000人もいなかったのに、教団の… 頭のイカレた教皇のせいで…」

食べたピザを飲み込み、再び口を開いたネロ。

「俺がへマしたせいで…」

「坊や」

遠くを見据えながらも拳を握り締めてしまいが、ダンテが割り込む。

「もし… 責任を感じてるんだとしたら… そいつはお前のせいじやねえよ」

ダンテはネロを見ていたが、彼が顔を向けた頃にはダンテは海の方を見ていた。

「お前が最初に言った… 下らねえ夢見てた爺さんのせいだし…」

喋るダンテをネロは黙って見詰める。

「俺にも責任があるし…」

小さく息を吐き、今度はダンテが自嘲しながら笑う。

「相棒がよ？ スパーダ持ち出して、教団を探る為とはいえ渡しち

まっ たからな」

またフツと笑うダンテの横顔を見ていたネロ。

「…グロリア…… だっ け？」

「いや、そいつは教団に潜り込んだ時に変装してたあいつの偽名だ。本名はトリッシュ」

記憶に残っていた「グロリア」の名前を出すネロ。

しかし、ダンテは彼女の本当の名は「トリッシュ」である事を話すと、思い出したように笑い始める。

「そっ さいや、お前が捕まった時には変装止めてたんだな」

ネロは、“神”に捕まった時にダンテの隣にいた長いブロンドヘアの女性の事を思い出していた。

「えつ と… 黒いレザーのビスチェとパンツ着てた…」

「ああ、そいつな。イケてるだろ？」

「トリッシュ」と「グロリア」は似ても似つなかないと思うが、それこそがまさに“変装”と言うものだ。

「そっ くだな…」

「グロリアの方も？」

どちらもフォルトゥナには不似合いな格好だと考えていたネロ。

因みに「グロリア」の方が非常に場違い… 言い換えれば露出の多すぎる“破廉恥”な格好なのだが、その事を思い出してしまいながらもネロは適当に返す。

しかし、「あっちの方が良いだろ？」と言うようにニヤニヤしながらダンテがネロを見た。

「…」

「似合ってただろ？」

ネロは蔑むような目をしているが、ダンテはその時のグロリアの格好を思い出しながらにやける。

「どうかしてるやつとしか思わなかったよ」

「みたいだな」

呆れながら溜め息を吐くネロにまた不敵に笑うダンテ。

「やたらと顔を背けながら右腕を隠してたって言ってたよ。あいつ曰く“信心深い土地で目立ち、尚且つ相手の裏をかく格好”だよ」

「あつそ」

ネロは舌打ちし、特に興味もなく言う。

「……………お前さ…」

また暫く沈黙が続いた後にダンテが口を開く。

「孤児らしいな」

「そつだよ。なんで知ってる」

「トリツシュからお前は“身寄りのない孤児院出身”だつて聞いたし…」

藪から棒に聞いて来たダンテにやる気なく応えるネロ。
この情報はトリツシュが魔剣教団に潜入した時に仕入れたものである。

ダンテを追跡しているネロと言う若い騎士は“扱いにくいはみ出し者”だと聞かされ、ついでに色々と聞いていた。

「教皇の爺さんが言つてたよな？ “銀髪の男がこの土地で女を孕ませてお前が産まれた” って」

「ああ… って、何でそれも知ってたんだよ？」

取り敢えずは返事をしたものの、何故それを知っているのかネロは疑問に思った。

一年前にネロは教皇と戦っている時にキリエを人質に取られ、そこで“神”に捕まってしまった。その時に教皇は「今から１７年前に刀を持った銀髪の男に会った事がある」と話している。つまりは今から１８年前… ネロが孤児院で拾われる約一年前。

その時は「下らない話だ」とネロは思ったのだが、どうしてそれをダンテが知っているのかネロには分からなかった。

「いや、なんでって… 後ろでトリツシュと一緒に見てたから…」

「いつから？」

「最初から」

ダンテは軽く肩を竦める。

「最初…」

「なんだっけ？ お前が教皇の爺さんに言ったセリフ？」

ネロが顔をヒクつかせるが、ダンテがまたニヤニヤしながら聞く。

「確か… “Go blow…”」

「それ以上言ったら、ブチ殺すぞ！！」

思い出すのも嫌になるが、ネロは全て言われてしまいう前にダンテの胸ぐらを掴んだ。

「あれ、ノリか？」

「しょうがないだろ… あの時はその時だったんだし…」

顔が赤いネロをダンテは口の端を吊り上げながら見ている。

やはり、若気の至りは誰にでもあるものだ。とダンテは思った。

「まあ、気にするな。俺は気にしないから」

「こっちはするよ…」

さっきからダンテが笑ってばかりだが、そんな彼を見たネロはまた

遠くを見ながら話を続ける。

「あの時にクレドも死んじまったし…」

「騎士長の… “ 帰天 ” してたやつか…」

自分のせいで兄同然の男を死なせてしまったと感じているネロの言葉を聞き、彼の最後を見届けたダンテもクレドの事を思い出していた。

「……………なあ……………」

すると、徐にネロが問う。

「クレドは… 死んだんだよな…？」

「ああ」

クレドの最後を見届けていないネロは、彼が帰って来ないと分かっているにも信じられないでいた。

だが、クレドの最後を見届けたダンテはありのままに話す。

「俺とトリッシュに見送られながら…」

「…そうか」

ありのままの真実を聞き、改めてクレドの死を受け止めるネロ。

「……………あいつがさ……………」

“神”に取り込まれたネロは知らないが、ダンテは彼に…

「言ってたんだ…」

託された…

「お前”と”キリエ”って嬢ちゃんを頼む… って…」

「クレドが…？」

光の粒子となり、消え行く中でもクレドは自分の妹であるキリエと、弟同然のネロを救うようにダンテに頼んだ。
その“遺言”と言う名の“依頼”は果たされたのだが…

「…ああ」

まだ、続いているのかもしれない。

「…大丈夫かな…」

「え？」

「キリエ…」

またネロが寝転がって物思いにふける。

「すぐ帰るって言ったのにな…」

この世界に来る前にネロがキリエに言った言葉。
あれから一週間が経過したが、彼女はどうしているだろうか。

フエイトが兄に頼んでくれたらしいが、まだ見付からないらしい。
出身の土地や惑星が“地球”である事を話した時は、なのはとはや
ての出身世界である「第97管理外世界」ではないかと言われ、ネ
ロも安堵したが、“フォルトゥナ”と言う土地は何処にも見つから
なかった。

「北欧地区… 英国領、フォルトゥナ城塞都市…」

一年前にフォルトゥナまで行った時の事を思い出しながらも呟くダ
ンテ。

「あんた… 自分が悪魔の血を引いてて辛い思いをした事ってある
のか？」

唐突にネロが聞いて来たが、ダンテもその質問に押し黙ってしまっ
たかと思われた。
だが、

「……ない… って言いたい、あるな」

そう応えた。

ネロはそれを聞き、体が一瞬だけピクツと動く。

「話したらキリがないけどよ、やっぱり、俺と兄貴がまだ10歳に
なったばかりの頃にお袋が悪魔に殺されちゃったのは特にな」

フツと笑い、ネロの背中を見ながらもダンテは話を続ける。

「他にも色々あるが、俺がスパイダの息子ってせいで知り合いが殺
されたり… お袋が殺された時に街が大火事になったんだが、その

火事を起こしたのが俺のお袋じゃないのかって言われてただけだな… あ、もちろんお袋がやったんじゃないかって悪魔がやったんだぞ？」

次第に明かされるダンテの過去… その話をネ口も背中を向けたまま黙って聞いていた。

「…その火事を起こした犯人はお袋じゃないって信じてくれてたやつがいたんだけどよ。そいつに俺が悪魔の血を引いてるから追っ手が来て、街が火事になったってバレてな…」

そこでダンテは自嘲しながら笑うが、空を見上げて深く息を吸い込む。

「二度と現れるな。この悪魔」だってよ。あれはキツイぜ」

フーと息を吐き、ネ口を見るが、彼はまだ寝そべったままにいる。

「…ちなみに、これは6、7年前の話で…」

「あんたの兄貴は？」

その話よりもネ口は聞きたい事があった。

「え？」

「閻魔刀を持ってたあんたの兄貴… “黒い天使に身を落とした閻魔をさ迷う剣士” ってのは？」

スカリエッティが言った言葉。

それをあの意識が薄れて行く中でネロは聞いていたのかと思い、ダ
ンテの目付きが少し変わる。

「…聞いてたのか…」

「聞こえてたよ。楽勝でな」

顔は向けないが、ネロは小さく鼻で笑っていた。

「アグナスが言ってたんだよ。“アンジェロは黒い天使と呼ばれた
悪魔から造り出した”って」

「黒い天使… か…」

それを聞き、ダンテがまた過去の記憶を辿りながら遠くを見詰める。
なかなか話さないの、ネロが少し顔を向けると、彼は酒を飲んで
いた。

「おい…」

「坊や……」

ダンテの只ならぬ雰囲気、ネロも上体を起こすと、ダンテは酒瓶を
置き…

「…どうしても聞きたいか？」

真顔でそう言い放った。

「え…」

「お前がどうしても聞きたいってのなら話してやる。だかな…」

思わず声を漏らしてしまうが、ダンテは喋り続けた。

「…辛くなるかもしれないぞ」

ダンテがそう言うのにはワケがあった。

一緒にいた時間は短いとはいえ、一年前に会った時は、今のよう
に時折見せる悲しい雰囲気はネロにはなかった。

そもそも、“悪魔の血を引いていて辛い思いはあったのか”と聞い
て来た時点で、この一年の間にネロに何かあったのだらうとダンテ
は察していた。

「…ああ。話せよ」

それでも、彼は聞きたかった。

後戻りが出来なくなるかもしれないのに。

「そうか…」

ネロが聞こうとする思いは、ただの興味本意ではない。確実に、何
かを心に決めたものだった。

「それじゃあ…」

一年前のネロならば、ダンテの兄が誰であらうと、教皇が話してい
た男が誰であらうと気にしなかった。

だが、彼の脳裏にはある男の姿が残っていた。

「まずは…」

何処かで会った事のあるような、懐かしいような… 何か忘れているものを取り戻せるような。

しかし、その男の姿は酷く臃気…。思い出そうとするが、何故かそれは出来ない。

その度に頭の中に声が響くのだから…

「10歳の頃に別れて、久々に再会した20の頃だな…」

“もつと力を…”

その声が邪魔をする。まるで、その男の事を思い出そうとするネロを妨害するように…

——昨日、会ったのも思い出させないように——
そして、赤き狩人の知る限りの真実が語られた。

「そんな時は、悪魔の追っ手に見付からないように偽名で“トニー・レッドグレイヴ”って俺は名乗ってたんだがな…」

…

「…そこで気付いたんだよ。あの悪魔は兄貴だったって」

ダンテから語られた真実… 20歳の頃に双子の兄バージルと再会。その時にバージルは魔術を使い、思念体だけを送り込み、“ギルバ”という名でダンテの前に現れたものだった。

「あとからトリッシュから聞いたんだが…」

次に会ったのはその一年後。そこでバージルは直接姿を現した。二人は戦うものの、決着は着かず。

「魔界に落ちた兄貴は魔帝に戦いを挑み… 敗れ…」

そして、その一年後に再会。バージルはダンテの持っていた母の形見である《もう一つのアミュレット》を手に入れ、魔界への道を開き、父の力を求める。

「体を改造された…」

しかし、戦いに勝ったのはダンテ。バージルは人界と魔界の狭間から落ち、魔界へ。その後、母の仇である“魔界の帝王”の元に辿り着くものの敗北。自我を失い、《黒い天使》へと改造されてしまった。

「…こんなトコだな」

その“恐怖を生み出す土台”の戦いから8年後… ダンテが30の頃に魔界側からゲートが開こうとしていたとある無人島での戦い。そこでダンテは“黒い天使”の正体が亡き兄、バージルである事を倒す事で気付いたのだった。

「氣い、済んだか？」

正直、ダンテは話すべきではなかったのではないかと思った。キリエと言う心の支えを失っている今のネロならば、どうなるか分からない。肉体的な不調に精神的なものも加われば、この先はやつ

て行けないだろう。
だが、

「…ああ」

このままネロは折れるワケには行かない。

「ありがとう…」

今の自分と向き合いながら、力を求め、キリエを守る為には… 真の強さを知る為には、どうしたらいいか…

「…重い言い方かもしれないが… 生きるってのは、命を失っちゃまったやつに分まで生きなきゃいけない。俺は俺の、お前はお前の生き方だな」

「だとしたら… 生きるのって大変だな」

「まあな」

ダンテの言葉を聞き、右腕を見詰めながらネロは応えた。
それに再びダンテは酒を一口飲み、短く返す。

「あんたも大変だな。母親に似た悪… 相棒に、双子の兄貴と…」

目を移し、ネロが海を眺めていると、何やら胸にあたる感触があった。

「飲めよ」

酒の入っている瓶だ。ダンテはそれをネロに飲ませようとしているのである。

「…俺、まだ１７だぞ？」

「真面目だな。俺は１５から飲んでるぞ？」

「１５…？ まさか煙草とかも…」

「いや、煙草はどうも苦手… っていうか嫌いだな。あれは完全にダメ… それより飲めよ」

余計な捕捉事項を付け足し、半ば無理矢理ネロに瓶を渡す。
観念したネロもそれを受け取り、一口飲んでみるが…

「…不味いな」

単刀直入な感想を聞き、ダンテは呆れる。

「ジンの味が分からないようじゃ、まだまだだな。だから“坊や”なんだよ」

やれやれと言わんばかりの手振りに首を振ると、ダンテが立ち上がった。

「俺は戻るけど、ちゃんとメシ食えよ」

「おい…」

「さてと… 新しいピザでも焼いてもらうか…」

まだ手のつけていない料理があるが、それも食べると言いたいのだろつ。

手をヒラつかせ、隊舎に向かって歩き出すダンテ。

「あー… 食い足りねえー…」

そう言いながら、ダンテは歩きながらも大きく背伸びする。

（あ！ リベリオン、置いて来たんだつた）

大事な剣を蔑ろにしているつもりはないが、どうも背中が軽かった事でダンテは合点が行った。

…

「…………… 本当に強いな… あんたは…」

ダンテの背中を見送るネロは、そう口から漏らした。

「ハハッ…」

（俺なんか… 全然、大した事ないな…）

自嘲しながらも力無く笑い、この一年の間にあった事を思い出すネロ。

そこで、また酒瓶を一口飲むが、今度は「苦い」と言う感想だった。

「はあ…」

瓶を置き、地面に寝そべりながらも空を見上げる。

「想いは通じる…」

ネロはそう呟く…

「優しさを忘れないで、か…」

その言葉の意味は、何を表すのだろうか…

くアニメの次回予告風に第3節を予告く

talking:なのは

ダンテさん遅いなあ… 本当に大丈夫かな？

だけど、昨日は大変だったよね。本当にいろんな事がありすぎて、大変だったけど…

あれ？ シャマルさん、どうしたんですか？

…ええっ！？ あの子が居ない？ ちょっと目を離れた隙にいなくなっただけ！？

わ、分かりました。それじゃあ、みんなで… あ！ ダンテさん、

いい所に… いえ、デートの誘いじゃなくて、手伝って下さい。

はい。昨日、フォワードのみんなが保護した子供です。

…いや、分かりましたから… 剣を振り回さないで下さい。剣はいりませんから… 確かに、情報では、危険性があるみたいに聞きました、それはいいりませんから…

え… 見かけた？ 何処で！？

S e c t i o n : 3 } b e p e r p l e x e d k i t t e n 迷子の仔猫

母親を求める仔猫の瞳は、“緑”と“赤”のオッドアイ…

前足に包帯を巻いた一人ぼっちの黒猫の瞳は、孤独の“青”…

ダンテが食堂を出て行き、既に30分以上が経過し、食事を終えようとしているフェイト達。

「…ねえ、ティア」

唐突に声を上げたのはスバル。

彼女はまだ食事を終えていないが。

「なによ？」

「ずっと思ってたんだけどさ…」

スバルの隣に座っているティアナはもう食べる気はないが、未だに食事を続行していたスバルが食べていた料理を飲み込み…

「ダンテさんってあの剣、どうやって背負ってるのかな？」

今更な事を言い出す。

「どうやって… それは…」

何を言い出したのかと思うティアナだが、彼女もハツとする。

「背中にくっ付いてたよね？」

普通に話していた為か、周りにいるのはやフェイト達も「あ！」「あ！」と言っていた。

「そう言えば…」

「本当にどうなってるのかな…」

エリオとキャラも今更に気付いたようだが、考えてみれば無理もない。

出会いは突然なうえに、先日は悪魔との戦闘ばかり。質問を受け付けてくれた時に、“鞘も吊革も無しにどうやって剣を背負っているんですか”と、ある意味で第一に聞きたいことを聞けなかった。と言っよりもそのようなことを考える余裕がなかったのだが。

「“反逆”の魔剣って言いよつたな」

「父親の形見だとか」

記憶を探るはやてとシグナム。

どのような物かは得体の知れないが、鞘も何もなく大剣を背負ってリベリオンいたダンテの姿を思い出す。

「ネロさんのは分かるんやけどなあ…」

「そうですね」

上着を着ていない状態でもリベリオンを背負っていたダンテの姿を思い出し、赤面したはやてが苦笑しながら言う。

彼女の前にいるリインはその小さな体には余りにも不釣り合いな大量の料理を食べた跡がある。

後ろにいるはやてを見ていないが、リインの頭にはダンテの姿ではなく、レッドクイーンを背負っているネロの姿が浮かんでいた。

「ネロさんとダンテさんの話やったら2000年前の代物みたいやし、“魔剣”って事は… やっぱロストロギアなんかな？」

はやてがそう言つと、椅子に立て掛けてあるダンテのリベリオンに注目が注ぐ。

「あいつらが《デビルトリガー》とか言うの使わなきゃ、ロストロギア反応は出ねえんだろ」

「ヴィータ…！」

「あー、分かってるよ」

何気なく言つたヴィータの言葉をシグナムが咎めるように言つが、彼女は眉を吊り上げてシグナムから顔を背けた。

ネロの閻魔刀は《悪魔の右腕》の中に吸収されるが、ダンテは勝手が違い、常にリベリオンを背負っている。無論、鞘も吊革もない。代わってネロは、魔剣教団に所属していた時から着ているコートに付けていたレッドクイーンを背負うための吊革があるので、それを今はコートから外して使用している。

「…ホンマにどうなつとるんやろ」

はやてがそう言つと、そのテーブルに集まっていたメンバー全員が静まりかえる。

「ダンテさんに聞いてみますか？」

その沈黙を破り、スバルが余りにもストレートな結論を口にした。

「あんたね…」

【大変です、はやてちゃん!!】

確かにそれが一番だろう。

何せ、その剣の持ち主なのだから。

しかし、そのダンテも今はネロの所に行っているのではない。

若干、顔を引き吊らせるティアナだったが、そこへ息を切らせて慌てているシャルルから通信が入って来た。

「シャルル、どないしたん？」

【実は… 昨日、保護した女の子が少し目を離した間にいなくなつて…!】

「なんやて!？」

酷く焦っているシャルルの話を聞き、はやてが椅子から立ち上がる。

「ヤベエじゃんか! ギンガの話と、昨日の検査じゃ確か…」

モニター越しに頭を下げ謝っているシャルルを慰めているはやてを見ながらもヴィータも椅子から立ち上がった。

「とにかく、はよ探さんと…」

「どうした？」

ギンガの情報である5、6歳程の子供が入っていたと思われる生体

ポッド… それにあの少女は入っていたらしいが、慌てるはやて達の所にちょうどダンテが戻って来た。

「ダンテさん!!」

「新しいピザでも焼いて欲しかったんだが… なんかあったのか？」

「ちょっと手伝って欲しい事が…」

なのはが声を掛けると、それにダンテは反応し、

「悪魔か？」

「いえ、そうじゃなくて… 危ないですから…」

椅子に立て掛けてあった大剣リベリオンを掴み取ると数回振り回し、空の斬る音を鳴らす。

「じゃあ、デートか？」

「だから違い…」

「なのは」

悪魔が現れたのではなかったので、ダンテは剣を背負うが、鞘もないのに背負われたリベリオンから謎の“ジャキン”という金属音が鳴った。

一向に話が進まないの、そこでフェイトがなのはの肩に手をおき助け船を出す。

「昨日、私達が保護した女の子の事は覚えてますよね？」

「ああ。ヘリの中で寝てて、どっかに運ばれてったリトルレディだろ」

デートの誘いではなかった事にがっかりしたダンテが頭を掻き、昨日の事を忘れるほど野暮ではないと言いたげな顔をしている。

「その子が目を離れた隙に何処かに行ってしまったようで…」

「一緒に探すのを手伝って頂けませんか？」

「いいけどよ…」

フェイトとなのはから事情を聞くと、ダンテは髭のない顎を触り、

「その嬢ちゃんなら見たぜ」

空いている左手で上着の下に隠していたホルスターから抜いた黒い
エボニー大口径拳銃を見詰める。

「え？」

「さっきな」

そう言いながら指で銃を回し、華麗にホルスターに納める。

「…それって、確か質量兵器…」

「案内して下さい」

ダンテの無駄な所作を見たティアナの言葉も、何事もなかったように終わってしまう。

…

所変わり、地面に寝そべるネロは空を見上げて物思いに耽る。

「闇をさ迷う剣士…」

ダンテから、兄は半人半魔でありながら、悪魔として生きる道を選んだ男だと彼は聞かされ、その事を考えながらもただ空を見ていた。

——あいつは… 力が必要だったみたいだ

（力…）

ダンテから聞かされた話を思い出す。

——お袋を助けられずに死なせたのは自分が弱かったからだってな。だから、もっと力が必要だってよ

「純粋な“力”だけを求めた… か…」

母親の死と己の無力さから力を欲したというバージル。もし、自分もキリエを守れなかったら…
そう思いながら、ネロはそのまま右手を太陽に翳す。

「Give me more...」
もっと

包帯とグローブで隠してある《悪魔の右腕》。その右手の指を順に折り曲げ…

「Power（力を）…！」

拳を握り締める。

ダンテは己の魂の叫びに従い、兄を止めようとした。
そして、ダンテの兄であるバージルも己の魂に従い、力を求めた。

「…俺もそうなのかな」

眩き、フツと笑う。

「そうなんだろうな…」

上体を起こし、右手に魔力を集中させると、そこを中心に風が吹く。

（そんなに集中しなくても出来るようになった…）

「ひっ…！」

右掌の上に出現した青白い湾曲刃《幻影刀》を見詰め、溜め息を吐いた後にそれは砕け散る。

ガラスが割れるような派手な音をたてながら砕けるが、背後から聞こえた声に反応してネロは振り返った。

「…う…」

そこには、昨日エリオとキャロに保護された少女がいた。

（確か、昨日拾って来た…）

「……どうした…」

「ひっ！」

余りにも弱々しい悲鳴のような声を漏らした少女にネロは声を掛けようとする。

しかし、その少女は先程からやたらと彼を警戒し、なにやら怯えていた。

「あ…」

そこでネロは不意に声を漏らす。

《悪魔の右腕》は隠してあるが、あの怯えた目を見ると、どうも反射的に右肩を掴み、庇うように右腕を背中の方に回してしまった。

「…どうしたんだ？」

再度声を掛ける。

またしてもその少女は体をビクつかせるが、ネロは口を開く。

「確か… 医務室にいた筈だけど、出て来ていいのか？」

「………いないの…」

「え？」

昨日はボロ布を纏い、レリックが入っているケースに鎖で足を繋がれていたが、無論今は違う。

その幼女はボソリと言葉を発した事にネロも聞き返した。

「ママ… いないの……」

「ママ…？」

その幼女は、確かにそう言った。

だが、聞く話では身元も分からない筈。

「…そうか」

そう言うとネロは立ち上がり、幼女の傍まで歩み寄るとしゃがみこむ。

「まあ、取り敢えずは戻ろうか。ママを探すのはそれからだ」

今更だが、ネロはその幼女の瞳が緑と赤のオッドアイである事に気が付いた。

「だから…」

「見つけた」

取り敢えずは六課の隊舎の方に戻ろう。シャルから聞いた話では、体の方に異常はないらしいが、ネロはその幼女を連れ戻すのが最初だと思った。

探すのならば、それしかないだろう。はやてやフェイトに頼めば何

とかしてくれる。

そう言いかけた所で、誰かに割り込まれる。
見れば、そこにはダンテとなのは、フェイトが立っていた。

「ほら、いただろ？」

ダンテはなのはとフェイトの方に顔を向けながら、不敵に笑ってみせた。

「言いましたけど…」

「見かけたならもつと早く…」

何故この男はこんなに笑い、こんなに自信に満ちた顔をしているのだらう。二人には分からなかった。

「流石は坊やだな。子供の扱いにも馴れてやがる」

「いや、別に馴れてるワケじゃ…」

だが、ダンテは二人を無視してネロと幼女の方に近付き…

「…“坊や”だけに」

一々強調するように言い放つ。

それを聞いたネロは“何が言いたいんだ”と言うカンジの顔をしているが、

「う…」

見れば、隣にいる少女が今にも泣き出しそうになっていた。

「え？」

「どうしたんだ、リトルレディ？」

泣く寸前の少女に顔を向けたネロ。

更に近づくダンテ。逆光による影の掛かった彼の顔を見たネロは、この光景になんとなく見覚えがあった。

初めてダンテと会った時の事を…

「…う……」

だが、あの時と違い顔に血は着いていない。

どちらかと言えば、転んだキリエに近付いた時に近いだろう。

「おい……」

「あんたはこっちに来い」

泣かれたら色々と面倒な事になりそうだと察したネロは、ダンテをこの場から引き離そうと考え、立ち上がると彼の肩を掴む。

「なんだ……」

「あんたがいると話がややこしくなる。って言うか、正直顔が怖いんだよ」

服を引っ張っていたネロの手を振り払い、ダンテは不満そうな顔をする。

「そりやないだろ？ 俺が怖いなんてあり得ないぜ。こんな男前…」

「いいから行くぞ」

背負っていた大剣を抜き、刃に映る自分の顔に見惚れるダンテは無視して、ネロはその場から彼を引かせる。

「おいおい、俺の顔が怖いってんなら、お前だって…」

「俺がなんだよ？」

引き摺られながらも愚痴るダンテに冷やかに言葉を返すネロ。
自分は別に怖がられて当然だと言つかのような態度… もしくは、お前と一緒にするなとも言える態度にダンテは小さく溜め息を吐いた。

「悪い。その子、頼む」

「う、うん」

何かブツブツ言っているダンテは無視し、ネロは後の事をなのはとフェイトに任せてその場を去って行く。

「おい、服引っ張るなよ。どうせなら、おぶるとか…」

…

「いい加減に歩くから放せよ」

「あの…」

ダンテを連れて暫く歩いていたネロ。右手には食べ終わった料理の皿があるが、隊舎にだいぶ近付いた所でスバル達に鉢合わせになる。

「よう、少年。メシ食ったか？ こっちの坊やは終わったみたいだけれどよ。つくづく世話のかかる奴だよな」

全員 午前の訓練を始めるようだが、最初に声を掛けて来たのはエリオだった。

しかし、ダンテは彼を見るなり軽快な挨拶と共に自分のペースに持って行こうとする。

「は、はい。その… あの子は？」

取り敢えずは応えるエリオだが、どうもあの子が気になるのか。ダンテはフツと笑い、口を開く。

「隊長の姉ちゃん二人に任せたよ。坊やの顔が怖くて泣かれちゃったからな」

「まだ泣いてはいなかっただろ？ 大体、怖がられてたのはあんただよ」

何故、自分に擦り付けられるのか分からないネロだが、彼はダンテの思考が全く理解出来ないまま話す。

「そうなんだよ。何でだろうな？ こんな男前が二人…」

余計な事を言いつつも、また巻き込まれたネロはダンテの頭を叩く。

「痛えな… そんなに叩くなよ。近頃のやつはすぐに手が出やがる」

「嘘つけ。心臓刺されようが、頭を地面に埋め込まれようが平気なくせに」

「「え？」」

ようやく手を放すと、ネロはポケットに入れていた酒瓶をダンテに向かって放り投げる。
スバル達の頭には、ネロの言った言葉の意味が分からずに“？”しか浮かびそうになかった。

『…頭を… 地面に…？』

『どついう事かな…』

「どこ行くんだ？」

ダンテが頭を地面に埋め込まれた姿を想像しようとするティアナだが、どうすればそうなるのだろうか。

スバルも同様である。

思考を巡る四人は放っておき、ダンテはただ歩き続けるネロを見る。だが、彼はダンテに応えず、フラフラと行ってしまった。

「…つくづく分からないやつだ」

そう言うと、ダンテは受け取った酒瓶を一口飲み、これが至福の時

だと言わんばかりに大きく息を吐き出す。

「あー… やっぱ、ジンは最高だな」

後ろから感じるフォワード4名の視線に気付いたダンテが振り返ると、

「なんだ？」

「え！？」

「俺の顔に見惚れたか？」

またしても自信に満ちながら笑う。

「いえ…」

「じゃあ、どうした？」

「はい！」

ティアナは若干顔を引き吊らせていたが、唐突にスバルが手を挙げる。

「質問いいですか？」

「ちょっと！！」

場の空気を読むつもりはないのか、スバルがいきなりの質問と来た。

「なんだ？ 将来有望な嬢ちゃん？」

「ダンテさんは、その剣をどうやって背負ってるんですか？」

ティアナの制止も、ダンテのジョーク（恐らくは半分本気）はスルーされてしまうが、スバルはずっと頭から離れなかった疑問を解き明かす為にダンテに聞く。

「コイツか？」

「はい」

背負っていた《リベリオン》の柄に手を掛け、微かに抜くと、まるで鞘から抜いているような金属が擦れるような音が発せられる。

「その音は何処から…」

「コイツはな…」

多分、エリオとキャロも同じ事を思っているに違いない。チビツ子二人の疑問を晴らす為にティアナが口を開いたが、またしてもスルーされた。

「…って言うか、質量兵器の所持……」

「実は…」

完全に無視されつつも、喋り続けようとするティアナ。

剣だけでもまずいの、まだダンテは拳銃を所持している。しかもまだ銃弾は10発ほど残ったまま。

先ほどからやたらと勿体ぶるようなダンテにスバルは若干わくわくしている。そんな彼女の姿を見てみると、真面目にやっていた自分はなんなのだろうかとティアナは思ってしまった。

「……………俺もよく分からない」

「…え？」

しかも、さんざん引つ張っておいて分からないと来た。スバルは少し間が空いてから声を出す。

「なんだかよく分からねえけどよ？ 鞘とか無しに背負えるんだよ、これが」

先程の緊迫した空気は吹き飛び、ダンテが抜いた剣から凄まじい金属音が鳴り響く。

「自分でも分からないんですか…？」

「ああ」

「鞘も無しに？」

「そうだって」

身の丈近くある大剣からは光が反射し、鈍い銀色の光を放っている。それほどの物をダンテが右腕一本で持っている姿に呆気にと取られつつ、エリオとキャロは声を掛け、ダンテは軽く返した。

「それ、何kgぐらいあるんですか？」

「あ、これ？」

スバルは興味津々に聞くと、ダンテは剣を下ろし、地面に突き刺した。

「さあな？ 測った事はないし… こっちの銃ならともかく」

地面に突き刺さっている剣が微かに振動している。

装飾の人のドクロを模した部分は、特に恐怖感を与えるが、それを見詰めていたティアナが小さく息を吐き、自分も質問してみる事にした。

「その銃、質量兵器ですけど… 何kgあるんですか？」

ダンテはホルスターから抜いた二丁の拳銃を華麗に回しているが、そのハシャいでいる姿はとても大人に見えない。

「ハハッ！ あ、確か片方で20」

「『『『え？』『』『』」

平然と言つてのけるダンテの言葉は嘘か誠か…

…

「あ、ネロさん」

食べ終わった料理の皿と、ピザの皿を重ねて返却するネロを見付けたはやて。それに気付いたネロもはやて達が座っているテーブルに近付き、

「……おはよう」

「え？」

「挨拶はまだだったろ？ 因みにレリックを持ってたあの子供はなのはとフェイトに任せたよ」

せめてもの朝の挨拶をするネロ。はやても念話で聞いているのだろうが“そうですか”と言い、言葉を繋げる。

「おはようございます。昨日はよう眠れ… って、寝とらんらしいな？ 気が済むまでやらせたかったんやけど、あれだけの破損はこやつたら無理やで」

はやてがネロにデバイスルームの使用許可をくれた意思を彼は分かっているのか…

目の前にいるはやてに向けてネロは再び口を開く。

「ああ、そうだな… お気遣いどうも…」

「いえいえ」

気だるく言ったセリフも、はやては微笑みながら返す。
彼女に皮肉など通用しないと分かっていたが、また思い知らされたネロは誰にも気付かれないように小さく溜め息を吐いた。

「…なに、見てんだよ」

何やらシグナムやヴィータ、リインがネロをじーと見ていると、彼もその視線に気付く。

「いや、ちよつとな。座つたらどうだ」

「嫌だつて言つたら？」

何故かフツと笑うシグナムに少し首を傾げたまま怪訝そうに返すネロ。

しかし、何もする当ても無いことが、只の気まぐれか。彼は小さく舌打ちし、乱暴に椅子を引いて腰掛ける。

「…分かったよ。座ればいいんだろ、座れば」

「舌打ちは止めた方がいいぞ」

「あー、そうかよ」

気遣いか何かは知らないが、シグナムがせっかく言ってくれた言葉も適当にネロは返した。

それがおかしいのか、リインはクスクス笑い、ヴィータは鼻で笑う。

「ネロさん、一つええかな？」

「なんだ？」

だが、4人から距離を空けて座っているネロに向けてはやては…

「自分を動物に例えたら、何やと思います？」

突拍子に聞いた。

「え？ 何だよ、急に？」

「ええから答えて」

周りの3人（2人と1騎）は何と応えるのか少しそわそわしているように見えるが、ネロは気に掛けずに思案する。

「そつだな… 強いて例えるなら…」

ネロが思いあたる動物は…

「狼…」

彼は魔剣教団に所属していた頃、周りからは色々な呼び名があった。その中の一つが“一匹狼気取りのいけすかない奴”である。

「あ、やっぱ違う…」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

はやてがボソリと言ったのもネロに聞こえたが、彼女はしらを切るように両手を振る。

『狼だってよ。格好つけか？』

『しかし、確かにそうだろうな』

ネロとはやてのやり取りを見ながらも離れた位置… と言っても同じテーブルにいるヴィータとシグナムが念話で話す。

『普通、狼とか言うかよ？　せめて“犬”だろ』

『ヴィータちゃん、よくないですよ？　でも、狼だとザフィーラと被っちゃいますね』

まだ、ネロの事を完全に認めていないヴィータの言った事を咎めつつ、“狼”の例えはどうしたものかと考え込むリイン。

「あと、もう一つ…」

「……え？」「……」

しかし、どうやらネロは自分を動物に例えるならまだあるようだ。思わず声を漏らしたはやて以外の3人に“一つじゃ悪いかよ”とでも言いたい顔をする。盗み聞きされていたのは気にしないのだろう。

「どちらかって言ったら、こっちの方があってるかも…」

ダンテのようにテーブルに脚は乗せないが、その姿はやはり彼に似ていると皆が思った。そして…

「黒猫…」

「ビンゴだな」

ネロが次に自分を動物に例えたものを出す。
だが、言った瞬間にヴィータが故意なのか、完全に聞こえる声で言う。

「なに？」

「あ！ いえ、何でもありません！」

『ヴィータ！』

前もってみんなで考えていたのが当たったとでも言いたいのか。そうネロは考えるが、はやてがやたらと慌ててヴィータに念話を飛ばす。

『だって、ダンテの奴が言ってたじゃねえか』

頬杖を突き、不満そうに睨んでいるようにも思えるネロから彼女は目を反らした。

——着いて来な。こっちだ

ヴィータの頭の中では、先ほど戻って来たばかりのダンテがなのとはフェイトを誘導する姿があった。

（懐かない黒猫に餌をやった次は… 迷子の仔猫探し… か…）

このセリフもダンテが言ったものなのだが、ヴィータにふと疑問が浮かぶ。

「因みに、私は“狸”ってよお言われます」

（…あれ？）

はやてが不機嫌なネロを慰める為かそう言っているが、ヴィータの耳には聞こえていなかった。

「狸？」

「はい」

（そう言や…）

脚を組んで背凭れに身を任せているネロは“なんで狸なんだ？”と聞き、はやてが“なんでですかね？”と言っていた。

（なんで“黒”猫なんだ？）

只の猫ではなく、どうして“黒猫”なのか。
着ていたコートの色が“黒”だからか。

ネロが“黒猫”に例えられた、その本当の意味を彼女は知らない。

くアニメの次回予告風に第4節を予告く

t a l k i n g : ヴィータ

え？ あたしも“猫”かよ？
最悪じゃん… はやて、他のにしてくれよ。

ったく、まあいいや。今日はカリムに会いに行くんだっけ？ この前も行っただじゃんか。そいつのせいで… あー、分かったよシグナム。

あれ？ なのはとテストロッサも着いて行くのかよ。

…って、おいおい… こいつ、泣き出したんだけど…
こうしてると、ラインが産まれた時みたいだな。体は今と変わらなかったけど、中身は赤ん坊だったけどよ。

誰か あやせる奴いねえのかよ？ なのはとテストロッサがいねえのは致命的だろ…

S e c t i o n : 4 } P r o p h e c y 預言 } (前書き)

戦いの先を予見する預言者の告げる未来とは…

Section: 4 Prophecy 預言

あれから少しばかりの時間がすぎた昼下がりの頃。
機動六課部隊舎の一室にて…

「俺も一緒に？」

はやてとフェイトに呼び出されたダンテ。

「はい。これからなのは隊長とフェイト隊長、私と一緒に」

はやてが今日はカリムに会いに行くらしく、それにダンテも来て欲しいとの事らしかった。

「ネロは聖王教会騎士団の騎士カリムと私達で預かっている次元漂流者… 民間協力者と言うことになっているんです」

「へえ…」

はやての隣に座っているフェイトの説明を聞くが、彼の前には食べ終わったストロベリーサンデーのグラスが4つ。

「こう言うのもなんですけど… 私達だけでダンテさんを保護していると言うのも無理がありますし、“その”質量兵器は特に…」

はやての視線は椅子に立て掛けられてある大剣とテーブル（トペル）に置かれ、ホルスターに収まっている大口徑二丁拳銃《エボニー&amp;アイボリー》に注がれていた。

「剣の方は仕方ありませんが、銃の方はちょっと…」

「弾、抜いとくか？」

「いえ、そう言う問題じゃ…」

ダンテは5杯目のストロベリーサンデーを食べながらも左手でホルスターからエボニーを抜き、これみよがしに見せつける。

父親の形見である剣をどうにか取り上げる事のないようにしようとするはやてが苦笑し、鈍く光る黒い拳銃を見たフェイトの顔がやるせなくなる。

「…とにかく、会っていただけませんか？ 銃の方は取り上げると言うワケではなく、預かるという形になってしまいますが」

エボニーを指で弄ぶダンテの姿は、どこか子供のようで華麗。

「質量兵器ねえ…」

ダンテがポツリと呟くように言う。

ネロからこの世界では銃は“質量兵器”と呼ばれるものであると聞かされ、フェイトからも厳しく取り締まられているものだと言われている。元の世界もそれは同様だろうが、このミッドチルダで銃は使用するどころか所持も“禁止”されている。フェイトの説得に聞く耳を持つのかどうか分からないが、ダンテが指で銃を回している様に二人は見惚れていた。

「なあ、フェイトちゃん…」

「なに？」

『フォワードの4人が言いよった話、本当なんかな?』

午前の訓練で、なのはとヴィータによる新人フォワード4名の訓練をダンは見学していた。

彼の隣にはシグナムと、ダンと同じく暇をもて余しているネロがいた。

——この世界の女つてのは結構おっかないもんだな？

ダンは隣にいるネロに向けてフツと笑い、

——…何故、私を見る？

次にシグナムを見る。

その時にネロは心の中で“同感だ”と思っていたが、敢えて口には出さなかった。

「あの、すみません」

「なんだ？」

一呼吸置き、はやてが声を掛けるとダンも銃を回すのを止めてエボニーを握ったまま腕を下ろす。

「そちらの銃、少し見させてもらって宜しいですか？」

「…別にいいけど…」

それくらいは構わないと言うダンはエボニーを一度見ると、テー

ブルに置いてはやての方に送る。

「女が持つには重いぞ?」

またストロベリーサンデーを食べ始めたダンテから目線を落としてエボニーを見るはやて。

彼女はゆっくりとエボニーを手にするが…

「…!!?」

かるうじて上がる程度。両手で持つのがやっとだった。

「悪く言つつもりはないが、嬢ちゃんには無理だよ。ソイツ、大人でも片手じゃ持てないんだぜ?」

ダンテは軽く息を吐き、はやてに手を差し出す。

「これ… ホンマに何kgあるんですか…?」

「多分、20kgだろ?」

はやての余りにも遅々とした動きにフェイトは目を見開くが、ようやく重い鉄の塊から解放されたはやてがドサリとソファーに身を任せた。

「多分って… 自分の物なのに知らないんですか?」

「いちいち測ろうとか思わないな。それ、少年とか嬢ちゃんにも言われたぞ」

使えばいいのだろうか。

不敵な笑みにも、少女の行動を微笑ましく見ている様子とも取れるダンテ。

「…そんなに可笑しいですか？」

小馬鹿にされているとも感じたはやてが大きく息を吐いた後に言うが、ダンテはエボニーをテーブルに置き、首を横に振る。

「いや、ちょっと思い出ただけだ。嬢ちゃん見てたらな…」

フツと笑うダンテに少し首を傾げるフェイト。

——あんた、よくそんな重い持てるわね？

遡ること10年以上前の事である。

ダンテが正式に便利屋デビルメイクライを開業した時に、彼のもとには一人の女性が訪れていた。

——お前だって、あんなデカイもん、ぶっ放してるだろ？

——“担ぐ”と“持つ”じゃ、ワケが違うでしょ

ピザを頼張っているダンテは行儀悪く椅子に座ったままデスクに足を乗せているが、その女性はダンテの事務所に飾られている“悪魔の剥製”やらジュークボックス、ビリヤード台を見物しながら言う。その女性は未成年… ハイスクールに通っているような年頃。

ダンテよりも年下なのだろうが、彼女もデビルハンターを名乗っているのだった。

……って言うか、そんなの罠にすると考えたわね

——パツと浮かんだんだよ

彼女は、デスクに置かれている今よりも銃身やグリップが若干薄いエボニーとアイボリーに目を向ける。

この時から1ヶ月程前にダンテと戦った女性……“レディ”と言う名に変えた彼女は、悪魔の力に魅了された父親を追ってダンテと出会ったのだった。

その最中でダンテに2度も命を救われた（実質1度の方が正しい）のだが、ダンテと対峙した際に彼が罠として放った銃を拾おうとした時に一瞬とはいえ、彼女は今はやてと同じように顔が驚愕の色に染まっていた。

（あの頃はもう少し軽かったな……）

「ネロさんの銃は、確か2kgくらいやったと思うけど、それ重すぎるんとちゃいます？」

エボニーとアイボリーは度重なる改造に連れ、パーツが加わり重量が増している事を今更ながら思い出すダンテだが、はやてが言っている事はまるで聞いていない。

「デバイスに改造するのも断ってしもたし…… まあ、そっちは置いていて」

罠が空かないダンテに溜め息しか出そうにないはやて。

「そろそろ出ようと思うんですが、宜しいですか？」

「え？」

「聖王教会。カリムの所にです」

やはり聞いていなかったのだろう。物思いに耽っていたダンテがストロベリーサンデーを食べながら我に返る。

『やっぱ聞いとらんかったな、この人…』

『まあまあ』

顔の引き吊っているはやてを念話で宥めながらもフェイトがモニターを展開し、操作する。

「騎士カリムははやてと同じ、“古代ベルカ式魔法”継承者で六課設立にも尽力を尽くしてくれた方なんですよ」

カリムの映る画像を見たダンテが口笛を吹き…

「すげえべっぴんさんだな」

“金髪”であるカリムに俄然テンションを上げ、ソファーから立ち上がる。

「行こうぜ、その教会。ミサとかは好きじゃないが、そんな美人の姉ちゃんがいるなら…」

先ほどとは打って変わって態度が変わるダンテに、“まったくこの人は…”と、口には出さないが顔に出ているはやてとフェイト。

「それが…」

「うわあああーーーー！！！！」

見ての通りとしか言い様がない。

『フォワードに相手してもらってただけど、行くって言ったら泣き出しちゃって…』

『『『すみません…』』』

泣き喚く幼女の相手をするのはと、申し訳なさげにしているフォワード陣。

『分かった。任せ…』

子供のあやし方を心得ているフェイトが前に出ようとする。

しかし、何やら部屋の外… 廊下の方から騒がしい声が聞こえて来た。

【押すな！！ 何で俺がやらなきゃいけないんだよ！！】

【お前しかいないだろ！？ “坊や” なんだから！】

【それ、関係ないだろ！！ っていうか、ここ確か女子寮のはず…！】

そこでドアが開き…

「行け、坊や！」

ダンテに蹴り押されたネロが突入される。

「テメ…!!」

【Good Luck（行ってきた）…!】

ネロはダンテに手を延ばそうとしたが、ドアが閉まり、何故か鍵が掛かる。

「あ…」

ドア越しに聞こえて来たダンテの声に舌打ちするが、背後を振り向けば完全に皆が沈黙… いつの間にか泣き止んでいる幼女もネロに注目しており、彼は余りのアウェイ感を感じつつも声を漏らした。

「ネロ？」

ネロの左手にはストロベリーサンデーの盛られているグラスがあるが、すぐ近くにいるフェイトから声を掛けられた瞬間に彼はそれを差し出す。

「いや、ダンテが子供を泣き止ませるのを手伝えとか言ってただけで、俺は自分で行けって言ったんだけど…」

面倒事に巻き込まれるのはゴメンだと思いつつも、いっこうにサンデーのグラスを受け取ってくれないフェイトに苛つきながらも、その場を去ろうとするネロ。

「とにかく、これ…」

フエイトに無理矢理グラスを渡し、この場から去ろうとする。
だが…

「…チツ！」

ドアが開かない。自動なのでセンサーが感知して開く筈であり、ネロが無理にスライドさせようとするがビクともしない。

「あの野郎…！」

（あいつ、押さえてやがるな…）

「ネロ」

「え？」

外でダンテはどのようにしてドアが開かないようにしているのだろうかと考えている余裕がネロにはない。あるとしたらスバル達くらいだろう。

そんな彼にフエイトは声を掛けつつ…

「はい」

ストロベリーサンデーのグラスをネロに返す。

「渡して来なよ」

微笑みながら言われても、ネロがそれを理解する為に思考を有するには数秒の時間が必要だった。

「朝は私がやったから、次はネ口の番」

情報処理が追い付かない間に言われたい放題だが、ようするにこう言う事だ。

朝にネ口から任された幼女の相手はなのはとフェイトでしたから、今回は自分でやれと。

「…え？」

「ほら。早く」

彼女の考えなどまるで分からないネ口。フェイトに促されるがままに幼女の前に来る。

「…」

なのはのスカートにしがみついている幼女が見上げる視線から目を逸らし、ネ口は一度深呼吸する。

「…ほら、これやるから…」

【ちゃんと渡せよ】

しゃがみ、幼女と視線を合わせつつも愛想悪くストロベリーサンデーを渡そうとするネ口。

しかし、ドアの外から聞いていたダンテの声に彼は過敏に反応し、舌打ちする。

「…う………」

【ほら、泣くぞ。何やってんだよ】

何処から見ているんだと思うが、実際ダンテは聞いているだけ。
ネロとダンテが念話を使えたら、今頃は凄まじい事になっていたかもしれないが、ネロは焦りながらも少女を泣かせないように次の言葉を探す。

「……泣くなよ。うまい物やるからさ」

そう言いながらネロは少女にストロベリーサンデーを差し出した。
その少女も黙って受け取りつつ、ネロの目線から目を逸らさないでいる。

「…名前は？」

ネロの問いに少女は少しかり口を閉ざし、グラスを両手で握り締めた。

なのはも自分のスカートを掴んでいた少女の手がゆっくりと離れた事に気が付くが、二人を見守る。

「……………ヴィヴィオ……」

既になのは達は知っているのだろうが、ネロは少女本人から自分の名前を聞くと、再び口を開いた。

「ヴィヴィオか。悪くない名前だ」

ネロがフツと微笑むのにヴィヴィオが見惚れるが、彼はダンテに連れて来られた話の本題に入る。

「こつちの…」

ネロはしゃがんだままなのはを見上げるが、ドアの外からダンテがやったと思われる咳払いが聞こえて来たので、他の言葉を出す。

「…なのはは大事な用があるみたいだから、行かせてやってくれないか？」

『ネロさん、出来るかな…』

『さあね…？ 私達が来る前までみたいにフェイトさんに何とかしてもらった方が手っ取り早いと思うけど』

ヴィヴィオを説得する為に、彼なりに子供の相手をしているネロを見ながら念話で話すスバルとティアナ。

「今は行かなきゃいけないけど、必ず帰って来る」

また、ヴィヴィオがなのはのスカートを掴んでしまった。

“いけない”という所がまずかったのかもしれない。

ネロは一度後ろにいるフェイトの方を振り返ろうとするが、振り返らずに顔を戻す。

「…なのはの事が好きか？」

この子は母親を探していた… その母親が見付かっていないのだとしたら、この子はなのはを母親と重ね、その存在に最も近いものとしているのではないのかと考えて聞く。

「……うん…」

母親が見付かったにしろ、見付かっていないにしろ、なのはに一番懐いているのは事実だろう。この子を見ていればそうだとネロは察しがついた。

「その人が好きなら、願いを叶えてやるように手伝ってやらないか？」

ヴィヴィオの頭にネロはポンと左手を置く。

「お願い…？」

「そうだ。ヴィヴィオも、願いを聞いてもらえないのは嫌だろう？」

ネロがヴィヴィオの頭から手を退かせると、彼女は傍にいるのを見上げた。

「大丈夫。こっちのお兄さんが言った通り、必ず帰って来るよ」

「本当…？」

「うん」

ヴィヴィオの視線になのはは微笑みながらも応える。

「さすがは坊やだな…」

部屋の外にいるダンテはフツと笑い、ドアから手を離す。

ドアに指を突き刺して出来た穴の修理費を、後にはやてから請求さ

れたのは言つまでもない。

…

「ダンテさん、何であんな事を…」

「あー、分かつてるよ。修理代の方は…」

「そつちとちやいます」

聖王教会に向かうへりの中ではやてから声を掛けられたダンテ。さっきの続きでドアに空いた穴の事をうるさく言われるのではないかと思い、面倒臭そうに取り合うダンテにちゃんとした会話をしたいはやて。

「ネロさんに任せようと思った事です」

放っておくなり、フェイトに任せればなんとかなるような事にどうしてネロを呼んだのか。彼女はそれが聞きたかった。

「あれか？」

「あれです」

合点が行った様子のダンテ。彼は椅子に立て掛けてあるリベリオンに手を添え…

「坊やならやってくれると思ったからだ」

そう応えた。

「え？」

「だから、あいつならやれるって思ったからだよ」

はやてが呆気にとられているが、ダンテは“耳、悪いのか？”と言
うような態度でいた。

「ネロならやれる…？」

「ああ」

「それだけ…？」

「そうだよ」

なのはとフェイトも腑に落ちないでいるが、彼は自分が来ている紺
のトレーニングウェアを気にしているように見回す。

「美人の姉ちゃんに会うのに、コイツはどうだろうな… 勝負服
は坊やにダメにされちまつたし、嬢ちゃん達が来てるようなのは俺
にあつてはサイズはないんだろ？」

…

（何でこうなってるんだ…）

ネロは顔に手を当てたまま、今までの事を思い出しながらも思考を巡っていた。

（午前中は訓練をサボって… 閻魔刀を振り回してる所にダンテが現れて… ストロベリーサンデー渡されて…）

「……………ん…！」

（それから… なのはとフェイトからヴィヴィオの世話を頼まれて…）

「ネロさん…！」

現在、どうしてこうなったのか… 何故こうなったのか考えていた所でネロはハッと我に返った。

「どうかしたんですか？」

ネロの傍に来ていたエリオに対して、

「いや、何でもない」

顔に当てていた手を離しつつ、テーブルの向こう側で絵を描いているヴィヴィオと、その相手をしているキャラロを見ながら応える。

「あの…」

「何だ？」

その二人を眺めながらも、ソファーに腰掛けていたネロに話を持ちかけるエリオ。

「いくつか質問… よろしいですか？」

その手には、何かが書かれてある紙がある。

「…スバルか？」

「えと…」

「そうだろ？」

「…はい」

予想はついていた。エリオにこんな事を頼むんだとしたらスバルしかいない。凶星だったようで、エリオは観念したように少しシユンとする。

「別にいいぞ。俺が手伝えって言ったんだからな？」

「すみません…」

「だから、いちいち謝るな」

立ったままにいるエリオに座るように促しつつ、数分前の事をネロは思い返していた。

——じゃあ、お願いするね？

——俺一人かよ！？

なのはにヴィヴィオの世話を頼まれつつも、まさか自分一人でやるような事態になっていた事に焦るネロ。

——頑張れよ、坊や。将来にはきつと役に立つことなんだしょ？

去り際にダンテがウインクしながら言うのにはネロも飛び掛かりそうになるが、ズボンの裾をヴィヴィオに掴まれている事で断念。

——誰か坊やと一緒に嬢ちゃんの世話してやってもいいヤツ、手を挙げろ！

見上げるヴィヴィオの目には、自分はどう写っているのだろうと思いつつ、ダンテの提案により挙手したエリオとキャロ。

——悪い…

——いえ、こちらこそ

——何度も助けて頂いてますし、これくらい私達だって

寮の窓からへりを見送りつつ、溜め息を吐くネロの背中を見るエリオとキャロ。

そして今は…

「えっと… 故郷は島国だって言っていましたけど、昨日話された時は城塞都市だって言われましたが…？」

「あー…」

第1の質問がこれかと思うネロだが、気だるそうにその質問に応える。

「故郷が“城塞都市フォルトゥナ”って言う島で… 外界とも遮断されてる所なだけだな？」

絵を描いているヴィヴィオと共にいるキャロを見てフツと笑うネロ。彼の横顔を見たままエリオは大人しく話を聞いている。

「まあ、そんな所だし、細かく話するのが面倒だから島国って言ったんだよ」

「え…？」

単純に“面倒臭い”と言う理由で話してもらったのが何処か不満なエリオは、少し眉を吊り上げた。

「それじゃあ、実際は…」

「あ…」

実際は島国ではないのかと聞こうとするエリオだが、ネロは思い出したように声を上げる。

「でも、一応はイギリスの国領内だしな… って、そんな国知らないか…」

「知ってます！」

こいつに話しても仕方ないとネロは思ったが、エリオの声は思いの外、芯が通る。近くにいるというのに、ネロの耳に届くどころか、向こうのヴィヴィオとキャロにも丸聞こえだ。

「確か、97管理外世界… 八神部隊長となのは隊長の出身世界で、フェイトさんも子供の頃に住んでた地球って言う惑星の欧州にある国ですよね」

「……らしいな…」

エリオが“でしたら解釈としては間違っていない”と言っていた所でネロはボソリと呟く。

そこでエリオも触れてはいけない部分に触れてしまったと察し、落ち込みつつもガクリと肩を落とした。

「はい」

先ほどまで絵を描いていたヴィヴィオが画用紙を持ってネロの前に来ていた。

「…君が描いたのか？」

「うん」

ネロが画用紙を受け取ると、ヴィヴィオはそのまま待っている。ネロの感想を聞きたいのだろう。

「へえ…」

やはり画力は年相応だが、描かれているのはクレヨンを使ってネロ

を描いたものだった。

向こうにはなのはやフェイトを描いた絵があるのだろう。

「上手く描けたな」

「ほんとう？」

「ああ」

傍に座っているエリオも覗き込むと、ネロの手元には2枚の画用紙があった。

1枚目は髪型が殺伐として、包帯を巻いてある右腕の上に幻影刀を出現させてあるネロの絵。

2枚目はダンテと一緒に描かれてある絵だが、こちらは2人ともストロベリーサンデーと思われるグラスを持っている。

「ヴィヴィオ、上手に描けてますよね」

「そうだな…」

近くに来ていたキャラに賛同するようにネロは静かに応える。

…

一方、聖王教会では…

「お兄ちゃん、元気？」

「お兄ちゃんは止める」

カリムの所に来たフェイト達。

フェイトと黒髪の黒い軍服を来た若い男性… 彼女の義兄であるクロノのやりとりをおかしく笑っているのはとはやてがいた。

「さて、本題に入りたい所なんだが…」

我を落ち着かせ、話を戻そうとするクロノが目を向けた先にはダンテがいた。

「…彼がそうか？ 次元漂流者で、今は六課に協力してくれているというのは」

クロノがしかめっ面になるのは無理もない。
なぜなら…

「この世界に“運命”というものはありはしないと思っていたが、君のような…」

「そうや。民間協力者として預かってるダンテさん。ウチらだけ言うのも無理があるし、今日はカリムとクロノ君にも会うからええ機会やと思つて… ダンテさん！！」

ダンテがカリムの手を取り、時代掛かった喋り方で口説く様は、まさに演劇のよう。

しかし、先ほどから顔をヒクつかせ、額に青筋を浮かべたはやてが堪えきれずに声を張り上げた。

「美しい女性に会えた事こそ、まさに… なんだよ、嬢ちゃん。今

いい所だから、後に…」

「後もしです」

カリムは半分は愛想笑い、半分は困っている笑いをダンテに向けていたが、これ以上やられたらキリがないので、はやてがムスっとした顔で無理にでも話を進める。

「ほなら、二人の紹介からやな。ダンテさん。まずは座って下さい」

「OK…」

はやてに言われ、カリムを口説くのを断念したダンテが渋々椅子に座ろうとする。

そして…

「これで…!」

椅子を蹴り上げ…

「いいんだろ？」

宙を舞う椅子が地面に落下して来た瞬間、タイミングを見計らってダンテは椅子に腰掛ける。

「おい…」

「ダンテさん!!」

カリムは言葉を失い、真面目なクロノはダンテのやる無駄な行動に

バフォーマンス

ワケの分からないまま口を開こうとするが、彼よりも先にはやてが声を上げた。

「え？」

「またですか!？」

ダンテは頭の後ろに手を回し、足組みしたままテーブルの上に足を乗せていたが、はやての声に反応してそちらを見る。
だが、はやての口にした“また”という単語にクロノとカリムは引っ掛かった。

「おっと、またやっちゃった」

そう言うと、ダンテはテーブルに乗せていた足を下ろすと悪びれない様子ではやてを見る。

「…それはさておき、こちらは聖王教会、教会騎士団のカリム。こちらはフェイト隊長のお兄さんで航行部隊で艦長やってるクロノ提督です」

「提督？ 船の？」

「船、言うても次元空間内を航行する為の船です」

カリムとクロノの紹介が済んだが、“提督”と言う言葉を聞き、ダンテは海を渡る為の船を想像しているのだろうと思ったのはやてが付け足す。

「ネロさんとダンテさんの出身世界を探してもろってるんですよ」

「なるほどな。そいつはどうも」

先ほどからずっとふざけているようにしか見えないダンテを見た後にクロノははやてを見る。

『はやて』

『クロノ君、念話やのうて口で言ったらええんとちゃう？』

『いや…』

この場で念話を使うのは好ましくないとはいっては言いたいが、クロノは話を続ける。

『彼と… もう一人いるんだろ？ 次元漂流者であり民間協力者が』

「そう言えば、ネロはどうしてですか？」

話の中に“ネロ”の名前が出てきたのでカリムが話を持ちかけると、
「ネロは元気にしてますよ。まあ、少しみんなとは距離を置いてい
ると言うか…」

「体は大丈夫… なのかな？」

なのはとフェイトが少し浮かない顔で応える。

「…どうかしたんですか？」

二人に続き、はやての表情も雲っていたのに気が付いたカリムが聞くと…

「なあに。ちょっとばかり打ち解けられずにはみ出して、なおかつ体が言うことを聞いてくれないってだけだ」

端にいたダンテが応えた。

「え…」

「なんか、調子が悪いんだってよ」

声を漏らすカリム、同じく視線をダンテに向けつつも知ってはいたが言葉を失うはやて達。

「そのネロと言うのが…」

「俺のかわいい坊やさ」

ネロの事を詳しく聞かされていなかったクロノがはやてに聞こうとしたが、彼が喋り終える前にダンテが割り込む。

…

「さてと…」

薄暗い部屋の中に一つの灯火が…

「行きましようかね…」

それは、荒々しい刃の剣を手にするウリエルだった。
灯りの正体は、彼女の軽く上げている左手から発せられている炎である。

「派手に暴れなさい…！」

ウリエルがその炎に息を吹き掛けると、宙を舞い地面から一定の高さで止まり…

「悪魔達…！！！」

彼女が指を弾いた瞬間に爆ぜ… その一瞬だけ部屋中にいた大小あわせた無数の悪魔を照らし、彼女と悪魔の姿は再び闇の中に沈んだ…

…

「…」

「なんだ？」

ヴィヴィオはキャロの隣に座り、エリオの隣に座っているネロをジ―と見詰めていた。
その視線の先にあるのは…

「……おてて…」

「え？」

包帯を巻かれた右腕である。

「おてて、痛いのか？」

ヴィヴィオはそういい、ネロの身を案じるように少し悲しい目をした。

「あ…」

「いや、平気だ」

エリオとキャロが“まずい”と思うものの、ネロは気に止める様子もなく話す。

「昔、大切な人を助けようとして怪我したんだが… その時のやつを今もやってるだけだよ」

ネロはこの子を心配させまいと、何ともない事を証明するかのよう
に拳を固く握ったり、右腕を軽く動かす。

「たいせつなひと？」

「そうさ。俺の大切な人」

まだヴィヴィオはネロを心配しているようだが、ネロは明るく振る
舞う。

「…で？」

「え!？」

「次の質問は？」

「は、はい！ え〜と…」

そして、ネロは自分からエリオに質問して来るように促した。

第2の質問、“あんな重い剣をよく片腕で持てますね”は“重いけど俺の剣だ。それに使い馴れてる”と応え、第3の質問、“バイクは買ったんですか？”は“知人から譲ってもらったやつだ”と応えた。

「仕事は赤字続きみたいですけど、普段は何を…？」

「そいつかよ…」

スバルのやつは、案外ふてぶてしいと思いつつもネロは2、3回頬を搔く。

「…暇な時は武器の手入れとか、庭弄りしてる」

先に言った方は分かるが、後に言った方がどうも引つ掛かった。

「え？ と言うと…」

「自給自足だよ。赤字の分を浮かせないといけないし、田舎だからな」

…

聖王教会… カリム達の会合が終わるのを外で待っていたシャッハ。

（あの方も銀髪ですか…）

数日前にここにいたネロの事を思い出しながらも、彼は六課でうまくやっているだろうかと思っていた。

「…！？」

だが、突如として彼女の吐いた息が白に変わる。
まるで…

「逆巻け！！！」

“冬”のように。

しかし、首都から大分距離が離れているとはいえこの地は気温変化も少なく、雪も降らない。それどころか季節外れだ。

「ヴィンデルシャフト！！！」

彼女はデバイスを起動させ、その場から跳躍する。

その瞬間に槍のような物が地面に着弾。

“氷柱”が立ち上る。

「クツ…！ 何者です…！」

彼女は着地すると、氷の槍を打ち出されたと思われる狙撃地点を睨

んだ。

そこには…

「シューーーー…」

体高が2メートル以上ある背中から尾を生やした“白い悪魔”がいた。

腕には氷で形成された柱のような物が生え、槍を射出した左腕を振り払うと共に、再び氷の槍が形成される。

「悪魔…！」

シャツハは、その姿と禍々しい魔力から犯人の正体は悪魔である事に気付いた。

教会の病棟の屋上にいる2体の白い悪魔は、フロストマスクを着けている時の呼吸音に似た音を立たせながら、ヴィンデルシャフトを構えているシャツハの所まで瞬間移動し…

「はああああああつ！！！！！」

シャツハも目前に出現したフロストに向けてヴィンデルシャフトを振り抜いた。

プロフェーティン・シュリフティンカリムの希少技能を目にしたダンは口笛を吹き、“本格的に魔法だな”と言っていたが、

「これは最短でも数ヶ月、最長で数年先の…」

何かを感じ取り、ガタン！と椅子から音を立たせながら立ち上がる。

「ダンテさん…?」

すぐにドアに向かうが、開かない。

「あの…」

「…来やがったな」

「え？」

はやて達は何を言っているのか分からないような顔をするが、次第に扉が凍りつきはじめ、

「…まさか!」

「ああ…」

窓も凍りはじめる。

なのはとフェイトも異変に気が付き、立ち上がるとダンテは静かに応え…

「悪魔だ…!」

頭を掻きながら、椅子に立て掛けてあるリベリオンを手にする。

…

【緊急事態発生！！ アンノウンと思われる巨大な魔力反応を感知、隊員は所定の配置に着いて下さい！！】

「え！？」

「まさか！！」

緊急の警報が鳴り響き、アルトの声で六課の隊舎にいる隊員達が慌てて任務の為に動きはじめる。

そこでエリオとキャラの分のデスクワークも任されていたスバルとティアナも立ち上がり、

「巨大な魔力反応… アンノウンってことは…」

「ネロさん…」

魔力の根源は“悪魔”である事を察したエリオとキャラにも不安が込み上げる。

「…う…」

その警報が原因で、ようやく寝かせたヴィヴィオが起きてしまうが、ネロは立ち上がり…

「……行くぞ…」

部屋から出ようとする。

「いっちゃうの…？」

だが、ヴィヴィオが微睡んだ目から覚め、離れて欲しくない事を哀願しようとする。

「悪いな… ちょっと…」

「やだ!…」

ネロはそこから出て行こうとするが、ヴィヴィオの声が一直線に届いた。

「行かなきゃいけないんだ…」

ネロはそう言うが、ヴィヴィオは一向に言うことを聞いてくれそうにない。
だから…

「…おい。エリオ、キャラ」

「はい」

「なんででしょうか？」

「この子の面倒、見ててくれ」

エリオとキャラの二人に任せて行こうとする。

「ですが、悪魔の… “巨大”な魔力反応って…!!」

「巨大ね…」

自分も行くと言うエリオ。彼が強調した言葉も、ネロは鼻で笑うかのよう。

「俺にとってはザコだ」

「ですが、昨日は…！」

悪魔を倒すなど自分一人で十分だ。それがネロの気持ちだった。何故なら、今までもそうして来たのだから。

エリオは昨日の出来事を持ち出そうとするが、そこから先は声が出て来ない。

「頼んだぞ？」

短い言葉と共にネロの姿は扉の向こうへ行ってしまった。

「…」

「大丈夫だよ」

「え…」

ネロの姿が消え、顔を俯かせていたヴィヴィオにキャラが優しく声を掛けると、彼女もゆっくりと顔を上げる。

「ネロさん… あのお兄さんは強いから」

不安にさせまいと、キャラはヴィヴィオに微笑む。

「つよい…？」

「そうだよ。とつてもね」

…

「…え？」

はやては何が起きたのか分からない。
何故なら…

「やれやれ…」

ダンテが拳一つで凍りついた扉を破壊したからだ。
しかし、彼の右腕は赤い電流が走り抜け、“悪魔”へと変じていた
右腕から元の“人間”の右腕に戻すと、手首のスナップをきかせる
ようにブラブラ振るう。

「ダンテさん！！」

なのはが声を上げるが、彼は手をヒラつかせ、リベリオンを背負ったまま部屋から出て行く。

「やってくれたのは“最上級悪魔”だ。見たカンジ“氷結系”のやつ…」

廊下へと出て立ち止まったダンテは、窓の外を親指で指差すと振り返り、

「…軽く相手して来るぜ」

不敵に笑みを浮かべながらもウインクする。

「最上級…？」

「簡単に言えば、昨日の“ナイトメア”並みに魔力を持ってるやつさ」

フェイトも待機状態のバルディッシュを握り締めたままだった。
昨夜、“ナイトメア”の話を彼女達は聞かされていたが、ダンテは天候を操るほどの力を持っている悪魔は“最上級悪魔”しかない
と言い、外に向かおうとする。

「それなら私達も…！！」

「レディはじつとしてた方がいいぞ」

レイジングハートから周囲が半径2kmに渡って悪魔のものと思われる魔力と雪で被われていると聞かされ、室内にいても吐く息は白くなっていた。

「それじゃ、行ってくる」

まるで掴む事の出来ない“雲”のような“風”のような存在であるダンテにクロノも呆気にと取られていた。

「あの…！」

「まだあるのか？」

今度こそ行こうとしていたダンテだが、次に呼び止めたのはカリム。

「礼拝堂には教徒の方たちと、外にシャツハが…」

「ヴァイス陸曹も!!」

ヘリで連れて来てもらったヴァイスがいる事もなのはに言われて思
い出すダンテだが、彼は天井を見上げて考え込み、

「じゃあ、そっちを頼む」

「え!？」

「礼拝堂にいるって言う教徒のやつらの方だよ。ここみたいに凍り
ついて閉じ込められてるだろうからな。俺はこんな事やらかした悪
魔が外にいると思うから、そっちに行く」

悪魔と戦うよりは安全な方をなのは達に任せようと提案するダンテ。

「…それと、修道女の姉ちゃんとかヘリパイロットの兄ちゃんは悪魔
を倒すついでに助けるよ」

教会に来た時にはやて達が挨拶していたシャツハの事も思い出しな
がらも、ダンテはシャツハとヴァイスを助けに行く事も付け足した。
ダンテが指揮する状況になっているが、ここで時間を掛けている暇
はないので、はやてはダンテの提案に賛成する。

「分かりました。ウチらはカリムを連れて教徒の人達を助けに行き
ます」

「その悪魔はダンテさんが…」

外は吹雪の為、来る時に着ていたローブを羽織りながらはやてが言い、なのはが振り向いた頃にはダンテはいなかった。

「カリム！！ ほなら行くで！！」

「え… ええ」

下手をしたら教徒の人達が悪魔に襲われている可能性がある。

急いでいたはやてに言われて、カリムも預言書を仕舞い、ローブを羽織った。

「……………」武運を……」

カリムはどうなっているか分からないシャッハと教徒、悪魔と戦いに言ったダンテの身を案じつつも、はやて達と共に廊下に出ると静かに呟いた。

「カリム？」

「え……」

「どないしたん？」

カリムの呟きははやてにも聞こえていたが、どうも浮かない顔をしていた彼女を心配してはやては声を掛ける。

「実は… 新しい預言が出たの」

「新しい預言!？」

「ええ」

ダンテのリベリオンによる突きでも壊れなかった扉が“右腕のみの魔人化”の拳一発で破壊された事に皆は驚いていて気が付かなかったが、その事を聞き、クロノも驚く。

「何て書いてあつたん？」

「それが… 一部しか読めなくて…」

“第3の預言”の内容を聞こうとするはやてだが、あの騒動の最中、古代ベルカ語の預言をカリムは僅かしか解読出来なかった。

「ええやん。“一部”でも解読できたんやし。で、何て? どんな預言なん？」

一部だけだとしても、知るべきものだ。
はやてが聞くと、カリムは静かに言う…

「……黒い翼…」

「え？」

カリムの言った言葉を聞き、はやては少し首を傾げつつ聞き返す。

「……裏切りの… 黒い翼…!」

Section:4 Prophecy 預言 (後書き)

アニメの次回予告風に第5節予告

talking:スバル&mp:ティアナ&mp:エリオ&mp:キャラ

スバル「え！？ あたし達はまとめてなの」

エリオ「しょうがないですよ。作者の都合ですから」

ティアナ「いや、ここで作者とか言ったらダメでしょ！？ せつかく今まで…！」

キャラ「ティアナさん」

ティアナ「ああ、そうだったわね… あんた達は次回じゃ出番も少ないみたいだし」

スバル「ティア？ それは言っちゃダメなんでしょ？」

ティアナ「あ！ しまった！」

スバル「エリオとキャラが落ち込んでるよ」

エリオ「いいんです…」

キャラ「ネロさんに頼まりましたから…」

ティアナ「あゝもー！！ 悪かったわよ！！ 謝ればいいんでしょ、
謝れば！！」

スバル「そう言えば、どうするのかな？」

ティアナ「何が？」

スバル「ヴァイス陸曹いないし…」

ティアナ「あ…」

エリオ「スバルさんとティアナさんも待機ですか？」

キャラ「でしたら私達と一緒に…」

ティアナ「出動するわよ！！ なんて放棄しなくちゃいけないのよ
！？」

スバル「ティア？ 落ち着こうね」

エリオ&キャラ「次回もお楽しみに！！」

ティア「チビツ子にいいとこ取られた！！」

スバル「いいじゃん。それくらい」

ティアナ「次回で私達に出番があるのか分かんないのに、あんなね
…」

スバル「あるよ、きつと！」

ティ
アナ「…バカ」

S e c t i o n : 5 } L i v i n g D e a d 黄泉の軍勢 } (前書き)

蘇りしは、嘗て狩人に倒された悪魔達…

物語は、更なる激化へと進む…

Section:5 Living Dead 黄泉の軍勢

ミッドチルタ北部に位置する聖王教会周辺一帯は、猛吹雪に包まれ、辺り一面は視界もままならない程になっていた。

「…くそっ！」

へりの中で待機していたヴァイスだが、彼は中に取り残されていた。言うまでもなく原因は悪魔がもたらしたこの“吹雪”である。

「どうなっただよ？ ストームレイダー」

【周囲一帯は吹雪と強力な魔力に包まれ、通信不能】

「マジかよ…」

彼が呼び掛けると、へりに搭載されている愛機は状況が芳しくない事を知らせる。

どうも肌寒いと思っていたが、気が付けばこの有り様だ。

「隊長さん達はどうしてるんだろう…な！」

またへりのドアを開こうと奮闘してみるものの、ビクともしない。しかも凍りついているのはドアだけではなく、フロントガラスもなので外は見えない。

ただ“白”だけ。

「ダメか…」

【此方に接近する生体反応が1】

この状況下で外へ出るのも危険だが、隊長陣達はどうしているのだろうか。

先ほどからバックヤードと連絡を取るところか、なのは達とも連絡が出来ない。

「隊長か!？」

【分かりません。ですが、かなりの速度です】

助けが来たのか、それとも他のものか。期待と不安の中でも警戒しながら問い掛けるヴァイス。

——ドンドンッ！

だが、その存在はストームレイダーが情報を伝えた瞬間にヴァイスが座る座席のドアを叩いた。

彼も一瞬は身構えると、外には黒い影が1つ。

「おい」

「え？」

外から聞こえて来た声にヴァイスも気が抜けそうになるが、その“男”はまた声を掛ける。

「兄ちゃん、居るか？」

…

同時刻、機動六課隊舎の指令室。

出勤しなければならぬ中、部隊長のはやてがいないそこに、主戦力でありスターズ副隊長であるヴィータとライトニング副隊長であるシグナムもいた。

「これは…」

皆が騒いでいる中で部隊長補佐のラインが声を漏らす。

理由は、ミッドチルタの地に巨大な魔力反応を“2つ”あるからだ。

「何が起きている！？」

「ミッド北部、並びに首都クラナガン付近の廃棄都市区画内で魔力反応… 更に増大して行きます！！」

シグナムの問いに、急かしくキーボードを叩きながらも応えるルキノ。今までにない巨大な魔力反応に総員も慌てているが、現地の映像は悪魔の魔力によって酷く乱れている。

「部隊長との連絡は取れないのか！？」

「さっきからやってるんだけど…」

はやてに代わって指揮しているグリフィスの張り上げた声にシャーリーが聖王教会にいる隊長陣に通信を入れようと試みるものの、現地の魔力の影響で強力なジャミングのようになっている為、繋がらない。

「廃棄都市の方は!？」

「そちらには別部隊が交戦中ですが、出動要請が来てます!!」

もう一方の方は、近くの部隊が既に到着しているようで、戦闘が始まっていた。

吹雪に包まれている聖王教会とは違い、こちらの方はそれほど映像は酷くないが、時間が経つにつれて乱れて来ている。

廃棄都市にて無数の下級悪魔と戦う別部隊員達の姿が。

「了解した」

「そんじゃ、あたし達も早いト」…」

「失礼します」

待機状態のグラーファイゼンを持っている手を軽く上げるヴィータ。ジャラッと金属アクセサリー特有の音をたてると、彼女の隣にいるシグナムの手にも同様に待機状態のレヴァンティンがある。

そこで指令室のドアが開き、一礼して入って来た二人の少女がいた。

「副隊長」

「スバル、ティアナ。出動だ」

「面倒になる前に早いトコ、ケリ着けるぞ」

先に入室したティアナに続き、スバルが口を開くが、そこで二人の副隊長も振り向く。

「了解です」

「分かりました。…あれ？ ネロさんは…？」

ティアナが上官の指示に従い敬礼するが、隣にいるスバルが姿が見えないネロの事を持ち出すと、シグナムヴィータもこの場に来ていない事に気付く。

「お前達と一緒にではなかったのか？」

「いえ…」

「保護した子の相手をなのはさんに頼まれちゃって、エリオとキャロと一緒に…」

ネロの姿が昼から見えなくなっていたが、此方に向かう途中でスバル達と合流していなかったのかとシグナムが聞くと、女子寮の方にいる筈だと話すティアナとスバル。

「黒猫が仔猫の世話してるってワケか？」

ネロを皮肉るヴィータだが、そこでちょうどドアが開いた。

「また悪魔か!？」

見れば、そこには遅刻して来たネロが。彼は目の前にいるスバル達ではなく、巨大モニターを睨みながら声を上げる。

「来たか… 出勤だが、お前は…」

ヴィータの言った皮肉は聞かれていなかったようだが、ネロはシグナムに顔を向けた。

「行かなきゃならないのは分かるけど、どうするんだ？ あれ見たカンジ、なんかデカイ反応が2つあるぞ」

「ああ。それなんだが…」

そう言いながら、ネロはモニターを指差した。
魔力反応が感知された2カ所はかなり離れている。メンバーを分けて動くのか。そう言おうとしたが、ネロの脳裏に一つの疑問が浮かぶ。

「それより、どうやって行くんだ？」

へりはない。何故なら出てしまっているからだ。
しかも場所は巨大な魔力反応が感知されている一つの方に。

「私とヴィータは空から行けるが…」

「スバルはウイングロードがあるけど、お前とティアナは無理だったっけ」

一応は分かっていたシグナムが顔を渋くし、ヴィータが小さく息を吐きながら言う。

…

「烈風一陣！！！」

そして場所は“巨大な魔力”に包まれている聖王教会。

そこにはヴィンデルシャフトからカートリッジを排莢し、20体以上の氷結の悪魔^{フロスト}と戦うシャツハがいた。

彼女の手にするデバイスが唸り、冷酷なる悪魔を一閃する。

「キリがない……！！」

既に何体ものフロストを葬ったが、悪魔は次から次へと現れていた。彼女が歯噛みした瞬間に数体のフロストが襲い掛かって来るが回避し、構えを取る。

（ですが…）

彼女は決して弱音など吐かない。倒されたフロストが氷が碎けるような音をたたせながら消滅して行くのには目もくれずにシャツハは射出される氷槍をかわし、ヴィンデルシャフトで叩き落とす。

（……にしても…）

「この吹雪…」

やはり悪魔が原因か。彼女は推測する。

いくら倒してもキリがない悪魔と対峙しつつ、通信も繋がらないカリムと礼拝堂にいる教徒の人達の無事を祈りつつも彼女は跳躍した。

「…？」

（この臭いは…）

視界が悪い状況で“白い悪魔”を相手にするという余りにも分が悪い中で、彼女の鼻先を“異臭”が掠めた…

…

「あの…」

日は沈み朱の世界から、夜の世界が近づく人気がない道路を駆ける“黒い鉄馬”には、若い男女が二人跨がっていた。

その後部に座る女性… いや、少女は戸惑いつつも“鉄馬”を操る男性… 青年に聞こうとする…

「ネロさん…」

バイクの運転席に座っているネロに。

「なんだ？」

彼は半ヘルを被り、ゴーグルを着けてバイクを運転しながらもティアナに聞き返した。

「いいんですか！？ シグナム副隊長の命令、無視して…！」

後部座席に座るティアナは風に声が掻き消されないように声を張り上げる。先ほどのように声が小さくてもネロには聞こえていたが、彼女の言葉などネロは気にも止めない。

——ふて腐れないで下さいよ…

数分前の事、指令室の壁に寄り掛かり、モニターを睨むネロにティアナは声を掛けるが、彼は“ふて腐れてなんかいない”とやる気なく言った。

実はこの二人、出動待機にされていたのである。

空を飛べないティアナと、レッドクインとブルーローズを持っていないネロ。現状からどうなっているか分からないので、呼び出しがない限り、二人は動く事が出来なかった。

——障害ないじゃないですか。上官命令だし…

ネロの扱いに困るティアナが溜め息を吐いた後に言う。

——あいつは俺の上官じゃない

いかにも“一匹狼”のようだが、彼が見ているモニターには廃棄都市の映像が。

——ヴィータ副隊長とスバルがもうすぐ着く頃だと思えますけど…

——廃棄都市区画内の魔力反応、急増！！

シグナムははやてがいる聖王教会に、ヴィータとスバルは廃棄都市に向かった。

それを言えば、ネロがこれ以上不機嫌になってしまうかもしれないと思いつつ、ティアナは喋っていたが…

——え！？

アルトの声に反応し、そちらを振り向いた。

——これって…！

——昨日の戦闘と同じ反応です！！

彼女に続いて声を上げるルキノ。その知らせを聞き、皆に動揺が走る。

——昨日ってどれだよ

——夜の戦闘の時です！

昨日の事などどれか分からないネロにティアナが知らせる。
彼女もこの魔力反応は、溶けたレリックが集合し出現した“ナイトメア”の時と同じものだと言った。昼間のデスクワークで分かっていた。

——あれか…　って事は…

映像ではよく分からないが、説明してもらって合点が行くネロ。
しかし、同時にそれが何を意味するか理解した。

——来ます！！

“強力な悪魔”が現れると言う事を。
通信士のアルトの声と共に皆の注目が巨大モニターに集まる。
そこに映るのは…

——魔法陣！？　でも、あんなの見たことない…！

巨大な“召喚魔法陣”である。

ミッドチルダ式でもベルカ式、召喚魔法による魔法陣でもないものを彼女は解析しようとキーボードを叩いていた。

一見すればミッドチルダ式に近いが、空と地面に浮かぶ“赤”の魔法陣をネロは無言で睨みながらも目付きが厳しくなり、

——あれって…

ティアナは一度ネロを見た。

彼女は、その未知の魔法陣はネロが《エア ハイク》を使う際に出現する魔法陣と同じものだと思い付いたからだ。

——出番だな…

だが、やはりネロはその魔法陣が何か大体予想はついていた。

——…あれも分かるんですか？

——多分だが…

ティアナが息を飲んで聞くと、ネロは頭を掻き…

——……あれは…

自分の考えを言おうとした。

しかし、そこで魔法陣の間から眩い光を放ち、炎が噴き出し始める。

——悪魔が現れる時のやつ…

——ハアアアア…！！

取り敢えずはティアナに教えたが、モニター越しに獣の呻き声のよ
うなものが炎の中から聞こえて来た。

ア
ア
ア
ア
:
:

そして、その炎が収束されて一体の巨大な悪魔が出現する。獅子のような顔、人の上半身、獣の下半身…

オオオオオオオオオオツツ！！！！

炎で形成された翼…… 巨大な剣……

その悪魔の咆哮と共に、周囲は凄まじい炎に包まれた。

—
なんだあれは…

——おい！ もう出ていいよな！？

皆が啞然とする中でグリフィスに問い掛けるネロ。

——ネロさ…

あれはヤバいだろ

ティアナが声を掛けようとするが、彼は右手の親指をモニターの悪魔に向け、一応は出撃の許可を得ようとしていた。

――別にいつらが弱いとか言いたいワケじゃないけどよ……

見れば、現場には既にヴィータとスバルが到着していた。

歯が立たない別部隊の人間も、その悪魔に近付こうと距離を詰める
スターズ分隊の二人だが、強烈な炎と熱風で阻まれている姿があっ
た。

——死人が出る前に行くぞ

口調は静かだが、その眼孔からは凄まじい殺気を放っていた。
その気迫にグリフィスは一瞬押されてしまうが、ネロはそそくさと
ドアの方に向かい、

——それじゃ…

——あの！

出て行こうとする。
だが、聞こえて来た声は幼さの残る少女の声に彼は歩を止める。

——ネロさん…

——…行っでいいよな？

ラインが宙を浮いたままネロを心配しているようだが、彼はポーカ
ーフェイスのままそう聞く。

そこには、先ほど見せた殺気の込められた目ではなかったが、彼の
目を見たラインが何か言おうとする前にグリフィスが出撃を了承し、
今に至る。

（燃料はヴァイス陸曹のバイクから抜いちゃうし…　って言うか、
バイク持ち上げてたし、エンジン直結してたわね…）

ティアナはネロにいい考えがあると言われて着いて行った結果、信じられないものを目にした。

ヴァイスのバイクを《デビルブリンガー》で持ち上げて、ガソリンを直に自分のバイクのガソリントankに送り、キーが無いのでワイヤーを引き千切ってエンジンを掛けるネロに彼女は空いた口が塞がらなかった。

（この人、やっぱり不良なんじゃ…）

「もうすぐだな… 現場はどうなってる？」

ティアナの脳裏に六課で噂されているネロのイメージが横切っているが、その本人であるネロは夜の世界も明るく照らす“炎”を見詰めるながらも聞く。

「… “あの” 悪魔と交戦中です。やっぱり、スバルとヴィータ副隊長も… 別部隊の人達も苦戦してるみたいです」

隣に展開されたモニターに目を軽く向けるネロは“よくやるな…”と呟き、小さく息を吐いた。

「陸士108部隊… だっけ？」

「はい。ギンガさん… スバルのお姉さんが所属している部隊です」

その中には見覚えのある顔があった。

スバルと共に巨大な悪魔に立ち向かうものの、地面から立ち昇る炎が二人の行く手を阻んでいる。

「あいつか…」

気だるく言うが、昨日の事を思い出しながらもネロはもう一つのモニターを見た。

「……コイツもよくやるよ…」

そこには、空から鉄球を飛ばし、グラーフアイゼンの《ギガントフォルム》で悪魔に殴り掛かるヴィータのものもある。

「…とにかく、急ぐぞ」

「え？ ちょ！？」

アクセルを捻り、更なる加速で風を切りながらも“黒き鉄馬”は夜の世界に赤い軌跡を描く…

…

「…あれは…」

漸くフロストがいなくなり、気が付けば広い場所に来ていたシャツハの目にはぼんやりとした“青い光”が見えた。

彼女は警戒しつつもその光に近付くが、そこでまた鼻を突んざく“異臭”がした。

その臭いがどうも気になるが、彼女は光に近付く。

「え…」

その光の正体を目にしたシャツハは一瞬足を止めた。

（女性…？）

艶かしい女性が二人、裸体で猛吹雪の中、倒れていたのだから。
だが、常識から考えれば、こんな事がある筈がない。
あり得ないのだから。

彼女が再び歩を進めた瞬間…

「ガアアアツツ…！！」

“異臭”が更に凄まじくなり、“何か”が叫びながらもシャツハに
飛び掛かって来た。

「ガアツ！！ クソが！！」

しかし、彼女もその存在を感じ取り、巨大な“牙”から逃れ距離を
取る。

「人間のクセにちょこまかしゃがって！！」

「うつ…！！」

（この臭い…！？ さっきの？）

シャツハの前に現れた悪魔は、蛙のような体つきに鮫鰐あなごうのような頭
を持つ“白い最上級悪魔”だった。

酷い訛りで悪態をつきながらも口からは汚らしい唾液を“異臭”
と共に撒き散らすので、彼女は思わず腕で鼻を塞ぐ。

「これも悪魔…？」

「あああ！？ 悪魔以外やったら、ナンに見えるっちゅうんじゃ！」

数日前に倒した《アサルト》とは余りにも企画違いの大きさ、人語を話す悪魔の存在にシャツハは目を疑っていた。

情報では“炎を噴き出す巨大な2体の悪魔”は目撃例が一度あるが、その悪魔が発していたのは言葉と言うより叫びに近かったのだから。

「そりゃ、別にエエが… 人間…」

「え！？」

また口からは汚ない唾液が飛び散るのにシャツハは顔を引き吊らせていたが、悪魔は青い光を放っていた人の形をした“擬態”を自分の方に引き寄せつつ、

「お前…」

息を吐く事で“異臭”を辺りに染み渡らせながらも…

「食わせろおおー！ー！ーっ！ー！！！」

シャツハに飛び掛かった。

「フンッ！！」

その悪魔は思いつきり口を閉じると共に、脳天に感じる感覚に思考が止まる。

「何じゃ… ガッ!!?」

口の中にある、食った筈の人間がいない事に悪魔が気付いたのは、空薬莢が二つ雪の上に落ち、激痛が体中に駆け巡った後である。

「あああああああつっ!!!!」

「グオアアアツッ!!」

悪魔の脳天には、カートリッジを排莢し、ヴィンデルシャフトを叩き付けるシャツハがいた。
落下に伴う重力と腕力が加わり、悪魔の頭が雪の中に沈む。

「ガ…ア…」

悪魔は雪に頭を沈めながらも苦悶する姿にシャツハはヴィンデルシャフトを振るい、深く息を吐いた。

「カリム…」

念話も通信も使えない吹雪の中で、彼女はカリムの身を案じながらも何かに気付き、顔を上げる。

「おい、兄弟!!」

「何やっとなじゃ、タワケ!!」

「こんな女に手こずんなや!!」
アマ

「ドアホ!!」

そこには、“赤”の擬態を持つ、シャツハの前で悶えている悪魔と同種と思われる悪魔が複数いた。

「いつの間に!？」

ただ、体色は更に汚ならしい“深緑”。その数は10を超えているだろう。

視界が悪い吹雪の中でも光を頼りに数えるが、もしかしたらもっているかもしれない。

「ウウ… エサヤから油断しとっただけじゃ… 兄弟」

「そんな!？」

雪に埋もれていた頭を引き抜き、バタバタと体を振るう悪魔の姿にシャツハは目を見開いた。

さしたるダメージがないのだから。

「じゃけど、氣い付けろ。コイツ、人間のクセにやりやがる」

白い悪魔と黒い悪魔に囲まれたシャツハが構えるが、その悪魔の兄弟達は醜く笑っていた。

「じゃが、俺達を殺した裏切り者の息子と比べりゃ、大したことない」

「全くだ」

この悪魔達がどう攻めて来るのか、まだ分からないが、その会話を

聞いたシャツハは困惑していた。

今、自分達を殺したと言っていたのだから。

「女^{アマ}ア… 今のはなかなか痛かったが…」

その中で白い悪魔は体を縮込ませ…

「消えた！！？」

一瞬にしてその姿が消えた。

シャツハは辺りの悪魔を警戒を継続させるが…

「あのガキほどじゃねえ！！！」

空から聞こえて来た声に顔を上げた。

見れば、白い悪魔は上空に跳躍し、シャツハを下敷きにしようとしていたのだから。

「跳んだ！？」

（あの巨体で！？）

「ガキを殺す前に、まずはテメエで腹ごしらえだぁーーーー！！！」

状況に飲まれそうになるシャツハだが、彼女はすぐにデバイスを起動し、その場からくぐり抜けようとする。

「抜け駆けすんなや！！ 兄弟！！！」

「ギャーッハハハハッ！！！！ この女^{アマ}は、この《バエル》様の

獲物だぜええーーーー！！！！」

取り巻きの悪魔達も騒ぎ始めるが、その白い悪魔バエルにノシ掛かられるワケには行かず、不満の声を漏らしていた。

「死ねえええーーーー！！！！」

「くっ……！」

巨体が迫り、ここから離れようとするシャツハ。

移動型の彼女からすれば、いくら無数の悪魔がいたところでぐぐり抜けるのは容易い。
だが……

「グオオオツツ！！？」

空から泥……いや、“ヘドロ”のような血が飛び散り、バエルは大きく軌道のずれた場所に落ちて来る。

「え……」

「兄弟！！！」

「おい、どうし……」

立ち退こうとしたシャツハも何が起きたのか分からないが、それは他の悪魔も同じである。
しかし、

「……た……」

兄弟の心配をしていた悪魔の体を“赤い閃光”が貫き、同じヘドロのような血をぶち撒けて吹き飛んだ。

「兄弟！！」

「誰じゃあ！！」

吹き飛ばしたものの発現地を悪魔はよたよたと体を動かしながらも睨み、シャツハもヴィンデルシャフトを構えながら見る。

「…俺か？」

吹雪の中には、こちらにゆっくりと近づく人影が一つ…

「俺は…」

いや、二つ。銀髪の男の後ろには、もう一人男がいた。前にいる銀髪の男に隠れるようにして前には出て来ないが。

「お前らの…」

バエルの体に突き刺さっていた銀色の刃がブーメランのように男の手元に戻る。

その銀髪の男の左腕^{ダンテ}が赤い“魔力”に包まれ、握っている黒い拳銃が…

「テメエは…！！」

「…天敵だよ」

再び発砲された。

…

「ハアアアアア…！！」

そして、廃棄都市においても戦闘は続いていた。
巨大な悪魔は魔力を体中に充填させ、大気を焼く。

「ちっ！！ コイツ…！！」

いくら攻撃しようにも悪魔には効かない事に苛立つヴィータがギガントフォルムのグラーファイゼンを握り締め、空から悪魔を見下ろしていた。

「…」

その悪魔は雄叫び以外の言葉は発さずに、一度ヴィータに顔を向け…

「オオオオオオツツ…！！」

一気に飛び掛かった。

「アイゼン…！！」

【Jawhol（了解）】

その悪魔の突進をかわし、空中で無防備になっている所に殴り掛か

るヴィータ。

彼女の言葉にグラーフアイゼンも応え…

「ギガントハンマアアアアアアアアアア！！！！！」

悪魔目掛けてギガントハンマーを振り抜く。

「でえやああああああっ！！！！」

だが…

「アアッ！！」

悪魔は体を捻り、体高ほどある大剣でグラーフアイゼンを受け止める。

「な！？」

「ヴィータ副隊長！！」

自分の渾身の一撃を止められたヴィータが動揺し、ウインググロッドを駆けるスバルが声を上げる。
そして…

「ガアアアッ！！！！」

悪魔の咆哮と共に、身に纏う炎は激しく燃え上がる。

「うあっ！？ アイゼン！！」

近くにいるだけで焼き尽くされそうになる炎から距離を取ろうとするヴィータだが…

「アアアアアアアアッッ！！！」

「うあああああつ！！！」

遂には押し負け、突き飛ばされてしまった。

勢いのまま、ヴィータは建物に叩き付けられ、そのまま地面に落下。

「副隊長！！！」

「ヴィータ三尉！！！」

スバルとギンガも駆け寄ろうとするが、炎が行く手を阻み、いつこうに近付けない。

「痛^{いっ}てえ…！！！」

「グルル…」

グラーファイゼンを杖代わりに使い、建物に寄り掛かりながらも立ち上がるヴィータに悪魔は牙を剥き出しながらも、再び炎を充填する。

（やべ…！！！）

飛び掛かって来た悪魔の姿… ヴィータの視界が全て“赤”に包まれ…

「ガアアアッ！！！」

悪魔の巨体に沈んだ…

「ギリギリだったな…」

「え…」

かと思われた。

だが、彼女の体は持ち上げられ、悪魔から離れている場所にいる。

「副隊長、ご無事ですか！？」

聞き覚えのある若い男の声に続き、次に聞こえたのはティアナの声だった。

「ティアナ！？　なんでお前がここに…　って、なんでバイク乗ってんだよ！？」

「いや、それは…」

今のヴィータはネロが左腕で腹の位置を抱えられている状態にあり、彼女が頭を上げれば、そこにはティアナがいた。

全く状況の分からないヴィータに、ティアナは何とか説明しようか考えるが、その途中でバイクは一気にフルスロットルに達し、飛び掛かって来た悪魔の大剣をかわして離れる。

「おい！！　降ろせ…！！」

「ティアナ…！！」

いい加減に放せと言いたいヴィータ。しかし、彼女の声もネロが張り上げた声によって掻き消されてしまう。

「ティア!?」

「さっきのやるぞ!」

「は、はい!」

急ブレーキによって自分達の真後ろに來たバイクに驚きの声を上げるスバル。

そして、その周囲には無数のオレンジ色の魔力スフィアが形成され…

「はあああああ…」

ネロが悪魔を見据えながらも低い呻き声を漏らすと、6本の幻影刀が出現し…

「シューーーーーーッ!」

ティアナの指示と共に、《クロスファイアシュート》と《幻影刀》が組み合わさった“青と朱の4枚刃”が飛び交う。

「グウ!」

その刃が全て悪魔に着弾。突き刺さった後に爆煙に包まれ、悪魔が後退した。

「おい…」

「相変わらずタフだな」

降ろしてもらったヴィータが何か言いたげにしているが、ネロは聞かずにバイクから降りるとスタンドを立て、ヘルメットとゴーグルを外し、小さく笑う。

「まあ、これくらいでくたばるワケないだろうし……」

「おい!!」

後ろに座っていたティアナも降りると、スバルとギンガが駆け寄って来たが、話し掛けようとしていたが、それもネロのぼやきもヴィータの一喝によって阻まれる。

「言いたいことなら山ほどあるけど……!!」

後ろの三人は何故か整列しているが、またうるさいことでも言うのだろう思い、ネロは面倒臭そうにして“手短にな”と言った。

「……っ!……」

聞いたヴィータが聞かれないように舌打ちしたようだが、かなり歯を食い縛って一度顔を背けていたから、完全にバレている。

「………よ……」

「え?」

何かモゴモゴと言ったから全く聞き取れなかったので、ネロが聞き

返すと、ヴィータは完全に聞こえる音量で舌打ちし、拳を握り締め
ていたが、ほどくと深く息を吐き…

「…ありがとよ…」

小さく言った。

「え？」

一応聞こえたが、まさかヴィータが礼を言うとは思ひもなかった
ので、ネロはつい聞き返す。

「あーもー！！ だから…！！」

「小僧オオオオオオオツツ！！！」

何度も言わせるなどの心境のヴィータがそろそろキレそうになるが、
それは一つの咆哮によって消える。

「見付けたぞッ！！」

「喋った！？」

先ほどまでは叫ぶだけの悪魔が人の言葉を話した事にスバルは驚き
つつ構えるが、ネロは顔をしかめていた。

「位の高い悪魔は喋れるって言っただろ？ まあ、そんなのはどう
でもいいか…」

フツと笑い、ネロは右手に填めているグローブを外し…

「こいつら、下がらせる」

ポケットに仕舞いながらも、ヴィータに指示する。

「お前…!!」

「早く」

命令しているかのようにだったが、その目を見たヴィータも押し黙り、

「…お前らは下がったところにいる。ティアナ、お前は遠距離から援護。スバル、ギンガ。あたしが指示するまで動くな」

命令する。

それを聞いたスバルが何か言おうとするが、彼女の背中を見ると言葉が出て来なかった。

「…分かりました」

「おい」

下がろうとするスバルにネロが呼び止めると、自分のバイクを指差し、
“これも離れた所に止めといてくれ”と言った。

「それと…」

いつ悪魔が襲って来てもいい筈だが、動かない。まるでこちらを待っているように。

巨大な悪魔を見詰めたままネロは静かに言葉を繋ぐ。

「これが俺のやり方だ…」

右肩にある包帯の結び目をほどき…

「……よく見てろ」

《悪魔の右腕》を露にして言う。

「…はい」

スバルの返事を聞き、ネロは振り向かないまま小さく笑った。

「…お前も下がってた方がいいぞ」

「ざけんなよ。あたしは副隊長だ」

スバル達と一緒に下がれと言いたいネロの言葉も払いのけ、ヴィータはグラーファイゼンを肩に担ぐ。

「で、誰が出動許可くれたんだ？ リインか？」

「グリフィス」

右腕が眩い光を放ち、閻魔刀を握るネロに軽く目を向けながら聞くヴィータに、彼は率直に返す。

「あいつ…」

「小娘…！」

後で文句でも言ってるのかと思うヴィータだが、悪魔が発した声に顔を向ける。

「貴様は邪魔だ。我はこの男に用がある」

「あ！？ なんだと！！」

「人間ごときの談話を妨げるようでは、“炎獄の覇者”の名が廃るのでは…」

“覇者”を名乗る悪魔にヴィータが噛み付いているが、ネロはそれを聞いて、一歩前に出る。

「お前…」

自分の体より遥かに小さいネロを見下ろしながらも悪魔は目を向け、

「《ベリアル》の息子か？」

黙って話を聞いていた。

「ベリアル！？」

「こいつに似た悪魔と前に戦ったって言ったよな？ そいつが今と同じこと言ってたから…」

「ククク…！」

だが、悪魔は笑う。

戯れ言を言う矮小な人間を嘲笑うかのように。

「何を言い出したかと思えば…」

いかにも小物を見るかのように。

「我がその《ベリアル》だ!!」

夜空を照らす炎を噴き出し、雄叫びが響く。

「なに!？」

「スパダの息子に敗れたが、貴様とあの男に雪辱を晴らす為に、蘇ったのだ!!」

死んだはずの悪魔が目の前にいる事にネロもヴィータも驚いたが、ベリアルが纏う炎の激しさが更に増す。

「小娘!! 最後の忠告だ!! 貴様は退^どけ!!」

「ナメんな!! 誰が退くかよ!!」

悪魔の血を引く人間と、死の世界から蘇った悪魔の戦いが始まるうとしている中で、“人間”は邪魔だと言われたのに憤慨するヴィータ。

「そうか… ならば…」

まるで何れは死に行く運命にある事を暗示するかのように…

「己の愚かさを呪うがいい!!」

その炎は焼き尽くさんばかりに放出された。

…

「スゲエ…」

吹雪の中に佇む影が二つ。一つは言葉を失っているシャツハ。もう一つは啞然とした様子で声を漏らしたヴァイスである。

「ざつと…」

「ガ…」

「こんなもんかな？」

その二人の先には、葬った悪魔の山の上にいるダンテが。彼は虫の息の悪魔に剣を突き刺し、トドメを刺す。

「…助けて頂き、ありがとうございます。あなたは…」

ヴァイスの隣にいるシャツハは息を飲み、悪魔の体が氷のように碎け散る勢いで着地したダンテに声を掛けた。
それにダンテも応えようとして口を開くが…

「兄弟!!」

「おのれ!!」

「スパイダの息子が!!」

また雪の中から現れた悪魔に邪魔され、ダンテは呆れたように溜め息を吐く。

「スパイダ…?」

「やれやれ…」

悪魔の言った言葉にシャツハはヴィンデルシャフトを構えたまま復唱するが、ダンテは頭を掻き、

「前に戦った時は、俺のこと知らなかったくせに…」

リベリオンを肩に担ぎながらも、また溜め息を吐く。

「シスターの姉ちゃん、こいつ連れて逃げな」

「え?」

「さっきの見てたが、仕留められないんじゃない?」

唐突に言われた事にシャツハは振り返るが、ダンテは大剣を悪魔達に向けながら言う。

（この人…）

「おい、あんた!!」

と言うことは、最初から見ていたのか。あれはタイミングを見計らって現れたのか。

甚だ疑問だが、こんな場所のど真ん中にヴァイスを連れて来てる時点でそのつもりだったのかもしれない。

声を上げるヴァイスは肌寒そうにしているが、ダンテは半袖のまま平然としていた。

「…分かりました。ヴァイス陸曹は任せて下さい」

仕方なしにシャツは首を振り、もう一度ダンテを見た。

「まだ聞いていませんでしたが、あなたの名前は？」

「俺か？ 俺は…」

聞かれたのにダンテも名乗ろうとするが、

「ダアアンテエエエエエエー！！！」

「お前が名乗んな！！！」

飛び掛かる勢いで食らいつこうとした悪魔をダンテは斬り捨て、格好良く名乗り損ねた事で若干落ち込む。

「なんで、テメエが言っただよ！？」

「ガアッ！！」

横たわっている悪魔に剣を突き刺し、断末魔を上げる。

「あの…」

「ああ。俺は悪魔狩人^{デビルハンター}やつてるダンテだ」

シャツハが戸惑いつつも声を掛けると、ダンテは思い出したように軽く挨拶する。

「…私は教会騎士のシャツハ・ヌエラです」

周りの悪魔達が騒がしいが、一通りの挨拶ん済ませると、彼女はヴァイスを連れて姿を消した。

「そんじゃ、ぼちぼち…」

先ほど悪魔が言っていた“俺達を殺した”と言うのが引っ掛かっていたが、ダンテは不敵に笑みを浮かべる。
そしてネロも…

「やるな…」

燃え盛る炎“ベリアル”の攻撃をかわし、閻魔刀を一度振るう。

（今の俺で倒せるか分からないけど…）
「本気で行くぜ…？」

ダンテにも昨日言われた… 先ほどもベリアルに言われた事を気にしながらもネロは剣を構える。

——どうした、小僧？ それが本気か？

閻魔刀の一閃を止められた事で、やはり今の自分には嘗ての時よりも弱いという事実を思い知らされていた。

「おい、テメエ!!」

「ちょっと本気、出すか…」

ネロの叫びと、ダンテの余裕…

「塵と灰、変わるならどっちがいい!？」

「速攻でキメてやるぜ」

二人の狩人は、己の魂の切っ先を悪魔に向け… 飛び込んだ…

Section:5 Living Dead 黄泉の軍勢 (後書き)

次回予告になってない第6節予告

注意:このセリフは、次回のものではなく、今のネロとダンテの心境です。

talking:ネロ&ダンテ

ネロ「やっぱりリアルなのか… ダンテが倒したって言ったのに…」

ダンテ「さっきの蛙野郎… バエルだっけ？ 坊やに倒されたやつか？」

ネロ「ちっ…！ やっぱり体が思うように動かねえな。しかも、また頭の中で声が響きやがる」

ダンテ「さて、調子に乗って2発も撃ちまった。まあ、美人の姉ちゃんを助ける為だし、いいか」

ネロ「ナメてんじゃねえぞ…！！ テメエにはこれくらいのハンデがあつて丁度いいんだよ…！！」

ダンテ「さてと、またテンション上がって、教会とか壊さないようにしないとな」

悪魔： それは人外存在にして魔界の住人。

生命力は高く、頭を跳ねる事が最も有効な対処法とされる。

ただの物理攻撃によるものも有効だが、強力な魔力を纏う武器による攻撃は使い手により“最上級悪魔”すらも一撃で滅する事も可能とされる。

某管理外世界 - ヴァチカン禁書図書館収蔵「魔界史」より抜粋

「あれか…！」

空を駆けるシグナムが目にしたものは、聖王教会一帯が吹雪に包まれている光景だった。

六課にいた時は強力な魔力がもたらす影響で現地の映像は見られなかったが、実際にそれを目にした彼女は静かに言葉を発し、地上に着地。

目の前の白の世界から手にしてある鞘に納まったレヴァンティンに目を落とす。

「中にいる主とテストアロッサ達と連絡はやはり取れないのか？」

【未だに通信不能】

「そうか…」

向かっている最中も先ほどから試みていた念話も繋がらない事もあり、シグナムはレヴァンティンの返事を聞いた後に改めて目の前の吹雪を見る。

「…とにかく、行ってみるとしよう。中に主達がいるのは間違いない」

彼女は一度目を瞑りながら言うと、無数の悪魔が住まう“魔の巣窟”に足を踏み入れた。

「…」

騎士甲冑を纏っている為、周囲の環境が変化していてもシグナム自身には何ということも無いが、五感を研ぎ澄ませつつも彼女は積もる雪に足跡を残し、そして吹雪に消されながらも進んでいた。

【前方に強大な魔力を感知】

「!!」

だが、レヴァンティンの警告により、彼女も己の剣の柄を掴み、構えを取る。

【数、20】

シグナムはレヴァンティンを鞘から引き抜き、鞘を仕舞うと、柄を両手で握りしめる。

【否、19!!】

「なに!？」

しかし、戦闘体勢に入った所でレヴァンティンは新たな情報を伝えた。その知らせにシグナムも一気に跳躍し、空に舞い上がる。

【数、17】

魔力反応が尋常ならざる速さで次々と減って行く事を不可解に思いつつも、魔力が集合している場所に向かう。
そして…

——ギヤアアアア——!!!

聞こえて来たのは、猛吹雪の中でも響き渡るほどの絶叫。

「悲鳴…!？」

【数、13】

凄まじい叫びと共に、また魔力反応が減った。

誰かが悪魔と戦っているのだろうか。

なのはか、フェイトか。それともシャツハかはやてか。

だが、昨日戦った時の“ナイトメア”並の魔力を持っているであろう悪魔がこれほどの速さで葬られるだろうか。

はやての広域魔法や、なのはの砲撃魔法を使えば一掃することが出来るだろうが、このような場所でそれほどの魔法を使うわけにはいかない。

「まさか…」

もし、そのような事が出来る者がいるのだとしたら一人だけ。

シグナムは一人の人物のことを思い浮かべながらも、何か声が聞こえる場所の上空で停滞する。

そして、真下には黒く巨大な影が無数と…

——Brutal!!

一つの人影…

「ダンテ!!」

最強の悪魔狩人であるダンテ。彼を見つけたシグナムは自分の考えが当たっていた事を思わず声に出す。

彼は群がる悪魔を斬り捨てながらも、何か叫んでいた。

「Atomic!!」

バリアジャケットではない普通の半袖で寒くはないのかとシグナムの頭に一瞬、疑問が浮かんだが、彼の叫び声で我に返る。

見ればダンテは残り10体余りの最上級悪魔であり、この吹雪を起こした《ダゴン》をハイタイムで斬り上げ…

「うらぁあぁっ!!」

「ギアアアアアアアア!!!!」

ダゴン… いや、ダゴン族の1体が上空に弾き飛ばされている間に残りのダゴンに剣を突き刺し…

「ガアアアアアッ!!!!」

「Smokin!!」

「アア…!」

横薙ぎに斬り裂いた時の勢いで、背後から襲い掛かって来たダゴンを2体、斬る。

「何という男だ…」

悪魔の断末魔が響く中で、シグナムは不意に呟くように言った。

（これが…）

これこそがダンテの本気なのだろうか。自分の助けなど必要として

いない事はシグナムにも分かっていた。

少し前方の所をダンテに斬り上げられたダゴンが舞い上がって行つたのに彼女は目もくれず、ダンテの戦いに自分の中で“あの男と戦いたい”という気持ちが芽生えている事に気付く。

「おい!!」

地上を見れば、ダンテは剣を肩に担ぎ、

「美人な剣士の姉ちゃん!!」

「なっ!?!」

シグナムの方を見ていた。

自分の存在に気付いていた事と、巨大な悪魔の群れの中にも関わらず、これほどの余裕を見せるダンテにシグナムは驚く。

「観戦料は払ってもらってないぜ!?!」

そう言うと、ダンテは剣を肩にトントンと打ち付け、こんな状況の中でも不敵に笑ってみせる。

「それとも、俺みたいな男が…」

「後ろ…!!」

「ガアアッ!!!!」

「おらあっ!!!! タイプか!?!」

からかっているのかどうか分からないが、不意を突いて飛び掛かって来たダゴンの噛み付きを跳び上がった回避。

シグナムに言われるまでもなかったように、ダンテは余裕と言わんばかりに華麗に体勢を整えるとダゴンの脳天に剣を深々と突き刺し、またシグナムの方に顔を向ける。

「何を言っている!!」

何のつもりで冗談を言っているのか真面目なシグナムには理解出来ないが、ダンテはダゴンの頭から剣を抜いて飛び降りると、倒された事で一瞬にして凍り付き、真後ろで砕け散る悪魔には目もくれずに軽口を叩く。

「あれ？ タイプじゃないのか？」

相変わらずふざけた調子で首を傾げるのを見ると、心なしかこちらが腹立たしくなってくるシグナムだが、

「それより…」

彼女の目の前を黒く巨大な影が通りすぎた。

ダンテは剣を両手で握り、足元を確かめるかのように踏み締め…

「遅刻だ…」

左足を上げると…

「…ぜ!…!!」

「ガッ!…!!」

野球のフルスイングのように、落ちて来たダゴンを剣で斬った。

「!!!??」

「アアアッ!!!」

「もう、パーティーが終わっちまうよ」

シグナムは何が起きたのか分からなかった。何せ、目の前を通った黒い影に顔を上げたが、断末魔が聞こえた方を見れば、その目の前を通りすぎた悪魔がダンテに斬り飛ばされていたのだから。そして、ダンテは大剣を片手で持ったまま軽く振り回して小さく息を吐き出す。

「あれほどの巨体を…」

（一撃で、あそこまで…?）

「…………ア…………アアッ…」

「兄弟!!」

「しっかりせい!!」

「おのれ!!」

只ふざけているのだとしたら、あのような芸当が出来るだろうか。シグナムが思わずレヴァンティンを握り締めるが、悪魔達は悶える“兄弟”にノロノロとした所作で近寄り、心配するもの…

「スパーダの息子!!」

兄弟を斬ったダンテを睨むものなどが。

「本当に有名らしいな…」

「ダアアアアンテエエエエツ!!!」

昨日ダンテが話した“父親は悪魔達から裏切り者扱いされているので、自分は父親の尻拭いをする羽目になっている”と言っていた事を思い出すシグナムだが、地上の悪魔は背中から氷の槍を射出し、肺を満たした息を吹雪と共に撒き散らし始めた。

「くっ…!!」

(やはり、この吹雪はこの悪魔達が…!!)

上空にいてもその吹雪と冷氣は届く。

プロテクションで吹雪から身を守り、ダンテだけではなく自分にも飛んで来た氷槍を斬り払いながらもシグナムの目付きが厳しくなる。

「ハッ!!」

だが、ダンテはそのようなものなど、何の苦にもならない、何の事もないと鼻で笑うかのように吹雪を撒き散らすダゴン目掛けて駆けていた。

「フツ!!! … ダンテ!!!」

「餌は俺の獲物だあああッ!!!」
デメエ

障害となる槍を砕いたシグナムが叫ぶと同時に、彼女には1体のダゴンが飛び掛かって来た。

「チイツー!!」

「ハアアアッ!!!」

これほどの巨体でありながら恐るべき跳躍力を持っているダゴンに彼女は歯を食い縛る。

シグナムを獲物として食らおうと飛び掛かって来たダゴンも大口を開けると、彼女の動きを封じるべく“赤”の触角を振り回すが…

「退け!!」

レヴァンティンによる縦一文字の一閃で斬り捨てられ、女性の裸体の形をした擬態が宙を舞う。

「アアッ!!!」

だが、それすらもシグナムを食らう為ならば犠牲にすぎないのか。ダゴンは一瞬、顔を歪めたばかりであり、更に口を広げる。

——食った!!!

ダゴンはそう実感し、顎を閉じた。

そして、その食った人間の味を噛み締めようとするが…

「…ア？」

何もない。

だが、腹には何かの感触がある。
まるで…

「……紫電……」

針でも刺さっているような…

「一閃!!」

「アアアアアアアッ!!!!」

その瞬間に、微かな痛みは爆発的に膨れ上がった。
僅かな痛み、微かな不快感は激痛となり、ダゴンの腹には突き刺さ
つてあるレヴァンティンが“烈火”の炎を纏い、悪魔の肉を焼き尽
くさんばかりに燃え上がる。

「ぐう… ううつ…!!」

（思っていたより…!）

ダンテは易々と斬っていたが、シグナムはダゴンを相手にして、こ
の悪魔の体は予想外に斬り辛いものだど気付いた。

「うつうつ…!!」

（キツイな…!）

ダゴン族の悪魔は体表がぶよぶよとしている為、斬るだけでは致命
傷は与えられない。

打撃や衝撃も吸収されるので、こちらも深刻なダメージは与えられ
ない。

そして、体の奥の方には、巨体をも跳躍させるほどの筋肉がある。

シグナムのレヴァンティンは、今そこで止められていた。

「この女^{アマ}アアツッ！！！！」

「うつうつっ…！！！」

激痛に身を悶えながらも、ダゴンはシグナムを振り払おうと必死に身を振る。

その抵抗に彼女も更に柄を握り締め…

「レヴァンティン！！！」

手にする“炎の魔剣”の名を叫び…

「カートリッジロード！！！」

【Ja】

魔力を込めた弾丸^{カートリッジ}を排莢し、更に斬撃と火力を上げる。

「はあああああ…っ！！！」

「ギアアアアアツッ！！！！！」

レヴァンティンの刀身が深々と食い込み、先程とは比べ物にならない激痛に暴れだすダゴン。

このまま地上に落ちればシグナムは悪魔の下敷きになるであろうが、彼女は決着をつけるべく、余計な考えを捨てる。

「でえやあああああっ！！！！！」

「アッ…！」

レヴァンティンがダゴンの腹を斬り開き、刃が描いた軌跡には“茶と緑が混ざりあったかのような血”が飛び、そして霧散する。地上に叩き付けられたダゴンは、地響きを起こしながらも仰向けのまま手足を動かしていた。

シグナムもレヴァンティンを一度振るい鞘に納めると、瀕死のダゴンに目を向ける。

「やるな」

シグナムが地上に舞い降りると、拍手が聞こえて来たのでそちらを振り返る。

「お前…」

「さすがは“剣士”… いや…」

そこにはダンテが立っていた。

彼の後ろには、既に倒されたダゴン達が数体いた。どれも虫の息であり、体も徐々に凍り付き始めている。

「“騎士”だったな？」

拍手を止めると、彼はシグナムの前で止まり、また笑う。

「…当たり前だ。私は主に使える夜天の騎士。この程度で手こずるワケには行かん」

「なるほど…」

ダンテの後ろにいたダゴン達が砕け散り、氷片と雪が舞い上がるが、ダンテは納得したように顎を触りながら…

「…何処を見ている!？」

目線を落とし、シグナムの体… 主に“脚”を見詰める。

「いや、イカした趣味してると思って…」

「貴様!!」

昨日もどうもおかしいと思っていたが、自分の事をそのような目で見ていたのかと怒るシグナムが顔を赤くし、レヴァンティンの柄を握った。

「ふざけるのもいい加減に…!!」

「何で分かんねえのかなあ…」

目線を上げているが、今度は恐らく“胸”の方を見ているのだろうと思ったシグナムはレヴァンティンを抜こうとするが、ダンテはポリポリと頬を掻き…

「なに!？」

「坊やのやつ…」

「…ネロがどうかしたのか？」

ネロの事を持ち出す。

ダンテはネロだけに止まらず、他の人間の名前をちゃんと呼ばない事は分かっていたが、シグナムも警戒を持続させたまま聞き返した。

「あいつがさ？ 姉ちゃんの格好のこと“ハレンチ”だの、“見てられない”だの言ってたんだよ」

「っ…！？」

“昨日、言ってた”とダンテが言っているのはシグナムの耳には入っていないが、

「肌、見せすぎだつてさ」

仕舞いの付け足しを聞き、“そうか…”とシグナムは複雑な感情を込めながら言う。

（どおりでおかしいワケだ…）

今なら分かる。どうして騎士甲冑の時は様子がおかしかったのか。話している時も時々、目を反らしているように見えたのも。シグナムが何か考え込んでいるように顔に手を当てていた。

「あいつ、見掛けに寄らずウブみたいなんだよ。前に俺の相棒が…」

「アア…ッ…！」

「おっと、まだくたばってなかったか」

ダンテは知っている限りのネロの捕捉事項をシグナムに教えようと

するが、彼女の背後で体が凍り始め、所々にヒビが入っているダゴンに気付いたダンテは歩み寄る。

「…おの…れ……」

「…気を付ける。まだ油断は…」

「生きてる内に聞いとくぞ。テメエは魔界から来たやつじゃない…
そうだな？」

シグナムはまだ複雑な気持ちであり、悪魔に平然と近づくダンテに注意するよう促すが、彼はまるで気にも止めないように悪魔に問う。

「…………裏切り…ものの……息子…」

「はぁ……」

仰向けの状態のダゴンは、もう手足も動かす力も残っていないのだろう。

シグナムに斬られた腹と口からは夥しい“ヘドロ色の血”が滴り落ちている。

ダンテはしゃがみこみ、そんな瀕死の悪魔の赤い目に映っている自分を見詰めるかのように聞いたが、ダゴンはうらめしそうにダンテを睨む。

自分の質問に応えない事にダンテは溜め息を吐いた。

「うつらっ!!」

「ガッ!!?」

そして、ダンテは無理にでも喋る気を出させる為にダンテの鼻頭に蹴りを入れる。

その勢いでダゴンは吹き飛び、雪の上を滑って木に直撃。

「おい…！」

「たく、前にぶち殺した時は俺のこと知りもしないで食おうとしやがったくせに、生き返ったら今度は親父がどうだこうだ…」

何をやっていると言いたいシグナムだが、彼女は前にいるダンテのぼやきを聞いた瞬間に耳を疑った。

「…言いやがって…」

「何と言った…」

「え？」

ダンテは“何がだ？”というカンジの顔をしているが、彼女は真剣な顔でダンテに一步步近付き…

「今、何と言った！？」

「何が？」

「この悪魔は“生き返った”ものなのか！？」

「ああ、それが」

シグナムが指差す先には、木の下で苦しんでいる悪魔が。

どの事を聞きたかったのか合点が行ったダンテは“落ち着けよ”と言い、体の半分以上が凍り付いているダゴンに近寄る。

：

「フンッッ!!」

大気を焼き尽くす炎を纏うベリアルは、己の大剣をネロに向けて突き出した。

「おっと！」

その焼けた樹木、もしくは岩のような剣をネロはかわし、ベリアルとの間合いを一気に詰める。

「今度は逃がさない!!」

「ほざけ、小僧!!」

迫るネロは、ベリアルにとっては余りにも小さなものである。

その迫る影を踏み潰そうとベリアルは地面に叩き付けた剣を持ち上げながらも前足を上げてネロを踏み潰そうとする。

「朽ち果てる!!」

ドンッッ!! と轟音を響かせながらも大地は揺れる。

そしてその巻き上げられた土煙の中、ベリアルの足にネロは踏み潰されたのだろうか。

「誰をどうしたいって？」

「なに！？」

いや、ネロはもう既に跳躍していた。

彼は攻撃をかわし、常人を上回る跳躍力でベリアルルの頭上へと跳んでいた。

「おらああっ！！」

「ムンツ！！」

ネロは渾身の力を込めて右手で握る閻魔刀を降り下ろす。

だが、その太刀もベリアルルの左手にある大剣によって止められてしまった。

「どうした、小僧！！ それでも《スパーダ》の血を引く者か！？」

ベリアルルは嘲笑うかのようにネロを罵るが、力は互角なのだろう。いつの間にか大剣を両手で持ち、そこからは前にも出れないでいる。

「好きなだけほざいてろ！！」

ネロも集中力を切れさせず、ベリアルルの剣とぶつかり合う閻魔刀に更に力を込める。

その間にも遠距離からはティアナの援護射撃がベリアルルに当たり、

「……！！……人間風情が……！！」

僅かに目を向け、うるさい蚊がいるかのように苛立っていた。
それを見たネロも微かに笑みを浮かべ、

「人間を甘くみるなよ… 何せ…」

— Explosion

周囲に幻影刀を展開させる。

それと同時に上空からは金属が軋むような音と風を切る音が聞こえる。

「お前は…！」

—— ううつうつうつ…！！

6本の湾曲刃は狂暴なまでに凄まじい回転を始め…

「その“人間”にやられるんだからな…！」

「グウ！！？」

一気に射出された。

完全に無防備となっていたベリアル顔面と首には“急襲幻影刀”
が突き刺さり、堪らず一歩下がる。

「小賢しい真似を…！」

幻影刀が刺さっている部分からはマグマのようなベリアルの血が噴
出し、徐々にヒビが入り始めた幻影刀を溶かす。
そして、剣を弾いて距離を取ったネロは上空を見上げ…

「ヴィータ!!」

——…りいりいやあああああ…!!

ギガントフォルムのグラーフアイゼンを振りかぶっているヴィータに向けて叫ぶ。

「やれ!!」

「あああああっ!!」

「なっ…?」

グラーフアイゼンが大きくしなり、ベリアルは顔面に刺さった幻影刀を振り払っていた指の間からヴィータの姿を捉えた時には遅く…

「ブツ飛べええええっ!!!!」

「ガアアアッ!!!!」

モロに鉄槌が直撃する。

「…アガッ…アア…」

「ナメンなつて言つたろ。覇者気取り」

「ガッ!!?」

苦悶するベリアルに追い討ちと言わんばかりのギガントハンマーが

もう一発。今度は顔の側面に直撃し、ベリアルスの巨体が大きく吹き飛ぶ。

「単純な作戦だったけど、上手くいったな」

多大なダメージにより、体の炎が弱まっているベリアルを見た後にネロを見るヴィータ。

「ああ言うのは“自分は強い”とか言ってて“人間は弱い”とか決めつけてるからな。頭はいい癖に、自信過剰なんだよ」

ネロは這いつくばっているベリアルを見ながらも気だるげに言った。

「おのれ…！ 小僧…！」

「まだやる気かよ…」

「小娘…！」

荒い息を吐きながらも立ち上がりつとするベリアルに気付いたヴィータは構えを取り、

「……人間を見下しすぎたな…」

ネロは閻魔刀の切っ先を向ける。

「…ベリアル」

そつ言葉を発すると、呼応するように右腕はボウツと青白い光を放

った。

「あらあら……」

その光景を遥か遠くの建物の屋上から見る影が一つ。

（やっぱりベリアルなんかじゃダメね……）

ウリエルだった。

彼女は役に立たない“最上級悪魔”を蔑むかのように呆れて溜め息を吐く。

「…ディエチ」

「はい」

そして、彼女の後ろには巨大な砲撃を持つディエチがいた。

その砲撃は部品の間を移動するかのように白い光を放ち、所々には鎖が巻き付けられている。

「やっちゃって。後は“他の子達”がやるから」

「了解……」

ウリエルが髪を掻き上げながら指示を出すと、ディエチの足元には《IS》を発動する際に出現する《テンプレート》が展開される。

（“エクシア”クラスの魔力がこっちに近付いてる… 面倒になる前にやった方がいいわね……）

一人思案するウリエルの隣では、エネルギーを充填させるディエチが。

「…9…8…」

（いよいよ…）

発射のカウントは始まっているが、ウリエルはこの先の展開を見抜くかのように何が起こるのか楽しみにしながらもクスツと笑った。

（お披露目ね…）

「…5…4…」

砲撃の銃口にはオレンジと白が混ざった光が漏れ出し…

（“パンドラ”の力…！）

「…0…」

ディエチは《災厄兵器》のトリガーを引き、

「発射…！」

その全てを消し去る光は放たれた。

…

「主！」

「シグナム！！ 来てくれたんか！？」

聖王教会の方では、はやて達と合流したシグナムが。

「はい。遅れて申し訳ございません」

はやて達の前には、礼拝堂の扉を破壊し、中から出てきた教徒達が出た。

「騎士カリム、シャツハ。教徒の方達は…？」

「全員無事です」

「そうですね… 貴女方も無事で何よりです」

「シグナム…」

シグナムが教徒の人達の安否を聞くと、カリムは微笑みながら返す。それに応えるべくシグナムも安堵しながら小さく笑うが…

「彼は…」

カリムの後ろにいたシャツハはぎこちなさそうにしていた。その“彼”が誰なのかはシグナムもすぐに察する。

「…ダンテなら、“この雪を降らせている悪魔”の所に向かいました」

ダゴンは全て倒した筈であるが、雪は未だに降り続けていた。
先ほどと比べれば弱くはなっているものの、ダンテ曰く“倒したら雪は止むはずだから、まだ生き残りがいる”との事をシグナムは皆に話す。

「じゃあ、彼は…」

「その“生き残り”を探しています。クロノ提督」

教徒達を囲うように守るなのははやて達も警戒しながら話を聞いているが、その中の一人であるクロノの問いもシグナムは率直に返した。

『そちらは彼に任せてしまいましたが、宜しかったでしょうか。主』

『ええよ。私たちはみんなを守らなアカンし』

シグナムも周囲に悪魔がいないか警戒しながら見渡し、念話をはやてに飛ばすが、ある事に気付いた。

『…そう言えば、テストロッサの姿が見当たりませんか？』

フェイトがいない。先ほどは礼拝堂の中にいるのではないかと思っただけ、そうではなかった。

『ああ。悪魔の魔力が弱まったみたいでバックヤードと通信が繋がってな？ フェイトちゃんは廃棄都市の方に向かってもらったんや』

『そうでしたか…』

一応は自分の上官であるフェイトの事を聞いたシグナムは目を附せる。

『それと、主』

『なに？』

『一つ分かった事が…』

——ギアアアアアッ！！！！

何かを知らせようとしたシグナムだったが、そこでけたたましい悲鳴と共に猛吹雪が襲う。

「くっ！」

「また！？」

吹雪が弱まったかと思えば、先ほど以上の冷氣と雪がはやて達と聖王教会の教徒達を襲う。

皆が悲鳴を上げ、事態が飲み込めない中でも、瞬時に結界を作り、その先を睨んだ。

「何が起きているんだ…！！」

なのはとはやてに続き、齒噛みするクロノ。

彼等がいるその先… 山の方には巨大な影が。

——ガアッ！！

『あれって…!』

『悪魔!?!』

それは、昨日戦った“集合体ナイトメア”よりも巨大な悪魔だった。体高はゆうに30メートル以上はある。それを見たなのは達も杖を構え、教徒達をカリムとシャツハに任せて臨戦体勢に入る。だが、

——ガアアアア!! アアツ!!

どうも様子がおかしい。

まるで悶え苦しんでいるかのように。

「様子が… 変…?」

——ガアアアツ!!

なのはは魔力砲撃がいつでも撃てるようにしている。後ろにいる教徒達の安全が確保されればそのつもりだ。だが、先ほどから悪魔は襲って来る気配は見せず、何かを振り払おうと必死になっていた。

——ウエアアアツ!!?

「なに!?!」

「泥…? ちやう、血か!?!」

そして、悪魔の口からは夥しい“ヘドロ色の血”が辺りに飛び散る。

結界にもそれが飛んで来たのに驚きの声を上げるのはとはやてだが…

「よつと！」

彼女達の前には一つの影が飛来した。

「ダンテさん…！？」

「でも、なんか…」

それこそはまさしくダンテである。しかし、彼の体には悪魔の唾液と血が滴っていた。

「よう、嬢ちゃん達じゃねえか。危ないから下がってな」

「いや…」

ダンテは振り返るなり軽快に挨拶するものの、彼の姿を見た教徒達は驚き、なのは達も思わず顔が引き吊る。

「その格好…」

ダンテの服に付着したものの“悪臭”は、結界を張っているにも関わらずなのは達の方に通じた。

なのはがバリアジャケットの裾で鼻を塞いでいるのを見たダンテも自分の姿を見回し、“ああ、これか…”と言った。

「いや、くたばりかけてたバエルつてのを見付けたんだけどさ？
そいつがなんかデカくなっちまうし、ノリで食われてみたんだけど、

試しに斬ってみたならあいつって口の中が弱いみたいだから、そこから…」

「テムエエエエッ！！！」

「斬りまくっただけど… しぶといやつだな、まったく…」

大剣を背負い、地面に積もっている雪で血と唾液を落とそうと試みるダンテだが、所詮は気休めでしかない。

なのはやはやて達も啞然としているが、ダンテのこうなっている事の説明の途中で《バエル》は雄叫びを上げ、それを見たダンテも“楽しめそうだ”と言いながらフツと笑う。

…

「映像、回復します！！」

時を同じくして六課の指令室、声を上げるルキノの目線の先には、乱れ続ける巨大モニターが。

「さっきの反応… まさか！？」

いや、それでもまだマシになった方だろう。

ベリアルも多大なダメージで弱まっているのに伴い、最初の頃よりはいい方だ。

そしてルキノの隣にいるアルトも覚えのあるエネルギー反応に急いで解析を始める。

【…やって…くれる…】

【危…ね…え…】

「ネロさん！！ ヴィータちゃん！！」

そして、モニターの中には瓦礫の中から出てきたネロの姿が。もちろんヴィータもいる。

二人に大した怪我もなかった事から、思わず声を上げてしまったりインも安堵した。

【現場はどうなってるの！？】

「今のところ死傷者はいません」

【そう… よかった…】

感知されたエネルギー反応と、“まさか”とは思いつつデータの解析を続けながらもキーボードを叩くシャーリーが廃棄都市に向かっているフェイトと通信を取っていた。

こちらは魔力の影響がないのでモニターには何処も異常はない。

「…どうしたの？」

【いえ、まさかとは思っていますが…】

空を飛ぶフェイトの遙か先には、微かな炎が見える。

そこから視線を移し、彼女は隣に展開されてあるシャーリーが映っているモニターを見ると、彼女は急かしく目を動かしていた。

「あれは!!」

「戦闘機人!？」

アルトとルキノの声にハツとすると、モニターには昨日記録された戦闘機人であるディエチが映っていた。しかし、彼女の隣にウリエルはいない。

【戦闘機人もいるの!？】

「そのようです…!」

(あの子が持つてる武装…)

シャーリーの前にあるモニター越しのフェイトも驚いていたが、シャーリーは最後にキーボードを叩いた瞬間、先ほどの反応が間違いではなかった事を知る。

「…そんな!」

【どうしたの…?】

不意に声を漏らしたシャーリーにフェイトもただ事ではないと思いつながら聞く。

「あの戦闘機人の子が持っているの…」

【おい、お前!!】

気持ちを整理し、息を飲むシャーリー。

その間にも廃棄都市にいるネロは無言で自分達を襲ったディエチが

いる建物を睨み、その彼の姿を見たヴィータは制止しようとしていた。

「あれは…」

【ネロ！！】

【この反応…】

ベリアルは他の部隊員達がバインドで動けなくしているが、ヴィータを無視してネロは閻魔刀を握ったままの右腕を見た後に、もう一度遠くの建物を見る。

「…ネロさんとダンテさんの剣と同じタイプの“ロストロギア”です…！」

【えっ…！？】

シャーリーの知らせを聞いたフェイトは驚愕し…

【昨日の悪魔だ…！！】

【おい！！】

ネロは一気に駆け出す。

その姿は“黒猫”ではなく、まさしく“銀狼”。

新たな狩りの標的を見付けた狩人の姿がヴィータの目には映っていた。

く予告になっていない第7節予告く

talking:シャーリー&alt;アルト&alt;ルキノ

シャーリー「まずいですよ!! 今、持ち場を離れたら...!!」

アルト「あれ? これって、私達の番?」

ルキノ「そうみたい」

シャーリー「ネロさ...! え? ウソ!？」

ルキノ「それじゃあ、普段は出番が少ないから今の内に目立つとかないと...」

アルト「あ!! ルキノ、ずるい!!」

シャーリー「いや、ネロさんじゃなくて、あなた達も持ち場離れないで...!! ちょ、今は戦闘中...!!」

ルキノ「いいよね... 私達より出番があるから...」

シャーリー「いや、そんなこと言ってる場合じゃ...!」

アルト「デバイスに改造とか、ネロさんと徹夜したり...」

シャーリー「部隊長から色々頼まれてたのよ！！　それより、モニター！！」

アルト&ルキノ「それじゃあ次回もお楽しみに！！」

シャーリー「だから前、見て！！　廃棄都市の方が大変な事になってるから！！　ちよつと二人とも！！」

S e c t i o n : 7 } D e v i l p o w e r 悪魔の力 } (前書き)

黒き騎士は、今の己の全力を…

赤き狩人は、巨大すぎる自身の力を抑えて…

そして…

Section:7 Devil power 悪魔の力

「ザマアねえな…」

「ガ… アア…」

ネロは地面に這いつく張るベリアルを見ながら鼻で笑っていた。

「あたしも小娘じゃねえぞ」

彼の隣にいるヴィータもギガントフォルムのままのグラーフアイゼンを肩に担ぎ上げてベリアルを見据える。

「ネロさんと副隊長… すごい…！」

「私達じゃ近付く事も出来なかったのに…」

その光景を離れた所にいるスバルとギンガも見te驚愕する。

「あんまり仲は良くないみたいだけど、コンビネーションはピッタリだったわ」

その二人の傍にもティアナはいる。彼女は新しいカートリッジをクロスミラージュに装填し、ベリアルに何か言っているネロを見ていた。

「2000年前にはこんなやつ、いなかっただろ？」

「ハア… アガア…」

ネロはダンテのように不敵に笑ってみせ、それを見たヴィータは“やっぱりダンテと似てる”と心中で思うが、敢えて言わない。

「年寄りなんだから大人しくしてな。まあ、そんなのはどうでもいいけど…」

まともに喋る事も出来そうになく、息の荒いベリアル。頭を掻きながら面倒臭そうにしているネロ。

「ねえ、ティア…」

「なに？」

「聞きたいことあるんだけど」

周りにいる陸士108部隊の部隊員達がバインドでベリアルを動けないように拘束している中でスバルは後ろにあるバイクを見た後にティアナの方に顔を向ける。

「バイクに乗って来た事ならネロさんに言われて仕方なく…」

「ううん、そっちじゃない。それは後で詳しく聞くから」

ヴィータのように何か言われるのではないかと思ったティアナだが、スバルが聞きたいのはそこではないらしい。帰還したらうるさく聞いてくるのだろうか。

「…じゃあ、なに？」

“詳しく”と言うことは“しつこく”聞いてくる。

訓練校からの付き合いであるティアナは後々の事を思案しながらも怪訝そうな顔で聞き返す。

「あれ”も倒したワケじゃなくて弱ってるだけなんだし、手短に
しなさいよ」

「うん。あのさ…」

“あれ”とはもちろんベリアル的事であるのは言つまでもない。

「お前、なんで俺が《スパイダ》の血を引いてるって知ってやがる」

「どう言つことだ？」

「1年前に俺と会つた時… コイツ、“死ぬ前”は俺のことを知ら
なかつた」

始まつた尋問でネロの言つたことに眉を吊り上げるヴィータ。
そしてネロはベリアルに剣の切っ先を向ける。

「ネロさんが幻影刀を飛ばす時に“さっきのやるぞ”って言つてた
よね？」

スバルの目は完全に嫉妬の色に染まっていた。

それを見たティアナが思わず“うわ…”と声を漏らしてしまうが、
お構い無しにスバルは押しよって来るのでティアナも面倒になる前
に簡潔に話そうとする。

「そのままの意味よ。ここに向かって来る途中…」

——悪魔！？　こんな所まで……！！

無駄に疲れさせないで欲しいティアナは溜め息を吐くと、つい先ほど……廃棄都市に向かっていた時のことを思い出しながらも話し始める。

「悪魔が飛び出して来て……」

——別に驚く事じゃないだろ？　もう近いんだし

“俺達を殺したいんだろうな”と付け足すネロ。

「ネロさんは運転してたから私が撃退しようとしたんだけど……」

——クロスファイアアア……！！

「ネロさんが幻影刀、出しちゃって……」

——はああああ……！！！！

ネロとティアナの乗るバイクの周囲にオレンジの魔力スフィアが10以上も展開されるが、ネロは獣が敵を威嚇するかのように低い呻き声を漏らすと6本の幻影刀が出現。

「……で、混ざっちゃってね？」

——え！？

——ティアナ！！　コントロール頼む！！

朱と蒼白の4枚刃が風を切る凄まじい音をたてているのに気付いたティアナは何が起きたのか驚いていたが、

——は、はい!!

ネロに言われてティアナが幻影刀を射出。

コントロールは上手くいき、下級悪魔は全て撃退。

「多分、魔力同士の化学反応だと思うけど… 要するにぶつつけ本番で出来た偶然の産物よ」

「ふん…」

ティアナがせっかく説明したというのに、スバルは疑り深い目で見ていた。

「なによ!!」

「前から練習してたんじゃないんだよね？」

「あんた疑ってんの!？」

スバルの顔が妙に近いが、その瞳に映るティアナは憤慨するようにクロスミラーージュを握り締めていた。

「ティアナ、落ち着いて… スバルも」

「すみません…」

「だってギン姉、魔力光の色はあたしがネロさんに一番近いのに…」

「いや、その話は後にしてね。今は戦闘中だから」

【長距離から高エネルギー反応を感知】

揉める二人をギンガがまとめ、事なきを得たのも束の間。事態は一変する。

「高エネルギー！？」

【位置は北西3200メートル地点です】

ギンガのブリッツキヤリバーに続いて姉妹機であるマツハキヤリバーがスバルに情報を伝える。

そして彼女達と別部隊員達が見た先には微かなオレンジの光が。

「…それに、どうやって生き返った！？ 聞いた話だとダンテに倒された筈じゃ…！」

問うネロの心情には微かな焦りと不安があった。

燃え盛る“2体”の悪魔の目撃例があったのはネロがミッドチルダにやって来た日と同じであり、はやての話では唐突に出現し、直ぐに退散したらしい。

「まさか…！」

ネロがやって来た時にはダンテがミッドチルダに来た時と同様に強力な魔力反応が感知されたらしく、フェイトとシグナムはその日から“レリックを持った犯人”を探していたらしい。
そして翌日にネロと遭遇。

「スカリエッティが…！」

そして今朝、ネロははやて達からスカリエッティは生体改造や人造生命体の開発をしている者であると聞かされた。

ガジェットドローンに留まらず、ダンテの話が正しければ悪魔を超越しているのもスカリエッティである事を知ったネロがその名を口にした瞬間…

——ボウ…ッ！

「おい…！」

《悪魔の右腕》が疼き、光を発する。
そしてヴィータも声を張り上げた。

（このカンジは…！）

「離れる…！」

只ならぬ不快感にネロは遙か遠く…オレンジの光がある建物を見詰めていると、ヴィータは空に舞い上がろうとする。
しかし、彼女の騎士甲冑をネロは左手で徐に掴み…

「うわっ…！？　ちょ…！！」

無理にでも引つ張って“隠れた”…

…

「…着弾確認」

砲撃を撃ち出したディエチは静かに言うが、左目に内臓されたカメラをズームにしたまま黒い砲撃の銃口は下ろさない。

何故なら、今狙った“黒騎士”を侮った為、昨日は反撃を許してしまったからだ。

【……アッ……】

【……】

【…ゲホッ！！ お前…！】

そして、視界が晴れると自分の考え通りネロが生きていたのを確認すると、彼女は第2射の準備として再びチャージを始める。

彼女の目には、体からは弱々しい火を灯して横たわっているベリアルの後ろから無言で立ち上がるネロと、咳き込みながら瓦礫を払うヴィータが映っていた。

「……！」

（悪魔を盾にした…？）

瓦礫がガラガラと崩れ、服に付着した埃を払わずに自分を見詰めているネロに照準を合わせるディエチ。

【やってくれるな…】

【危ねえトコだった… ゲホッ！！】

瓦礫の山からゆっくりと一步踏み出すネロは“取り敢えずはありがとよ”と乗り気なく言ったヴィータは見ていない。

彼が見ているのは自分に攻撃を仕掛けて来た“敵”だけ。

「くっ…！」

（ヤバい…！）

昨日の“赤”ではない“青”の瞳のネロがまた一步出た事にディエチは焦りを感じた。

「このカンジ…」

「おい…」

そして、閻魔刀を握ったまま右腕を見詰め、何かボソツと言ったネロの背中を見ながらヴィータは手を伸ばそうとするが…

「昨日の悪魔か…！」

「おい…！」

彼は彼女の前から姿を消す。

いや、消したのではなく驚異的な瞬発力で前に跳んだ。

「ベリアルは任せる…！」

「なんだよ、それ…！」

弱った悪魔を押し付けられた事にヴィータは意見しようとするが、

「かなりヤバイ」やつがいる!!」

彼は単刀直入に言い残し、ディエチがいる建物に向けて走り出した。

「弱つても回復したらソイツ、体から炎を噴き出したりするから気を付ける!! 頼むぞ!!」

（この疼き… “嫌なカンジ”だ…!!）

ヴィータはまだ叫んでいるが、彼は“ベリアルより疼きの強い”建物に向けて駆ける。

…

「レイジングハート!!」

【Shoot】

「ヴェア`アアアツツ!!?」

一方でもなのはが撃ち出したディバインシューターが巨大なバエルの鼻柱に着弾。

堪らず悲鳴を上げるが下がることも…

「飛竜一閃!!」

「ゲアツツ!! アガアアツツ!!」

前に出る事も出来ない。

それは彼女達の後ろには聖王教会の教徒達がいるからだが、最大の

理由は…

「ハハッ！ やるじゃねえか、姉ちゃん！」

ダンテがバエルの尻尾に剣を突き刺しているからである。
バエルは後ろにいるダンテに噛み付こうとしても届かず、

「テメエッ！！！」

「おっと！」

触角を振り回しても簡単に避けられてしまっていた。

「只デカけりやいってもんじゃねえぞ。脳ミソ、ちゃんと入ってるのか？」

「この…！」

バエルの尻尾にリベリオンが刺さっている為、雪は悪魔の血で染まっている。

バエルは忌々しそうにダンテを睨み付けていたが、前方に見える桜色の光に顔を向けた。

「レイジングハート！！ 行くよ！！」

【Yes , my master】

その光は、全てを撃ち抜く《神聖の光》。

「な、なんじゃあ！？ これは！！？」

「お前はじつとして…な！」

「ギャアアツツ！！！」

デイベインバスターを撃つべくレイジングハートからカートリッジが排莢され、どんどん魔力が収束されていくのに慌てふためくバエル。

しかし、逃がしはしないとダンテは更に深々と剣を突き刺す。

「ダンテさん、離れて下さい！！ 撃ちます！！」

激しく暴れるバエル。

だが、ダンテが動けなくしているので逃げられはしない。

いくら巨大化したバエルでも、この距離ならば外さないと思うのは。

「姉ちゃん、やっちゃまいな！！」

「え！？」

そんな彼女に向けてダンテは叫んだ。

その返答が理解出来ないのはも思わず聞き返してしまう。

「俺が離れたら… うらっ！！ こいつは姉ちゃん達の方に行っちゃうよ！！」

「でも！！」

「ダンテ！！」

非殺傷設定とはいえ、いくらダンテでもデイバインバスターをまともにも受けたらただでは済まないだろう。

皆を守るべくそこから動こうとしないダンテになのはとシグナムは叫ぶ。

「心配してくれてるなら嬉しいが、俺を誰だと思ってんだ!？」

“さつさとしな”と言うダンテ。

それでも戸惑うなのは。

「ゲアアアッ!! クソがあっ!!」

その隙を突いたかのようにバエルの背中から氷槍が射出される。

バエル自体が巨大化しているので槍のサイズも格段に大きくなっている。

「あかん!!」

「上は私がやります!!」

はやてが騎士甲冑を纏おうとするが、その前にシグナムが舞い上がり、瞬時にレヴァンティンをシュランゲフォルムに切り替え振るう。

「守りたいならやれ!!」

その危機的状況を打破するべくダンテがなのはを一喝。彼の言葉を信じ、なのははデイバインバスターを撃つ。

「…デイバイイイイン……ッッ!!」

「それでいい……」

バエルが狼狽え、辺りに血と唾液をぶち撒けるが、ダンテはフツと笑う……

「それで……！」

すると、彼の胸に電流が走り、
“黄色い亀裂”が広がり始めた。

「バスタァアアアアアアアー……ッ！！！！！」

視界が眩い桜色に包まれていく中でダンテは……

「フウウウツツ……!!」

歯を食い縛り、魔力で体を覆った“黒い鎧”を纏う……

-
-
-

「ハア……ハア……！」

ひたすらに地を駆ける“黒”の狩人は、己の本能に従っていた。

「ちっ…！」

そして、右腕が疼くと同時に光が見えた瞬間に舌打ちすると、脚を止めないまま“魔剣”を握り締める。

——いいか？　よく見てろよ

午前中に閻魔刀を一心不乱に振るうネロを見かねたダンテは、彼から鞘ごと刀を受け取り、

——刀つてのはな…

左手を鞘に添え、脱力する。

——ただ力任せに振り回せばいいってもんじゃない。こうやって…

右腕もだらんと下げているダンテをネロも黙って見ていた。

——…抜く！！

——うおっ！！？

抜刀の一閃。それは人間の視覚ではいつ抜いたのかなど分かるものではなかった。気が付けば刀を抜いていたという表現が正しい。ダンテの周囲に突風が吹いた事に思わずネロも目を見開いて驚く。

——こんなカンジだ。やってみろ

——あ…　ああ。分かつ…

閻魔刀を受け取り、ダンテと同じようにやろうとするネロ。しかし、海の方こうにある空からけたたましい金属音が響き、

——…た…

空が“割れる”。

——あ、いけねえ。《次元》ごと斬っちまった

ネロも啞然とした様子で口が開きっぱなしであり、向こうの方で訓練しているのはやスバル達が気付いたらしく騒いでいた。

——いや… 次元ごとって…

——お前だつて出来るだろ？

ネロは構えをとき、顔をヒクつかせているのに“なに、驚いてんだ？”というかのような顔のダンテ。

——出来るワケないだろ、そんなの

ダンテの問い掛けにネロは軽く息を吐いた後にそう返す。

——いや、だつてお前…

昨日の廃棄都市でネロがナイトメアと戦った時の記録映像の事を思い返すダンテ。

しかし、彼はそこで一度口を閉ざしてしまった後に“まあ、いいか…”と言った。

——とにかく… 閻魔刀に斬れないものはないって事は覚えときな

(…“コイツ”ならやれる…!!)

ダンテの言葉を信じ、ネロは足でブレーキを掛けながらも構える。

——お前が望めば何でも斬れるぞ。次元だろうが…

（閻魔刀なら…!!）

右腕と閻魔刀は青白い魔力を纏い…

——…なんだろうがな

（…俺なら!!）

「ハアアア…！」

オレンジと白の砲撃が迫る中で“居合い”を使うべく、ネロは余計な考えは全て捨て去った。

…

「…3…2…」

（黒騎士が…止まった？）

第2射のエネルギー充填も終わる直前であるディエチは走ることを止めたネロを見て、その事に疑問が浮かぶがすぐに振り払う。

「…1…」

（いや、躊躇っちゃダメだ。それだと昨日みたいに…）

昨日の任務が失敗したのは仕留めたと思って出来た自分の僅かな隙をつかれた事と、《魔剣士の血族》は予想を遥かに上回る事を平然

とやってのける事を知らなかったからだ。

（だから…）

「……0…」

今度は侮りもしないし、隙など作らない。

そう心に決めたディエチは、

「発射…！」

《パンドラ》のトリガーを引いた。

撃ち出された光の帯は、轟音を鳴り響かせながらも突き進む。
その先にいるのは“黒猫”…

——ギイイイインッ！！

「えっ…」

（なに… この音…？）

だが、オレンジと白の光はけたたましい金属音とぶつかり、辺りに
四散する。

奇っ怪な光景にディエチも何が起きているのか分からないが…

【ううううううう…！！！！】

「黒騎士！？」

（まさか…）

彼女の目は、光の中で微かに見える銀色の髪を。耳はネロの声を捉えていた。

だが、いくらなんでもこの砲撃に耐えられる筈がない。
何せ昨日まで使っていた武装よりも強力なものなのだから。

【…ああああっ！！！！】

「…っ…！！」

その期待と自信も一瞬で碎かれる。

ネロは砲撃を断ち斬り、

【ハハッ…！】

息を荒くしながら力なく不敵に笑う。

「斬った…？ 砲撃を…？」

ネロの瞳が“赤”に染まっていたように見えたが、自分に向かって来る“黒猫”… いや、狩りを始めた“銀狼”の威圧に押されてデイエチは微かに震わせる手で砲撃のグリップを握る。

「ハア… ハア…」

砲撃を叩き斬ったネロは先ほどより一層に苦しそうに息を荒くし、
また撃つて来る前に走り出そうとした。
だが…

「……これ…」

突如として彼の後ろには赤い網目のような物が広がり、広い範囲に渡ってドーム状に包み込む。

（結界か…）

“強制結界”の中に閉じ込められ、ヴィータ達と分断されたネロが振り返って結界に触れようとした。だが、何やら背後の方から風を切るような音と、何かが迫って来るような音が。

——ビュンツ！！

「くっ…」

建物の方を振り向いた瞬間にネロは風を切っていた“刃”をかわす為に頭を下げ、

「チイツ…！」

黄と桜色の無数の光弾をサイドロールで回避し、

「ハアアッ…！」

「シッ…！」

左右から神速で飛び込んで来た紫と赤の魔力刃を…

「……昨日のやつか…！」

背中の方に回した閻魔刀で止める。

「…！！」

「ちっ…！」

『デイド、下がれ…！』

自分の双剣が止められた事が驚いたようで、デイドは無表情のまま微かに目を細め、トーレは顔が険しいまま後方に飛んだ。

「…」

「あゝ、避けられちゃったッス」

「分かってんだよ…！」

『オットー…！ チンク姉…！』

飛ばした2本のブーメランブレードを無言でキャチするセット。光弾がかわされたことを残念そうにしているウエンディと舌打ちした後、苛ついたような口調で念話を飛ばすノーヴェ。

（確か…）

「スカリエッティの…！」

建物の屋上にいる戦闘機人を見たネロは彼女達を見上げるが、迫る緑の光をかわす為に後方へ跳び、

「なっ…！！？」

無数のナイフを閻魔刀で叩き落とし、弾くが…

「うおっ…！！」

突如として全てのナイフが爆発。

「魔剣士だか黒騎士だか知らねえけど、大したことねえな」

「いや…」

ノーヴェが鼻で笑ったが、彼女の隣にいるチンクは眼帯を着けていない左目で爆煙を睨む。

「終わってない…」

そして別の建物の上で宙に浮いているオットーは静かに言うと、隣で赤い双剣を握るデードも構えを取った。

「やはり、簡単にはいかんか…」

眉間に皺を寄せるトーレの隣には無表情のまま武装を構えるセツテがいた。

そして、次第に巻き上がった土埃は晴れて行き、ネロが姿を現す。

「危ね…」

（ギリギリだった…！）

彼は呼吸がかなり荒く、肩で息をしているほどだった。

どうやら“幻影刀”を周囲に展開したのだろう。チンクの“スティングガー”を用いたISと相殺したようで、青白いガラスのような物が砕け散っては消えていった。

「…うつ…！」

（ヤベ…！！）

真紅に染まっていた瞳も静まり、咄嗟に発動した最小限の《デビルトリガー》を解除した途端にネロは思わず片膝を着くように倒れそうになる。

（流石に… 最初から飛ばしすぎちまったか…！）

一年前にベリアルと戦った嘗ての力を出せていなかったネロが取った手段は、“魔剣”を用いた今の自分の全力。更には馴れない“居合い”に魔力と集中力を使い過ぎたせいでかなり疲弊していた。閻魔刀を杖代わりにして立とうとするが、彼の目に飛び込んで来たのは…

「IS発動…！」

「終わりです…！」

「はあああああっつ…！」

左手で投げ飛ばしたブレードを《スローターアームズ》で操り、右手のブレードを引き付けるように構えるセツテ。《ツインブレイズ》を振りかぶるデイド。そして《ライドインパルス》による高速移動で先陣を切るトーレが。

「…」

ネロはただ刮目し、剣を構えた…

…

「終わったな… だが…」

「ダンテさん!!」

氷槍が細かい粒子となって雪のように降り注ぐ。

レヴァンティンをシュベルトフォルムに戻して鞘に納めたシグナムも空からデイベインバスターによって挟れた雪を見ながら言い、砲撃を撃ったのはが叫び、はやても体の側面を残して煙が立ち昇るバエルの方を見た。
その煙の中には…

「…すげえな。これだけデカイ悪魔の体がフツ飛んじまったよ」

無傷のダンテがいた。

「良かった… て、えええっ!？」

「悪魔の後ろにいたとはいえ、デイベインバスターを受けてかすり傷一つない… だと…?」

レイジングハートが排熱処理をする中でののはとシグナムも驚いていた。

無理もない。いくらなんでもまさか“無傷”だとは思ひもしなかったのだから。

「やるな、姉ちゃん」

「いや…」

「可愛い顔して結構過激だけだよ？」

地面に突き刺していたリベリオンを抜くと、ダンテは何事もないようになのはを誉めながら歩み寄る。

彼女は少しばかり混乱しているのでダンテの話は右の耳から入って左の耳から出ているような状態。

「ダンテ…」

「なんだ？」

はやての後ろでカリムやシャッハ、クロノと共にいる教徒達も悪魔が倒された事で恐る恐る顔を上げている。

大剣を背負うと、ダンテの背中からジャキツと金属音が鳴ったが、シグナムはダンテに近付き、彼に“こっちに来い”と言った。

「お前： まさか、“あれ”を使ったのか？」

「あれ？」

「…“デビルトリガー”の事だ」

はやて達に聞かれる事は別に悪くはない。シグナムは事態が飲み込めていない教徒達をこれ以上不安にさせない為の計らいとして離れた所でダンテと話す。

「民間人を助けてくれたのは感謝する。しかし、やむを得なかったとはいえ、昨日話しただろう？ その力は極力使わぬようにと…」

デビルトリガー発動中はロストロギア反応が出るので、その力は“本当に危険な時”にしか使わないようにとはやては昨夜の内にダンテに釘を刺していた。

——安心しな。使おうと思えば簡単に出来るけど、そう“魔人”になる事もないだろ

——すみません。なんか…

——気にすんなよ

昨夜の出来事。ダンテを部屋まで案内したはやての後ろにはシグナムやリイン達もいる。

はやての話を承諾したダンテはフツと笑い、それを見たはやては苦笑していた。

——変身魔法っていうのもありますけど、ダンテさんの“あれ”、凄かったですね！

——リイン…！

——あ…

黙っていたリインが励ましのつもりで言うが、完全に空回り。そんな彼女が余計な事を言わないようにシグナムが咎めると、リインも気まずい空気になっていた事に気付き、両手で自分の口を塞ぐ。

——あの…

——気にならしてない。使ったのは俺だし、中でちょっとばかりあ

ったからさ

はやてが申し訳なさそうにダンテを見上げるが、彼は平然とした様子で首筋に手を当てて“ナイトメア”の体中の事を適当に話した。

——しかし、“切り札”って言いよったけど、ダンテさんが本気になるほど中の方は大変やったんですか？

切り札だとダンテ自身が言っていたのだが、はやてが躊躇しながら聞くと、ダンテは片方の眉を吊り上げる。

——いや、それほどでもなかったな

——え…

スバルをナイトメアの体中から救出すべくダンテはデビルトリガーを使ったのだが、その返事を聞いたはやては声を漏らした。

——じゃあ、なんで…？

——あれは早いトコ嬢ちゃんを助けないといけないうって思ったから使ったんだよ

ダンテの話はまだ続いている。

はやてはそれなら使う必要はなかったのではないかと言おうとしたが、ダンテはまだ剃っていなかった無精髭を触っていた。

——…そうやったんですか。すみません、ホンマに…

ダンテが“魔人化中なら100メートルも1秒くらいで走れる”と

付け足しているのはどうも引っ掛かるが、はやてがまた一礼するとダンテも“いいよ、別に”と手をヒラつかせる。

——って、言うかさあ…

——はい？

はやてが顔を上げると、ダンテはポリポリと頬を掻いていた。

——話、聞いてたか？

——どれのことですか？

——全部

はやてが聞き返すと、今度は背伸びしながらの屈伸。

——スカリエッティが言ってたのはムカつくけど、別にデビルトリガーを使うから本気を出すってワケじゃねえよ

背伸びが終わったダンテが深く息を吐き出すが、はやて達の思考が止まる。いや、先ほどの戦闘中にスカリエッティが回線を繋いで言っていた事を思いだそうとしているのだろう。

——でも、なんであいつが知ってたんだろうな…？

——え… ダンテさん、いま何て言いました？

——なにが？

——本気を出してないって言いよった話です！！

スカリエッティが何故知っているのか疑問に思い、珍しく頭を捻るダンテ。そこで漸く口が開いたはやてが聞くとダンテはどれを聞きたいのか分からなかったが、本気を出していないと言っていたのは本当だったのかとはやてが聞いて来たので“分かったから落ち着けよ”と両手で手振りする。

「今朝もネロに言っておいたが…」

「言っただろ？」

シグナムが真顔で喋っているが、生真面目な彼女を見たダンテは不敵に短く笑った。

「『約束は守る』ってよ」

「…！」

彼を見たシグナムは一瞬驚いた。そう言ったダンテの姿が昨夜の彼の姿だけでなく、今朝のネロと重なったのだから。

「使ったのはデビルトリガーじゃなくて《ドレッドノート》っていう魔力で体を困って攻撃を寄せ付けないやつさ」

「ドレッドノート…？」

「まあ、それは置いといて…」

ダンテも別に隠していたワケではない。言わなかったただけだ。

彼の《絶対防御の鎧》の名前を口にしようとしたシグナム。“ロス
トロギアとか言う反応は出ないだろ、多分”と言ってダンテはゆっ
くりと腰のホルスターに収めているエボニーに手を伸ばし、

「まだ終わってないぞ」

銃弾を発砲。ドンッ！と、乾いた銃声が白い雪がちらつく中に木
霊する。

「なにっ!？」

「シグナム!!」

「シグナム副隊長!!」

ダンテがただ無意味に銃を撃ったとは思えない。

彼の《黒鍵》の拳銃が向けられている先をシグナムが向いた瞬間に
はやてとなのはも叫んだ。

「ヴェアッ!!! ガアッ!!」

見れば倒した筈のバエルの肉片が集結し、再生しようとしている。
恐らくダゴン族のものも混ざっているのか、目や口も複数あり、そ
の余りにもグロテスクな悪魔を見た教徒の人達は悲鳴を上げ、シャ
ッハとクロノに庇われているカリムも思わず顔を背けてしまってい
た。

「しづといな…」

そんな人達の前にダンテは立ち、教徒達とカリムに集合体のバエルとダゴンが見えないようにする。

「元の大きさに戻ろうとしている…!？」

「もう一回…!」

バエルは周囲の魔力を吸収し、吹き飛ばされる前の体格を取り戻そうとしていた。

鞘からレヴァンティンを抜くシグナムと、再びディバインバスターを撃つべく足元に魔法陣を展開するなのが並ぶが、彼女達はハッとして振り向いた。
そこには…

「いい加減に終わらせるか…」

二丁拳銃の銃口を悪魔に向け、クロスさせた両腕に真紅の魔力を纏ったダンテが。

「……ダンテ…さん…？」

「なんという魔力だ…!!」

“悪魔”がもたらす魔力は、人間が備えている魔力よりも遥かに濃密であり、“脅威的”なまでに狂暴である。

況してや魔界の帝王すらも封印した魔剣士スパード…そして復活した魔帝を再封印したダンテの魔力である。

禍々しいまでに魔力を充填するダンテを見たのは額は額から一筋の冷や汗を流し、シグナムも悪寒に近い感覚を覚える。

「二人とも下がりな。一応加減するけど、多分後ろにある山まで消し飛んじまうぜ?」

「加減…?」

ダンテは銃を構えたまま高らかに声を上げるが、それを聞いたシグナムは何を言っているのか分からず、思わず復唱する。

「シグナム!!」

背後から聞こえて来た声に反応し、我に返ったシグナムが振り返ると、はやてがクロノと協力して教徒の人達を守るべく結界を強化していた。

「なのはも手伝ってくれ!!」

「了解!!」

「シグナム!! 早よ!!」

「承知です、主!!」

クロノに呼ばれたのはと、はやての前に出るシグナムも加わる。

…

「ぐっ…!!」

迫る刃を止めたネロは、獣の如く前屈の姿勢で頭と背中を守るように剣を構えていた。

「まだ止めるだけの力は残っていたようですね」

「ううつ!!」

先に投げてネロの気を反らす為に使ったブーメランブレードも今はセツテの手にある。

感情を込めず、あたかも瞬きもしないかのような機械的に発する彼女の言葉と共にネロの体が軋み、悲鳴を上げる。

「だが、これまでだ」

セツテに続き、トーレが低い声を発すると腕に力を込め、彼女の隣にいるディードのツインブレイズも金属同士が擦れるような音を立たせた。

「フウウッ…!!」

だが、押しきられそうになった刹那。ネロの瞳が真紅の光を放つ。

「ううつうつ!!」

まだ押し返す力が残っていた事にディードとセツテは表情を変えな
いまま目を見開き、

「!？」

「!!」

「下がれ!!」

トーレも殺気を感じ、彼女達と共に後退する。

「くっ…!!」

(落ち着け…!!)

おもし重石がなくなったことでネロは再び閻魔刀を杖代わりにして身を任せ、左手を顔にあてがった。

——力を…!

(うるせえよ!!)

ネロは酷く呼吸が乱れたまま、自分の頭の中に響く声を振り払おうとして首を振る。

「うらああああああっ…!!!!」

「…!!」

なんとか自分を落ち着かせようとするものの、彼の瞳は赤と青が交互に入れ替わるかのように点滅する。

そして、彼の事など気には掛けない敵であるノーヴェはけたたましい金属音を轟かせながら突き進み…

「……ちっ…!!」

黄色の足場“エアライナー”から飛び出し、ネロに向けて両足蹴りを繰り返す。

よく見れば、まだ遠くにある建物の屋上のオレンジの光が強くなつていき、それに伴い右腕の疼きが大きくなっていった。自身に危険が迫っている事を改めて確認したネロは己の不甲斐なさにただ舌打ちするしかない…

…

「だから言わんこつちやねえ…」

一方で広域結界にネロが閉じ込められた事でヴィータは険しい顔になる。

勝手に動いたネロが無事かどうか分からないが、彼女の前にいるベリアルはバインドで縛られたままだった。

「しかも、これってあいつが六課に来た初日の時に…」

「…」

ヴィータの記憶にはまだ新しいこと。以前ネロが廃棄都市でヘル・ヴァンガードと建物の中で戦った時のものであった。

彼女が記録されていた“赤い結界”を見ながらぼやいている姿をベリアルは身動きの取れないまま睨み…

「許せん…!」

いや、睨んでいるのかも分からない。炎獄の覇者は憎しみを込め、口から熱気を発したのにヴィータも振り返るが、

「なっ！！？」

その顔が焦りと驚愕に染まる。

「許せん…！！」

「うあっ…！？」

（こ、こいつっ…！！）

ベリアル周囲の気温が急激に上昇し、大気を焼き、歪め…

「許せんツツ…！！」

地を溶かし、それに伴ってバインドを弾き飛ばしつつ溶解させているのだから。

「この野郎おー…！！っっ…！！！！」

このままではマズイ。そう直感するヴィータ。

ベリアルは魔力と炎が先ほどとは桁違いに上がっていくのが分かる。全てのバインドが外れてしまう前に彼女は叫びながら飛び掛かった。

「……なに… あれ…？」

もう少しで廃棄都市に到着するフェイトの目に、より一層激しく燃え盛る炎と赤いドーム状の結界が飛び込んで来た。

「もしかして…」

（前にネロが閉じ込められた結界…？）

【フェイト……隊……長……】

「シャーリー!？」

胸騒ぎを感じる彼女の隣にシャーリーが映るモニターが展開するが、魔力の影響で酷く乱れ、画像が途切れる度に音声も切れ切れ。

「向こうはどうなってるの!? ヴィータ達は!？」

【こ……れ……見……】

廃棄都市で悪魔と戦っているヴィータやスバル達はどうなったのか。あの炎の近くにいるのは間違いない。

どんどん映像の乱れが酷くなっていくモニター越しのシャーリーはフェイトに何か伝えたかったようだが、そこで通信は切れてしまった。

「……っ! ……シャーリー!！」

ザーっというノイズと砂嵐しかないモニターにフェイトは呼び掛けるものの、返答はない。

「一体何が……!」

【バックヤードから通信が切れる前に現地の記録映像が届いています】

不安が募る中で、シャーリーからネロとティアナも廃棄都市にいる事を知らされていたフェイト。彼女はその二人を含めてヴィータとスバル、別部隊員達の身を案じていたが、携えるバルディッシュが低い男性の電子音で情報を伝達する。

「現地の…?」

【はい】

「…出して。バルディッシュ」

どうやらシャーリーが転送したものがギリギリで間に合っただけらしい。フェイトは一度息を飲むと、映像を出すように指示する。そこに映っていたのは…

「記録映像の悪魔…!?!」

【バックヤードからの情報でも、以前に確認されたアンノウンと同じものとのことです】

そこに映っていたのは紛れもなくベリアルである。だが、おかしい。明らかに。

「ネロが…ベリアルって言ってた悪魔…!」

それは地上部隊でも最も危険視されているアンノウン《ベリアル》。しかし、記録のものとは明らかに違う。

【人間風情がっ!】

【うわああああっ!?!】

体に纏う“魔界の炎”は何者も寄せ付けず、魔力弾を意図も簡単に掻き消す。

燃える炎は魔界で最も過酷な“炎獄”から呼び寄せたもの。魔界の一角を統べる覇者は小賢しい虫を振り払うかのように右手で

ヴィータを弾き飛ばし、

「ヴィータ…！」

【ガアアアアアッ！！！！】

「スバル、ティアナ…！ ギンガ…！」

全てを焼き尽くす炎によって愚かな人間を断罪するかのよう。
そこで映像が終わってしまった。

歯を食い縛り、強く閉じた瞼を開いたフェイトはキッ！と先の炎を
睨み付ける。

（みんな…！！）

だが、あの映像を見る限りベリアルは…

——オオオオオオオオ——…ッ！！！！

“飛んでいる”。飛んでいるのだ。

背中に備えた炎は翼となり、ベリアルを飛翔させていた。

「行くよ…！ バルディッシュ…！」

【Yes, sir】

一度は朽ち果て、滅びた身である覇者は力を蓄え、“本来の力”を
取り戻していた。

覇者が雄叫びを上げるその地獄の中にフェイトは《戦斧》を携え、
金色の閃光となって飛び込む…

Section:7 Devil power 悪魔の力 (後書き)

第8節予告

talking:フェイト

あの悪魔… 飛べるんだ…

それにこの魔力、離れてても体に突き刺さるように感じる。
推定でもSS… いや、もっと!?

ヴィータ、スバル、ティアナ、ギンガ… ネロ…

早くしないとマズイことになる…!!

ここは、私一人でも!!

S e c t i o n : 8 } T e r r i b l e S h o c k 激動 } (前書き)

戦いの炎は、更に激しさを増す…

宿命の螺旋からは決して逃れられはせず、人はそれを受け入れなければならぬのか…

Section: 8 Terrible Shock 激動

最後の夜天の王の前にあるのは、闇を断ち斬る雷。滅する紅蓮の炎を纏いし赤き狩人。

「これが…」

彼女は不意にそう声を漏らす、ハツとして結界の強度を増すために意識を集中させる。

（ダンテさんの魔力…！？）

リミッターが付いているとはいえ、魔導士ランク総合SSを誇る彼女でさえダンテの力には驚いていた。

これがあのふざけた男の本気なのだろうか。はやては一瞬そう考えるが、ダンテが先ほど言った言葉を思い出す。

（これでも… 加減してる内に入るんか！？）

ダンテが魔力を充填させはじめて僅か10秒も経ってはいない。しかし、彼の腕に纏う魔力は軽くSランクなど超えているだろう。

「なあ！」

バエルとダゴンが混ざりあった集合体悪魔は周囲に肉をぶち撒け、口からも悪臭きまわりないヘドロのような唾液を撒き散らす中でダンテは声を上げた。

「この中で一番偉いのは誰だ！？」

「えっ！！？」

教徒達は、はやて達の後ろで身を固めて悪魔から顔を背け、目を強く閉じている。

そこでなのも意識を集中したままダンテを見た。

「どついう事ですか！？」

はやても声を上げる。

そこで彼女達は気付いた。ダンテがこの様な状況でも不敵に笑い、軽く振り向いていることに。

「だから、そのままの意味だよ！ 取り敢えずはブツ放すけど、こつて何かの教会だろ？ 下手したら敷地とか建物も壊しちゃうかもしれないし、あっちの山も地図から無くなって平地になっちゃうだろうからな！」

要するにこうだ。

このままチャージショットを撃つたら被害も大きいだろうから、“多少”壊してもいいか許可が欲しいとダンテは言いたいのである。

「…ここの管理者は騎士カリムだが…」

ダンテのかなり荒い説明を聞いたシグナムは片膝をつき、鞘に納めたレヴァンティンを地面に突き立て、柄を両手で握ったままカリムの方に顔を向ける。

「確かにそうですが… カリム」

シグナムの隣でカリムを守っているシャツハが振り返る。

「これほどの魔力を撃ち出したら、建物にも被害が出るかもしれないが……」

「……分かってるわ……」

クロノも険しい顔になっていた。

なのはの砲撃がどれほど強力なものか彼は知っているからこそ、ダントの撃つであろう魔力を込めた弾丸の凄まじさを予想する。

クロノの言葉を聞いたカリムも教徒達を庇うようにしたまま、瞼をそっと閉じると静かに言う。

「……ダンテさん」

彼女がそう言ったのを聞き、教徒達の中に紛れているヴァイスは無言のまま顔を上げたが、ダンテの凄まじい魔力を見て顔が引き吊っていた。

「……教徒の方達を守るのが最優先ですが、出来れば被害が少ないように……」

「分かってるよ。あの先に建物とかないよな？」

「……ありません」

「山が消えちまうだろうけど構わないか？」

「……はい」

まずカリムの話の途中にダンテが割り込むが、バエルがいる先には何の建物もない。

しかし、山はある。下手をしたら誰かが住んでいる山小屋でもあるのではないかと考えていたダンテだが、カリムによれば大丈夫らしい。

いや、実際は大丈夫などではない。管理局… 地上本部の方から何か言われるだろうが、悪魔は完全に滅するしか倒す方法はない。

カリムが最後に言ったのを聞いたダンテは口元を微かに吊り上げた。

「OK… そんなじゃ！」

——ガチッ…！

ダンテが拳銃の撃鉄を起こすと、彼の腕に纏っていた真紅の雷が駆け巡る紅蓮の炎が《黒鍵》と《白鍵》の大口径二挺拳銃へと送り込まれる。

「美人の姉ちゃんと真面目な信者の為に人肌脱ぐか…！」

ダンテの耳には後ろにいる信者が「聖王」だの「神」だの言っているのが聞こえていた。

彼は“神”がいるとは思ってもいないし、信じてもない。

だが、彼らのような者達にはそのような存在が必要なのだろう。

そのような想いや正しい心を持っている人を見ると、「あの爺さんも余計なこと考えなけりやな…」と呟いた。

「ヴェアアッ…！」

「…ハッ！」

迫る魔物を恐るるに足らないと言いたげにその鼻で笑い飛ばす狩人。

「Come on babes!!」

——ドウンン…ッッ!!!!!!

幾多の修羅場を潜り抜けてきた最強の獣。

右前足に包帯を巻いている“若き銀狼”をも容易く擦じ伏せる“最強の銀狼”。

その銀狼の咆哮と共に、たった2発の弾丸に込められた魔力は周囲の吹雪を吹き飛ばし、空間すらも歪め…

「ヴェエアアアッ!!!!!!!!!!」

驚異的な再生能力と生命力を持つ《凍土の主》を滅する。

「アアアッ!!!!!!!!!!」

「ゲエアアッ!!!!!!!!!!」

「エアアアッ!!!!!!!!!!」

口が複数ある為か、その各所からは断末魔が響き渡る。

教徒達は醜い悪魔と眩い光から顔を背け、

「くうっ!!」

「うっつ!!」

はやてとなのはでさえも目を開けていられない状態だった。

「っ…!!」

（それでも加減していると言いたいのか!？）

シグナムでも辛い状況だった。

だが、微かに開いた彼女の目に飛び込んできたのは、赤い閃光に消され行く悪魔と…

「Adios , Amigo（さらば友よ）！」

華麗に銃を指で回し、ホルスターに収めながらキメるダンテだった。

「終わったぜ？」

「え…」

雪が巻き上がる中、ダンテは皆に近寄りながら言つと、はやても何の重圧も悪魔の魔力も感じられないことから目を開けて顔を上げる。

「……雪が… 止んだ？」

「そりゃな。悪魔倒したんだし止むだろ」

なのははいつの間にか雪が止んでいたことに気付き、空を見上げる。ダンテも地面に残っている雪を拾い上げて髪や服に付着しているバエルの唾液を落とそうと試みながら言った。

「まあ、それはさておき…」

結界が消え、教徒達も先ほどまでの猛吹雪が止んでいたことに驚い

ているようだった。

そして、ダンテはどんどん溶けていく雪で汚れを落とすのを諦めたらしく、チャージショットを撃った方角を見る。

「派手にやっちまったな。ワリイ」

ダンテはカリムにそう言う。

だが、頭は下げておらず、どう見ても謝っているようには見えない。

「え… あの…」

「カリム…!」

カリムも少し戸惑っているようだったが、隣にいたシャツハが見詰めて声を上げる先を彼女を見た。

「あー、手加減したんだけどな…」

ダンテも腕組みし、バエルがいた場所… いや、その先を見る。はやて達もそれを見て声にならない悲鳴を上げた。何せ…

「山が…」

「消えてやがる…!」

車線上にして軌道上にあった山が激しく削られていたのだから、いや、もう削られている、抉られているというものではない。子供が作った砂山を蹴飛ばしたようなものと例えるのが最適だ。

「ヤベエな。本当に悪い」

先ほど驚きの声を上げたシグナムとヴァイスもダンテの方に顔を向けるが、彼は誠意0でカリムに謝る。
いや、絶対に謝っていない。

「あの…」

「本当に悪いって思ってたんだぜ？」

——バキン！

カリムが色々な意味で少し震えていたのでダンテは彼女に向けて一歩踏み出す。

だが、彼の足元から何かを踏み碎いたような音がした。

「ん？」

まるで氷を踏んだような。ガラスを砕いたような。
ダンテは地面に散らばる赤い塊を拾い上げる。

「それ…」

「まさか…！」

なのはの頭にはふとした疑問が浮かび、はやてはそれが何かの欠片であつた事を察する。

「レリック…！！」

はやて言った時には遅かった。レリックの光に包まれ、ダンテは赤い光の中に消える。

「…ダンテさん!!」

「ダンテ!!」

なのはとシグナムがダンテの消えた場所に駆け出すが、彼の姿はない。
完全に。

「空間転移… したのか？」

クロノは何が起きたのか比較的冷静に頭で処理する。

「なんでレリックが…?」

【おそらくアンノウンの体内にあったものが、先ほどの攻撃で排出されたのではないかと】

なのはが言ったことをレイジングハートが即決に応えた。

【先日ものとは比べれば魔力も安定していたので、暴発の恐れもありませんでした。マスターが撃った砲撃でアンノウンを再生させたのもレリックによるものと思われます】
「…」

そのままなのはは目を細くし、何が起きているのか推測しようとする。

（昨日も悪魔… それにレリック…）

『……先ほど言いそびれましたが…』

『シグナム…？』

「まさか」としか言い様のない顔になっていたのはだが、シグナムが飛ばした念話は彼女の隣にいるはやて以外にもものは、カリム、シャッハ、クロノにも届く。

『一つ分かったことがあります』

教徒達を避難させるため、早く他の場所に連れて行く中でも心配させないようにシグナムは念話を使っていた。

実際、民間人にこのような話を聞かせるワケにはいかないのだが。

『そやったな…』

『何が分かったんだ？』

はやてはダンテのいた場所を見た後に、クロノはなくなった山を見た後に聞く。

『……やはり、今回の一件… いや、それだけではありません』

ダンテは先ほど、レリックによる空間転移で飛ばされる前に逃れようとしていた。

だが、彼の足は地面に吸い付いていたかのように離れなかった。そのように見えたシグナムは、「あのレリックの転移も意図的なものなのではないか」と考えながら話す。

『悪魔を暴れさせている… 少なくともミッドに寄越しているのはスカリエッティです…!』

…

「オオオオツッ!!!」

その余りにも巨大すぎる力を己のため、愚かで矮小な人間を殺すために使う炎獄の覇者は雄叫びを上げる。
その宙に浮かぶ悪魔は炎の翼をはためかせ、獅子のごとく夜の空に向けて叫んでいた。

— P l a s m a L a n c e r

「グル…!」

魔力と只ならぬ闘気を感じ取り、ベリアルは雷の槍をかわし、剣で叩き落とす。

「はぁぁぁぁあつ!!!!」

「ムウツ…!!」

——ギンツ!!!

ベリアルが新たな標的を見たと同時にフェイトがバルディッシュをザンバーフォームに切り替え、雷光となって斬り掛かった。
そのスピードに驚いたのか、それともまた自分に立ち向かう人間が

増えたことを愚かと思いながら大剣で防ぐ。

バルディッシュのザンバーが斬りつけた部分からは岩が削られるような鈍い音が鳴ったが、傷一つない。

「くっ！」

（しまった…！！）

急速停止したので地面には突風が吹いたように土が巻き上がる。

フェイトはスピードと渾身の斬撃を組み合わせた攻撃で仕留めそこなったことを齒噛みしながらベリアルを睨む。

「また人間が増えたか…」

ベリアルは宙に浮いたまま剣を一度振り、地上にいるフェイトを見下ろす。

「この世界の人間は魔力を有しているのをいいことに“英雄”になるうとも思っているのか？ 全く愚かだ」

「お前が…」

「ム…？」

ベリアルは人間はどこまでも愚か極まりない生き物であると言いたいようだった。

たかがその程度の力で「最上級悪魔」に立ち向かうなど愚かかと言いたいようがないと。

だが、フェイトはバルディッシュの柄を両手で握り締め、小さく言葉を発し、

「お前がみんなを……!!」

大きな怒りを電気へと変換させた魔力を周囲に迸らせながら叫ぶ。

「なるほど…… 仇討ちか……」

フェイトを蔑むかのように、見下すかのようにベリアルは言った。

「バルディツシュ!」

【Yes , sir】

バルディツシュからはカートリッジが排莢され、魔力刃の光が強くなる。

「貴様にも教えてやろう……」

ベリアル体からは更に強い熱と炎を発生し、

「人間ごときが悪魔に勝てぬということ……!!」

「ああああっ!!」

“雷光”と“炎獄”の戦いが始まった。

…

「……エリオ君……」

六課の女子療にいるキャラは窓の外から視線を移し、後ろで眠っているヴィヴィオの傍にいるエリオを心配そうな顔で見る。

「みんな… 大丈夫だよな？ スバルさんもティアナさんも…」

「隊長達も…」

魔力の影響で映像の途絶えた。今では、現地の状況がどうなっているのかも分からない。

いや、それ以前に二人は最初から見れなかった。

キャラが不安そうに言ったのに続き、エリオは待機状態のストライダを見ながら言う。

（みんなが出勤してから30分… ティアナさんから通信があつてから15分…）

「皆さん…」

フェイトが廃棄都市の方に向かったことをエリオとキャラは知らされていない。

彼の脳裏にティアナから通信が入った時のことが横切っていた。

——悪いんだけど、あんた達には映像を見せないようにってネロさんが言ってるから、シャーリーさんに頼んどいたわよ

——えっ！？

——ゴメンね。子供には見せられないぐらいすごいことになるって彼が言ってるから

エリオとキャラの後ろには何がどうなっているのか分かっていない

ヴィヴィオがいた。

最初にバイクで走っているティアナの横顔の映像を見たエリオも何故か分らずに戸惑うものの、その隣にあるモニター越しのシャーリーが余程の事態のためか真剣な顔で言う。

「……」

エリオは出動待機のまま前のめり椅子に座り、ヴィヴィオの寝顔を黙って見る。

（どうか「無事で…」）

エリオはいつの間にか両手を合掌し、握り締めていた。

…

「やあああつー!!」

「フンッッ!!」

雷の刃はフェイトの叫びと共にベリアル脳の脳天に向けて振り落とされる。

しかし、剣の切っ先が叩き付けるのよりも前にベリアルは左手で握る大剣をフェイトに向けて突き出した。

「うっうっうっ…!!」

ぶつかり合う剣からは電流が弾け、炎が噴き出す。

「人間の女… なかなかやりおるな」

「くっ！」

フェイトは全身全霊を込めてバルディッシュを振るうが、ベリアルにはまるで歯が立たない。

炎獄の炎を纏うベリアルも“人間風情でありながら”手応えのあるフェイトをそれなりに評してはいるが、まだそちらの方が上。

「這いつくばっているその者達よりはだがな」

「黙れ！！」

——バチイッ！！！！

ベリアルが見る先には倒れているヴィータ達。

フェイトは更なる怒気を込み上げ、叫ぶと共にベリアルから距離を取った。

「人は弱いかもしれない。……だけどお前のようなただ破壊と殺戮を繰り返すだけの存在に敗けるワケにはいかない！！」

——死亡した武装局員8名… 負傷した局員と民間人合わせて43名…

——…そうか…

ベリアルが宙に浮かんでいるのと同様に、フェイトも空にいる。そのフェイトの脳裏にはネロと出会う前日の記憶が蘇っていた。

この程度かと言わんばかりに叩き斬る。

「所詮は貴様も人間だ」

哀れなものを見るかのようにベリアルはフェイトを見る。
いや…

「ム…？」

フェイトはもうそこにいなかった。

ベリアルは軽く頭を動かしてフェイトを探すが、何処にもいない。
代わりにベリアルは右の脇腹に感じた不快感から、その部分を見た。

「…先ほどの攻撃は囷か…」

ベリアルは右脇腹の部分は微かに炎が弱まっていた。

その事からフェイトが一瞬で間合いを詰めて斬り掛かって来たことを理解する。

「そうであろう？ 女」

「…っっ！…」

得意とする高速戦闘による攻撃が全く効いていなかったことにフェイトは顔が強張り、ベリアルゆっくりと振り返りながら言う。

「もう打つ手なしか？」

「…」

ベリアルが言うと共に脇腹の部分の弱まっていた炎が灯り、フェイトは自分の攻撃が通用していないことで睨み付けるしかない。

「言ったであろう。人間など所詮はその程度であると。実に無力だ」
フェイトは警戒を止まないうままバルディッシュのザンバーが欠けている部分に目をやる。

（あの炎… ザンバーで太刀打ち出来ないとすると、やっぱりただの炎じゃない。斬った感触も重みもまるで鎧みたいだった…）

自分の力では、この悪魔には勝てないのかと苛立ちが込み上げてくるフェイトの頭に一つの考えが浮かぶ。

（だったら、その鎧も壊せるほどの攻撃… ザンバーよりも強力な魔力刃…）

まだ打つ手は残っている。

だが、この方法は“最後の切り札”。この悪魔に今のままでは太刀打ち出来ないことから使うべきかフェイトは悩む。

（使っしかない… ライオット…！）

「いい加減目障りだ…！！」

フェイトが地上で倒れているヴィータ達をこれ以上危険に晒さない溜めにも、その力を使う事を決心しようとした。
だが、フェイトの相手をするのも飽きたベリアルは体の炎をより一層に激しく燃え上がらせ、周囲を熱気の渦に包む。

「なっ！？　ぐ…　ううつ…！！」

【Defenser-plus】

バリアジャケットを纏っているにも関わらず、まるでただの服…
布切れ同然に離れているフェイトにも熱風が吹き荒れる。

彼女は即座にディフェサーで炎から体を守るものの、ハツとして地上を見た。

「…！！…みんな！！」

バルディッシュからの情報では、まだ生命反応はあるらしい。倒れ、
気を失ってこそのいるもののヴィータやスバル達、別部隊員達には目
立った外傷は見られない。

せっかく離れて戦っていたのに、このままでは倒れているみんなに
まで被害が及ぶ。

そう焦ったフェイトはベリアルから目を離してしまった。

「オオオオオーーーーッ！！！！」

「ぐうつ…！！」

咆哮と共に、周囲は焼き尽くさんばかりに燃える。

大気が、空間が、地面が。

フェイトはディフェサーを展開したまま地上へと降り立ち、皆を守
るべくして迫る炎の前に立ち塞がった。

——ゴウッ…！！！！

「くうつ…！！」

ディフェサーを使っているのにも、その熱風と炎による重圧と衝撃、高温がフェイト一人にのし掛かる。

「ガアアッ！！！」

——ドンッッン！！！！！

ベリアルが荒ぶる獅子の如く唸り、右腕を振るうと共に無数の炎の柱が彼女とヴィータ達を囲むように襲い掛かって来た。

「ああっ！！ う…っ…！！」

地面に片膝をつき、フェイトは両手でバルディッシュを握り締めている。

彼女に応えるべく戦斧も魔力を防壁に注ぎ込んでいた。

【Ser!】

「バルディッシュ…！ 頑張っ…！」

防壁に炎が叩き付けられる度にフェイトの体が軋み、悲鳴を上げる。

「ガアッ！！！」

「うっっ…！！」

だが、炎が止んだのと同時に重圧が再びフェイトを襲う。それも先ほどとは比べ物にならないほどの。

「我に勝ち目がなく、戦うのを止めて仲間を守る方を優先するか！
女！！」

——ドンッ——！！

「…っ　　うつうつ　…！！」

ベリアルは地上へと舞い降り、防壁の上に前足を乗せていた。強者が弱者を踏みにじるかのように、再度防壁に足を叩きつける。

「下らんな！！」

「うつ！！！！」

——ビシイッ——！！

ベリアルが再び足を叩きつけるとフェイトは歯を食い縛りながら苦痛の声を漏らし、ディフェサーにヒビが入る。

「女！！」

「……黙れ……！！」

ベリアルに応える義理などありはしないが、それでもフェイトは言葉を発する。

「私は…　この力で……！！」

フェイトは息を荒くしてゆっくりと立ち上がり……

「みんなを守る……！！」

バルディッシュを握る手が微かに震えている。
巨大すぎる悪魔の力に恐れているというのではない。
このまま誰も守れずに敗ける事が嫌だった。

「そうか…」

ベリアルは防壁に足を乗せたまま静かに言う。
それに伴い口からは吐息のように炎が漏れた。

「そうまで言うなら…」

ベリアルが左手の大剣を握り締めたのに気付き、フェイトもバルディッシュを構える。

「貴様もこの者達と共に死ぬがいい!!」

「はああああっ!!!!」

ベリアルが引き付けるように構えていた大剣を突き出し、フェイトもベリアルの顔面目掛けて一気に跳躍した。

「ハアアアッ!!」

「…っ!!」

——ドッ…ッ!!!

質量と腕力も人間とは桁違いの突き。更には熱気と炎を纏っているのならなおさらだ。

フェイトはその突きを紙一重でかわすが、熱気と炎で目を細くし、

顔を険しくする。

「逃がさん!!」

——フォンンツ!!

(よし!!)

あのまま突きを繰り出していたら、気絶しているみんなに当たるのではないかとフェイトは不安だったようだが、ベリアルは彼女の誘いに乗ってきた。

ベリアル of 突きはフェイトがいた場所に的確に突き刺さったが、元よりそこはヴィータ達から少し距離がある。気絶しているみんなが無事であったのを流し目で見たフェイトはバルディッシュを握り締めた。

ベリアルも剣を斬り上げる振るうのにフェイトを追い掛ける。

「いくよ!!」

【Yes, sir】

ベリアルを倒れているヴィータ達から少しでも離し、フェイトはバルディッシュを振りかぶりながらカートリッジを3つ排莖。

「アアツ!!」

ベリアルはフェイトに向けて燃える大剣を振るうが、

「!!」

(またかわしたか!)

かわされてしまう。

ベリアルはうるさい蠅や蚊のように苛立った顔に向けて…

「はああああっ！！！！」

「ムオツ！！？」

フェイトはザンバーを降り下ろした。

カートリッジによる魔力強化はしていた為か、先ほどの刃こぼれも修復され、魔力光の強さも増している。

「ガアツ！！ 貴様…！！」

「ああああああっ！！！！」

ベリアルは堪らず悲鳴を上げるが、フェイトは何とか炎の鎧を貫き、ベリアルの眉間に剣を叩きつけた。

「ガアアツツ！！！！」

「！！！！」

いくら頭を振り回してもフェイトが離れないことからベリアルは忌々しい人間に向けて右手を伸ばした。

その危機を感じ取ったフェイトも目を見開き、バルディッシュを抜こうとするが…

「…っ…！！？」

（抜けない！！）

ベリアル頭の魔力刃は深く刺さっているわけではない。
ベリアルが纏う炎が原因で抜けないのだ。

「しまっ…！」

フェイトが気付いた頃には遅かった。
ベリアル右手は彼女の目前にある。

「アアッ…！！」

「…！！」

（バルディッシュ…！！）

ベリアルは成す術のないフェイトを掴み取った。
その勢いで彼女はバルディッシュの柄から手を離してしまい、何とか自由な右手を伸ばすものの、バルディッシュには届かない。

「バルディッシュ…！」

彼女が叫ぼうとした瞬間。フェイトの身に凄まじい重圧と衝撃が走った。

（え…）

——ドンッッ…！！！！

フェイトは何が起きたのか理解出来なかったが、頭に響く轟音が残響していること。

世界が横向いていること。

「手間取らせおって…！」

ベリアルを見上げるような形になり、眉間に刺さったバルディッシュを抜いていること。

「…うつ…！」

立ち上がるうとした瞬間に激痛が体中を駆け巡ったことからフェイトはようやく理解した。

「人間が…」

「……あ……っ……」

（そんな…！）

自分はベリアルに地面に叩き付けられたのだと。

フェイトは横たわり、声にならない微かな悲鳴を上げて苦悶する。

「……フン…！」

「…！…」

（バルディッシュ…！）

ゆっくりと地に足を下ろし、右手で棒切れでも持つように持っていたバルディッシュを遠くに放るベリアル。

それを見たフェイトは声も出せないまま震える手を伸ばし、心の中で叫んだ。

「……………イ…シュ…」

（バルディッシュ……！！）

気が付けば、フェイトの左目の視界が塞がりはじめていた。
叩き付けられた時のものが原因で頭から出血しているからだ。

「終わりだ……」

ベリアルは見苦しいとは思わず、

「それなりに面白かったぞ……」

「……」

遂には腕も動かす力をなくし、声も出せず、両目の瞼が閉ざされようとしているフェイトに向けて……

「人間の女……！！」

大剣を振り下ろした。

……

——バチィッ……！！

ところ変わり、とある建物の付近。
そこに突如として赤い亀裂が走り、耳をつんざくような音が鳴り響く。

——バチイッツ！！！！

その空間に先ほどよりもけたたましい電流が走り…

「フツ！！…あれ？」

ダンテが飛び出して来た。

彼は現れるなり剣を構えるが、辺りをキョロキョロと見回す。

「さっきのやつと妖精ちゃんは…？」

リベリオンを杖のように地面に突き立てるが、彼は周りが見覚えのある景色であったことから軽く息を吐き、納得する。

「…元の場所か…」

「ダンテ！！！」

ダンテはレリックで何処かに飛ばされ、再び元いた聖王教会に戻って来たのだ。

彼は剣を背負うと、背後から女性の声が聞こえて来た。

「ご無事ですか！？」

そこにいたのはシャツハ。

彼女は少し荒い息のままダンテに駆け寄る。

「よう。修道女の姉ちゃん。さっきの服から戻ったのか？」

「何を言ってるんですか！？ みんな心配してたんですよ？」

会うなるダンテは軽く挨拶しながら言うが、カリムは「バリアジャ
ケットと同じ原理です」と付け足す。

「レリックは強力な魔力の集合体なんですよ？ 下手に衝撃を与え
るだけで何が起るのか分からないのに…！」

カリムは真面目に説明を始めるが、ダンテは自分が破壊した山を見
た後に一部が壊されている聖王教会に目を向けた。

「無事だったかと思えば…！」

「他のやつらはどうした？」

「え…」

シャツハの説教は続いていたが、ダンテは悪魔に壊された建物の外
壁を触りながら聞く。

「だから部隊長の嬢ちゃんとかイケてる隊長の姉ちゃん達は何処に
いるってことだよ」

「…シグナムとはやて達はここにいません。廃棄都市の方に向かい
ました」

「廃棄都市？」

シャツハから話を聞き、ダンテは外壁から手を離して振り返った。

「そちらでもこのように悪魔が現れたとの事です」

「おやおや…」

話を聞いたダンテは穏やかじゃないと言いつつも溜め息を吐く。

「なんでも此方よりも強力な魔力に包まれて現地の状況は把握出来ないとのことです。地上本部の方でも騒ぎになっているようで…」

「そいつは大変だな」

シャツハが話している途中だが、ダンテは気だるそうに言い、歩き出した。

「大変つて… 当たり前です！」

真面目なシャツハにはダンテがどのような考えを持っているのか分からない。

今日初めて会ったのならなおさらだ。

「あなた…！」

「いいか、姉ちゃん」

この人は何とも思っていないのか。はやてからダンテはネロと同じで悪魔を狩ることを生業としている狩人^{ハンター}だとシャツハは聞かされていた。ネロのように少しばかりは真面目にやれないのかと言おうとしたシャツハだが、ダンテが振り返らないまま軽く手を上げたことで押し黙ってしまう。

「俺からの忠告… って言うか、いいこと教えてやる。一つ、クソ

真面目にやったら人生は楽しくない。二つ、遊び心を持て。三つ……これ大事だぞ？ レディがそんな怖い顔しなさんな」

「え……」

ダンテが言いたかったことが全く理解不能なシャツハはキョトンとした顔をしている。

「自分を大切にしろってことだよ。……おっ！」

まだシャツハは理解していない。

と言うよりもダンテが何を言いたいのかわけが分からなかったが、彼は何か見付けたらしく、建物の壁が壊れている所に歩み寄る。

「嬢ちゃんの土産にはピッタリだな。これ貰っていいか？」

ダンテの手には、ウサギのぬいぐるみがあった。

彼は壊れた建物の内側にあった売店から一つのぬいぐるみを見付けたのである。

「いや……あの……」

「俺と坊やに続いて六課ってトコで世話になってる嬢ちゃんがいるんだよ。その子にやってもいいか？」

「……まあ……構いませんが、坊やというのはもしかしてネロのことですか……？」

「そうさ。姉ちゃん、鋭いな」

ダンテにはまるで着いていけないシャツハは短い溜め息を吐き、持って行ってもいいと言う。

だが、その子供が何者なのかはやてやシグナムから聞かされていたシャツハは一度思考するものの、何故ネロを“坊や”と呼んだのか疑問に思い聞いた。

しかし、ダンテは応える気はないらしい。

「いや、鋭いワケではないんですが…　って、それどころじゃありません！」

ネロだけではなく、自分もはやて達も名前で呼ばないのかとシャツハは疑問に思うが、そのようなことを言っている場合ではないと思い、シャツハは話題を戻した。

「廃棄都市にあなたも向かって下さい！　ヴァイス陸曹もまだいますから！」

「ヘリの兄ちゃんが？」

「凍りついていたヘリが何とか動きそうだって言ってるじゃないました。早くそちらに」

シャツハに急かされるが、ダンテは焦らずに「分かった分かった」と手振りする。

…

「そんじゃ、頼むぜ。兄ちゃん」

【了解！】

ダンテをヘリに乗せ、彼の前には操縦席にいるヴァイスが映るモニターがあつた。

【…にしても、ダンナ…】

「なんだ？」

【本当に大丈夫なのか？】

「またか…」

ヘリが飛び立ちはじめ、空に舞い上がる中でヴァイスが聞くと、ダンテは面倒臭そうな質問をまたされたといったカンジの顔になっている。

【ネロってアンチャンにも昨日助けてもらったんだが、あんたにも助けられちまつたし、さっきなんかは…】

「よせよ、その話は」

またレリックの話が出されそうになったが、ダンテは煙に撒くようにして窓から景色を眺める。

【ワリ…】

「そっちこそ気にすんなよ」

ヴァイスが申し訳なさそうにしているが、ダンテは腰のホルスターから抜いた二挺拳銃のカートリッジを抜き出し、今度はそちらを眺める。

（とうとう弾切れか…）

本来ならまだ5発は残っている筈だが、ダンテの銃は遂に弾切れになっっていた。

この世界では銃の使用も所持も禁止されていることを聞かされていたダンテはヴァイスに気付かれないように小さく溜め息を吐く。

「廃棄都市ってトコはどうなってるか分かるか？」

【いや、魔力の影響が強すぎて分かんねえ。隊長達は着いてるみたいだから、そつちとも通信が繋がらねえんだ…】

銃が弾切れになるのは前から分かっていたが、相棒が使えないというのは寂しいものだ。

「じゃあ、それなりに急いでくれ」

【それなりって… りょくかいだ】

再びカートリッジが装填され、ジャキツと金属音が鳴る。

こんな状況でも特に焦った様子も見せないままのダンテを見たヴァイスはやるせなくなる。

（スゲエ魔力だ… これじゃ、まるで…）

まるで「魔界」とでも言いたいのか。

かなりの濃い魔力が風に乗ってこちらまで流れて来ていたのを感じ取ったダンテはポーカーフェイスのまま窓の外を見る。

…

『ハア… ハア…』

暗闇の世界にいる銀髪の男は息を荒くしたまま、腰を下ろして地面に座り込む。

『“あれ”を抑えるだけで手一杯だと言うのに… クズが!』

山吹色の帯が着いている閻魔刀が青い光を放ちながら闇の中に消えると、その男は悪態をついた。

『ハア… ハア…』

その男は頂垂れるようにして座り込んでいるが、静かに呟く。

『日に日に手強くなっているな…』

“世話の焼ける”と付け足し、男は少しばかり顔を上げる。

『あの“悪魔”…!』

その男は思考し、何かを思い出そうとしていた。

『“ロキ”の息子か…!』

…

「…ここは？」

ネロは目を覚ますと、飛び込んで来た光景は白い天井と照明だった。

（家… でも、六課でもない？）

彼がいるのはフォルトウナでも、六課の医務室でもない。
辺りを見回すが、何処かの病室ということしか分からなかった。

「…あいつ！！ うわっ！？」

彼は何かを思い出したようにベッドから飛び出すが、左腕に点滴を刺されていたので勢いのまま倒してしまい、ガタン！と派手な音を立ててしまう。

「…」

（何処だ、ここ…？）

見慣れない景色に頭を捻り、今まで自分はどうしていたのかを必死に思い出そうとする。

記憶は酷く曖昧だが、その思考していた途中でドアが開いた。
その瞬間にネロは右腕を背中の方に回すようにして構えるが…

「あ… 気が付かれはったんですか…！」

入って来たのははやてだった。

そのことでネロは一瞬構えを解きそうになってしまいが、ハッと
して構えを戻す。

「…本当にはやてか？」

「心配してはったんですよ？ 私らが駆け付けた時には倒れとっ
たし…」

「質問に応えろ！！」

はやては本当に心配していたらしく、ネロに駆け寄ろうとしたが、
その瞬間にネロははやての胸ぐらを掴み、壁に押し付ける。

「ちょ… ネロさん…」

はやては押さえ付けられたままネロが軽く錯乱していると思い、落
ち着かせようと試みるものの、ネロの息が酷く乱れている。

「あの天使気取りのやつが、またやりやがったか…」

ネロは右手の拳を固く握り、青白い光を揺らめかせる。

「ネロさ…！！」

はやてが叫ぼうとした瞬間にネロの拳は…

「おらっ！」

「がっ！！！！」

突き出されなかった。

人間の骨など容易く砕くであろう《悪魔の右腕》がはやてに向けて飛ばされる前にネ口の脳天に聞き覚えのある声と共にゲンコツが直撃する。

「痛っ…!!」

はやての服から手を放し、踞るような態勢になっていたネ口は頭を押さえながら顔を上げる。

「まったく、なにレディに手え出そうとしてんだよ。それでもお前は英国紳士の端くれか？」

「主!!」

そこにはネ口を殴ったダンテと、はやてに駆け寄るシグナムがいた。ダンテは右拳をほどき、軽く息を吹き掛ける。

「ダン…テ？」

右腕の疼きを感じ、この感覚はダンテ特有のものに間違いないと思ったネ口は立ち上がり、何故か陸士服を着ているダンテに近寄ろうとするが、その前にハッとして横を見た。

「って、ことは…」

「……貴様!!」

「シグナム!!」

ネロは恐る恐る顔を向けると、初めて会った時の翌日のようなシグナムがいた。

彼女ははやてを懷抱していたが、立ち上がるなりネロに掴み掛かるうした。

しかし、その前にはやてがシグナムを止めるべく腕を掴む。

「しかし、主……」

「あかんよ、シグナム」

シグナムははやてを見るが、彼女は首を振り、乱れた服装を正しながら服に付いた埃を払う。

「……申し訳ありません、主……」

「なんだよ、嬢ちゃん。せつかなんだから、ここいらで一発ぐらい殴っておいた方が……」

「ダンテさんもいい加減にして下さい。今はそれどころとちゃいます」

シグナムが少し顔を俯かせると、今度はダンテが一步出て「殴っておいた方がいいんじゃないか？」と言うが、はやては真剣な顔だった。

…

それより、一週間が経過した日の事である…

「一週間ぶりの悪魔だな」

「ああ…」

ヘリの中で座席に向かい合うように座っているネロは左手の人差し指と薬指に嵌めている銀色の指輪を見ながらダンテに返答した。

「体の調子はどうだ？」

「絶好調だよ…」

ダンテの左手の中指にも銀色の指輪が嵌められているが、彼が体の調子を聞くと、ネロが立ち上がったのに続きダンテも腰を上げる。

「それじゃあ…」

ヘリのハッチが開き、ネロは指輪を見ながら言い、

「始めるか？」

ダンテはあくびをした後に首の骨を鳴らす。

「フッ！」

「ハッハア！！」

そこから一步踏み出し、二匹の銀狼は高らかな雄叫びを上げる。

「セットアップ！」

「セットアップ！」

Section: 8 Terrible Shock 激動 (後書き)

機動六課報告書より…

本日未明の廃棄都市の戦闘にて

前線フォワード スターズ分隊 スバル・ナカジマ二等陸士、ティ

アナ・ランスター二等陸士

スターズ副隊長 ヴィータ三等空尉

軽傷。外傷は大事に至らず、明日には本局より退院予定。

現場へ出向したライティング分隊長 フェイト・T・ハラオウン
執務官は全身と後頭部を強打した模様。ただし大事に至らず、3日
後には退院予定。

先に現場に到着し、六課メンバーと居合わせていた陸士108部隊

ギンガ・ナカジマ陸曹含む部隊員8名も軽微の負傷。

明日には退院予定。

なお、民間協力者1名が全身裂傷。鎖骨1、肋骨4本、右足骨折。
左手を危険度レッドの火傷を負っていた状態で気絶していた所を彼
を保護している機動六課部隊長八神はやて陸上二佐、スターズ分隊
隊長高町なのは一等空尉、ライティング分隊副隊長シグナム二等空
尉が気絶していた部隊員達と共に発見。

民間協力者ネロは、本局に護送される前の状態では、生死をさ迷う
ほどの負傷であったものの、本局到着時には傷は全て塞がり、骨折
も9割回復していたとのこと（現地から本局までの護送時間は僅か
14分であったことから、この時間の間に自己再生したものと思わ
れる）

機動六課部隊長補佐

ラインフォース^{ツヴァイ}エエ空曹長

なお、この報告書は未提出であり、執筆者が記録として書いたものである。

時に記憶とは思いだし、語り、思い返すもの…

「ここは何処だ？」

「時空管理局本局内にあるメディカルルームだ。お前と一緒に倒れていたテストロッサやスバル達も運び込まれたが、幸い軽傷で済んだから安心しろ」

「…にしても、ホンマに心配したんですよ？」

白の病院着は着ているものの、寝ずにベッドに腰掛けているネロは聞くだけ聞く。だが、前にいるシグナムとはやての話を彼はちゃんと聞いているのかどうか分からない。

「モテるやつは辛いな、坊や」

「なあ…」

はやてがどこも調子は悪くないかと聞き、ダンテが茶化してくるが、ネロは静かに口を開く。

「……何があつた…？」

「え…」

「あそこで何があつた？」

ネロは包帯も巻かれていない《悪魔の右腕》を握り締めると、口には出してはいない彼の感情を現すかのように光が漏れ出した。

「…ネロさんは覚えてないんですか？」

「断片的にしか」

はやてがネロの様子を伺うように聞くと、彼は拳をほどき、右腕で頬杖を突く。

「また随分と無茶をしたようだな」

「…みたいだな」

「私が行った時には…」

ネロはかなり飛んでいる記憶を呼び覚まそうとしながらもシグナムに適当に返した。

そして、彼女の隣にいるはやてから自分達が見たものが語られる。

…

「やっぱり繋がらん…」

「………みたいだね」

廃棄都市の様子も見れず、六課とも通信が取れないことからはやては顔をしかめ、なのはも先の炎を睨む。

「テストロッサ達とも連絡が取れません」

はやての隣を飛ぶシグナムも只ならぬ突き刺さるような魔力を体で感じていた。

「とにかく、早くせな…」

「はい」

「うん…！」

先日のように広域魔法を使えば悪魔を手早く倒すことが出来るだろうが、今はそうはいかない。

現地はどうなっているのか把握出来ないうえに、市街地まで距離が近い。何よりも昨日限定的にリミッターを解除したというのに、今日も任務に加わっているのだから。

はやてがシュベルクロイツを握り締めながら言い、彼女に続いてシグナムとなのはも先を見据える。

「“あれ”なんか完全に…」

「ネロが前に閉じ込められた種類の結界だね」

はやてとなのはが見詰めるのは、燃え盛る炎の手前に位置する巨大な赤いドーム… 広域型の《強制結界》だった。

「今まで見たことないのだし…」

「シャーリーの話では、解析不能の未知の結界らしい」

なのはは前に見たことのあるものだった。それは近付くことも出来

ず、如何なる攻撃も通用しない結界。

今までにないタイプだ。

シグナムもその日にシャーリーから話を聞いたようだが、得体の知れないものである。

「確か、ネロさんの話やったら悪魔が魔力で作り出したもの言うてたな……」

悪魔と戦っているであろうフェイト達の無事を祈りながらも少し焦るはやて。

だが、その時……

——バリン……ッ……！！

「っ……！！」

「割れた！？」

突如として強制結界がガラスが割れるかのような派手な音を立てながら砕け散る。

「二人とも急ぐで……！！」

「……了解……！！」

結界が割れたということは、結界内で戦闘が終わったということか、何かしら起きたということ。
赤い結界が砕けたのに一瞬驚いたなのはとシグナムは、はやての掛け声に従い、飛行速度を上げる。

(どうなつとるんや…)

結界は消えたものの、やはり悪魔はいるのに間違いない。
廃棄都市の真ん中には巨大な炎の塊が一つ。

「主！！ あれを！！」

「なんなんや… ホンマに…」

最高速度で飛んでいるとはいえ、まだかなりの距離がある。
彼女達の焦りが大きくなるように、廃棄都市の炎も周囲を焼き尽くさんばかりに燃え上がっていた。

「フェイト隊長達は…」

「あそこにいると思うけど…」

フェイトが悪魔と戦っているのなら、彼女の魔力光が見える筈。彼女以外の者が戦っているのなら、他の魔力光が見えるだろう。はやてが肉眼で見ようと目を細めるが見えない。
なのはもフェイトの無事を信じながらもレイジングハートを握る手が汗でじんわりと滲む。

「……あの光…」

しかし、二人と違いシグナムの目には、微かな“光”が見えていた。

「え？」

「僅かですが、魔力光が見えます」

はやてが振り向くと、シグナムは飛行しながらも神経を集中させている。

「誰かが戦つとるんか!？」

「そのようです」

「誰ですか？」

「テストロッサではないな… 色は…」

なのははフェイトが戦っているのかと思い、一度息を飲んだ後に聞くと、シグナムは更に目付きがきつくし、なのはの方に目を向けないまま静かに… 低い声色で言った。

「……“青”だ…！」

…

「魔力光つてなんだ？」

「この世界にいる人間が魔法を使う時に足元に出る魔法陣から放つ光… あと、そいつ特色の魔力の色」

はやての話を聞いていたが、謎のワードに首を傾げるダンテ。ネロは点滴から落ちる水滴から視線を移し、椅子に腰掛けているダンテに顔を向けて教える。

「詳しいんだな」

「無駄な時間を過ごしてたわけじゃない」

ダンテが驚いた素振りを見せるが、ネロはただ世話になっていただけではないと言いたいように怪訝そうな顔をする。

「で、魔力光は青かったんだって？」

「はい」

ネロは軽く息を吐いて椅子に腰掛けるはやてに顔を向けると、彼女は隣にいるシグナムの方を見た。

「……やはり、あれは……」

…

「青…？」

「スバル…かな？」

「いえ、でしたらウイングロードの光も見えるはずですが、どうやら直接戦闘… ぶつかっているようです」

なのはが目を細め、はやてが首を捻るが、シグナムの言う通り魔法陣の展開やウイングロードも見えるだろう。

だが、悪魔と戦っている“誰か”は直にぶつかり合っているようだった。

「別部隊の誰か…？」

その考えが妥当だろう。

はやての頭にあれほどの悪魔と戦える“青”の魔力色としてギンガではないかと思うが、彼女ならスバルと同様にウイングロードが展開されるはず。

「何れにせよ、早くしないとマズイですね」

「せやな… 市街地も近いみたいやし…」

燃える炎は誰かと戦っているのだろう。何かから逃れるように身を翻し、時に炎を噴き出していた。

シグナムははやてと話しながらも戦っている者がいるのだとしたら一人だけと想っていた。

「ネロ…」

自分が出動待機にしていた人物。理由を付けて出動させなかった人物。出ればまた無茶をやるだろうと思っていた人物。

「…やね？」

なのはが言ったのに続き、はやてがシグナムを見る。それに彼女もはやてに顔を向け、少し顔を附せた。

「申し訳ありません… 主」

「しゃあないやろ。あの人がじっとしてるワケないやろっし」

シグナムは、はやてからネロの様子を見る為に出動するような事があっても極力待機させるように託けられていた。

彼女は主であるはやてに謝るが、はやては先の炎を見詰めながら言う。

「ネロさんが戦つとるんなら、私らも早いトコ手助け……っ!？」

「なっ……!」

はやてがシグナムに微笑むが、彼女は何かを感じ取ったようにバツと廃棄都市の方を見た。

隣にいるシグナムとなのはも同じように凝視する。

「炎が……」

「弱まってる……!」

先ほどまで感じていた禍々しいまでに凶悪な魔力と重圧が和らいだことでハツとするシグナムとなのは。

「……って、ことは……」

あの悪魔の魔力が弱まったと言うことは、魔力の影響も弱くなったと言うこと。

そこではやてが通信が繋がらないか試み、フェイトに念話を飛ばすが、

「あかな…」

「はやてちゃん!!」

通じず断念。

炎が消え、溶岩のようなものになった悪魔を見ながらもはやてはボソリと言う。

だが、なのはが声を上げた瞬間に彼女は目を見開いた。

「あれって…!」

「また悪魔!!?」

突如として空から隕石の如く飛来した物体が凄まじい炎を放ち、体を形作る。

「偉いこっちゃ…」

「……つつ…!!」

「急ぎましょう」

巨大な何かが蠢き、ただ破壊する為に暴れ回る新たな悪魔が加わったことで、なのは達にまた焦りが込み上げる。

一難去ってまた一難。シグナムは歯を食い縛り、その悪魔を睨む。

…

「新手の悪魔ってワケだ…」

ネロはベリアル他に強力な悪魔…ベリアルと同等と思われる悪魔が現れたとはやてとシグナムから聞かされて「どどん面倒になつてるな」と言い、左手で頭を搔く。

「…それよりも、本当に覚えてないのか？」

「何が？」

「せやから、ネロさんが悪魔…そのベリアル言つのと戦ってたんじゃないんですか？」

ネロがベリアルと戦ってたのではないのかと推測…いや、それ以外考えられないシグナムとはやてが問うが、ネロは呆れたような顔をしている。

「だから覚えてないって言ってるだろ。さっきも言っだし、何回も言わせるなよ」

そう言うネロをダンテは珍しく黙って見ていた。

彼は自分がレリックで空間転移していた間に何があったのか、ただ聞いているだけ。

…

「なに！？」

声を上げるシグナム。

彼女と同じく、はやてとなのはも何が起こっているのか分からなかった。

何故なら…

「悪魔が…！」

逃げて行くからだ。

突如として出現した悪魔は、“空に向かって火球を吐き出した”だけであり、弱まっている悪魔を連れて空間に浮かぶ魔法陣の中に消えて行く。

ただ仲間の悪魔を救出しに來ただけなのだろうか。なのはの頭に疑問が浮かぶが、その赤い魔法陣の中に悪魔が消えたのを肉眼で確認すると、ハッとした。

「レイジングハート！ 通信の方は！？」

【魔力によるジャミングが消えましたので、バックヤードとも繋がります】

「シャーリー！！！」

【……隊…長…！ やった…！ 繋がった…！】

はやても漸く通信を繋げることが出来ると分かり、回線を繋いだ。その瞬間に何度も通信を繋ごうと試みていたシャーリーが映るモニターが展開される。

「向こうの方はどないなっとなるん！ フェイト隊長が向かった筈やろ…？」

【そうなんです、少々お待ちを…】

シグナムがはやての隣に浮かび上がるモニターに目を向ける。
シャーリーは画面の向こう側で廃棄都市の様子がどうなったのか心配しているようだった。

【…そんなっ…!!】

「どないした!？」

「シャーリー!!」

慌てて情報処理をしていたシャーリーだが、何かを目にして思わず手で口を覆ってしまう。

それを見たはやても、シグナムとなのはもただ事ではないと察する。

【……これを見てください…】

「……っ!!」

送られて来た廃棄都市の映像を目にしたはやて達は声にならない悲鳴を上げる。

そこに映っていたのは倒れている別部隊の部隊員。更にはスバルやティアナ、ギンガも横たわっている。

「ヴィータ!!!!」

「くっ…!!」

「ヴィータちゃん!!!!」

その倒れている人の中にもヴィータはいた。外傷はどれ程のものか分からないが、他の者と同様に騎士甲冑が所々焼け焦げて気絶している。その鉄槌の騎士の近くにはグラーファイゼンもあった。どうやら、彼女も最後まで戦おうとしたのだろう。這いつくばってでもグラーファイゼンの柄に向かって手を伸ばしていた。

「ヴィータ！！　しっかりして！！」

はやてが声を張り上げた瞬間だった。
モニターに映るヴィータの手が微かに動いたのである。

「ヴィータ！！」

再度はやてが声を上げた瞬間、音声までは届かないが、廃棄都市にいるヴィータが口を動かし、ゆっくりと上体を起こす。

——…はやて…？

そう彼女は口を動かしたように見えた。やはり負傷はしているのだろう。悲鳴を上げる体に鞭を打って立ち上がった。

「ヴィータ、大丈夫か！？」

『はやて…？　あ、ああ。あたしは何とかな…』

口に出しながらも念話を飛ばすはやて。元より主と騎士としての繋がりがあったので生きているのは分かってはいたが、大事なさそうなモニターの中にいるヴィータはグラーファイゼンを杖代わりにして周囲を見回す。

「フェイトちゃん…」

なのはが震えるような声で言ったのを聞き、はやてとシグナムもそちらを見た。
そこには…

「フェイトちゃん！！！」

「テストロッサ！！！」

仰向けに倒れ、頭から血を流しているフェイトだった。

廃棄都市にいるヴィータがスバル達の無事を確認しようとしているようだが、フェイトの姿を目にしたはやてとシグナムも声に出しながらも直接呼び掛ける。

「フェイトちゃん、しっかりして！！」

「テストロッサまでもか…！ クソッ！！」

フェイトが倒れている姿を見て、なのはとシグナムはまだ廃棄都市に着かないことに苛立ちと焦りを感じていた。

「シャーリー！！ フェイトちゃん… フェイト隊長達を護送するよ
うに連絡取って、 早よ！！」

【りよ、了解です！！】

はやては比較的冷静に指示を出す、内心は焦っている。
自分の部隊の隊員達もだが、親友であるフェイトがあのような姿に

なっているのだから。

「はやてちゃん…」

「主…」

なのはとシグナムもはやてに顔を向けるが、彼女は部隊長の立場にある。私情に流されたままではいられないが、その様子が少しばかり残っていた。

「私らが早よ行かな…」

【部隊長！！】

平静を装っているが、その顔には焦りの色を残し、シュベルトクロイツを握り締める。

彼女の両隣にいるなのはとシグナムもはやてを心配しているようだったが、またしてもシャーリーから通信が入った。

「シャーリー、どないした！？」

【大変です！！】

はやて達は漸く廃棄都市区画に入った所だが、シャーリーが映るモニターを通して六課の指令室の方が騒がしい。

【彼が…】

シャーリーがまた悪魔がいなくなった廃棄都市の映像をはやて達の元へと送る。

そこには…

「…………ネロ……?」

服がズタズタに引き裂かれ、体中から夥しい血を流しながら血溜まりに沈むネロが映し出されていた。

「ネロさん… ネロさん!!」

「ネロ!!」

昨日の戦いによる負傷とは比べ物にならない程の怪我を負い、輝かしい銀髪までも血で赤く染めているネロの姿を目にしたシグナムは我が目を疑い… はやては思考が追い付き、叫び… なのはも声を張り上げる。

…

「おい…」

「なんだ?」

「フェイトは軽傷ってさっき言っただろ。その話じゃ、かなりの重症じゃねえか」

シグナムの話を聞き、疑問が浮かぶネロ。
しかし、シグナムは特に慌てた様子はなかった。

「先ほどまでテストロッサの所にいたのだが… 全身を強打したとは言え、バリアジャケットを着ていたんだぞ？ やつを誰だと思っている。軽く見るな」

「ネロさんよりも先に目を覚ましたし、先生の話やったら2、3日したら退院出来るそうです」

シグナムは真顔で、はやても心配せずともいいと言う。

「…それよりも、お前は平気なのか？」

「見れば分かるだろ」

ネロは気だるげにシグナムに返すと、彼女ははやてと顔を見合わせた。

またこんな所で念話でも使っているのだろうが、はやてが何かの情報がまとめられているモニターに出した。

「それは？」

「お前の体の検査結果だよ」

ネロが聞くと、口を開きかけていたはやてが言う前にダンテが割り込む。

「ダンテさ…」

「検査？」

「大分ボロボロだったみたいだし、ついだからやってもらったん

だ。ここの先生とやらに感謝しな」

はやてが止めようとするが、ネロが座ったままダンテに問うと、彼は何故か得意気に言う。

「…まあ、いいか…」

またネロが掴み掛かるのではないかと思い、はやてとシグナムは止める準備をしていたが無駄に終わる。

ネロは諦めたように溜め息を吐き、モニターを見詰めていた。

「スバルとティアナ… スバルの姉貴とその部隊のやつらと…」

ネロは頬杖を突いたまま、慣れた手付きでモニターを進めて行くが、唐突に手を止める。

「…ヴィータはどうなった？」

バツが悪そうにしたままネロは目だけをはやてに向ける。そこではやては笑ってはみせるが、少しぎこちなかった。

「大丈夫ですよ。ウチの子なんやし、スバル達も軽い火傷と打撲程度ですから、ネロさんと同じで明日退院予定です」

「そうか… って、俺も明日？」

「はい」

取り敢えず話は聞いたものの、自分も明日までここにいらつていられるのにネロは僅かばかりだが憤慨する。

「何ともないんだから、もういいだろ。何でまた病人みたいに寝てなきゃいけないんだよ」

「お前がその病人だからだろ」

ネロはそのような扱いを受けるのは嫌なのか、立ち上がってみせるが、ダンテは呆れているようだった。

「その検査結果を見てから物を言うんだな」

「なに!?!」

「よせ」

「ネロさん……!」

ネロがダンテに詰め寄ろうとするものの、マズイことになる前にシグナムが止め、はやてもネロを心配しているようだった。

二人に制止され、ネロは舌打ちした後、ベッドに腰掛け、モニターの操作を再開する。

「……全身裂傷に出血多量、肋骨が4本粉碎骨折、右鎖骨と右脛骨複雑骨折……しかも、左手と前腕大火傷。なんだよ、これ……!?!」

ネロが目にしたのは、自分の診断結果が記されたものだった。

それを見たネロ自身も動揺は隠せていない。理由は、今の自分はそのような重症を負っていないのだから。

「それがお前を見つけた時の診断結果だ。だが、それほどの怪我も

この本局に護送されるまでの僅か14分の間で回復していたぞ」

「14分…」

「あの…」

シグナムが単刀直入に知らせると、ネロは何か考えているようだった。

そんなネロにはやてが声を掛けようとするが、彼はフツと笑う。

「…で？」

「え… ネロさん…？」

「俺を見付けたのはあんた達か？」

彼は自嘲するかのように、天を扇いでいるかのように見上げ、深く息を吐き出してはやてとシグナムを見た。

「えっと… そうです…けど…」

「どうかしたのか？」

「助けてくれて、ありがとう」

はやての体がビクツと反応し、シグナムが聞くと、ネロは礼を言う。ただ、誠意が込められているのか分からない。

口調から、彼の中に立ち込める感情… “怒り”を込められているかのような低いトーンの声が発せられた。

「これなら完全に病人だな」

「だからそう言っただろ。…って言うか、その字 読めるのか？」

今度は元の声質に戻っている。ネロは「自分は病人に間違いない」と認める。だが、ダンテにはネロがミッドチルダ語を読めたことの方が驚きだったようだ。

「英字に似てるけど、何か違うな…」

「ああ。だから覚えたんだよ」

「覚えた？」

小難しい文字に頭を捻るダンテ。そんな彼に適当に返しながらもネロは目を急かしく動かし、モニターの文字を読んでいた。

ネロはまだミッドチルダに来て8日しか経っていない筈である。

それなのにネロはこの世界の文字を読めていたので、ダンテは驚いていた。

「だから無駄に時間は過ごしてないって言っただろ。デバイスにまつわる本とか、この世界の本とかも暇潰しで読んだし、一週間もあれば覚えられるだろ」

ネロは頬杖は止めるが、今度は髪を掻き上げてみせた。

「…これだから、高学歴ってやつは嫌だね。インテリってやつか？」

ネロが嫌味を言っていると思えず、ダンテは困ったようにお手上げ状態の手振りをした。

「いや、俺 学歴はジュニアハイスクールで止まってるんだけど…」

「えっ!？」

モニターを操作する手を止め、ネロはダンテを見た。完全に大人気ないダンテにはやてとシグナムも困った顔をしていたが、ネロが何気なく言ったことにはやては過敏に反応する。

「ネロさんって、中卒なんですか!？」

「いや、2年で止まってる。その頃から教団に入ったからな」

はやてが「私も中卒です」と言っていたが、ネロは平然として付け足した。

「あ…」

しまったとしか言い様のないはやて。完全に空気が固まり、一室が静寂に包まれる。

「……すみません…」

「別に謝る必要はないだろ」

はやてがシユンとしてしまいが、ネロは気にしていなかった。

(頭が良いのもあいつと一緒にだよ…)

「何か言ったか？」

ネロの先ほど髪を掻き上げる仕草を見たダンテは幼き日の記憶を蘇らせつつも小声で壁に向かって言ったが、ネロには少しばかり聞こえていた。

「いや、別に」

しかし、ダンテは何事もなかったかのようにしらを切る。

…

「こいつ…!!」

ノーヴェは驚愕していた。
何せ…

「危ねえ…」

ジェットエッジにより加速した蹴りもかわされたうえ、踵の部分にある噴射口の推進力を使って軌道を変えた回し蹴りまで止められてしまったのだから。

ネロはノーヴェの両足蹴りを紙一重でかわし、第2の蹴りも閻魔刀の腹の部分を使って防いだのである。

「うらあああっ…!!」

「っ…!!」

右足を閻魔刀に当てたまま、そこを軸にしてノーヴェは左足で上段蹴りを繰り出すが、またしてもネロは回避した。

『ノーヴェ、下がれ!!』

『何だよ、まだこつから...』

「シッ!!」

一方的な連撃で攻めるノーヴェにトーレが念話を使って命令するが、彼女は聞く耳持たずにネロに攻め続ける。

『ノーヴェ!!』

「おらっ!!!!」

トーレの制止も聞かず、ノーヴェはジェットエッジの加速を巧みに利用しているが、ネロは全てかわし、

「...止めとけ」

「なっ!!!!?」

遂にはノーヴェの足を左手で掴み取った。

ネロはこれ以上戦っても無駄だと言うように目で言い、ノーヴェをは一瞬狼狽するが、右腕に装着したガンナックルを使って弾丸を撃ち出す。

「このっ!!!!」

だが、それもノーヴェを解放して上体を反らせればいいだけのこと。

ネロは距離を取ったノーヴェから目を反らし、臨戦態勢で空にいるトーレを見上げた。

「ちっ！」

後方に下がり、エアライナーの上に乗るノーヴェは苛立ちながらも舌打ちし、下にいるネロを睨む。

『ノーヴェ！！ 一人で突っ走るなどあればど作戦前に言っただろう！！』

『なんだよ、しつけないな。下がったんだから、もういいだろ』

言うことを聞かない妹を叱りつけるかのようにトーレは言う。彼女の隣にいるセツテは無言のままネロを見ていたが、彼が見ているのはナンバーズではない。

彼女達の遥か先にある建物である。

『ノーヴェ。トーレの言う通りだ。指揮を任されている姉の言うことは聞け』

『チンク姉…』

『そうッスよ。これだから頭に血が上りやすいのは困るんスよね』

『んだと、ウエンディ！！』

己の感情に左右されやすい妹に手を焼くトーレにチンクは助け船を出す。途中でウエンディが余計なことを言ったので、ノーヴェがウエンディに喰って掛かりそうになりながらも承諾し、チンク達がい

る建物まで下がった。

「…ったく、とにかくやりやいいんだろ」

高い位置からトーレとセツテがネ口と戦っているのを見ながらノーヴェは掌に拳を打ち付ける。

『チンク！！』

『分かっている』

「ドクターが興味を持っているらしいからな。準備はいいか？」

「了解！！」ッス！！」

二人掛かりでも厳しいことにトーレは念話を飛ばすと、チンクがナイフ型の固有武装スティンガーを取りだし、離れていても息が荒くなっているのが分かるネ口を見据える。

慕っている姉のチンクに言われ、自身の武装を抱えてノーヴェとウエンデイが戦闘態勢に入った。

「チンク姉、思いっきりやっちゃっていいんスカ？」

「全力でやれ」

「殺すつもりでやんねえと連れてけないって言ってたからな」

ネ口が閻魔刀に青白い光を纏い、トーレとセツテを弾き飛ばしたのを見ながらチンク達三人も建物から飛び出す。

「…退け！！」

「だったら、力で押し伏せたらどうだ」

渴いた呼吸音を発するネロは立っているのも辛そうにし、精一杯叫んでいるつもりだった。

しかし、彼の声は掠れている。

閻魔刀に目を向け、すぐに視線を戻したトーレは冷やかに言い放った。

「そうしたいのは山々なんだが……俺はあんた達に用はねえんだよ……とにかく……」

そこを退け。

その言葉しかネロは言わなかった。

「女が相手ではやりにくいか？」

「さあな……」

先ほどからずっとネロは「退け」「邪魔だ」「あんた達に構ってる暇はない」としか言わない。

一向に敵意を見せないネロを見下げるように、見据えるようにトーレが低い声で問うと、ネロははぐらかすように小さく言った。

「……図星か」

（あの光……）

彼女達は戦闘機人“ナンバーズ”であるが、それであると同時に女性でもある。

自分達を“女”だと認識し、本気になっていないネロに僅かばかり

の怒りを感じつつも、甘いと判断するトーレ。

「…あなたは戦士として未熟ですね」

ネロが本気を出さず、ナンバーズに手加減している最大の理由である“閻魔刀に纏った光”をトーレは見詰めていたが、今までほとんど無口であったセツテが感情を込めずに言い放つ。

「セツテ!!」

「その剣の刀身に纏っている魔力は殺傷力を増大させるものではなく、切れ味を落としているもの。私達を“女”だと差別し、蔑んでいる何よりの証拠です」

トーレが制止しようとするものの、セツテは止める様子はない。

「あなたが嘗て戦った閻魔の書の騎士の時と同じ」

セツテが喋り続けていたのをネロは構えたまま、黙って聞いていた。それ以前に喋ることも辛いのもかもしれない。

「セツテ、何を考えている!? 余計なことを言うなど、あれほど言っただろう!」

『トーレには申し訳ありませんが、ウリエルの命令ですので』

静まり返っている中で、ネロの荒い呼吸しか聞こえない。

トーレがセツテに無駄口を叩かないように叱り付けるが、セツテ自身は無表情のままブーメランブレードを構えた。

『ウリエル！？　また、あの女が…！』

『心を乱すように煽れとのことです』

指揮権を持っていないウリエルの命令をセツテが聞くはずがない。そう考えたトーレはすぐに察しが付いた。

『“ドクターに言われたから”と奴は言ったのか？』

『はい』

『馬鹿者…！　それはあいつが勝手に…！！』

動かないネロから僅かな時間だけ目を離してしまったトーレだが、寒気と悪寒。更には只ならぬ闘気と魔力を感じ取ったトーレは目を見開いた。
そこには…

「そうかよ…！」

通常の魔導師とは比べ物にならない程に禍々しく、狂暴な魔力を闇魔刀に込めるネロが。

「だつたら…！」

「なんだよ、あれ…！」

「ちよくとヤバいんじゃないんスか…？」

闇魔刀を固く握り、遅々とした動作で左手を添えるネロ。

突撃しようとしていたノーヴェも冷や汗が吹き出し、滑空するウェンディも顔をヒクつかせる。

「ちいっ！！！」

『みんな離れる！！』

「レイストーム……」

地上に舞い降りたチンクも想定外の事態に舌打ちし、両手に握るステインガーを投げた。

彼女に続き、オットーも手を翳してISを発動する。

「やってやる……！！」

トーレとセツテが離れ、遠くから無数の刃と緑の光が迫る中でネロは顔を上げる。

その瞳の色はまさしく“赤”に染まり、彼は閻魔刀を両手で握り締め、引き付けるように構えた。

…

「あと、診断した結果で分かったこともありました」

はやてとシグナムは自分達が廃棄都市に向かっていた時のことを細かく話してくれたものの、ネロは適当に「頭がどうかしてるやつらに絡まれた」としか話さなかった。

ネロは己の記憶を呼び覚ましながらも、はやてが喋っていることを乗り気なく聞いている。

「何が？」

「お前の体についてだ」

服の胸元を開き、自分の体に傷はないか確認しながらネロが聞くと、シグナムが新たなモニターを展開した。

「前から分かっていたことだが、お前の身体能力と耐久力は人間の数倍と出ている」

今いる本局に運ばれるまでの間にネロの《悪魔の右腕》は数人の人に見られてしまったらしい。はやての配慮で、彼女と繋がりのある医務官にネロを診てもらったのだが、やはり無理があつたようだ。部隊長と副隊長としての二人の立場もあり、はやてとシグナムが本局に来たのはネロが目覚める数十分前。廃棄都市の戦闘が終わったのは今から3時間前である。

「へえ……」

「話はここからですよ？」

その話を聞かされたネロは見られなくなかったものが見られ、バツが悪いのか。

シグナムの話聞き、だからどうしたと言わんばかりに返す。しかし、はやてはまだ真剣な顔だった。

「勝手に診察してもうて悪い思ってますけど……これを見て下さい」

次に出てきたモニターには、人間のバイタルを示すような画像であり、その人間の“右腕”だけは青く、それ以外の部分は白。

「ネロさんの魔力に関するデータです」

「お前には“リンカーコア”がないことが判明した。しかし、右腕の部分は強力な魔力と高エネルギーによって形成されたもので、ここから魔力… いや…」

はやてとシグナムが説明していたのをネロとダンテは口を挟まずに聞いているが、シグナムはそこで一度区切り、モニターを見詰める。

「我々が使う魔力に酷似し、異種の魔力… もしくは別系統のエネルギーを内包していると言うことが判明した…！」

モニターから視線を移し、ただ話を聞いているネロとダンテの方にシグナムは顔を向けた。

彼ら二人に彼女達は驚かされることばかりだったが、悪魔の血を引いていることを知った昨日に続き、またしても秘密が解き明かされた。

「AMF下でもお前が平気だったのはそれが原因だろう」

「恐らくダンテさんも同じだと思います…」

「……なるほどな…」

「ジュニアスクール中退の俺でもかなり分かりやすかったよ」

そこではやては二人の様子を伺っているようだった。

ネロとダンテは悪魔の血を引いているうえ、更に気分を悪くしているのではないかと彼女は思う。

しかし、ネロは納得したようであり、ダンテも頷いている。

「え…」

「ジュニアスクール…？」

「ようするに俺と坊やは“戦闘機人”っていうイケてる姉ちゃんと嬢ちゃん達と似たカンジってワケだ」

はやてとシグナムは別の意味で驚いていたが、ダンテは昨夜はやてから聞かされた戦闘機人のことを思い返していた。

「俺達とは“違う”だろ？」

ネロも今朝に戦闘機人の話を聞いたのだが、彼は自分達とは違うと言う。

「そつだな」

「…」

その言葉を聞き、ダンテもフツと笑ってみせながらネロに顔を向ける。

彼らは戦闘機人のことを自分達よりは人間らしいと“羨んで”いるのか、自分達よりも人間には遠いと“差別”しているのか。

はやてとシグナムはただ二人を見ているしかなかった。

「予告になってない次回予告」
talkingのコーナー

スバル「あの悪魔、強かったね…」

ティアナ「…そうね。私達じゃ太刀打ち出来なかったし…」

ギンガ「早々にやられるとは思わなかったけど、流石は地上部隊が最重要危険視してるだけはあるわね…」

ヴィータ「あの野郎…!! 次はゼッターぶちのめしてやる…!!」

スバル「ヴィータ副隊長、ここ病室だから静かにしないと…」

ティアナ「つて言うか、傷が開きますよ!？」

ヴィータ「こんなの怪我した内に入んねーよ!!」

ギンガ「いや、私達と比べたら酷いですし…」

ヴィータ「んだよ、それならテストロッサの方が…」

ス&mp;:テ&amp;mp;:ヴィ&amp;mp;:ギ「…」

スバル「フェイト隊長、大丈夫かな…?」

ティアナ「さつき意識が戻ったみたいだから、八神部隊長とシグナム副隊長が向かったみたいだけど…」

ギンガ「それにダンテさんもいたわね」

ヴィータ「なんでアイツも来てんだよ…!!」

ティアナ「トレーニングウェアだと目立つから、陸士服 渡されたって言っていましたけど…」

スバル「あれって、前にネロさんが着てたやつじゃ… なんか裾の長さが足りてなかったし…?」

ギンガ「借りたにしても、あれだけ長身の人って六課にいましたっけ?」

ヴィータ「さあな…（あれ、どう考えてもザフィーラが前に着てたやつだろ！ あいつ最近じゃ、ずっと狼形態だし…）」

再び1日の終わりを向かえる中で、傷跡を残したのは、反逆の血を
引く者たち…

「怪我の具合は？」

「大丈夫。見た目はこんなだけど、それほど大したことないし、2・3日安静にしてから復帰だつて」

あれから数分の時が過ぎ、ネロはフェイトがいる病室に来ていた。

「2・3日つて…」

フェイトが言ったことにネロは表情を曇らせる。彼女は大事になつていないと言うが、頭や腕などの各所には包帯が巻かれ、その姿は痛々しいものだった。

ネロの気持ちを察したフェイトが彼にそう言いながら包帯を巻いている左手を振る。

その姿にネロは小さく息を吐くように言う。

「…連絡とかしたのか？」

「え？」

「なのはとかエリオ達に…」

フェイトは”いつものネロ”の包帯を巻いている”右腕”に看取れていたが、彼が聞いたことにハツとし、我に返る。

「……………ヴィヴィオと連絡したのかって聞いてるんだ」

「あ…」

彼が言いたいことは分かった。要するに自分を心配しているであろう人達と何か話したのかとネロは言いたいのだ。

「それならさつきしておいたよ」

「……そうか、何て言ってた？」

「えっと…なのは早く怪我を治して元気になってって。エリオとキヤロも同じように…とにかく無事で良かったって」

聞いたネロは軽く相槌をするだけ。

「あ、ヴィヴィオはもう寝ちゃったって。そうだね。もうすぐ…」

時刻は夜の22時に差し掛かろうとしている。あの年の子供なら寝ていて当たり前だろう。

なのはが寝かしつかせたと言っているが、ネロは彼女の話聞き流し…いや、聞かずに数時間前の出来事を思い返していた。

…

「まったく、手こずらせやがって…！」

「任務完了」

頬に付いた血を拭うノーヴェと、ブーメランプレードから血を滴ら

せる上空にいるセツテ。

「…」

そして、インパルスブレードを赤に染めているトーレも地に横たわる”何か”を見据えたまま眉間に皺を寄せていた。

「いや… 一時はどうなるかと思ったツスよ」

着陸するが、ライディングボードに乗ったままあぐらをかいているウエンディがスティングガーを仕舞うチンクの隣にいた。

「それなりに手間取ったが…」

最後は呆気ない幕切れだった。チンクはそう言いたい。

単独任務から帰って来たばかりの彼女もスカリエッティから「黒騎士はAMF下でも平気で動き回れる」「潜在魔力値はSランク以上」と聞かされていたが…

「ドクターが送ってくれた援軍のお陰ツス」

スカリエッティが送り込んだ人造悪魔”グラディウス” カットラス” バジリスク” が、

「そつだな…」

”ビアンコアンジェロ” が建物に叩きつけられた”ネロ”を囲んでいた。

その無数の… 合計でも軽く100体以上いる悪魔の後ろにトーレとセツテ、ノーヴェが待機している。

「それにしても… あの男は何者だ？ ”タイプゼロ”と同じように別で造られた戦闘機人… それとも人造魔導士か？」

「いや、あたしも知らねッス」

先ほどから他愛のない話をしているチンクとウェンディ。

展開したモニターには頭から血を流し、胸や肩が切り裂かれて出血しているネロが映っていた。

「お前達は…」

「申し訳ありません」

「私達も昨日お話したこと以外は存じません」

昨日オットーとデイドからネロとダンテ話を聞いたのでチンクは二人を見たが、彼女達も詳細は知らないらしい。

「…そう…」

「ただいまー！」

二人とも感情希薄のまま言ったのを聞き、チンクは再びモニターを見た。案の定 ネロがビアンコアンジェロ2体に腕を捕まれて運ばれようとしているが、そこへ丁度ディープダイバーで地面に潜っていたセインが地上に出て来た。

「やったよ！！ とりあえず黒騎士の剣 取るのに成功したー！！」

「取ったって言うか、落つことしたの拾っただけッスよね、それ」

セインの手には”閻魔刀”があつた。やたらとハシヤぐ彼女に呆れたように言うウェンディだが、それを見たチンクは目を細める。

（デバイスではない…ただの剣か？）

「結構長いッスね」

「って言うか、鞘とかないのこれ？ 滅茶苦茶 危ないんだけど…」

セインが手にする閻魔刀の長さはゆうに1メートル以上はあるほどの刀だ。刃渡りと柄を合わせたら140センチ近くある。

抜き身の冷たい光を放つ刃に只ならぬものを感じるチンクがいつの間にか震えていた自分に気づき、腕を押さえる。

「あれ？」

「この剣、チンク姉の身長より長いんじゃない？」

——ドンッッ！！！！

彼女に気付かずセインとウェンディはまだ雑談していたが、遠くの方から凄まじい爆発が起こった。

「えっ！！？」

「何スカ！？」

そこは、倒れたネ口を包囲している建物の方。何やらトーレ達は何

か叫んでいるのも聞こえる。

「…ッッ…!!」

(チッ…!)

ただ事ではない。稼働歴は10年、幾多もの経験を積んで来たチンクはスティングーを取り出し、構えた。

【アアッ…!!】

(まだ動けるのか…!)

チンクが見たモニターには、”喧嘩”としか言いようのない荒々しいまでの蹴りと拳で悪魔を叩きのめすネロの姿が映っていた。

【フウウ…ッ…!!】

カットラスに切られた脚を引きずり、トーレに刺された肩を右手で押さえ、

【おらあああっ…!!!!】

【ハアアアッ…!!】

突っ込んで来たノーヴェの両脚蹴りとネロの上段蹴りがぶつかり合う。

【ガアアッ…!!】

だが、そのまま押し切られ、またしても地面に平伏した。

【バカが！！ 目も見えねえクセに無駄な足掻きしてんじゃねえよ！！】

俯せに倒れ、立ち上がるうとするネロの頭をノーヴェが乱暴に踏みつける。その瞬間にネロは声にならない悲鳴を上げ、苦悶した。

「相変わらずッスね、ノーヴェ……」

「苛ついてるのはいつものことだしね」

妹がネロを”また”ねじ伏せた事でステインガーを仕舞ったチンクはフツと息を吐く。

だが、その時 セインが持っている閻魔刀が弱々しく、微かに淡い光を灯した。

…

（そこで意識が“一回”途切れたんだよな……）

取り敢えずネロは記憶に残っていることを思い出しながらも、色々と思案する。

ノーヴェに肋骨を折られ、意識がなくなる前に記憶は遡りながらも彼の脳裏には構えた閻魔刀から斬撃を飛ばそうとした瞬間に戻っていた。

——だったら…… やってやる……！！

ネロはそのまま閻魔刀に魔力を込めて振るおうとするが、足を何かが掠め、彼はそのまま体勢を崩す。

（だいたい、何で右腕が悪魔に反応しなかったんだ…！）

——ガ…ッ！？

右脚の膝裏の筋をカットラスに切られたネロは、焼けた鉄を押し当てられたような痛みと共に脚を押さえ、後方を睨む。

——アグナスの人造悪魔！！？

——うらあああっ！！！！

——ッッ…！！！！

いつの間にか自分の後ろに無数の悪魔がいた事に狼狽するネロ。だが、その隙を突かれてノーヴェの蹴りをまともに受けてしまい、後退した後にネロは閻魔刀を杖変わりにして立ち上がるとする。

（この前みたいに反応が鈍ってるのとはワケが違う…）

聖王教会の時にアサルトに襲われた時とも、廃棄都市でヘルⅡヴァンガードと戦った時は反応が鈍っていた。

しかし、今回は右腕が疼くのが遅れたのではなく、疼かなかった。

——…ッ……うっ…！

代わりに、今は悪魔ではなく”戦闘機人”に反応している。

（本当にどうしちゃったんだ…）

——邪魔だ…！！

その後は一方的にノーヴェやトーレ達、悪魔にやられただけ。ガンナツクルのエネルギー弾をかわし、言うことを聞かない右足でバジリスクを蹴り飛ばし、剣に変形したグラディウスを正面から斬り捨てた。

——カスがつ…！！

もし、ダンテが話したようにスカリエッティが悪魔に何か細工したのだとしたら、悪魔の右腕が反応しなかったのにも説明はつくかもしれない。

だが、この時のネロはそのような事を考える余裕はなかった。ただ、人造悪魔を使ってスカリエッティが挑発しているとは思えず、それを叩き潰すことしかネロには出来なかった。

——ナメやがつて…！！

——動きが雑です

荒ぶる感情のままにネロは刀を振るい、ビアンコアンジェロを斬り、背後から聞こえたセツテの声に振り向いたが、そこに彼女はいない。

——しまっ…！！

その瞬間にオットーのレイストームが迫って来たのを回避し、波状攻撃のデイドのツインブレイズを受け止めようとするが…

——…！！？

閻魔刀はツインブレイズどころかディードの体を貫く。いや、それ自体が”幻影”だった。

そして…

ピッ…！

——え…

何か風のような物が掠り、衝撃がネロに伝わる。
それと同時にネロの視界は塞がりはじめ、

——どんなに強い獣でも爪と牙がなければ意味がありません

キンッ！

二つの何か… 本物のツインブレイズで閻魔刀を無理矢理弾かれ、
何かに左肩を貫かれながらも建物にネロは叩き付けられた。

——紙一重でかわしたか…

——どの道 見えはしないでしょうし、あれで終了ですね

インパルスブレードでネロの左肩を貫いたトーレが静かに言うと、
ネロの脛を切り裂いたブーメランブレードをキャッチしたセツテも
感情を込めずに言う。

——…！！…

——ううううらああああっ！！！！

——ア……ッ……！！

ビアンコアンジェロに槍で両肩を貫かれたネロは両目を閉ざし、磔の状態のまま右手を必死に延ばすが、ノーヴェの蹴りを受けてアバラ骨を軋ませながらも血が数滴飛び散らす。
事切れるように右腕の力が抜け、

——アバよ……！

ボキィッ！！

——ゲフッ！！！！

追い討ちと言わんばかりに更に足がねじ込まれ、ネロの返り血がノーヴェの顔に付着する。

その頃、ネロが落とした閻魔刀が地面から出て来た手に掴まれ、沈んで行った。

「どうかしたの？」

フェイトの声にハッとし、目の焦点を合わせる。

「何がだ？」

「いや、何だか考え事してたみたいけど……私の話聞いてた？」
全く聞いていなかったとは言えないが、ネロはつい「ああ」と応えてしまう。

（多分、聞いてないよね…）

その通りだが、敢えて彼女は言わない。

「あ、それとヴィータ達も平気だから…」

「知ってるよ。聞いたし、ここに来る前に先に寄ったから」

そう言えば、ネロが自分の病室に来る前に何やら騒がしかったような気がしたが、恐らく何か関係しているのかもしれない。だが、フェイトは聞こうにも聞けない。絶対に何かあったのだろう。

「じゃあな…」

「あ…」

「あんたもヴィータみたいに暴れんなよ。一番酷いのは変わらないからな」

「ヴィータみたいに…？」

唐突にネロは部屋を出て行こうとするのでフェイトが呼び止めようとするが、その前に彼は扉の向こうへと行ってしまった。

「あの時のカンジ…」

ふと窓の外を見れば次元空間を潜航する為の船が幾つもあるが、ネロは廃棄都市の戦闘中に頭の中で響いていた声と、組重なる感情の

事を考えていた。

（まだ力が足りない…）

不意に右手を握り締め、その場所を後にする。

（何で、ガキの時のことなんか思い出したんだ…！）

——遡ること10年前——

「ネ口…」

古い木造の建物の一室。そこには銀色よりも白に近い髪の子供が膝を擦りむき、口の端から血を流したまま、窓の所に腰掛けていた。その少年を心配するように白い修道女のような服を着た老婆が声を掛けると、

「何か用かよ、シエスタ。宿題ならとつくにやってる」

幼き日のネ口は、この孤児院の現責任者の院長であり、保護者であるシエスタに適当に返す。

しかし、未だに彼女の方に顔を向けないままだ。

「それとも、また説教しに来たのか？」

漸くネ口は窓枠から降り、床に足を下ろすなり口の血を拭った。

「……そうよ」

「ハッ！」

シエスタがゆつくりとネ口に向けて一歩ずつ近寄るが、彼は下らない。だから何だ、またかと言わんばかりに鼻で笑っていた。

「分かってるの？　これで何回目か…」

「数えてねえよ」

育ての親の説教を鬱陶しそうにしながらネ口は頭を掻く。

「だいたい…　あいつら、気に入らねえんだよ」

この時のネ口はただかだか7・8歳程度であるが、彼が壁を叩くと、年相応とは思えないような音が鳴り、微かに振動した。

「それに俺は悪くないね。手を出したのは俺が先だけど、あいつらが俺の事を…」

——あの頃は喧嘩ばかりしてたな…

「……の子供呼ばわりするんだし。つーか、3人がかりでも勝てないのかよ、10歳のクセして」

——次の日に10人で来られたらのはヤバかったな…　まあ、全員ブチのめしたけど

「何度だって言ってやる。俺は悪くない。腕に自信がないから口で言うだけの弱くて、群れなきゃ何も出来ないような奴らが悪い」

——その次に15の奴が来たっけ… まあ、それもぶっ飛ばしたけど、そこからはビビって誰も近寄らなくなっただけ…

あの時…戦闘機人達と戦っていた時。自分は体の内側から込み上げる感覚と、頭の中に響いて来た声が何か分からなかった。だが、今なら分かる。

（純粹な怒り… か…）

理由もなく怒りが込み上げるようなことなどある筈がない。だが、ナンバーズと戦っていた時に何処から感じたものの正体は確かに怒りだった。

「ちっ…」

自分を■■■呼ばわりしていた子供を殴っていた幼年期に、キリエを人質にするようなアグナスと教皇に対して感じた怒りと同じようなものが、あの時に感じた。

あの感情はどうしてこみ上げてきたのか。何も分からないままネロは舌打ちした。

「俺に何か用か？」

一方で、ダンテは広い休憩所から船を見ていた。周りには本局の隊員が何人もいては何気ない話をしていたりする中で、2メートル近い長身と目を引く銀髪のダンテを好奇心な目で見ている者もいるが、彼は何処に向けて言った。

「そこの二人だよ。妙な犬ところ何匹連れてやがんだ？」

ダンテは鼻で小さく笑い、”10か…”と言った。

「…すごい洞察力だね。数までピッタリだ」

柱の影に隠れていたのは、白いスーツを着た緑髪の年若い男性だった。彼に続き、フェイトの兄であるクロノも出て来ると、ダンテは軽く挨拶する。

「話は聞いてたんだけど…」

その男性は作り笑いしながら少し驚いた様子だが、ポケットに手を突っ込んだまま、ふてぶてしい顔で見据えているダンテと、ここで話すのは何だと思い、場所を移そうと考える。

「…少し宜しいかな？」

「あなたに聞きたいことがある」

「尋問ってやつか。まあ、いいけどよ」

——2分後 時空管理局本局のとある一室——

「まずは自己紹介からだね。初めまして。僕はヴェロッサ・アコース… 時空管理局本局所属の査察か…」

ドカツ！！

応接室に来たヴェロッサとクロノだが、この部屋に入るなりダンテ

は我先にソファ―に腰を下ろし、行儀悪くテーブルの上に足を乗せた。

「…ん……… なんだけど……」

言葉が途切れ途切れになるヴェロッサだが、ダンテはだるそうにネクタイを緩める。

『 ロッサ……』

『 何だい？』

『 ” 獵犬 ” は消した方がいいと思うよ』

背凭れの後ろに手を回し、天井を見上げているダンテを怪訝そうな目でヴェロッサは見ていたが、クロノから念話が入る。

『 さっきのも分かってたみたいだし、多分彼のことだから困っているのもバシてる』

『 了解……』

クロノに促され、ヴェロッサの指示で《ウンエントリヒ・ヤークト》《通称” 無限の獵犬 ” が消えると、ダンテは警戒が緩んだことを感じ取りヴェロッサとクロノの方に顔を向けた。

「クロノと姉さんから話は聞いてたけど……… これほどとはね……」

「 誉めてくれてるのか？ 」

元よりヴェロッサの”獵犬”は見えないようになっていたのだが、後ろを包囲していたものがなくなったとしても、ダンテには相変わらずの態度だった。

二人もソファアに座り、ヴェロッサが呆氣に取られているようだったが、ダンテは不敵に笑ってみせる。

「まあね…」

「どうもな。あんた、何だっけ？ トップブリーダーか？」

「いや、さっき言ったように査察官だよ」

こんな時でもふざけているダンテと、彼と同じようにしているのかそれとも付き合っているだけなのか分からないが、ヴェロッサも微笑みを返しながら言った。

「で？ その兄ちゃんと姉貴から聞いたとか言ってたけど」

「ああ。教会騎士団のカリム・グラシアは知ってるよね？」

「今日会った美人の姉ちゃんだろ。機械には弱くても、ちゃんと頭のメモリーには入ってるよ」

「カリムは僕の姉さ」

ダンテが何か言ったことでクロノが少しばかり顔をしかめたが、ヴェロッサが自分のカリムの弟であると言った瞬間にダンテがテーブルから足を下ろした。

「へえ…」

口端を僅かに吊り上げ、何やら笑っているダンテにヴェロッサは苦笑する。

『おい、余計なこと言ったんじゃないのか…?』

『まあまあ。昼間のことは君から聞いてるけど、探りを入れる為だし』

昼の聖王教会でのことを考えれば、ダンテは確実にカリムを狙っているとした考えられないが、ヴェロッサは体から赤いオーラを放っているように見えるダンテを見詰めたままクロノと念話で話す。

「要件は何だ？ 弟くん？」

「弟って言っても、義理のだけどね。最近出沒しはじめたアンノウン…姉さんやシャツハ、はやてが言ってる”悪魔”について聞いたいんだが…」

ふと閉じていた瞼を開ければ、ダンテはつまらなそうに溜め息を吐き、明後日の方を見ていた。

「おい…」

「義理ねえ…」

不真面目なダンテにクロノが何か言いたいようだが、「そっちのパートナーか…」とボソッと漏らしながらダンテは頭を掻いている。

「あの…」

「なんか飲み物とかないのか？」

ヴェロッサがやるせなさそうにしているが、ダンテが「酒とか」と言ったので、

「……ワインでも飲みながら話そうか？」

と言いながら、何処からかボトルごとワインを出した。

『おい、話で聞いてたよりもふてぶてしいぞ』

『あゝ…、一人で飲んでは…』

ダンテから色々と話を聞こうとしていたものの、もう向こうのペー
スに飲まれようとしている。実際にダンテが一人でワインを飲んで
いるのだから。

「なあ、まだあるか？」

「「え？」」

そこには、僅か数秒でワインを飲み干し、これよがしにボトルを逆
さにして振っているダンテだった。

…

「「デメエ…」」

「また覗き見か？」

槍を構え、無言のゼストの隣には、目ので余裕と言わんばかりに振る舞っているダンテを睨み付けるアギト。

「何しに来た！！」

「散歩」

時は3時間ほど前に遡り、ダンテが聖王教会でレリックを踏み碎いてしまった直後の頃のことである。

高エネルギーの集合体である魔石の影響で空間転移したダンテが現れた場所は、何処かも分からない森の中。湖の畔で、ゼストがルーテシアを庇うように立ち、アギトが怒号するが、ダンテは煙に巻くようだった。

「嘘付け！！」

叫ぶアギトの後ろには、廃棄都市でナンバーズと戦うネロが映っていた。

だが、彼はノーヴェに踏みつけられ、閻魔刀も持っていない。

「デカイ声出すなよ。カッカしてると頭の血管が切れちまうぞ」

「んだと！！？」

「よせ、アギト」

忠告としてダンテが言つと、憤慨したようにアギトがまた声を荒げ

るが、彼女の隣にいるゼストが落ち着かせる。

（坊やに女の相手は不味かったな…）

後ろのルーテシアはまだモニターを見ていたので、ダンテもチラリと目を向けた。

ノーヴェに蹴り飛ばされ、俯せから仰向けになるものの、過剰なまでのバインドで動きを封じられ、歯を食いしばっている。

「…よく此処がわかったな」

「まあな？」

ゼストはいつ戦闘になってもいい臨戦態勢に入っているが、ダンテは敵意を見せずにおどけている。

「昨日も見物してたみたいだし… そっちに取り敢えず聞くが… あんた達、何者だ？」

「質問に質問で返すようだが、それは此方も同じだ」

ビリビリと空気が揺れているように感じるが、それほどの緊迫感もどうということもないようにダンテはフツと笑う。

「お前は何者だ？」

よく見れば、ゼストの額から一筋の汗がつつつと流れていた。

『旦那！！』

『待て、アギト』

「それと、黒騎士も…」

「おい、ちよつといいか？」

”またか”と顔で言っているダンテは面倒臭そうに首をさすり、呆れ顔だった。

「まず言わせてもらうが… 昨日見てたんだよな？ ”黒騎士” としての白髪の方のことか？」

（誤魔化しても仕方ないか…）

「…そうだ。蒼い魔力を纏い、異形の右腕を持つ若い騎士…」

「一つ言つとくぞ」

ゼストが静かに口を開き、話していたが、ダンテは割り込むようにして入り込み、深く息を吐く。

「あいつを”騎士”って呼ぶのは止めときな。もう騎士じゃないし、下手すればぶつ飛ばされるかもしれないしよ」

「なに…？」

ゼストはルーテシア以上にスカリエッティからネロとダンテの話を聞いていない。それに、昨夜の戦闘は途中までしか見ていなかった。何故、そのようなことをダンテは言うのか、彼もアギトも分からなかった。

「あんた達の為だよ。とにかくあいつにもちゃんとした名前がある

んだから…」

せめてもの忠告としてダンテはそう言い、フツと笑ったが…

「……！！」

——ガウウウンッ……！！！！

腰のホルスターからアイボリーを引き抜き、一瞬でチャージした魔力を弾丸と共に撃ち出した。

「っ……！！」

「うわぁあぁっ！！？」

赤い閃光が稲妻のようなものを纏いながらも湖の向こう側に向けて突き進み、凄まじい爆炎を上げる。

ゼストもただ、先ほどとは打って変わって只ならぬ殺気を放つダンテに看取れ、アギトも何が起きているのか分からず、チャージショットの着弾に伴う爆風から目を覆い隠して声を上げるしかなかった。

「……」

流石にモニターから目を離れたルーテシアも爆炎の先を見詰める。だが、それと同時に体も動かすことが出来ない。いや、力が入らない。

（あれ…？）

何気なく廃棄都市の戦闘が行われていたモニターを見れば、一瞬電

流が走ったかのように映像が乱れた。

それに気を取られ、彼女がダンテのいた所を振り向いた頃には…

「…魔剣士さんは？」

ダンテはいなかった。

「何だよ… 今の…？」

何がどうなっているのかなどルーテシアには全く理解出来ない。少し目を離れた隙にダンテはいなくなっていたのだ。

ただ、地面は焼け焦げ、ゼストは片膝を突き、アギトも地面に降りて四つん這いになっている。

「旦那、今の…」

呼吸するのも辛そうにしながらアギトが顔を上げるが、彼女の隣にいるゼストの様子が明らかにおかしい。

「旦那…」

「ツツ…ア…!!」

アギトがそう言いかけた瞬間、ゼストが吐血し、苦しみに伴って槍を握り締める。

「旦那っ!!!!」

「ゼスト…!!」

ルーテシアも静かにだが、声を上げる。

その瞬間、遙か遠くの方では、”赤”と”黄”の雷が空に向けて昇り…

「ヤベーぞ、ルールー！！ 急いでこっから離れないと！！」

「うん…！」

轟音と爆音が響く中で、転移魔法の準備を始めているルーテシア。

「ゴホッ…！！」

「旦那！！」

暴風がそこまで届いている中で、咳き込みながらもゼストが見たものは…

（黒…騎士…？）

モニターの向こう側で、”蒼い双剣”を持ち、斬り捨てた悪魔の中に佇むネロだった。

…

「…」

「……………何だよ？」

場所と時刻は現在に戻り、時空管理局本局。とある一室では、ピリピリとした重苦しい空気に包まれ、ティアナ、スバル、ギンガも不安そうな顔で時折目をちらつかせてはいるものの、無言で立っているシグナムと、頭や腕に包帯を巻き、頬に大きな絆創膏を貼っているヴィータの5人がいた。

「……少しは認めたと思えば、またあれか…」

「んだよ!!?」

やや低いトーンの声で静かに言うシグナム。しかし、ヴィータは眉を吊り上げて不満の声を漏らした。

「何だとは何だ。あいつが自分の非を認めていたと言うのに…」

「だから、どうしてあたしが悪いみたいに言うんだよ!?」

「……」

何かと突っかかるヴィータに呆れて溜め息を吐くシグナムだが、彼女は黙ってヴィータの目を見詰める。

「なんだよ、あいつ口じゃ悪いとか言ってたけど、目は完全に謝ってなかっただろ?　ってか、”自分なら倒せた”ってさり気なく言ってたよな!?’

(…目は口ほどにものを言う、か…)

「それを言っても仕方あるまい…　それに、”倒せた”ではなく、”こんなことにはならなかった”だろ?」

二人がもめているのは、つい先ほどネロが来た時のことについてだった。

ここにはやてがいればヴィータも沈まるのだろうが、ある用事で席を外している。

『ティア… ギン姉…』

『スバル、下手に入ったら火に油よ』

『でも、このままって言うのも… 八神二佐 早く戻って来ないかな…』

フェイトとネロは個室であつたのに対し、彼女達は4人で一つの大きめの病室だった。

隣の部屋の方ではギンガと同じ部隊の隊員達もいるのだろうが、恐らくヴィータの怒声が丸聞こえだろう。少し離れた部屋のフェイトの所にまで聞こえたのだから。

「結果的に意味は一緒だろ」

『あー、ヤバイ…』

ヴィータが寝転がり、シグナムに背を向けながら適当に返すものの、居心地が悪すぎる中でスバルの額から冷や汗が流れていた。

「何度言わせるつもりだ？ 違うと言っているだろう」

『えっと… 八神部隊長が会いに行つたのって、確か…』

『マリーさんの所よ』

繰り返される口論の中で、ティアナは向かいのベッドにいるヴィータとシグナムから目を背け、隣のスバルの向かいにいるギンガを見て念話を続ける。

『急に呼び出されてたよね？』

『確かにそうだけど、会う約束はしてたみたいよ。何か』昨日話したばかり”って言うってたし？』

…

「こちらの銃型の方は銃身の強化ですが、問題はこちらの方ですね。燃燒^{コラ}機関部分は1から作り直さないといけません」

「ホンマにすみません。マリエル技官」

青い光を放つ試験管のようなものの中にあるブルーローズと、燃燒機関が完全に壊れたレッドクイーンを見た後に後ろにいるはやての方を振り向いた女性の名はマリエル・アテンザ。本局第四技術部主任であり、現在はやてに頼まれた仕事を受け持っている。

「いえ、他ならぬ八神二佐の頼みですから」

笑みを返しながらキーボードを叩くマリエルは、何やら現在他のデバイスのデータについてまとめているようである。

「フェイト隊長のバルディッシュ… やっぱり何処か悪いんですか

？ まさか、壊れたとか…」

「そうではなくて… メインプログラムが一部書き換えられてるみたいです。特に問題ないと思いますが？」

ブルーローズとレッドクイーンの前には、待機状態になっているフエイトのデバイス バルディッシュがあった。どうやら、数時間前のベリアルとの戦闘が原因と思われるが、今は正常に作動せず、言葉も発しないらしい。

「バルディッシュの方は明日には何とか出来ます」

「そうですか… よかった…」

マリエルから話を聞き、はやては安堵の息を吐き、胸を撫で下ろすが、話はまだこれから。
他にも用はあるのだから。

「話は戻すんやけど、ブルーローズとレッドクイーンの方はどれくらいになりそうですか？」

「まだ何とも言えませんね…」

そう言うと、バルディッシュのデータを仕舞い、今度は違うデータを出す。

「”要望通り”にするんだとしたら色々やることがありますし…」

「………そうですか……」

出て来た無数のデータには、これからやるであろう作業プランが書かれているのだが、マリエルはかけている眼鏡を上げ、再びネ口の銃と剣に顔を向け、はやてもそれに続いて目を向けた。

「それにしても、すごい剣ですよ。40kg以上ある剣を”彼”、片手で振り回してるんですって？」

「ええ、まあ……」

マリエルはネ口が本局に運び込まれた時に”偶然”居合わせ、《悪魔の右腕》を見ているのだが、その事に関しては一切触れない。

数多の魔導生物や使い魔を見受けられるミッドチルダの人間だとしても、魔導生物と人間との間に子を成すと言うこと。右腕に異形の力を宿している人間など今までに例がないことであった。

だが、マリエルはネ口のことをはやてに聞くような素振りは見せず、に黙々と作業を続ける。

「改造したのも私ですけど、参っちゃいましたよ。刀身は折れちゃってるし、成分を分析したら”解読不能”って出て来たんですから。ただの鉄じゃないんですから、どうしようかと思いましたが、分解出来る構造だったから刀身フレームは丸ごと変換しちゃいまし……」

ありのままの気持ちで話していたマリエルだが、ふと後ろを振り返ればはやてが何やら言い出そうにしていた。

「どうかしましたか？」

「えっ!？」

「何だか落ち着かないみたいですけど……」

「あ、その…」

はやてはお構いなくと言うように両手を振り、苦笑を浮かべて「あつちの方はどうなってます？」と聞く。

「そうですね… やっぱり手こずってますよ。”試作機”として作られたものですが、やはり癖があると言いますか…」

はやてとマリエルが見た先にあるのは、金属質の黒く鈍い光を放つ物体。試作型のデバイスのようだが、その20センチ近くある円柱の物体からは、妙な威圧感を放っているように思えた。

「使用するのに膨大な魔力を必要としますからね… それが原因で保管されてたんですが」

「大出力の魔力砲撃を目的として作られた試作デバイス… なのはちゃんも前に運用テストに参加したんやっけ…」

二人は若干顔を沈め、空気が重くなっているのを肌で感じている。

「リンディ提督には感謝せなな。また協力してもらって」

「クロノ提督が、はやて二佐が言ってた”彼”に会ってみたいって言っていましたっけ…」

どうもはやて一人では出来なかったらしい。いくらその階級と部隊長の立場があってもだ。

「今 ロツサも一緒に話しとるんやろうな… 大丈夫やるか…」

「どつでしようね……」

…

「……」

「……………何よ？」

「いや……」

その頃でスカリエッティのラボ。

何かの書物を読んでいるスカリエッティは目線を移し、左の脇腹を押さえているウリエルを暫し見た。彼の目が一瞬笑ったようにも見えたとような気がした彼女は怒りを隠しながらも問うが、スカリエッティ自身は煙に撒くかのようにして書物を閉じ、他にも数冊ある山積みの本の中に放り投げる。

「流石の君でも無傷とはいかなかったようだね」

「はっ……！」

ウリエルが脇から手を放すと、その部分はローブごと切り裂かれ、火傷を負っているような後があった。

彼女はスカリエッティの言葉が気に食わないと言つように短く笑う。

「どうせ見てたんでしょ？」

「まあね…」

スカリエツティがキーボードを叩くと、出現したモニターには壊れかけた建物の中で戦うネロとウリエルの映像が出て来た。

「ちよつと甘く見てただけよ…」

【アハハハハハハ！！！】

【ああああっっ！！！！！！】

モニターの中では、燃え盛る剣と、ヒビの入った青い剣。高らかに笑うウリエルと碧い瞳のネロがぶつかり合っていた。

「手負いの獣は恐ろしいって言うけど… あの子はまさにそれね」

【うわぁっ！！？】

よく見れば、ウリエルの脇腹には、切り傷と火傷の二つの傷がある。切り傷は真新しいが、火傷の方は古傷のようだ。

ウリエルが淡々と喋る中で、ウリエルもスカリエツティもモニターを見てはいない。

しかし、ウリエルの剣との衝突に耐えられなくなったネロの手にする剣が真っ二つに折れてしまい、ネロは後方に大きく弾き飛ばされる。

「動物ならば、生きる為に全力を注ぐが…」

【どうしたの？ その程度？】

「彼は、”破壊”の為に全力を注いでいるように見えたよ…」

今度はスカリエッツィが喋り始め、彼はモニターに目を移し、映像を止めた。

「”悪魔”のようにね…?」

そこには、

【うらあ ああつー！！！！】

折れた剣の刀身を左手で引つ掻き、その左手に纏った魔力を応用してウリエルに幻影刀を投げ飛ばすネロ。

【遅かったな、こぞ…】

【ああつー！！】

【ガアツ！！?】

ベリアルは振り下ろした大剣からフェイトを救い出し、そつと下ろすなり一瞬で間合いを詰めて力任せの蹴りでベリアルの左前足をへし折るネロの映像。

「さながら暴君… って、ところかしら?」

「そうだね…」

【フウウウツツ…！！】

【ガッ…！？】

数時間前の廃棄都市の戦闘映像で、火球を吐き出そうとしていたファントムの牙を掴み、無理矢理軌道を変えて火球を空に向かって飛ばさせるネロが映っているが、ゆうに数千度はあるファントムの超高温で先ほど幻影刀を飛ばした時の荒技と、その時の行動が原因でネロの左手のから肉が焼けるような「ジュウツ…！」という音がモニターを通して聞こえた。

「まさか、ファントムの体に傷を付けるとはね…」

【このガキ…！！】

【ドルルルウツ…！！！！】

左前足を引きずり、上顎から突き出した自慢の牙を切り落とされたベリアルはネロの眼中にない。今の彼は青白い炎のように消えゆく閻魔刀にも、” たった今 閻魔刀で切り落とし、灰となっていくファントムの右前足 ” にも目を向けずに、獣の如く牙を剥き出して威嚇する。

「大変だったのよ？ ファントムったら、まだ暴れてて… まあ、騒いでたから、あの子に切られた所に” スルト ” 突き刺して決つてやったら大人しくなっただけ」

「ベリアルはともかく… ファントムの足は治せないだろうね…」

「でしょうね」

黒い渦の中から取り出した魔剣” スルト ” の刃を眺め、肩に担ぎな

がらもウリエルは深い溜め息を吐いた。

「”ミカエル”もダンテとぶつけたんでしょ？」

「ああ…」

【速ええな、おい！！】

周囲を駆け巡る雷に向けて二丁銃を構えるダンテだが、引き金を引いた瞬間「カチッ」と音がただけで弾丸は出ない。

【ヤベっ…！ うおああっ！！？】

遂に撃ち尽くされた弾にダンテは一瞬顔を引き吊らせるが、飛び込んで来た”人の形をした雷”が体中に巻き付き、彼も溜まらず声を振り絞る。

【…ブリッツの……比じゃ…ねえな…！！】

振り払おうにも、形のない”ミカエル”はダンテの体から離れない。堪らずにダンテは膝を突くが…

【ベタベタくつつくなよ…！】

「あらあら…」

ダンテの胸に亀裂が走り、まるで電流のような魔力の影響で髪が逆立つ。

【……美人の姉ちゃんならまだしも、悪魔のハグはお断りだ。そう

言う趣味はないんでな…!」

「悪魔がパートナーの癖にね…」

”魔人”と化し、ミカエルと対峙するダンテを見ながらウリエルはポツリと呟き、脇腹の傷と、

「よく言うわ…」

肩の部分を捲り上げる。そこにも脇腹と同様に火傷を負っていた。

「あれでも本気を出してないってあなたは言いたいのか？」

「そうさ…」

”帰天”したミカエルと、”魔人”となっているダンテの激闘が映っているモニターに背を向け、そのまま部屋の奥に歩き出したスカリエッティに向けてウリエルは言うが、彼は酷く歪んだ笑みを浮かべている。

「分かってるのか？ ミカエルは”ドミニオン”クラスよ!? あの隻腕の子でも、一瞬だけど”デユナメス”まで…!!」

本気を出していなかったとはいえ、ネロと刃を交えたウリエルはまだ納得出来なかった。

「だったら、ダンテは”スローネ”以上って事に…!!」

感情の高ぶりと共に、スルトが炎を纏い、ウリエルの体からも炎を噴き出す。だが、スカリエッティは「ラファエルの所に行くてくる」

と言っただけで、そのまま姿を消した。

「……」

（偉そうに……！）

自分を造った生みの親とはいえ、スカリエッティの態度も、自分に傷を負わせたネロも、あれでも本気を出していないダンテも気に入らないウリエルは地団駄を踏み、床に亀裂を走らせる。

「……フン……！」

舌打ちし、ラボを後にするウリエル。

展開したモニターの片隅に、巨大な《デビルプリンガー》で体長は100……いや、150メートルはあろうかという白い石像のようなものの頭を握り潰すネロの画像や、

「”神”を殺したからって、何よ……」

白い巨人を囲むように浮遊する足場の上にいる”魔人化”したダンテがリベリオンで左手を切り、その血を髑髏の装飾の口の中に流し込んでいるものがあつた。

【フウウウウツツ……！！】

【うわ、またかよ！？】

再び誰もいなくなったラボの中には、退散するベリアルとファントムに足を引き擦りながらも唸るネロや、ミカエルの電撃が体を掠め、その影響でレリックによる空間転移で森林から姿を消すダンテの映像と音声だけが響いていた。

「計画性ないから下手に予告出来ないの、アニメの次回予告みたいにやるtalkingのコーナー」

ヴェロッサ「あゝ… もう飲めない…」

クロノ「おい！！ 一応仕事だぞ、何をやってるんだ！！」

ダンテ「お前も飲めよ」

クロノ「いや、君も何本飲むつもりだ！？ それで8本目だぞ！！」

ダンテ「飲まなきゃやってられねえだろ？」

クロノ「何が!？」

ヴェロッサ「まあ、いいじゃないかクロノ。君も…」

クロノ「だから君は何をやってるんだ？ 一口だけとか言ってたのに…」

ヴェロッサ「はい」

クロノ「え？」

ヴェロッサ「次回予告だよ。クロノにどうしてもやって欲しいって、

作者が」

クロノ「作者！？ あ、あそこのヤツか…」

ダンテ「読まないともっと酷い扱いにするってカンペ出してな」

クロノ「なんだ、それは！？ 嫌がらせか？」

ダンテ「早く読めよ。それとも酒飲むか？」

クロノ「だから、君はなんなんだ！？ 僕、一応君の出身世界探してるんだぞ？ あと、作者は男性陣の扱い酷いな、本当に…」

ダンテ「飲まなきゃやってられないぞ」

10分後

はやて「ダンテさん、何しはったんです！？」

ダンテ「当ててみな」

はやて「謎掛けせんといて下さい！！ って言うか、朝にもネロさんにお酒飲ませたらしいですね？ 医務官の先生がアルコール検出されたって言うてはったし、下手したら飲酒運転で…」

ダンテ「あー、はいはい」

はやて「ちゃんと聞いて下さい！！ ……ん？ なに、これ…？」

ダンテ「嬢ちゃんと同年になったばっかって言う奴がスタッフに

持つて来させたやつだろ。なんて書いてんだ？」

はやて「えー、なにになに… 更なる戦いが待ち受ける中、真紅と蒼白の狩人は、ただ機が熟すのを待つ。ウェイクアップ、運命さだめの鎖を解き放て… 何これ？」

ダンテ「また自分の趣味の影響で無茶やらせるつもりだろ。あ、逃げた」

はやて「まで、バカ作者！！」

ヴェロッサ「…カウントは…？」

クロノ「ワタル… キバって行くぜ」

ダンテ「こいつら、何の夢見てんだ？」

S e c t i o n : 1 1 } H o l i d a y 狩人の休日 〵 (前書き)

ダンテ「さ〵、今日もスタントなし、アドリブ全開で行くぞ〵」

エリオ「ダンテさん、カメラ回ってます!!」

ネロ「うわ… また話 引つ張りやがったよ、あの監督…」
バカ

k i d 「はい、スタート!!」

Section:11 Holiday 狩人の休日

「いや、ようやく着いたね。機動六課」

車から降り、隊舎へと向かう道で大きく背伸びをするスバル。

「もう、1日でも何だか懐かしい気が…」

「スバル」

「ん？」

「少し黙って…」

彼女は陽気に笑ってみせながら肩の関節をほぐしていたが、隣を歩いているティアナはどうも沈んでいる。声を掛けられたらスバルは普通に聞き返したものの、やはりティアナはどこか不機嫌なようにも思えた。

「何で？」

「何でじゃないわよ!-!」

「ちょ…! ティア…」

「あんだ、分かんないの!-?」

完全に惚けているスバルに詰め寄り、額を打ち付けながらティアナは片手で胸倉を鷲掴みにする。

「和ませようとしてるつもりかも知れないけどねえ、そうやってさつきから場の空気読まないでいること、あんた 本当に自覚してんの！？ って言うか、これ何回目！？」

「うああ… え…！？」

六課に戻るまで、スバルがやらかしたこと。ようはただのお喋りなのだが、次元ポート然り、リニアレールに乗っている間、そして送ってもらった車の中でも気まずい空気は貫き通された。

「しかも、あんた… ネロさんに趣味は何ですかとか聞いたわよね？ あの人は何て答えたか覚えてる！？ ” ない ” よ…！」

「ティア… 苦し…！」

「 ” その服、似合ってますね ” じゃないでしょ…！ 言った瞬間にネクタイ緩めたわよ…！」

ネロの服装は現在 陸士服なのだが、理由は昨夜に遡る。着ていた服が着れない状態になっていたし、仮に無傷だったとしても目立つので、はやてが置いていったものであった。時空管理局本局の中では仕方のないことだ。

「何 着ても様になってるって、あんた何回言ったか…！」

「ティア…」

ガクガクと揺さぶられるスバルは、若干意識が遠のきながらも遠方を指差す。

「ネロさんとヴィータ副隊長… 先行つてる…」

ティアナも言われて見てみれば、二人ともお構い無しに歩き続けていた。並列してはいるものの、離れていても何だか近寄りがたい雰囲気醸し出している。

「え…」

揉めていた時間は僅かな筈だが、ネロとヴィータは50メートルは先を歩いている。ティアナはそのことと、自分達を止めずにいたことがどうも引つかかりながらスバルの服から手を放した。昨日もどうも気まずいカンジにはなっていたが、それほどまでにまた険悪ムードに戻ってしまったのかと思案するティアナには、足元でもがきつつ、咳き込みながら手を伸ばすスバルには気づいていない。

…

「あ、お帰りなさい」

「よ…」

二人を置き去りにしたネロとヴィータの先には、どうやら午前の訓練に取り組んでいるエリオとキャラロがいた。

二人を見付けるなりキャラロが挨拶すると、ヴィータは気だるそうに返す。

「…復帰おめでとつございます」

「そんな大した怪我じゃなかったのは知ってたんだろ。敬礼はいらねえよ」

畏まるエリオにヴィータが返す隣では、ネロが何かを探すようにキヨロキヨロと辺りを見回している。

「ネロさんもお無事で…」

「あいつは？」

「え？」

ネクタイを締めずに第三ボタンまで開けているネロは何ともない様子。それでも伺うようにエリオは声を掛けようとしたが、彼が喋り終わる前にネロは問うた。

「ダンテだよ。あいつはどうした？ まだ寝てるのか？」

「多分… そうだと思います」

「今日は、まだお会いになってません」

時刻は既に11時に差し掛かろうとしている。昨日 起こしに行った時よりも時間は遅いから起きている筈だが、二人の話だとベッドの中だろう。

キャロの足元にいるフリードが、何やらまだネロを警戒するように唸っているが、彼は気付いていないのか、気にしていないのか。目もくれないでいる。

「……そうか…」

「あ、来た来た…」

ダンテが寝ていようが、何をしていようが自分には関係ないので、ネロは話を聞くと小さく息を吐いた。そこで遠くから声が聞こえたので四人… いや、追い付いたスバルとティアナを含めた六人と一匹は顔を向けた先になのはがいる。

何故いるのかは言うまでもない。今までエリオとキャロに訓練教導していたのだから。

「みんなお帰り」

「ただ今 戻りました」

レイジングハートはデバイスモードになっているが、服装は教導服のなのはにスバルとティアナが敬礼するが、彼女の顔を見た二人は少し顔を沈めた。

「すみません… 昨日は…」

「私たち…」

「仕方ないよ。私やシグナム副隊長も助けに行くのが遅れちゃったし、その経験からもっと強くなるっ」

昨日 ベリアルとの戦いで全く太刀打ち出来ないまま敗北したスバルとティアナは合わせる顔がない。そんな彼女達にエリオとキャロも少し戸惑っていたが、なのはは励ますように声を掛けた。

「あれ？ その服…」

「着替えだとさ」

やり取りを無視して隊舎に歩き出すネロになのはが声を掛けようとするが、彼は振り返らないまま適当に返し、歩き続ける。どう考えでも早く陸士服を脱ぎたいのだろう。フォルトウナにいる時なら教団にいた時の服装か、外界から取り寄せた物資である“今時の”普段着なのだから。

（早くはやてに返そう…）

教団に入っただばかりの頃に着ていた堅苦しい“白い騎士服”を思い出すので、ネロは早く着替えようと思いつつ、頭を掻いた。

（あと、ワックス…）

昨日の戦闘で血だらけになっていたから、気絶してる間に勝手に髪を洗われていた。

寝ている髪を弄りながらヴァイスに“また”借りようかと思った矢先に、バイクのガソリンを抜いたことも思い出す。

（いや、多分 貸してくれない…）

…オオオオ…ンツ…！

バレたのなら確実に整髪料を貸してもらえないと思い、天を仰ぐネロだが、何かの機械音と思える音が耳を掠めた。

（この音…）

その音は、ネロにとって確実に聞き覚えのある音だった。
何せ…

オオンッ！！

自分のバイクのエンジン音なのだから。
だが、彼が気付き、ハッとした頃には遅かった。

「イイーハアアーーーーッッ！！！」

黒い大型バイクに跨るダンテがかなりのハイテンションで雑木林を
突き破り、訓練所の所に飛び出して来たのだから。

「ダンテさん！！？」

「あれ、ネロさんのバイク…！」

テンションを持续させたまま駆け回るバイクと、運転するダンテに
開いた口が塞がらない。

エリオやキャロが何とか声を出し、ふとネロを見た。

案の定 立ったまま怒り心頭に拳を握り締めているようだが、彼は
止めに行かない。

理由は簡単。

「ヴィヴィオ！！？」

後部座席にヴィヴィオが座っているのだから。ダンテに必死にしが
みついているようだが、心なしか彼女も楽しそう。

「え！？ ちょっと、ダンテさ……！！」

なのはが慌てて止めようとした瞬間だった。

ガシャンッ！！

大きな石が地面から突き出していたので、それがジャンプ台の役割を果たし、バイクと一緒にダンテとヴィヴィオは放り出される。

皆の時間がスローモーションのようになる中で、ヴィヴィオが見たのは、叫ぶなのは、それに続くヴィータ。同様に慌てながらもデバイスを起動させようとするスバル、ソニックムーヴを発動しようとするエリオ。啞然としていた顔から驚愕に染まりティアナと、両手を握り締めるキヤロと、飛び立とうとするフリード。

「……………！！」

誰よりも叫び声を上げ、駆け出すネロが。

「よつと！」

だが、最悪の事態は訪れなかった。ヴィヴィオが地面に叩き付けられることも、バイクの下敷きにもなっていない。

空中で驚くべき乱舞とも言える動きをみせたダンテが彼女を左脇で抱え、

ガッ！

バイクを右肩に担いだ。彼が何をしたのか、なのは達の頭が追いつくのに数秒の時間を有したが、ダンテはヴィヴィオとバイクを持つたまま皆の方を振り向く。

「よう。退院出来て良かったな」

啞然とするか、顔をヒクつかせることしか出来ていないなのは達にダンテが声を掛けているのを、ヴィヴィオは脇に抱えられたまま見上げる。

「あの… 何をして…」

「おい…！」

なのはがようやく聞いたものの、かなりドスの聞いた低い声が違う方から聞こえた。

「下ろせ…！！」

ギリッ！！

そこには、瞳こそ赤くはなっていないものの、確実にキレているネロが。服の袖から微かに包帯を巻いた腕が覗き、人差し指を地面に向けている右手からはグローブの革が軋む音を立たせた。

「おお、坊やじゃねえか。元気そうで… って、そうじゃなかったな」

体の体調もさることながら、ネロがただ事では無くなっているので、ダンテはおどけつつもふざける。

「いいから…！ ヴィヴィオと、俺のバイクを下ろせ…！！」

「……………分かったよ。今……」

一句一句 区切り、強調しながらも地面に下ろすように促すネロ。
ダンテも言われなくても今やると言いたげにしてヴィヴィオを地面に下ろし、次にバイクを下ろそうとするが、

ガンッ！！

堅いもの同士がぶつかるような大きな音がした。ヴィヴィオの体が一瞬ビクツと反応し、なのは達もフリーズしている。

「おっと……」

何より、肩にあった重みがなくなったことと、すぐ真後ろから振動が伝わったこと。ネロが歯を食い縛り、打ち振るえていることからバイクがハンドルの部分から千切れ、地面に落ちてしまったことに。

「ネロさん、落ち着いて！！」

「気持ちは分かりますから！！」

「堪えて下さい！！」

「ヴィヴィオもいます！！」

「フウ……ッ！」

ネロはダンテ目掛けて飛びかかろうとしたが、ネロ自身にフォワードメンバーが飛びついて止めようとする。四人掛かりだとしても重りの役割にはならず引きずり、行く手を阻むようにフリードは火

球を吐く準備は出来ているが、ヴィヴィオが胸にある人形を握り締め、怯えていたように見えたのでネロも進行する歩を止めた。

「……ワリイ……」

（あの野郎……！！）

感情のコントロールすらも出来ないのかと思いつつ、ネロは自重する。

「おじちゃん、すごい」

「ハハハ。おじちゃんじゃなくて“お兄さん”な」

ヴィヴィオがネロから目線を移し、ダンテを見上げると、喜びつつも中年扱いは否定した。

「俺、まだ37だから……」

「あの、ダンテさん……？」

「……“おじちゃん”ってのは40を越えたやつを言うんだよ。何だ？」

しゃがんで目線を合わせながらバイクのハンドルを肩にポンポンと打ち付けながら笑うダンテ。彼の基準によれば“おじちゃん”まで3年しかないが、それはさて置き聞いてきたなのはを見た。

「いま、バイク担いで……って言うか、なんでヴィヴィオが……？」

「ああ、起きてほつつき歩いてたら会ってな。姉ちゃん探してたか

ら連れてってやろうと思ったたら忙しそうだったし、坊やのバイク見つけたから、何となく暇つぶしでも…」

相手をしてくれていたのは嬉しいが、もっと他にもあっただろうにとなのはは思う。

「…ちなみに、マックスでトラックまで担ぐ自信あるぜ。大型のやつな？」

何故か不敵に、そして自信に満ちながらもダンテはアピールする。

「それって…」

（１０トンくらい…？）

「２０トンはいける口だ」

なのはが何を考えていたのか察したダンテは素敵スマイルで言うが、彼女には通用しない。

（もう、何だよこれ…）

復帰一日目にして、ダンテのせいでおかしくなりつつあることにヴィータは溜め息を吐き、隊舎の方に歩き出した。

—— 復帰二日目 ——

「おはよ〜…」

目を覚まし、顔を洗うヴィヴィオに狼形態のザフィーラがくわえた

タオルを差し出した。

なのは忙しく、フェイトはまだ本局の方にいるので、ヴィヴィオの面倒はザフィーラか寮母のアイナが見ている。

…

「…？」

昼食を食べ終わり、ダンテから貰った人形を抱いたまま一人歩くヴィヴィオの耳に誰かの声が聞こえて来た。どうも騒いでいるさしい。確実に怒声だ。

「こつち…？」

ザフィーラははやてに呼ばれたらしく、今は彼女に付き添っていない。食事を終えたので今からアイナの所に戻るうとしていたのだが、ヴィヴィオは好奇心から声がする方に向かう。

「デメエ…ッ…！！」

すぐ近くに辿り着いた彼女は、壁から頭を出して覗くと、そこには、ダンテの胸倉を掴み、壁に押し当てるネロがいた。

「どういっつもりだ！！？」

「どうもこつちも、今 話しただろ」

激しく詰め寄るネロが右腕一本でダンテを持ち上げているが、彼は

平然としたまま返す。

「ふざけてんのか!! “魔具”を知り合いに預けてて、あの戦闘機人のやつが使ってたのが、そうだって言いたいのかよ!!」

「ああ」

何のことを話しているのかヴィヴィオには分かっていない。ただ、昨日も帰って来て相手をしてくれたネロが、昨日遊んでくれたダンテに怒っているということしか分からない。

「ツツツ…!!」

(どうりで、“あの時に、前に触った事がある”って感じたワケだ…)

「おい、いい加減に下ろせよ」

ナンバーズと戦った時のことを思い返し、ネロは顔を俯かせた。

「聞くが… “あれ”は“フォルトウナ城の地獄門に使われてた魔具”か？」

「勘がいいな。名前はパンドラ…」

ドンッ!!

“パンドラ”と言った瞬間に、ダンテはまた壁に叩きつけられた。壁の振動が伝わり、その轟音でヴィヴィオの体が飛び退く。

「名前なんかどうだっていい!! なに考えてんだ!! 人間に“

魔具”を預けるなんて…!!」

激情したネロが更に詰め寄るが、ここでようやくヴィヴィオの存在に気がついた。

「ヴィヴィオ…!? いつから…」

「俺としたことが、気付かなかったとはな… 完全に年季が入ったか？」

我に返るネロと、自嘲しながら笑うダンテ。漸くネロの手から抜け出せたダンテは一步一步ヴィヴィオに近寄り、しゃがみ込んだ。

「よお、嬢ちゃん。今の聞いたか？」

「……うん…」

向こうではネロがバツの悪そうにして「D a m n i t!」と小声で舌打ちの後に言うのがヴィヴィオには見えたが、ダンテが聞いたことに人形を抱き締める力が強くなりながら答える。

「何処から聞いてたか知らないが… 今のは誰にも言わないでくれないか？」

「ないしょ…?」

「ああ。内緒で頼む」

ネロは壁に頭を当ててうなだれているが、二人の話は続く。

「…頼むよ、マジでさ…」

「代われ」

業を煮やしたネロがダンテの後ろへやって来ると、ヴィヴィオは見上げ、ダンテは後ろを振り向いた。

「俺が話す」

「おい…」

ダンテが何か言おうとしたが、彼を下がらせたネロの背中を見て肩を竦める。

…

「やるな」

「…」

去って行くヴィヴィオを見送りながらもダンテはフツと笑い、ネロは無言で立ち尽くす。

——頼む、どうしても言わないでくれ

「どう違うんだろっな。誠意ってやつか？」

ネロがヴィヴィオに頼んだ言葉はそれだけであった。自分が言った

こととどう違うのか理解し難いダンテは若干髭が伸びている顎を触りながら考える。

「…なんだ、まだ怒ってんのか？」

眉間にシワを寄せ、無言で立つネロを見たダンテは彼のしつこさに呆れていた。一年前も自分をしつこく追跡していたことを思い出すダンテだが、そんなことを言っている場合ではなかった。

「何してんだって、お前は言いたいんだろ。もう分かったから落착け」

ネロが右手に嵌めたグローブが音をたてたので、ダンテは彼が口を開くのよりも前に語る。

「俺が“魔具”を預けてたのは古い知り合いでな。分かるか？ 信頼してるから預けてたんだ。俺がお前を信頼して閻魔刀をやったみたいにな」

その言葉に顔を背け、ネロは息を吐き出す。いや、息が荒い。どうやら自分を落着かせるのに精一杯なのだろう。

「お前だって、あの嬢ちゃんを信じようとしたから、閻魔刀 預けようとしたんだろ？」

「…何で知ってる…」

「ここに来た日の夜に、部隊長の嬢ちゃんから聞いた」

その話も知っていたダンテから更に顔を背けるネロ。余計にバツが

悪いのだ。託されたものを渡そうとしたのだから。

「……あれ？ 違うのか？」

「……さあな」

ネロの真意はどうか分からないが、ダンテは「まあ、いいや」と言
って話を続けた。

「……とにかく、思ってたのよりも事態は最悪ってやつだな。スカリ
エッティの野郎が何 企んでるのは知らねえが、悪魔倒しながら
アイツをぶっ飛ばして、取られたもん取り返して、賞金でも貰って
帰ればいいだけの話だろ。あ、金は貰えても仕方ねえか」

饒舌なダンテは何処までも自分のペースを崩さないようだ。

「……魔具を普通の人間が“持つてる”だけなら問題はない。マズい
のは“使ってる”ことだ。俺達の世界の人間なら魔力を持ってない
から使いたくても使えないが、コッチのやつは魔力を持つてる人間
が多い……」

視線を落としているネロとは対照的に、ダンテは壁に寄りかかって
天井を見上げる。

「……下手したら、あの嬢ちゃん……」

「“魂”まで喰われるだろうな……」

…

話は終わり、互いに違う方向に廊下を歩くネロとダンテ。

——どうしてこんなトコに連れて来たのか分かるよな？

約二時間前… はやてや隊長陣、シャーリーに呼び出されたネロとダンテは、昨日の廃棄都市でデイエチが使っていた“ロストロギア”の件で呼び出された。理由はリベリオンと閻魔刀に非常に似たロストロギア反応が出ていたからだ。ネロは“もしや”と思ったが、ダンテが先に“さあ、よく分からねえな”と言って煙に巻いた。

——下手に喋ったら、俺とお前も剣 取り上げられて、仕舞いには捕まっちゃうかもよ。見ただろ、あの騒ぎよう

はやてが「かなり危険なロストロギア」と言ったせいでダンテも警戒し、“魔具”のことも、戦闘機人が使っていたのは、自分の物だと話さなかった。

——普通の人間が、あんなヤバいもん 手に入れられるワケねえだろ。俺が手に入れたのをトリッシュが“スパイダ”と一緒に持って行ったんだよ。あと、鉾山と森にあった地獄門に使われてた“魔具”もそうだ

「ちっ…」

（スカリエッティの野郎は…）

つまり、フォルトウナにあった三つの“擬似地獄門”の起動に使われていた魔具は、元々 ダンテの物だったのだ。ネロが「教団が手に入れたやつ」と言いかけたのをダンテは速攻で否定したのは言う

までもない。

（自分が何をしてるのか、分かってるのか…？）

（魔に魅入られし者… か…）

ネロもダンテも、戦闘機人^{サンバース}がスカリエッティの命令で動いているのは、もう聞かされている。

その事を踏まえながら、二人は不意に呟いていた。

「キリエ…」

（骨 折るぜ…）

「エンツォ…」

（無事でいろよ…）

ネロはキリエに帰るのが遅れていることを詫び、自分が戦う理由が何かを想いながら…

ダンテは“よく喋る双剣”が売られたのを思い出しながらも、質屋をしている友人の無事を祈っていた。“意識のある”魔具とは違い、極めて危険なパンドラをエンツォが売るはずがない。

もし、何かあったのだとしたら… ネロは怒りでヴィヴィオが立ち聞きしていたのに気付かなかったのだが、ダンテはその事が気がかりでヴィヴィオがいたのにも気付かなかった。

だが、今はどうしているのか知る方法はない。ただ、スカリエッティに辿り着くことを考えるしか…

——ネロ達が復帰して三日目——

「……たった三日だったけど、短いようで長かったな……」
【そうですね】

検査してどこも異常も見られなかったフェイトは、無事に退院し、六課に到着していた。今日 帰るといいうのはなのは達には既に話していることであるが、すっかり訛ってしまったように感じる体を動かす為に午後の教導訓練に出ようと考える彼女に、ある程度のシステム修正したバルディッシュが応えた。

「なのはとヴィヴィオの後見人にもなったワケだし…… あ、やってるやつてる」

実質 入院した翌日には歩けていたし、なのはとも連絡を取り合っていた。スバルがヴィヴィオに何か言ったらしく、ヴィヴィオは現在 なのはのことを“ママ”と呼んでいる。そして、フェイト自身もその後見人として“少しだけ”ママになったらしい。

「みんな〜」

早くなのはとヴィヴィオに元気な顔を直接 見せてあげようと思い、彼女が来たのは訓練場。

「あ、フェイトさん」

「お帰りなさい」

フェイトが戻ってきたので嬉しそうにしているエリオとキャロの近くにもスバルとティアナがいる。

「お帰り、フェイトちゃん」

何よりも、親友であるのは特にだろう。

「ただいま」

元より怪我は大したことなかったのだが、心配していただけに、戻って来てくれたのだから嬉しいのは当たり前だ。

「あ、ネロとダンテさんもおはようございます」

「ああ…」

「よう。また会えて俺も光栄だ」

木に凭れ掛かっているネロと、木の下で腕組みしているダンテは共に紺のトレーニングウェアを着ているが、今は訓練を見ているだけ。先ほどまでは何かしていたのだろうか、ネロの服には汗をかいた後と僅かばかりの汚れがある。

「あはは… それはどうも」

ダンテが余計なことを言ったので、またネロは苛ついて舌打ちし、顔を背ける。

フェイトはただ、乾いた笑みで返しながらも、ふとなのはを見た。

「ヴィヴィオは？」

「今 寮の方にいるよ。ザフィーラとアイナさんが面倒見てる」

なのはの返事を聞き、フェイトが「そっか…」 後で会いに行かない

とね」と言って笑む。

「19歳で母親… しかも、二人… か…」

「何だ、妬いてんのか？」

自分の故郷なら、絶対に有り得ないことだと思いながらもネロが言う
と、ダンテはワケが分からないことを言ったので、彼は怪訝そうな
顔になる。

「妬いてな… いや、意味が分からねえんだけど…」

つい、すっかり答えそうになってしまったものの、ネロは「コイツ
の考えていることは、本当に理解不能だ」と改めて思い知らされた
その時だった。

「ママ…」

遠くからヴィヴィオの声が聞こえたのは。

「ヴィヴィオ…」

「走ったら危ないよ、そのヘンは…」

ダンテが「噂をしてたら来たな」と言っていたのをネロが鬱陶しそ
うにしていた時だった。なのはが手を振り、フェイトが気を付ける
ようにと警告していたが…

「あ…」

ヴィヴィオが石に躓き、体勢を崩したのは。

…

「ね、まだなの？」

薄暗い部屋の中で、灯りとなるのは、悪魔が入っている巨大な試験管のような物から発せられるぼんやりとした黄色い光のみ。

「うつ、うるさいぞ！！ い、今 やってるんだ、静かにしろ！！
だだだ… だいたい、お前は何をしに来たんだ！！」

「暇つぶし」

白いノースリーブの服から露出した男の腕は、その体格と同様に逞しいものである。筋肉の量では、一見 ネロとダンテよりも上に見える。

そんな彼は、何かの研究をしているのだろう。同じく白の長いズボンと、白のノースリーブ。肩から肘の辺りまで腕に包帯を巻いて、白いローブを纏った女性が茶化してくるのを邪魔するなど言わんばかりで、苦虫を噛み潰したような顔になる。

「ウウ… ウリエル！！」

「なに？」

アグナス改め、ラファエルがどもりながらも声を上げると、ウリエルは右手を腰に当てたまま平然と聞き返した。

「わわ、私が何をしているのか知っているだろう！！ 邪魔をするな、でで… 出て行け！！」

ラファエルは、出入り口を指差し、一人きりにしろと言つと、ウリエルは口の端を吊り上げた。

「そんなこと言っただけ…」

邪悪な笑みを浮かべるウリエルからは、禍々しいオーラを立たせながらも、一歩ずつ踏み締めるようにラファエルに近づく。

「仕方ないじゃない。今日は誰も遊んでくれないんだもの…」

「ヒッ…！」

二人の距離は僅か2メートル程しかないが、改めてラファエル…いや、アグナスはウリエルの危険さを思い知る。

「この前の戦闘で、魔剣士の坊やに人形が6つも壊れちゃったんだし…？」

そこにいるのは、人の姿をした“悪魔”。

「“4番の子”に手を出すと“1番”がうるさいし…？」

造られた存在にして、純粹なまでに“破壊”を楽しもうとするもの。

「この前、あなたが止めてくれたのは感謝するけど… 相手してくれるの…？」

「ッッ！！！」

身長が2メートル近くあるアグナスに対し、ウリエルの身長はただか160センチ前後。体格差は大きい、威圧感、力共にウリエルの方が上であることを物語っていた。

「私と遊んでくれるなら嬉しいけど、今度はその程度じゃ済まないわよ」

そう言うと、ウリエルはアグナスの左手首に目を向けた。

「あの時と違って、私の力量なら知ってるでしょ？」

「くっ……！！」

アグナスはウリエルの視線に気付く、“生き返った日に負わされた火傷のある左手”を背中の方に回そうとするが、

「魔力を奪うくらいしか能のない“アルヒ”クラスのあなたなんか、簡単に灰に……」

剥き出した犬歯が、凶暴な獣のようであったことにアグナスは完全に気迫負けし、身動きが出来ないでいたが、語っていたウリエルも誰かの気配を感じ取り、後ろを振り向いた。

「ミカエル……！！」

そこには、金色の長髪の女性、ミカエルが立っていた。完全に気配を消し、すぐ振り向いた真後ろにいたことにウリエルは驚愕するが、

「…ッッ…!!?」

一瞬でミカエルはウリエルの首を掴み、締め上げながらも持ち上げる。

「ア…ッ… カッ…!!」

ブオンツ!!!

凄まじい風切り音をたてながらも投げ飛ばされるが、何とか体勢を立て直して着地したウリエルは、ただ立っているだけのミカエルを睨み付ける。

「彼には敬意を抜いなさいと言ったでしょ…?」

身長は180近くある女性、ブロンドのミカエルは、寡黙そうな雰囲気醸しながらも静かに口を開く。

「彼がいるから、私達は生まれた… 彼のお陰で私達は“大天使”になれた…」

まだ金縛りは続いているのか、アグナスは動くことも出来ずにいる。ただ、目を急かしく動かして目の前にいるミカエルと、彼女に圧されているウリエルを交互に見る。

「だから何よ!! そいつは“三番”…!!」

「それは“創造された”順位であって、階級ではないわ。それに、本来なら彼が第一の天使よ」

「階級なら“デュナメス”クラスの私が上…!!」

「私は更に上の“ドミニオン”クラスよ」

実力も魔力も、知略までも上であるミカエルに勝ち目はないと悟ったウリエルは、ただやり場のない怒りを残し、

「いい気にならないでよ…!」

と、捨て台詞だけを残し、その場を後にした。

「無事ですか？ ラファエル」

威圧感がなくなったことで、崩れるように倒れたアグナスに聞くミカエル。

乱れた呼吸を整え、ゆっくりと立ち上がるアグナスだが、彼はミカエルを警戒しているようだった。

「お、おおお… お前は…!」

凄まじいまでの力… 恐らくは、嘗て自分が戦った時のダンテ並みの力を持っているであろうミカエルからたじろぐように、吃音で喋りながらもアグナスは彼女を見た。

「紹介がまだでしたね。私はミカエル」

小さく一礼するミカエルの姿を、困惑した様子でアグナスはただ見詰める。

「あなたと同じ、神に仕える身です」

…

「…おにいちゃん…？」

石に躓いたヴィヴィオは、正面からモロに倒れかけていた。しかし、彼女は倒れていないし、無論怪我也負っていない。

「ネロさん、すごい！！今のどうやったんですか！？」

転びそうになったヴィヴィオの服を掴み、目を見開いているネロに興奮しているスバルが声を掛けたが、彼自身は何も返さないでいた。

「高速移動…」

（フェイト隊長とエリオみたいなソニックムーヴ…？）

「すごい速さだったね、エリオ君。今の見えた？」

「い…いや…」

つい先ほどまでネロがいた場所にいるダンテも、どうも驚いているようだった。目を丸くしているのだから。

転び掛けたヴィヴィオの動きを止めたネロに驚くティアナ。同じく驚きながらもエリオに聞くキャロと、速さが自慢でありながら、ネロの動きが全く見えなかったエリオも啞然としていた。

「速い…！」

ヴィヴィオが「ありがとう」と礼を言い、ネロは戸惑いながらも「怪我しなくてよかったな」と返す。

「もう、転ぶなよ」

「うん」

ネロが軌跡すら描かず、一瞬でヴィヴィオの所に辿り着いていたのにフェイトは驚いていたが、彼女となのはの所に向けて、またヴィヴィオは駆け出す。

「エア トリック…」

その光景を、フツと短く笑い、離れた位置で見ているのはダンテ。

（全く、どうなってんだろぅな…）

武者震いか、“脅威的”なまでの力に震えるのか。彼はただ、木の下で“青の魂”を持つ者から視線を移し、空を見上げた。

…

「主、査察の日が決まったそうですね」

「あゝ、シグナム… まあなあ…」

部隊長室にいるはやての元には、シグナムと、はやての補佐なのでリインがいるのは言うまでもない。

「前から決まっていたことですけど、急ですよ」

「いや、今週中つてのは知ってたんやけどな…」

シグナムの隣を浮遊するリインが不安げにしているのと同様に、はやてが溜め息混じりに窓から外を眺める。

「……明後日やて…」

フォワードメンバーが今から昼食なのだろう。皆で食堂に向かう後ろをネロとダンテが歩いている。

「まあ、ロツサから聞かんかったらヤバかったわ。色々と難癖つけられた上に、匿いきれるか分からなかったトコやし…」

上からは良く思われていない機動六課に、更に問題要素が増えていくのは今更だが、はやては深く深呼吸し、シグナムとリインの方を振り返った。

「…細かい話は、隊長陣のみんな 集めてからやな」

「はい」

「はいです!」

部隊長室を出ようとするはやてに続き、シグナムとリインが続いた。

「それと… 公開意見陳述会の日程も、この前 話した通りやで」

頭を掻きながらも軽く振り向くはやてと…

「四日後です」

ウリエルの時とは対照的に、アグナスには敬語で話すミカエル。

「予定よりも早まったみたいやけど、最終決定やそうや。その通達も兼ねての査察やて」

「“審判の時”が迫っています。創造主 スカリエッティの為に、あなたもご協力お願いします」

はやてがシグナムとリインに話し、ミカエルはラファエルことアグナスに話している。

戦いの時が、再び迫る中でダンテは…

「…!?!」

ハッ！と、遠くにある陸上本部の方を見た。

「どうした？」

「……いや……」

リベリオンが目立って仕方ないとはやてに言われていたことを愚痴るダンテが歩を止めたので、ネロも止まり、彼に問うた。

「…何でもない」

ダンテは「気のせいかな？」と思いつつも、またネロと他愛のない話

をしだした。

「……でよう？ 何とか出来ないのかとか言いやがるんだよ。どう思う？ そんなに言うなら、ギターケースでもくねってもんだよね」

Section:11 Holiday 狩人の休日 (後書き)

次回予告の代わりに、休憩時間の風景

talking:共通者達の集い

エリオ「ネロさん、お疲れ様です」

ネロ「よお…」

エリオ「あれ？ どうかなさったんです… あ… バイクですか？」

ネロ「あの野郎… 予定だったら、“バイクを乱暴に下ろす”って設定だったのに、アクシデントのやつを本編に使いやがった…!!」

エリオ「まあまあ…」

フェイト「あれ？ みんなで食べてるの？」

キャロ「エリオ君、その席 いい？」

エリオ「あ、フェイトさん。キャロもお疲れ」

フェイト「ネロ、お疲…」

キャロ『どうしたの？』

エリオ『監督とダンテさんに怒ってるんだと思うよ』

フェイト「いや、ちょ…すごい目つきになってる…」

ヴィヴィオ「フェイトママ」

フェイト「あ、ヴィヴィオ。どうしたの？」

ヴィヴィオ「なのはママが、いま“うちあわせ”してるから、フェイトママといっしょにごはん食べてって」

フェイト「ああ、なるほど… 何処行くの？」

ネロ「ちよつとな…」

エリオ「ネロさん…？」

キャロ「それって…」

ネロ「素振りでもしてくる…」

フェイト「いや、それは鉄パイプ…」

ヴィヴィオ「ママ、“すぶり”ってなに？」

ネロ「監督^{バカ}の頭をボールに見たてて…」

フェイト「ネロ、待つ…!!」

エリオ「キャロー!!」

キャロ「アルケミック・チェーン！」

エリオ「逃げたー!!」

キャロ「フリード……!　っは、いないんだっ……」

ゴッ……!

ヴィヴィオ「ママ、いまのおと　な　に　〜?」

フェイト「そうだね……　計画性のない人が頭　冷やされた音かな。
でも、懲りないし、反省もしないんだろっ……」

S e c t i o n : 1 2 } T h e T i m e H a s C o m e 来たるべき時

その者を突き動かすのは、使命か、責任か。約束か、想いか。

「こんな時に…」

「こんな時だからでしょ」

歯を食い縛るスバルの隣には、同じ状況下で冷静さを保とうとしながらもクロスミラージュを両手に構えるティアナがいた。

「分かって…」

「ハアッ！！！」

嫌にもなりそうな事態の中、スバルは返そうとしたが、その瞬間に炎で形成された刃が二人を襲う。

「…っ！」

「散って！！」

彼女達の周りにも、地上部隊の陸士と魔導士を合わせた人間は数十人体勢でいた。

今日は“公開意見陳述会”当日… その日である。

「矮小な人間共よ、己が築いた“牙城”と共に消えるがいい！！！」

「マズい！！ あれ！！！」

炎の翼で宙に浮かぶベリアルは、自身の体に膨大な魔力を充填し始める。見覚えのあるベリアルの行動に、ティアナは周りの武装隊の魔導士に警告を促そうとした。

「死ね！！！」

大気を焼きながら、周囲の気温を一気に上昇させるベリアルが吠えた。

回避行動も間に合わず、防壁魔法を使っても防ぎきれるか分からない。そう思案したスバルとティアナ… その周りにいる人間達も同じだった。

ドッ…！！

赤い閃光が一閃。ベリアルの翼を貫く。

（え…）

「あの光…」

目の前で起こったことに目を見開くティアナ。一瞬 頭が追い付かなかったが、翼を無くし、巨体を揺らめかせながら地上20メートルの位置から落下し始める。

「ガアアッ！！？」

時間差で痛みがベリアルの体にも駆け巡る。自身の魔力で作り出した翼だけに、それを無くしたことがダメージとなってベリアルを襲っているのだろう。

「みんな離れて！！」

落下地点にいる魔導士にそこから離れるように言いながらも、ティアナは空を見上げた。

「…貴様…！」

そこには、ベリアルの中に乗っている人間が一人。

燃えるような赤と、闇の剣士の血を受け継ぐ黒で構成された服装の男がいた。

「もう一回 地獄に送ってやるぜ」

その男は、“一年前”と同じく、ベリアル在眉間に向けて銃口を向け…発砲した。

「あの…」

「全員下がらせる。直ぐにだ…！」

同じく闇の剣士の血を受け継ぎ、青み掛かった黒のコートを揺らめかせる男は、地上本部の入り口を塞ぐように佇む大魔を睨み付けながらも、銀の銃を構える。

「オオオオオーーーーッッ！！！」

「ちっ…！」

（コイツがダンテが言ってた悪魔か…）

後ろにいるエリオとキャロを庇いながらも、悪魔の遠吠えと共に吐き出される氷塊を縦に並んだ銃口から射出された二発の魔力弾で打

ち砕いた。

「シャアアッ！！」

「グルルルッ！！」

他にもある二つの頭からは、獰猛な獣の如く牙を剥き出す。

（何だ… あの“鎖”…？）

「ネロさん！！」

「私達、隊長に渡し物が…！」

氷結の番人^{ケルベロス}の首や前脚に捲かれた鎖は、どこか不快感を感じさせる魔力を纏っていた。一人思案するネロだが、彼の後ろにいるエリオの手には、待機状態のバルディッシュがある。

「何でそれ、持ってたんだよ」

「いや、中には持っていけないから…」

「フェイトさんから預かったんですが… スバルさんもレイジングハートを預かってます」

つまらない規則だとネロは思いながらも、つい溜め息を吐いてしまい二人を見る。

「確か… スバル達の方にダンテがいると思うから、そっちに行け」

「アアッ！！」

「ネロさ…！」

ブルーローズを握る左手を腰に当てながらも、長い袖と黒いグローブで隠した“右手”の親指で少し離れた地点… 今いる場所とは反対側の、地上本部の正面玄関の方をネロは指差した。

彼の間を突いたようにケルベロスは氷塊を吐き出すが、ネロは即座にレッドクイーンを背中から引き抜き、それを真つ二つに斬り裂く。

「行け！！」

他にいる魔導士に被害がなかったことを確認しながらも、ネロは振り返り、言った。

「ダンテさん…」

「その“デバイス”…！」

一方でダンテは、二丁の黒い大型拳銃を携え、うずくまるベリアルを見据えていた。

彼が駆けつけたことに安堵しつつ、悪魔を警戒しながらスバルとテIANAは声を掛ける。

だが…

「ガアアアッ！！ いい気になるなよ、逆賊風情が！！」

右手で顔を押さえていたベリアルの怒号が、その感情に比例しつつも炎を燃え上がらせる。

「あの時とは違う!!」

油断はもうしない。ベリアル溶解した額の部分は、蠢きつつ高速で再生された。

「治った!？」

「そんな…!」

しかも、以前戦った時とも、先程までとも明らかに様子が違う。何かが違うベリアルに焦りを感じながらも、二人は構えた。それと同様に武装隊の人達も距離を取り始め、杖型のデバイスを構える。

「違う、ねえ…」

確かにどこか違う。その事はダンテにも分かっていた。魔力の大きさも、何かの“違和感”をひしひしと肌で感じる。

「じゃあ、見させてもらおうじゃねえか」

「ダンテさん!？」

そう言うと、ダンテは毛皮のような物で包まれていたりベリオンの柄に手を掛けた。取り払った白い毛皮をマフラーのように首に巻き付けると、彼はその《反逆の大剣》の切っ先をベリアルに向ける。

（相手を認めさせるか… 或いは…）

「巨大な力でねじ伏せる… か…」

ネロは、一向に言葉を発さずに唸り続けるケルベロスとどう戦うか

頭を捻りながらも剣を肩に担ぐ。

「「ああああっ！！！」」

炎と氷の“最上級悪魔”に向けて飛び込む二人の脳裏には、“数日前の記憶”が甦っていた…

——遡ること二日前、退院して5日目のこと——

【Get up you know the worst♪】

「ったく、お前やり過ぎだろ。あれ？」

「うるせえな… あつちが悪いんだよ、あつちが」

【Fed up fearless light now♪】

ドラムを叩くダンテと、ギターを轢くネロの二人は、つい先ほどのことで会話している。

【迫り来る衝撃へと♪】

「まあ、流石に出し過ぎたか？」

「あんたがスロットなんかやろうって言い出すからだろ」

【君、にも、流れ込む♪】

説明しよう。この日は地上本部から査察が来るので、ダンテとネロ

の二人は…

【永遠に沈むような　錯覚に抱かれゝて♪】

「…っか、子供を人質にすんなよな…」

【どこ〜まで〜♪】

いや、ヴィヴィオの三人は六課を出て街に来ていた。因みに現在はゲームセンター。

はやてから貰った金額は、そこいらの子供の小遣い程度だったし、ダントの欲しかったリベリオンを隠す為のギターケースが思いの外高かったので、アミューズメント施設で金を倍に増やす計画をダントが思いついたのが一時間前。

「お前、俺が止めなかったら“年少”入りは確定だったぞ」

【正、気で、いられるのか〜♪】

ダントがギャンブルでスリにスリまくったのが30分前。

「そうかよ…」

【Drink it drink it down〜♪】

ネロが常人離れたした動体視力でスロットに挑戦し、コイン一枚で元の金額から十倍以上にしたのが15分前。

（昔なら、あんなのいつもやってたさ…）

【Drink it drink it down♪】

そして、営業側破産にまで追い込むほどネロがコインを出しまくってしまい、店裏に呼び出されてしまうものの、ダンテが店側の人間をねじ伏せたのが5分前。見ていただだけのネロとヴィヴィオだが、そのヴィヴィオを人質に取った人間をキレたネロが一方的にボコボコにしたのが4分前である。

「おにいちゃん、おじちゃん、すごいね。さっきのどうやったの？」

スロットを当てまくったことが、バク宙しながら蹴りを二発喰らわせたことを聞いているのか。いや、今の演奏のことだろう。それしかない。

「ガキの頃に暇つぶしで読んだ本から勉強したんだよ」

ネロは適当に返し、ヴィヴィオの頭に左手を乗せる。

「スロットはやるなよ。俺も昔、やったんだけどさ？ さっきのみたいになったから、それ以来やってなかったのによ」

「じゃあ、行こうなんて言うなよ。俺も昔、金 巻き上げまくったから、キリエに“ポーカーは禁止”って言われてたから、外界でゲーセン見かけても我慢してたのに…」

騒ぎを聞きつけて誰か来る前に路地裏から逃げた三人が逃げ込んだのが、このゲームセンターである。

「おにんぎょさん」

「欲しいのがあるのか？」

「俺に任せな！ 一発で決めてやる！」

クレーンゲームから見える人形に見惚れるヴィヴィオが指さしていたので、ダンテが取ってやろうとする後ろに数人の人影があった。

「どうする……」

「行くか？」

「いや、無理だろ……」

自販機の影からネロとダンテを見る5人ほどのガラの悪い若者たち。再び説明しよう。彼らの内の3人はこの時より6日前にエリオとキヤロに絡んできたチンピラである。

「でも、5人いるんだから……」

「見ただろ、さっきの……絶対に勝てる気がしねえって……」

アミューズメント施設でダンテを見つけたはいいものの、その後のことも目撃していたので、絡めない。もしヴィヴィオに手を出したら、顔面整形コースは確定する。

「って言うか、あのオッサン……ガキと孫もいんのかよ……」

「ヤベッ……こっち見た……」

ネロがヴィヴィオの為にクレーンをやっているが、その隣にいるダンはチンピラ達がいる方向を見て、言う。

「誰が子持ちで、孫連れだつて？」

その瞬間にチンピラ集団は顔面蒼白で逃げ出したのは言うまでもない。

「あいつら知り合いか？」

「いや、知らねえな」

クドいようだが、ネロとダンの服装は普通の服であり、はやてが貸してくれたものだ。

「早く行こうぜ。ギターケース買うんだろ？ 俺もワックス欲しいし」

はやてが貸してくれた理由は、ザフィーラの為に買った服を持て余していたからである。

「いや、金はたっぷりあるから服も買うか。嬢ちゃんが貸してくれた服、お前は丁度いいみたいだけど、俺は微妙に小さいんだよ。見るよ、この丈」

…

「スバルさん!!」

「エリオ！ キャロ！」

崩れた瓦礫を盾にしているスバルとティアナの元にエリオとキャロが駆け寄るように滑り込み、ベリアルと戦っているダンテを見る。

「ネロさんのことは、さっき話した通りです」

「私達も早く隊長達に届けないと……」

自分達が戦っていた悪魔をネロに任せたことは既に念話で話している。今の自分達に出来ることをやろうと思いつつ、ティアナは聳え立つ地上本部に目を向けた。

「ほら、どうした！？ 遅せえぞ！」

「ほざけ！！」

手を叩きながら挑発するダンテは、地面から噴き出す火柱を軽やかに、踊るようにかわし、そのターンを踏む度に魔力弾を撃ち出す。

「ヴィータ副隊長とギン姉は合流したみたいだし、あたし達も頑張ろう！！」

「はい！」

「キユク」

リボルバーナックルから取り出したカートリッジを新たに装填し、

吹き荒れる火の粉を払いながら言うスバルに返すエリオとフリード。

「援護するわよ!! 急いで!!」

瓦礫が持ち堪えれそうになく、ぐらつき始めたことから、ティアナの指示に従い、皆が準備を始めた。

「…流石に、このままじゃキツいか…」

「ウオオオオー……ッッ!!」

レッドクイーンを杖代わりにして立ち上がるネロは、血が混じった唾を吐き出しながらもケルベロスを見据える。

「ったく… 下がれて言っただから、下がれよ…」

彼は未だに隠した右手を頭に当てながらも、ケルベロスの攻撃から守った魔導士に小言を漏らす。

「おい、君…!」

「なんだよ?」

「血が…!」

戦っていて分かったこととして、ケルベロスの三つある頭の内、青目は氷塊を吐き出し、赤目は吐息と共に冷氣を吐き、緑目が遠吠えすることで周囲の氷が崩れながらツララとなって襲う。他にも頭突きだの、引つ掻きもあるが、ここから離れる気はないらしい。いい加減に右腕を隠すような意地を張っている場合ではないと、ネ

口は思っていたが、すぐ後ろにいる魔導士が彼に声を掛けた。

「ああ、これか…」

頭から出血した血がグローブに付着していたことでネロは納得した。
“人間の力”で戦っていた自分は、彼らを守りながら戦っている内に負傷したのだと。

「気にするな。いつものことだ」

（そろそろ、マジでやるか…）

離れた位置からケルベロスを攻撃する魔導士達がいるが、纏った氷が鎧の役割をしているのだろう。全く効いていない。

（言葉も喋れないみたいだし…）

「本当にどうなってんだろうな…」

ダンテから聞いた話とケルベロスが全く違うことに苦笑するネロ。
ケルベロスはプライドが高い悪魔であり、無論 人語も解する。何よりの違いは“鎖”の存在だ。ダンテと会った時には、鎖が門に繋がっていたらしいが、いまは体中に巻きついている。

（とにかく、今は…）

やることをやるしかない。ネロは再び剣を構え、ケルベロスと向き合った。

「来いよ、犬ッコロ。遊んでやる」

「オオオオオオッ！！！」

犬呼ばわりされたことが気に食わないのか、ケルベロスは雄叫びと共に氷塊を吐き出す。

（乗ってきたな…）

その攻撃が迫る中で、ネロは一気に駆け出した。第一の氷塊を剣で叩き割り、右手で握るブルーローズで牽制しながらも距離を詰める。引つ掻きも予測の内。その攻撃も一気に跳躍してかわす。

「オオッ！！」

大剣を振りかぶるネロを飲み込まんばかりに緑目の頭が大きく口を開けた。その口の中には凶暴な獣の牙が。

「グルッ！？」

だが、閉じた口からは牙同士がぶつかり合う音しか響かない。緑目の頭には、何が起きたのか分かっていないが、他の二頭の頭と、離れた位置にいる魔導士には分かった。

「そんな簡単に食われるかよ…！」

エア ハイクで更に跳んだネロがレッドクイーンを振りかぶったまま、剣の刀身が真っ赤になるまでイクシードを蓄積させていることに。

「貴様…！ 戦う気があるのか…！」

そして、ベリアルと対峙するダンテは、飛んでくる魔力弾を鬱陶し

い虫のように振り払いながらも叫ぶ。

「あるに決まってるんだろ」

彼は相変わらずふざけた調子でいながらも、両手の拳銃を指先で弄んでいた。

「ならば、何故 剣を使わん!!」

確かに、剣を使えばダンテなら簡単にカタが着くだろう。だが、彼がリベリオンを使ったのは一度きり。自分に… いや、地上本部に向けて飛ばされた火球を叩き落とした時だけだ。

「こつちにも、それなりの事情があつてな…」

ダンテは、先ほどからだただ銃を撃っているだけ。しかし、カートリッジが一発も排莢していないことから、彼自身の魔力のみでやっているのだろう。既に百発… いや、数百発以上は撃っているにも関わらず、息切れ一つしていないことから、単調なチャージショットを無制限に撃てることも納得がいく。

「…っ!」

だが、いくら魔力弾を撃ったところでベリアルには炎の鎧があるから効いていない。

今まで銃を回していたダンテだが、急にそれを止め、ジャケットから覗く腰のホルスターに納め、背負う大剣の柄に手を掛けた。

「ほう… 漸くやる気になったか…」

「いや、ちょっと違うな」

再びリベリオンの刃に巻きつけていた毛皮をマフラーのように首に巻くダントは、少し残念そうな顔をしながら、リベリオンを逆手で持つ。

「…事情が変わったってただだ…！」

バチッ！！

腰を落とし、リベリオンに魔力を込めるダント。剣の刀身には、膨大な魔力が駆け巡り、納まりきらない魔力が電流のように地面にまで迸る。

「ドライブ Drive！！」

地を走る衝撃波は、ベリアル目掛けて一直線に突っ走った。

「フンッ！！」

だが、ベリアルは四脚で跳躍。再び炎の翼を展開して空に舞い上がる。

「One , two！！」

「戯けが！！ その技は、以前にも見たぞ！！」

立て続けに飛ばされた斬撃もかわし、大剣で防いだベリアルは滑稽だと言うように嘲笑う。
だが、

「こっからだぜ…?」

ダンテの攻撃は終わりではなかった。斬撃を三発飛ばした勢いを持続させたまま、左足を軸にして体を一回転。

「あの時と同じなんて、俺は言っていないんだからな!!」

ダンテはまた剣を振るった。それも、先ほどよりも速く、しかも強力な魔力を込めて。

「C a s i n o カジノドライブ D r i v e ! !」

「なにっ…!!? ぐおっ!!」

自分に飛んでくる真紅の衝撃波から身を守るべく、ベリアルは地面から火柱を立たせる。しかし、その程度の障壁など意味はない。壁を突き抜き、無数の衝撃波がベリアルの体を掠め、

「チィ!!」

かわし様がないことから大剣でガードする。

（我は… スパーダの血族に“四度”も敗れると言うのか…!）

間髪入れずに打ち込んでくるダンテのドライブに、ベリアルの魔力は弱まり始めていた。証拠に体に纏う炎も、背中の翼も小さくなり、高度が低くなっている。

（バカな…!）

「グルル…！」

剥き出した牙を食い縛り、先を見据えるベリアル。

（そのようなことが…）

「有り得るはずがない…！」

火柱ごと衝撃波^{ドライヴ}を切り裂いたベリアルは、怒りで魔力を高め、獣のように唸り声を上げた。

「どうした、ダンテ…！ その程度か…？」

猛攻が嘘のように止んでいたことから、ベリアルはらしくなくダンテを挑発する。

「魔帝を倒したようだが、我も倒せぬようでは、貴様も…！」

地上を見たベリアルが目映ったのは、燃える悪魔を見上げるスバルや、その他の魔導士達。ダンテの姿はなかった。

（奴は何処に…！？）

ターゲットのダンテの姿がないことから、ベリアルは一瞬 狼狽した。だが、ハッとして上空を見る。

そこを見たのは反射的なもの。凄まじい殺気を隠しながらも、内に秘めた潜在能力の片鱗を微かに窺わせる、狩人が。

「貴様…！！」

ピッ…！

吠えようとしたベリアル。

しかし、彼が喋り終わる前に、ダンテの一閃。大剣にも関わらず、研ぎ澄まされた魔力によってベリアルの体を頭から足まで断ち斬る。

「ガッ…」

ヒュンッ!!

顔を半分無くし、右腕と胸しか残っていないベリアルはもがきながらもダンテに手を延ばすが、彼は目もくれないまま、剣に付着した血を… いや、マグマのような血は付いていない。真紅の魔力を振り払い、ゆっくりと背負う。

「…さっき聞いたな。この程度かって…？」

振り返らないまま歩き出すダンテの首に巻いた毛皮が風に靡く。その姿は、まるで圧倒的な力で他をねじ伏せた銀狼のよう。

「……この程度… って言いたいが…」

そこで止まり、ダンテは軽く振り向いた。

「……まだ、こんなもんじゃないぜ…！」

「……！」

口の端を僅かに吊り上げるダンテの姿が、巨大な二本角を生やした“漆黒の悪魔”の姿と重なる。

（魔剣士… スパーダ…！！）

体がひび割れ、崩れゆく中で、ベリアルのは微かにそう動いた。彼はスパーダに会ったことがあるわけではない。少なくとも直接は

（何故… 人間などの為に…）

二千年前、当時のベリアルは下級悪魔に分類されるような存在だった。魔帝に仕えていたとはいえ、“目の前を通り過ぎる”スパーダ… 当時、魔帝の右腕として動いていた彼に面を上げることが許されていなかった。

（我は…）

嘗てのベリアルは、スパーダのようになりたいと憧れていた。それは他の悪魔も同様である。しかし、スパーダは裏切り、人間の為に戦った。悪魔騎士トップの座も、魔帝の側近という肩書きも捨てて何故 スパーダが正義に目覚めたのか。誰も知るものはいない。いや、いたとしても、ベリアルに“愛”というものは理解出来ないだろう。

（あれは錯覚か…？）

面を上げることが許されなかったのなら、ベリアルはスパーダの姿を知りはしない。だが、何故 先ほどダンテの姿がスパーダと重なったのか。上官の悪魔からスパーダの話を聞いていたからか。いや、違う。

（我には… 悪魔にはない、“何か”か…）

その“何か”をスパイダが持ち合わせていたからこそ、ダンテの姿がスパイダの姿に見えたのだろうか。気付いた頃には、ベリアルのは体は土塊へと変わり、無に返り始めていた。

…

「あの野郎… 本当に半魔か…？」
(加減ってモンを知らねえのかよ…)

びしょ濡れの上着を絞りながら歩くネロだが、遠くの方は何やら賑やかである。見れば、いつもよりも人が多い。

「あ、ネロさん 戻ってきた」

やたらと人がいる中で、ネロの存在に気付いたスバルが手を振っているが、彼は耳の中に入った“海水”を出そうと、上着を右肩に掛けたまま頭を振る。

「大変でした？」

「どれが大変だったって聞いているんだ？」

今度は反対の耳に入った海水を出そうとしながらも、ネロは怪訝そうなる顔になる。

「全部だろ。大変だったろ、坊や」

「あんたのせいだな…」

他人事のように笑うダンテに、苛立つネロは舌打ちする。

「2マイルは泳いだぞ…」

思い出ただけで嫌になるネロは頭を切り替え、賑やかなメンツに目を向けた。

「今日は多いな… 知ってる顔と、知らない顔がいる…」

「あ、ネロさんは“ダンテさんに吹っ飛ばされてた”からまだでしたね」

青く長い髪の少女と、眼鏡をかけている女性… と言っても、小柄な人物を見たネロに向けて、スバルは容赦なく先ほどのことを突きつける。

「もう会ってるから知ってますよね。あたしのお姉ちゃんのギン姉と、あっちが技官のマリーさん」

「宜しく願います」

ギンガが敬礼しながら挨拶して来るのはスルーして、ネロは「もう会っただろ」と冷ややかに返す。

「面と向かって会うのは始めてだね。よろしく」

服を乾かそうとバタバタと振るっていたネロだが、すぐ前にいるマリエルを見て止まる。

「…年下？」

「いえ、ネロさん…　って言うか、なのはさんより年上です」

外見から年齢が分かりにくいことから、ネロが言ったことを何とも言えない顔で返すスバル。

「うわ、この子　噂通りだね」

「マリーさん…！」

「良くない噂だろ。だいたい予想はつくよ」

顔をヒクつかせるマリエルの機嫌を直そうとギンガが相手をしているが、ネロは服が簡単に乾くワケがないと実感し、着はじめる。

「普段は静かだけど、トゲのあること言ったり、皮肉言ったりするってギンガが」

「私、そこまで言ってますよ！！」

二人のやり取りは無視して、ネロはダンテのいる場所に向けて歩き出す。

「よう。魚のエサになんなくて良かったな」

「言つとけよ」

「お前、いいの見逃したな。嬢ちゃんが二人でキャットファイトしてたのに」

「いや、そんなのじゃありませんよ!!」

ネロを吹っ飛ばした張本人ダンテが変なことを言ったので、ティアナは何を言うのかと焦りながら訂正した。

「ティア、キャットファイトって、なに？」

「あんた知らないの!? いや、知らなくていいんだけど…」

「簡単に言えば、女同士の殴り合い…」

「ダンテさん、教えないで下さい!! ちびっ子二人にヴィヴィオもいますから!!」

少し離れた位置で「だって。エリオ君」とにこやかに言うキャロと、やるせない顔になっているエリオ。いらぬ知識を得たヴィヴィオが案の定、なのはとフェイトに聞いていた。

「ハハ…」

泳いでいる途中に、二つのウイングロードの上で凄まじいぶつかり合いが行われているのを見えていた。

結果はギンガが勝つたらしいが、スバルと同様に自分もダンテに組み手で“また”負けてしまったことも踏まえ、つい笑ってしまうネロだが、その世界が揺れ、微かに声が聞こえる。

『…しっ…かり…して…!!』

聞き覚えのある声だった。そう、つい先日聞いた声。

「うつ…！」

その瞬間に、ネロは頭を押さえた。

「つつ…！？」

「あ、良かった…」

目を覚ましたネロがいるのは、つい先ほどまでいた“三日前の、退院して4日目の場所”ではない。地面が凍りつき、獣の唸り声が聞こえる地上本部の裏である。

「もう、どうなったかと思いましたよ。急に気絶するから… どうかしました？」

向こうでヴィータがケルベロスと戦っているが、そちらと傍にいるギンガを交互に見るネロは、

「…17歳には見えないな、やっぱり」

そう言った。

「……起きた第一声がそれって… って言うか、それ 前に聞いてるんですけど…」

「助けられたみたいだな。ありがとよ」

六課に出向した三日前に言われたのと、また同じことを言われたギンガはどう返そうか考えるが、今はそれ所ではないので後回しにし、

彼女も立ち上がる。

「いや、寧ろ助けられたのは私達の方ですから」

ネロが右手のスナップを利かせ、握っては開くの繰り返しを行う姿をギンガはただ見惚れる。

「助けた？ 俺が？」

「あ、はい。それに気を失ったのも、ついさっきですし」

（そっか…）

露わになっている《悪魔の右腕》からボウツ！と光を放ち、拳を固く握るネロは、近くに転がっている氷塊を見て、自分が何をしたのか思い出した。

——くそっ…！

フルスロットルまで達したイクシードでさえケルベロスの強固な氷鎧にヒビを入れるのが限界なことにネロは顔を険しくする。

——いや…

まだ、諦めるのは早い。諦めることなど、自分はしない。

——まだだ！！

更に柄を捻り、燃燒機関は轟音を発する。その瞬間、必殺の剣による勢いのままにネロの体は空中で一回転し、地面に着地した。

——！！！！

後方に飛び、頭を叩き斬られた一頭をネロは見上げる。もかくケルベロスの姿に、負傷して動けない者や、まだ残っていた魔導士達は歓声を上げた。しかし、その声もすぐに止んでしまう。

——おい……

切断面に氷が密集し、倒した筈の一頭が目を光らせたのだから。

——マジかよ……？

打つ手がないことに、ネロは顔を引き吊らせたが、微かな音が聞こえた。

——ガアアッ！！？

突如として、ケルベロスの一頭の側頭部に赤い魔力を纏った巨大な鉄球が直撃。氷結の番人がある方向を睨む。

——グルッ……！

——うりゃああああああっ！！！！

唸るケルベロスに向けて、ヴィータがグラーファイゼンを振り抜く支援が来たことにネロは小さく自嘲気味に笑うが、そんな彼の前にもう一人がやって来た。

——下がって下さい、ここは私とヴィータ副隊長が……！

——コイツ、どうなってんだよ！！

ネロと他の魔導士に言っているのであろうギンガがりボルバーナツクルを構え、氷ごと頭を粉碎しても再生するケルベロスに舌打ちした後に叫ぶヴィータ。

（そうだったな…）

ネロは、自分の所にギンガとヴィータが助けに来たことを思い返しながらも、巨大に氷塊に手を当てている。

——しまっ…！

渾身のギガントハンマーをケルベロスは頭突きで迎え撃ち、跳ね退けられたヴィータがやや無防備な態勢… 背中を曝してしまい、彼女に向けて氷息が吐き出された。

直撃は避けれたものの、彼女の右足が凍りつき、氷が壁と繋がっている為、身動きが取れない。

その彼女目掛けてケルベロスが大口を開け、食らいつこうとした瞬間だった。

——え…

ケルベロスの頭が一つ、跳ね飛んだのは。

——なっ…？ うおあっ！？

ケルベロスの真下にあった青い閃光が瞬時に彼女の所に辿り着き、氷を砕いてギンガがいる所まで下がる。

——お前…

——ぐっ…！

ヴィータが何か言おうとしたが、上着の右袖を捲り上げて“悪魔の右腕”を露わにしたネロがうずくまり、握っていた閻魔刀が光を放ちながら消え行く。

——やっぱり、“一瞬”が限界か…！

バチッ…！

——おい…！

ネロが不意に言っていたが、右腕に青い電流が走り、気を失ってしまった。ヴィータがグラーフアイゼンを構えたまま倒れている彼を見るが、怒りに打ち震えるケルベロスと再度対峙する。

——ちっ…！　おい、ギンガ。お前　そいつ下げる！

——ヴィータ副隊長…！

これがネロが意識を取り戻す１０秒ほど前。今より１０数秒前のことである。

「……分かった…」

自分で跳ね飛ばしたケルベロスの頭に手を当てていたネロは、呟くように言う。

「後は任せろ」

彼がまるで“ケルベロスの頭”と会話していたかのようなだったが、突如としてその緑目の頭が眩い光を放ち出す。

「あなた… 今 何を…？」

“ケルベロスの頭”が悪魔の右腕に吸収されたようにギンガには…

その他にもいる魔導士達には見えた。

彼は、周りの人間の目を気にしていないのか。それとも割り切ったのか。強い光を放つ右腕の感触を確かめるように固く拳を握り締める。

「俺が…」

ゴウッ！

右腕から漏れ出し、ぼんやりとした青白い魔力が炎のように揺らめく。ネロが、その右腕を凍りついた壁に押し当てると、

「…解放してやる…！！」

「シャアアッ！！！！」

辺り一面の氷が溶け始めた。

その事態に二頭しかないケルベロスは動きを止め、ヴィータからネロに狙いを変える。

「お前… 何した！？」

ヴィータもケルベロスと距離を取ったまま、レッドクイーンを背中から引き抜くネロの姿を見た。

『どうやら…“氷結を操る力”と、“炎熱による力”を一緒に使っているみたいです』

「なっ！？ そんなのアリかよ！！　って言うか、あいつ　そんなの出来んのかよ？」

今更だが、駆けつけた時からリインとヴィータはユニゾンしている。そんな彼女は、ネロがそんな力を使ったのかと憤慨するように思い、崩れて行く壁の氷塊に気を取られたが…

「え…」

それは一瞬。振り返ったヴィータの前を、跳ね飛ばされたケルベロスの二頭が舞っていた。

…

「さて、行くか」

毛皮にリベリオンに巻きつけないまま、スバル達の前にいるダンテはそびえ立つ地上本部を見上げる。

「行くって…」

「決まってるんだろ？」

エリオが何処に行くのか聞こうとしたが、彼が喋り終わるよりも前にダンテは不敵に笑ってみせる。

「隊長の姉ちゃんに“それ”、届けにだよ」

ダンテが顎で指す先には、スバルが持っているレイジングハート。エリオが持っているバルディッシュがある。

「あの…」

どうして、なのはとフェイトから預かっているのを知っているのかはさて置き、四人と一匹には色々とダンテに聞きたいことがあった。ベリアルが言っていたこともそうだが、あのベリアルを倒したものである。

エリオがまだ何か言いたかったが、ダンテは彼を肩に担ぎ…

「えっ、ちょ… ダンテさん？」

スバルを脇に抱えた。

「隊長の姉ちゃんはどこにいるか分かるか？」

「えっと… 確か…」

悪魔の数が増え、ガジェットも多くなっているのでAMFも濃くなっている。先ほどからうまく魔力結合することが出来ないが、なのはとフェイトがいる場所をエリオがダンテに伝えると…

「了解だ…！」

一瞬でその姿が消えた。

〈影の風景〉

Talking: 出番のない人達

カリム「陳述会があるから呼ばれたけど、本当に出番がないわね」

シャツハ「そうですね…」

アルト「…出番欲しいな…」

ルキノ「だね…」

シャーリー「いや、地上本部がすごいことになってるから!! ち
ゃんとやってよ、二人とも!!」

ヴァイス「ダンナとアンチャン、どうしてっかな…」

グリフィス「あー… 僕、本当に嫌なキャラ… カメラ回ってる!
?」

シャマル「みんな、大丈夫かしら…」

ザフィーラ「二人も向かったことだ。信じるしかあるまい…」

ヴィヴィオ「わんわん…」

キャラクター設定と特典映像（前書き）

いや、すみませんね。本当に。
無駄に描いちゃって。

キャラクター設定と特典映像

【キャラクター設定】

「ネロ」

CV：森田成一

身長：186センチ

体重：78キロ

年齢：17歳

出身地：第97管理外世界の平行世界 欧州北西地区イギリス国領
内部“城塞都市フォルトゥナ”

デバイス：レッドクイーン、ブルーローズ

使用武器：悪魔の右腕、閻魔刀（質量兵器）

推定魔力値：A A相当（通常時）

推定戦闘能力：陸戦A A A

座右の銘は「唯我独尊」

デビルハンター歴1年

両利き（昔は右利きだったが、悪魔化した右腕を隠していた1ヶ月の間に左手も使えるように特訓した）

髪質は白が強い銀髪。

戦闘スタイルは剣術と体術を合わせたもので、《悪魔の右腕》から繰り出される拳は驚異的。銃はあくまでも遠距離戦と補助に使う。戦闘能力はダンテより下だが、感情に比例して魔力が爆発的に上昇し、その場合はダンテすらも上回るほど。

元“魔剣教団”所属の教団騎士。現在は悪魔狩りを専門とする便利屋を営んでいたようだが、レリックの次元転移によってミッドチル

ダにやって来た。

性格は協調性、社交性ともに欠けているうえに、皮肉屋。厭世的ではあったが、その事に関しては更に酷くなり、時折 悲観的になる面。一年前の“救済”以降に何かあったらしく、時に暗い一面も見せる。

幼少期はかなり荒んでいたようであり、喧嘩に明け暮れる毎日を送り、教団騎士になってからも性格と口の悪さが災いし、“単独行動”の“汚れ仕事”が主であった。余談だが、教団騎士をやっていた頃から着ているコートの両肩にあった魔剣教団の紋章は、ネロが“シルクスクリーン”を使って描いた。しかし、教団壊滅後は彼が自ら削り、見えにくいよう薄くなっている。

見た目は不良のようだが、意外に一途であり、ある程度は常識人なので変な所は真面目。そしてウブだったりする。

学歴はジュニアハイスクールの途中で止まっているが、記憶力はいい。既にミッドチルダ語は大体マスターしている。ただし、その知識と頭脳も悪魔と戦いにしか役立てない。

現在では機動六課で世話になりながらもダンテにからかわれ、そして騒ぐ毎日である。

孤児である故か親のいない子供の気持ち分かり、ヴィヴィオの相手をすることが多い。ただ、彼自身は自覚がない。

苦手なものは、うるさいヤツとム力つくヤツ。あと、破廉恥な格好をした女。

リンカーコアは存在せず、右腕に魔力を内包しているのでAMFの影響は受けない。良くも悪くもチートの仲間入りを遂げた。

身体能力が落ちる反面、魔力値が上がっているが、その理由と詳細は未だ不明。

「技名一覧」

Blistering Swords（急襲幻影刀）

幻影刀を一斉射出する攻撃であり、その総称。二本はワンペア、四本はツーペアと別名があり、こちらも急襲幻影刀であるが、大抵は六本の幻影刀を飛ばす時のことを言う。

本来はデビルトリガーを発動しなければ使用出来ないが、ネロ自身の魔力制御が上がっているため通常時でも使用可能になっている。

Deal Swords（投擲幻影刀）

ポーカーで言うディーラーがカードをデイル（配る）ことに由来し、周囲に展開する幻影刀とは違い、ネロ自身の手から放出した魔力で形成された幻影刀。通常の幻影刀よりも魔力濃度も殺傷能力も高い。

廃棄都市でウリエルと戦った時は、かなり無茶な投擲幻影刀を使っただけである。

Bet（ベット、魔力斬撃）

右腕から出現した閻魔刀を使う技であり、デビルメイクライ4のムービーでよく使っていた“あれ”。ポーカー用語の賭け金を出すことに由来。

使用するのにチャージが必要だが、ネロの感情の高ぶりによって威力が増大し、チャージ無しでも放つことが出来、その際には“マキシマムベット”すら上回る程の斬撃となる（魔王サンクトウスのスパイダを使った衝撃波と相殺、ディエチのヘヴィバレルを掻き消したのもそれ）

Judgment Cut（次元斬、審判の切断）

“閻の殲滅者”が使用していた次元の狭間を“球体状”に切り裂く閻魔刀の奥義。肉眼では捉えることの出来ないほどの神速の剣技と、“閻を切り裂き、喰らい尽くす”閻魔刀があるからこそ使えるものであるが、閻魔刀の魔力を制御出来ないネロの場合、使用する際には膨大な魔力を必要とし、しかも使いたくても使えるものではない。

ない。

命が危険に晒され、ネロの中の悪魔が“部分的”に目覚めることで、
やっと使用出来る。

「ダンテ」

CV：東地宏樹（若年期は森川智之）

身長：197センチ

体重：93キロ

年齢：37歳

出身地：第97管理外世界の平行世界 欧米アメリカ イリノイ州
シカゴ（幼少期に住んでいた場所と現住所はそれほど遠くない）の
スラム街

使用武器：リベリオン（質量兵器）、エボニー&アイボリー

（質量兵器）

デバイス：エナソルナ

推定魔力値：C以下（非戦闘時）、状況によって変化するが通常戦
闘ではA相当（潜在魔力はオーバース）

推定戦闘能力：陸戦AAA+（この数値は手加減している際のもの
であり、実際は更に上。理由は陸戦オーバースの人間が存在したの
か分からないので）

座右の銘は「傍若無人」で、ウルトラマイペース爆進中。

便利屋歴22年（その内、デビルハンター歴17年）

右利きだが、左手も問題なく使える。

髪質は鈍い銀髪。

攻・守・走、並びに魔力も群を抜いて高い。戦闘スタイルは二丁銃
による超高速射撃と大剣を使ったもの。如何なる敵もねじ伏せるが、

体術も卓越している。怪我を負っても即座に回復する。

ネロですら呆れるほど不真面目でだらしない性格であり、主食はピザ（オリーブ抜き）。他の好物はストロベリーサンデー、酒はジントニックだがビールとワインも飲むようである。一昔前の“ただの”便利屋の頃はトマトジュースも飲んでいたようだが、最近は見られない。

大食であり、スバルとエリオ、出向したギンガと共に六課の財政を圧迫している。

力は父“スパイダ”を凌駕するとさえ言われ、潜在能力は計り知れない。

肉体、精神、魔力共に未だに成長を続けているせいか、本気を出せば街一つを簡単に吹き飛ばせるほどの力を持っているので、大概は手を抜いて戦う。

幼少期には物心ついて間もないのにも関わらず、兄と共に父親から剣技を叩き込まれていた。それ故か父スパイダを誇りに思いつつも、若干怖がっていたりもした過去を持つ。

ロクに人の名前を覚えようとしない悪癖があり、本作では完全に“エロオヤジ”でコメディ担当のポジション。金髪美人がタイプであるが、守備範囲は広い。

黙っていればイイ男だが、無駄に喋る。お喋りモードとだんまりモードを完璧に使い分けることは可能。

全世界の言語をマスターした父スパイダ、学校の成績はいつもAだった兄と違い、頭は悪い。10〜15歳までは孤児院で世話になっていたらしいが、勉強はせずに剣の稽古ばかりしていたのは言い訳であり、元から頭が悪い。

本作のチート第一人者であり、ネロと同様に体内に魔力を内包しているのでAMFの影響は全く受けない。

「技名一覧」

Charge Shot

チャージショット

魔力を込めて銃弾を撃ち出すものであり、記録映像からシャーリーが測定したものではAAAにまで達していた。

しかし、聖王教会で巨大化したバエルとダゴンの集合体を山ごと消し去ったことから、“魔帝”を封印した時よりも魔力が増大しているうえ、加減していたことから、ダンテが体内に内包している魔力がどれほど巨大なものか窺わせる。

現在ではデバイスに応用して使用している。

Casino Drive

カジノドライブ

“一攫千金の旅”を意味する。娯楽のカジノにおけるスロットから取り、山ほどのコインが出てくるのをイメージして頂きたい。実在する曲名から取っていたりする。同名の競走馬がいるが、そちらとは無関係。ただ、無数の衝撃波を飛ばしているのを、数頭の馬が競走しているのと見立てたら良い例えではある。

“オーバードライブ”を超える、ダンテが魔力斬撃を飛ばす技。一年前よりもダンテが強くなっていることで、その射出速度も威力も凄まじい。

？

ダンテがリベリオンの髑髏の装飾に血を流し込むことで発動する技。どれほどの力かは現時点で不明。

「悪魔の力」

Air Hike

エアハイク

魔力で形成された足場。それを使って更に跳躍する技名（手段）。“悪魔の血”が覚醒する事をきっかけに（ダンテは22歳、ネロは16歳から）使用可能となる。ネロは両腕（正確には右腕）に魔力を集中させて足場を作る。ダンテは彼よりも血が“濃い”のか、魔

力のコントロールに長けているのか、脚に意識を集中させれば形成出来る。

ただし、《デビルトリガー》の発動中は全身に魔力が漲っている為、ネロも脚に意識を集中すれば作れる。ダンテに至っては形成速度が上がり、連続で使用が可能。

デビルトリガー Devil Trigger

内に眠る悪魔の力を解放する“引き金”であり、使用するのに膨大な魔力を必要とする。発動中は身体能力、感覚も発達し、魔力も桁違いに高い“魔人”となる。（魔人化中は常時オーバーSランクの魔力）

ネロの場合は、発動に閻魔刀が必要不可欠であり、背後に青白い魔力で形成された悪魔が出現し、ネロの動きに合わせて波状攻撃を行う。なお、瞳が真紅に染まっている状態は本作で最も多様される。

ダンテの場合はネロと違い、自身が“悪魔”の姿へと変わるものであり、魔具の影響を受けない“完成型”の魔人。その強さは他の追随を許さず、圧倒するほどである。

補足として、ネロは発動中に頭で考えていることを口走る。発動の瞬間には凄まじい衝撃波が辺りに飛び交い、「Wake Up（目覚めろ）」「Do It^{めいしやう}」と叫ぶ特徴があるが、それも心中の言葉を口走るものである。

ダンテは魔人化する際に体中に迸る魔力を赤い雷に変換し、空に向かって打ち上げる（デビルメイクライ4本編では落雷によって魔人化する）が、ネロと違って悪魔の力を完全に制御しているので、一応は大人しく魔人化することが出来る。ようは派手好きな性格の影響。

【特典映像〜対談〜】

ダンテ「つーワケで、メインキャストが呼び出されたんだが…」

ネロ「…なに、話す？」

フェイト「バリアジャケットのことなんかは？」

ネロ「ああ、そうだな… 俺のは“黒の契約者”の主人公のほとんど一緒だろ」

ダンテ「フードついてて、裏地が緑じゃなくて赤なのがポイントだな」

なのは「無地の黒いロングコートで、前の方は胸元から腰の辺りはファスナーで止めてるね。それでダンテさんは…」

スバル「最初に着てたのとデザインは殆ど変わりませんね。ただし上着はコートじゃなくて赤のジャケットで、下に着てる服は若干黒が多くなってますが…」

ティアナ「特徴は剣をくるんでる毛皮をマフラーにしてるトコで…それって、マリーさんのデザイン？」

ギンガ「いや、所有者の思考の影響で造られるタイプだって言うてたわ」

エリオ「お二人とも剣と銃を使ってますけど、体術もすごいんですよね」

キャロ「ダンテさんは、もう速すぎますし…」

ティアナ「あの連射速度は反則よね… しかも、狙いも正確だし」

スバル「デバイスで魔力弾を撃つのは、最初から出来たんですか？」

ダンテ「ああ。初っぱなからな」

ネロ「ちっ…」

【メインキャストインタビュー】

ネロ「あー、なんか作者… いや、監督がオレンジ髪の死神代行とやたら俺がカブるって言ってたんだよ。斬撃を飛ばす時は特にな」

作者が気に入ってるから出番が多いですね

ネロ「まあな… 一応 主人公だし。やたらと無茶やらされるけどよ？ あとバリアジャケットのモチーフは“黒の契約者”のやつと、その死神代行が持つてる剣を第二段階まで解放した時の服装だったさ。何て言うんだっけ… 確か“BAN-KA…”」

続きましてダンテさん、もう一人の主人公をしていますが、どうですか？

ダンテ「どうもこうもあるかよ。あの野郎（作者）のやり方次第だし？」

もう、ズルいくらい最強ですよ

ダンテ「あたり前のこと言っな。俺を誰だと…」

以下略…

ダンテ「まあ、女運は最悪だな。見てたら分かるだろ？」

続きまして隊長陣にインタビューします

なのは「そうですね。本来なら主人公は私ですが、何故か出番が少ないんですよ。監督に聞いたら“扱いにくい”って言われました」

フェイト「ええっと… 出番は多い方です。ネロは危なっかしくて放っておけませんし、私と同じで普通の人は少し違ったりとか…」

はやて「あーっと… 私的にはフェイトちゃんと同じって言うか…

まあ、暗さを見せるネロ君は放つては置けませんし… あ、カメラ回ってない時は“君付け”で呼んでます。いや、これは問題ないんで… それに、あの“赤い目”の時なんかは…」

シグナム「ああ… 初対面の時は色々あったが、ネロは顔を背けるは、ダンテはいやらしい目で見るから… 本当にどうしたものだろうか」

ヴィータ「あ？ あたしに何 聞くんだよ。知ったこっちゃねえな。作者の野郎はイジリ易いって言うてるけど、周りの奴らはやり過ぎだって言うてるよ」

続きまして、フォワードメンバーにインタビューします

スバル「あれ、もう回ってる？ そうだな… ネロさんが右腕に包帯を巻いてたから怪我してるのかな？ って思ったんだけど… スゴいですね、ホント。怪我した次の日には、ああなってたって聞きました」

ティアナ「もうタジタジですよ。ネロさんは無茶苦茶やらかすし、ダンテさんも人の話 聞かないし… って言うか、あの人 名前覚える気ないんですよ、本当に…」

エリオ「ネロさんは元騎士らしいんですけど、言ったら怒りますから… 右手の威力は凄いですよね。単純に数トンのパンチ力はあると思います」

キャロ「…すみません。カメラ意識したら緊張しちゃって… 山育ちですから。ネロさんもそうだって… この前聞いたんですけど、テレビ見たことがないって言ってました。あ、パソコンも見たことなかったそうで… フリード カメラに咬みつかないで！」

ギンガ「はい。ネロさんとは唯一の同年代ですが、初めて会った時は年上だと思いました。…いや、今 私も17歳に見えないって言いました？」

最後に作者兼監督のkidさんにお聞きします

kid「小説を書き始めた理由は、やっぱり小説を読んだからです。でも、デビルメイクライ4とリリカルなのはクロス作品が少ないから、自分で書くのを決心しました」

予定通りに執筆出来ていないとのことですが？

kid「まあ毎度ですね、それ。そもそも“マジカルトリガー”が全50話くらいで終わらせるはずだったのに、納まりきらずにタイトル変えて続編を書いているので分かってもらえると思います」

ここにネタ帳がありますが、かなり違いますね

k i d「はい。でも、そっちのよりも構成はちゃんとしてるつもりです」

最後に一言　お願いします

k i d「えー…　駄文で無茶やるつえに話の構成も悪いですが、最後までお付き合い下さい。これからも応援よろしくお願いします」

キャラクター設定と特典映像（後書き）

さて、次回でもまた二人が無茶やらかします。回想も盛り込んだりしますが、そこんトコはよろしく！

Section: 13 } Against Confession 増え続ける謎

戦いは更に激しく、闇は更に深く…

「……何したんですか…？」

「別に…」

粉碎し、ただの氷となって崩れていくケルベロスに背を向けて歩き出すネロにギンガが戸惑いながら問うが、彼は右腕を見詰め、感触を確かめている。周りにいる数名の魔導士も、啞然としているヴィータも見えてはいない。

「ただ、斬って撃った後に“殴った”だけだ」

そう。彼はそうしただけ。

ケルベロスとの間合いを詰め、レッドクイーンによるイクシードの加速を利用し、“一瞬だけ出現させた”閻魔刀を逆手に持ち、ケルベロスの首を斬り落とした。

「いや… そんな簡単に言われても…」

確かに、ギンガの目にはレッドクイーンでケルベロスの氷鎧を砕き、加速の加わった連撃で閻魔刀を使ったのは見えた。しかし、刀と言うよりも“蒼い光”だったが。

「撃ったって言いましたけど、あれじゃ、まるで…」

地上本部の壁には、閻魔刀で斬り裂かれた跡と、“散弾銃”を使ったような弾痕が残っていた。しかし、聞こえた銃声は一発。

「リイン… 分かるか？」

「…推測ですが、拡散型の魔力砲撃ではなく、通常の射撃型の魔力弾だと思います」

ユニゾンを解除したヴィータが問いかけると、着陸する彼女に寄り添いながらもリインはネロが残した攻撃の痕を見た。

閻魔刀の間合いはせいぜい1メートル弱のはずだが、ネロがいた距離から考えれば本部の壁まで20メートルはあるはず。

「おそらく… ダンテさん並みに… いえ、それ以上の射出速度です。威力から考えても、射撃魔法の部類かと」

「…だな」

ブルーローズの銃身が痛んでないか確認しているネロに目を向け、ヴィータは微かに目を細める。

——恥を忍んで頼む。この苦しみから解放してくれ…！

跳ね飛ばしたケルベロスの一頭の声… ネロは、その頭に手を当てる時に伝わってきた思い。

——私の体には、未知なる魔石が埋め込まれている。それを砕けば…

「便利だな。包帯巻く手間が省けるよ」

ケルベロスの体を貫いた《悪魔の右腕》が、光を放ちながら瞬く間に隠される。

「説明は聞かされてたけど、マリエルに礼 言っとかないと…」

バリアジャケットの機能により、オートで右腕が隠れたことでネロは小さく笑ってみせるが、ヴィータ以外の二人はやたらと目をチラつかせる。

「…何か言いたそうだな」

「別に…」

ネロは溜め息混じりに言うが、ヴィータは先ほど彼が言ったセリフで違う方向に顔を向ける。

「聞きたいことがあるなら、後回しにしてくれ。今は忙しいんだし…」

「ツツ!!?」

確実にみんな何か言いたいんだろうが、代表して言ったヴィータは完全に気分を悪くしていた。そんな彼女に、ネロは面倒臭そうにしながら言おうとしたものの、何かを感じ取ったらしく、上を見上げる。

「おい、どうした…」

「(…っ!)」

リインも何か様子がおかしいことから、ネロは聞こうとするものの、その瞬間に彼の頭に声が走り、止め処ない不快感が襲う。

「どうしたんだ…?」

「はやてちゃんと念話が繋がらないんです！！ 強力な魔力が邪魔してるみたい…！」

「魔力で…？」

（だったら…）

だとしたら悪魔か。一瞬 そう考えたネロだが、右腕の疼きは感じない。いや、ここに来た時から悪魔の存在を感知する右腕が誤作動を起こしている時点で、それほど当てには出来ない。頭の中に響く声を振り払い、ネロが聞くと、リインはかなり焦っているようだった。

「ちいつ…！」

「ヴィータ副隊長…！」

「待って下さい、ヴィータちゃん…！」

その時、ヴィータが一気に地を蹴り、低空飛行によって駆け出した。

「おい…！」

ネロが叫び、ヴィータの後を追う三人だが…

ジジツ…！

一瞬、空間に電流のようなものが走ったのは誰も気付かない。

…

「よし、開いた！」

「急ごう。フェイトちゃ…！」

エレベーターの扉をこじ開け、急いでスバル達と合流しようとしていたのはとフェイトだが、背後の方から騒いでいる陸士達の声が聞こえる。

「え？」

「なに…？」

やたら騒いでいることから、二人も振り返ってみたが、我が目を疑う光景だ。
何故なら…

「何処かの部隊のやつが、へばりついてるぞ…！」

（ダンテさん！！？）

（それに、スバルとエリオも！？）

ガラスを隔てた向こう側には、エリオとスバルの二人を背負っているダンテがいた。

ガリガリガリガリッ！！！！

「うわっ!？」

ダンテがガラスに爪を突き立て、円形に削り出すのに伴い、凄まじい不快音がするので、フロアにいる皆が耳を塞いだ。無論 おぶってもらっているスバルとエリオも同様に。

「とうちゃく」

ガラスカッターの応用で入ってきたダンテは、何食わぬ顔でそう言う。

「ダンテさん…？」

「なのは隊長、フェイト隊長。お待たせしました!」

「お届け物です!」

ダンテがどうしているのか、なのはとフェイトには分からない理由があった。そんな彼女達の元に駆け寄り、スバルとエリオは待機状態のレイジングハートとバルディッシュを差し出す。しかし、やはり耳鳴りが酷いようだ。時折耳を弄っている。

「…ありがとうございます」

「いえ、すぐ来れたのはダンテさんのお陰ですか…」

なのはとフェイトは、まだ果然に… どこか戸惑っているようだったが、エリオが振り返った頃にはダンテの姿はなかった。

「あれ…？」

ふと、スバルが顔を向ければ、公開意見陳述会の様子が中継されて
いりモニターがあるが、それを見た二人も驚愕の色に染まる。

「えっ!？」

モニターには、黄色い光に包まれる中で、倒れている地上部隊や時
空管理局の重要人物…

「ダンテさん!!？」

【みみ… 観ているかい…？ ミッドチルダの諸君。こ、こ、この
場にいる人間は、私が人質にしたよ…】

モニターの映像にはノイズ混じりに音声が届くが、“虫のような悪
魔”が吃音気味に言う。そして、その悪魔は、ダンテを踏みつけて
いた。

「この映像、いつから流れてるんですか!？」

「ついさっき… 五分くらい前から…」

スバルは困惑していたがエリオが聞くと、フェイトがバリアジャケ
ットを纏いつつも返す。

しかし、エリオはその返答を聞いて引つ掛かった。

ダンテが自分達の前に現れたのは、約10分前。しかし、その10
分間はずっとベリアルと戦っていた。

(じゃあ…)

あのダンテは誰なのか。先ほどまで自分達と一緒にいたダンテは誰なのか。

【わ、わ、私の望みは、ただ一つ。墮落したこの世の…!!】

ドンッ!!

「ツッ!!」

ワケが分からなくなりそうになるエリオだが、突如として“虫の悪魔”が“赤い閃光”に貫かれた。

「なに!？」

【ガアアッ!!!!】

バリアジャケットを装着し、モニターの片隅で“意識が途絶え掛けている”はやたとシグナム、もちろん他の人間を助けに行く準備が出来ているのはが声を上げるが、モニターの中では汚らしい深緑の血を流す悪魔が、肩を押さえながら後ずさる。

【ききき… 貴様!!!!?】

【よう。久しぶり… いや、違うな…?】

虫の悪魔… アグナスもといラファエルが横たわるダンテと、画面の端から入り込んで来たダンテを交互に見ている。

なのは達も言葉を失い、モニター越しのはやて達も“魔力を奪われ”、苦しそうにしながらも彼らのやり取りを見ていた。

【こついつのは何て言えばいいんだろうな？ “生き返れて良かったな”か… それとも、“第2の誕生日、おめでとう”ってやつかな…】

【いや、どうでもいいだろ… そんなの…】

たった今 やって来たダンテはふざけつつも言い、横たわって傷だらけのダンテは荒い息のまま言う。

【そうだな。どうでもいいや】

【ったく…】

無傷のダンテはフツと笑い、横たわっていたダンテは、上体を起こしながらも少し気だるそうに言う。

【……遅えんだよ、俺…！】

【待たせたな、俺！】

モニターの向こうにいる二人のダンテが互いに手を掴み取ると…

「…一人に… なった？」

「フェイトちゃん、行こう」

二人のダンテが黒い霧のようなものに包まれ、一人となった。戸惑っているフェイト達と同様に、なのはも何かが分らないが、彼女に促されてフェイトも早く外に向かおうとする。

「なな、何故だ…！？ 貴様は、先ほど私が倒したはずなのに…！」

「倒した？ 人質取って魔力吸い取っただけだろ？」

“帰天”した姿のまま震えるアグナスが肩の傷を再生させながらダンを睨んでいるが、ダンテは銃型のデバイスを腰のホルスターに収めてアグナスを見据える。

「相変わらずやる事が湿っぽいな… 天使さんよ！」

「くっ…！！」

突き破られたガラスから吹き込む風によってダンテの首に巻かれた純白の毛皮が靡くが、その様が彼の凄みを引き立てつつも、微かな“怒り”を引き立たせる。

——時は遡り、数分前のこと——

「変だな… あんたからは掃き溜めの匂いがしな…」

「何ワケ分かんねーこと言ってやがる…！」

地上本部の屋上にいるダンテの前には、槍を携えた男性と彼に付き添う赤髪の妖精のような少女が。

「邪魔すんなら…！！」

「アギト…」

アギトは周囲に火球を出現させて威嚇するが、彼女を咎めるように

ゼストがぼそりと呟くように言う。

「邪魔？」

ダンテは、アギトが何を言っているのか分からずに首を傾げた。

「やっぱ、スカリエッティのパシリで来たのか…」

「違う！！ 旦那は…！」

何やら残念そうに、期待を裏切られたかのようなダンテが“仕方ねえな…”と言って自分の頭を掻く。だが、彼の言葉を否定するようにアギトは声を荒げた。

「違うのか？」

アギトと、彼女を遮るように一歩出たゼストを見てダンテは二人を見る。

「…先日はともに話していなかったが… そちらの推測通り我々はスカリエッティと繋がりはあるが、あくまでも協力しているだけで仲間ではない」

「旦那は昔の友達に会いに行くだけだ！！ だから邪魔すんじゃないえ…！」

ゼストの話をダンテは黙って聞いている。緊迫した空気の中、

『やはり、話したただけでは信じてもらえんか…』

『やるってんなら、あたしが…!』

ダンテの見透かされる瞳に射抜かれ、ゼストは槍を構え、アギトもユニゾンの準備をする。
しかし、

「じゃあ、行けよ」

「え…」

ダンテは地面に座り込み、早く行けと手振りする。

「言つたろ。あんたも、そっちの妖精ちゃんからも掃き溜めの匂いはしないしな。見逃してやる」

ダンテはそう言っているが、アギトは未だに警戒しているうえにゼストも神経を尖らせていた。

「あんた… なんかの病気か？ この前、血い吐いてたな」

「!?!」

「なっ!?!」

暫しその状態が数秒続くが、ダンテが唐突に言い放つ。

「行けよ。俺の気が変わらない内にな」

ゼストは微かに眉を動かし、アギトは何か言おうとしたが、二人ともダンテの前から姿を消し、ダンテ一人が屋上に座り込む。

「……あの目……」

（派手に突撃したみたいだな……）

下の方からゼストが突入した爆音が盛大に響き、ダンテがいる屋上まで振動が伝わるが、彼は槍騎士と融合騎の真っ直ぐな瞳を思い返す。

「あんな目えされちゃ、堪んねえよな……」

（“俺の本体”もやらかしてるみたいだし……）

“影”である自分がこんな気持ちにもなるのかと自嘲しつつも、“影のダンテ”は地上でベリアルと戦う“本体のダンテ”を見詰めるが、

「……ッッ！！？」

何かの違和感を感じ取る。

（この匂い……）

「チィッ！ー！」

その瞬間に彼は屋上から飛び降りた。この時、地上にいるダンテが“カジノドライブ”を繰り出した、まさにその時である。

「何者だ！ー！」

「神の子羊……とても名乗っておくよ……」

公開意見陳述会の会場に突入したゼストだが、グラディウスが変形

した巨大な剣が地上本部トップにして中将であるレジアス・ゲイズに振り下ろされた。しかし、その剣を槍で受け止め、ゼストがアグナスを睨み付ける。

「そのような事を聞いているのではない！！ 何のつもりだ！！」
（重い…！）

「ゼスト…！？」

声を張り上げるゼストの姿をレジアスは、ただ見詰めるしかない。いや、実際何が起きているのか理解出来ていないのだ。

「決まっている。この男は用済みだから、消しに来たのだよ…！」

「ぐう…っ！」

（用済み…？）

「旦那…！ テメエツ…！」

剣と槍が軋み、ギリツと音をたてるが、顔を歪めるゼストとは対照的にアグナスは口元を吊り上げた。このような状態にありながらも余裕を見せ、ワケの分からないことを言い出すアグナスに押され始めていたが、その瞬間にアギトがゼストの体に飛び込み、眩い光を放ちながらユニゾンする。

「…それがユニゾンとやらか…」

「くっ…！？」

『な、何だ…！？』

ユニゾンにより、髪質が金髪に変わるゼストに突き飛ばされたアグナスは、レジアスを庇うように立つゼストに目を向けるが、光に包まれ…

「……実に興味深いねえ…」

『何だよ、あれ…』

天使の姿へと変わった。その姿を見た会場の人間は悲鳴を上げ、一瞬だけ表情を変えたゼストも無言で槍を構える。しかし、彼の中にいるアギトは確かにその違和感に気付いていた。変身魔法などの生易しいものではない。数日前にダンテとミカエルが戦っていた時のような、禍々しい魔力を纏っているのだから。

「シグナム… あれって…」

「はい…」

デバイスの持ち込みが許されず、成す術のないはやてを庇うようにシグナムも“天使”となったアグナスとユニゾンしたゼストを見ている。

「騎士ゼストに間違いありません。しかし、彼は…」

シグナムの記憶が確かならば、ゼストは既に故人の筈である。しかし、彼はそこにいる。どよめく皆と自分達の前に。

「死ぬ時間だよ、人間共…」

アグナスが大剣をゆつくりと構え、距離を取っているゼストに剣の切っ先向けた。それに対峙しゼストも構えるが、アグナスはとっさに突き破られたガラスを見る。

「しまっ…！」

アグナスは瞬時に人造悪魔を出現させ、それを盾にした。だが、そのような障壁など気休めでしかない。放たれた“赤い閃光”が悪魔ごとアグナスを貫き、彼を壁に叩きつける。

「ガアッ…！！？」

「お前は…！」

『ハンター？』

二丁のデバイスを連結させて貫通性の高い魔力弾を撃ち出したダンテがいた。と言っても、本物の彼は地上にいるが。

「ちい… 動くな…！」

突き飛ばされたアグナスだが、彼は背中中の羽を展開して空間を湾曲させる。その亜空間こそアグナスが人造悪魔を内包させているもの。そこから出現させたバジリスクが頭を突き出し、周りにいる人間に狙いを定めた。そのような行動に出たアグナスを睨みつつもダンテはデバイスの銃口を向ける。

「そ、そ… そのままだ。動くなよ… 武器も捨てる。すす、すぐにだ…！」

ダンテの周りを地面に潜水したカットラスが漂い、彼は口を噤んでそれに目を向ける。

「がっ…！」

「いいザマだな、ダ…ダンテ！！ 成す術のないと言うのは…！」

「貴様…！」

一斉に撃たれたバジリスクの頭部が直撃し、ダンテは炎に包まれながらも膝をつく。無抵抗な状態にありながらも攻撃するアグナスの様に、ゼストが一瞬 声を荒げる。仲間でもなく、得体の知れないダンテがやられても彼には関係のないことだったが、先日に出会った時も先ほどもダンテからは悪意のようなものは感じなかった。そして、自分なりの正義を持つゼストの魂が彼にそのような行動を取らせる。

『テメエ、汚ねえぞ…！』

「ククッ…」

ユニゾンしているアギトの声は伝わらないが、ゼストの憤慨する様子を見て、アグナスは微かに笑った。無数の人造悪魔が飛び交い下手には動くことは出来ないでいるゼストが槍を構えるが、それと同時にアグナスの体に電流が走り、部屋一体が光に包まれ黄色い帯のようなものが伸びる。

「……………死ね…！」

その瞬間、会場にいる人間は魔力を持つ者問わずに悲鳴を上げ、倒

れ込んだ。人造悪魔は体が融解し、人間ならば魔力と生命力を吸い取られるかのように。

「……………あ……………あ……………あ……………！」

『…ユニゾンが…！……………維持…できな…い…！』

その影響で、レジアスとゼストも倒れ込む。まるで力を抜き取られるかのように感じながらも、強制的にユニゾンが解除されてしまいアギトも地面に這いつくばった。

【アハハハハハハハッ！！】

「はやてちゃん！！」

「早くしないと……………！！」

高笑いがモニターを通して伝わる。その光景をただ見ているしかないのはとフェイトは、エレベーターの扉をこじ開ける作業を手伝いながらも目を向け、更なる焦りがこみ上げていた。

「……………つつ……………あ……………！！」

（あれ……………？）

アグナスに魔力を吸い取られる最中、ダンテが捨てたデバイスと剣が黒い炎のように消えて行くのがはやての目には映っていた。この剣と銃も“影のダンテ”が作り出したものであり、魔力で作られているのだが、この時の彼女は、目の前にいるダンテが“本物ではない”というのは知らない。

「…なるほど、“ドッペルゲンガー”か」

時は現在へと戻り、遅々とした動作でダンテを見据えるアグナスは人の姿へと戻った。

「君が15年前：“テメンニグル”で手に入れた力…」

「何で知ってたんだ？」

互いに探り合うかのように位置が変わり、アグナスがガラス側に、ダンテがゼストやはやて達がいる側へと移る。

「知っているとも。私は“天使”だからね…」

「ハッ…！」

つまらない言い訳だ。ダンテはそう思いつつもアグナスと外を飛び交う“リヴァイアサン”と“ギガピード”を見ている。

（悪魔が増えてきやがったな…）

「確かにブチ殺してやったはずだが、お前… 何で生きてんだ？」

「ダンテさん… 物騒なこと喋りすぎや…」

『主… ご無事ですか…？』

アグナスが生き返った存在であるというのがはやて達の頭には引っかけかっていたが、考える余裕はない。自分達の前で仁王立ちするダンテの背中を彼女達は悶絶しつつ見詰めるが、アグナスは傷を癒やし、余裕を見せながら笑っていた。

「き… 君に会わせたい人がいてね…」

「なに…?」

サザッ…!

そう言うと、アグナスの後ろに巨大なモニターが出現し、映像の乱れが晴れていき、一人の人間が姿を現す。

「ヴィータ副隊長!! 八神部隊長達が…!」

「分かってるよ…」

一方で、ダンテがいる場所の真下… 地上本部の正面玄関前にいるティアナとキャロ、フリードの前にヴィータとギンガの二人が現れるが、ティアナの問い掛けにヴィータは暗く応える。

「…状況は?」

「スバルとエリオはなのは隊長とフェイト隊長にデバイスを届けに行きました」

グラーフアイゼンを肩に担ぐヴィータの姿をティアナは見送るような形になっているが、ラインの姿がないことに気がついた。

「あの… リーン曹長は…?」

「っ…!」

キャロが聞いた瞬間である。ヴィータが歯を食い縛り、僅かな動揺を見せたのだ。

「あの…」

「ヴィータ副隊長…？」

「……二人とも」

グラーファイゼンの柄を握り締め、打ち震えるヴィータに聞こうに聞けないが、彼女と共にいたギンガがこれまでの経緯をティアナとキャロに話し始める。

——きやああつ！！！！

——リイン！！

会場にいたはやと連絡が取れず、念話も繋がらないことに焦るヴィータを追っていたリインだが、突如として空間の亀裂から伸びた電流がリインに纏わりつき、悲鳴を上げる。
その光景に目を見開き、ヴィータは手を伸ばしたが、彼女を拒むかのように電流が辺りに四散した。

——リイン曹長… うっ！！

——リイン！！

目の前で荒れ狂う紫の稲妻を払いのけようとギンガが防壁魔法を展開するが、彼女の隣をネロがすれ違ふ。

——ネロさ…！

——おい…！

バチイツ…！！

二人が叫び、ネロが空間の裂け目に飛び込んだ瞬間… その亀裂は閉ざされ、ネロとリインが姿を消した。

『そんなことが…』

『じゃあ、二人は…』

念話を使つて話を聞いたキャロがアルケミック・チェーンで下級悪魔とガジェットの動きを封じ、フリードが殲滅する。ギンガと背中合わせの状況で魔力弾を撃ち出すティアナが問い掛けると、彼女も悪魔を退けながらも表情を曇らせて首を横に振った。

「分からない… 今はどうなってるのか…」

「一緒なんだとしたら、ネロさんを信じるしかないですね」

向こうで若干躍起になつて悪魔を粉碎しているヴィータに目を向けながらも、二人は姿を消したネロとリインの無事を祈る。しかし、またしても状況が一変した。

「なっ…！？」

「あそこつて…！」

地上本部のある階から凄まじい爆音のような音が響き、二つの人影が飛び出して来たのだから。

「スバル!？」

「エリオ君もいます!！」

ガラスを突き破り飛び出したスバルが空中で受け身を取りながらもウイングロードの上に着地し、同様にエリオもその上に降り立つ。念話を通じないか試みながらも叫ぶティアナだが、強力な魔力の影響で繋がらないうえにガジェットや他の悪魔が妨げとなり、改めて目の前の敵と向き合うことになった。

「なのは!！」

続いて建物から飛び出して来たのは、バリアジャケットを纏ったなのはとフェイトである。彼女達がいた階から炎が噴き出し、一斉に散らばる四人に向けてヴィータは声を張り上げたが、彼女の前にコンクリートごと地面から這い出てきた“黒い影”が立ち塞がった。

「フシャアアッ!!!！」

（こんな時に!!）

「邪魔すんな!!！」

それは、魔帝が創り出した悪魔^{ブレイド}であるが、従来のものよりも体色が濃い大型のタイプである。グラーファイゼンが盾ごとブレイドの腕を粉碎し、緑色の血が飛び散らせる。

「フェイトさん!!！」

「くっ…！」

「距離を取って、アウトレンジに持ち込んで!!」

離れた場所にいるエリオの前には、白いマントをはためかせるフェイトがいた。彼女のいる位置よりもやや上空にいるのはがアクセルシューターを撃ち出しながらも、エリオとスバルに近づきすぎないように指示する。

「はい!!」

「なにあれ…」

（新型のガジェット…？）

隊長の命令に従い、エリオは返事を返すが、“赤と青の鋸のような剣”を持つ金属質の人型兵器に只ならぬ不快感をスバルは感じていた。

「…っ…！」

（この嫌なカンジ…）

人型兵器が“双剣”を振るう度に炎と風が巻き起こり、不安定な足場から放り出されそうになりながらもリボルバーシュートを撃つが、その空気を通して伝わってくる感覚に彼女は覚えがあった。

（もしかして…）

「悪魔…？」

人の姿をした機械が手にする双剣の魔力から、彼女は悪魔ナイトメアの体内に

取り込まれた時のことを思い出し、不意に言葉を漏らした。

【こうして話すのは一週間ぶりだね… ダン…】

アグナスの後ろに出現したモニターにはスカリエッティが映し出されるが、彼が喋っている最中にダンテは高速連射によって無数の魔力弾を撃ち出した。

「おい、貴様!!」

【やれやれ… 無駄だというのが分からないようだ】

自身の体にも魔力弾が当たり、眉間から煙を上げながらもアグナスはダンテを睨み付ける。しかし、新たなモニターが出現してスカリエッティが喋ることが気に食わずに舌打ちした。

【おっと… まあ、落ち着きたまえ】

「スス… スカリエッティの話を、き、聞け!!」

砕け散るモニターを尻目に、新しいモニターに映るスカリエッティが歪んだ笑みを浮かべ、その前にいるアグナスがろれつが上手く回らずにどもりながらも怒鳴りつけた。

「テメエと話すのは、直接会ってからだ」

【聞いて損な話ではないさ。君だけではなく… このミッドにいる人間全てが聞くべきことだよ】

スカリエッティの言葉を聞き、ダンテは微かに眉をひそめ、何とか

立ち上がるまでに体力を回復させたはやて達も顔をしかめた。

「なに？」

『ウチらも…？』

ダンテはモニターに向けていた銃口をゆっくりと下ろし、シグナムに介抱されながらもはやては荒い息のまま掠れた声で言った。いや、あまりにも掠れすぎて聞き取れた者はいない。傍にいるシグナムやカリムでも。

「どう言う…」

ドン…ンンッ…！

ダンテが聞こうとしたその時だった。地震のように建物が振動し、彼らがいる会場が激しく揺れる。

「フフ…」

「デメエ…！」

【何をした…とでも言いたいようだね。なあに、大したことではないさ。ただ…】

ダンテの表情が微かに変わったことがおかしいとでも言うようにアグナスが小さく笑っていたが、一步出ようとしたダンテを止めるようにスカリエッティが説明を踏まえて小さなモニターを展開させた。そこには…

【君達を“人質”にさせてもらっただけだよ。君以外の地上本部にいる人間全員をね…？】

ダンテやはやて達がいる地上本部の一階部分に巨大な“鉄製の杭”のような物が突き刺さっている映像だった。

「…」

【“クイックシルバー”でも使うかい？ 止めておいた方がいいよ。さっきのだって奥底に眠っているのを無理矢理 引き出したんだろっ？】

「君が一步でも動いた瞬間に“あれ”は爆発するよ」とスカリエッティは付け足し、ダンテは微かに拳を握り締めた。

『スカリエッティ…！』

『主はやて…』

デバイス無しでも魔法は使えるにしても、何もすることが出来ない自分の不甲斐なさに、スカリエッティの卑劣な手段にはやては思わずモニターから顔を背けてしまった。

「はやて… うおお！！？」

キリがない悪魔とガジェットを叩き潰したヴィータが頭上にある無数のモニター… スカリエッティと会場にいる人間の中でもダンテをメインに映されているモニターを見上げるが、突如として彼女の後ろから轟音が響く。

「なっ…」

振り向けば、地上本部に巨大な鉄杭… いや、柱と言ったほうがいいのかもしれない。その光景に目を見開くヴィータは動揺を隠せなかったが…

「…動くな」

「ッッ!!」

彼女の首筋を囲うように無数の刃が出現する。

「戦闘機人!？」

「やっぱり、この日を狙って…!」

「はいはい… 動いたらドカンと行くッスよ」

ヴィータの相手をしているチンクに目を向け、どう使用もなくなっているキャロとティアナも桜色のエネルギー弾に包囲されていた。

「スバル!!」

同じくして、上の方で赤髪の戦闘機人と向き合っていたスバルから視線を移し、ギンガは後方にある禍々しい光を見る。

「……完全に抑えられた…!!」

（何で気付かなかったの…!）

無数の悪魔に紛れ込み、“幻影”から解放されたナンバーズ達は、

それぞれの定位置についている。かなりの遠距離でいつでも砲撃を行えるディエチをカバーするように立つオットーとディード。

「じつとしてな、タイプゼロ!」

チンクはヴィータに、ウエンディはティアナとキャロに。そして、ノーヴェはガンナックルをスバルに突きつけていた。

「スバルさん!!」

「動くんじゃねえ。妙なことしてみろよ…」

ウイングロードの上で、ノーヴェはスバルとエリオに挟まれた状況にあるが、彼女は振り返らないまま若干苛立ち気味にエリオに言い放つ。

「……“上”のヤツが死ぬからな」

その言葉を聞き、エリオは槍を構えたまま上空にいるのはとフェイトを見た。そこには、彼女達よりも高い位置で二人の行く手を阻むトーレとセツテの二人…そして双剣を壁に突き刺した機械兵器の一機が。

(同じ…顔…)

目の前にいるノーヴェの姿、顔を見たスバルは動揺し、彼女が喋っている言葉が耳に入らない。

(あの時…)

ガンナツクルの周囲に数発分のスフィアが展開させるが、スバルの脳裏に数日前の記憶が蘇っていた。

——似てる…

ギンガと他愛ない話をしていた自分の傍を通り過ぎるネロがボソリと言ったのが、彼女の耳には届く。

（ネロさんが言ってたのって…まさか…！？）

あの時は、自分と姉のギンガが似ていると言ったのだと思っていたが、ネロは廃棄都市の結界内で戦闘機人と戦っている。本人は全然話してはくれなかったが、あの時の言葉は、自分がナンバーズの一員であるノーヴェと顔が似ているとの意味だったのをスバルは理解した。

『フェイトちゃん、落ち着いて…』

『…うん…』

「ここで大人しくして頂きます。フェイトお嬢様」

通常のガジェットとは比較にならない程のAMFを展開している人型兵器と、AMFの影響を全く受けない戦闘機人であるトーレとセツテの前に、二人は下手に動けずにいた。

「一瞬でも攻撃の意思を見せれば、会場にいる人間どこるか下にいる者達も巻き添えになりますのでご理解下さい」

「っ…！」

セツテに続き、冷徹なまでに言うトーレの言葉で、なのはとフェイトの顔から血の気が引く。

「あなた方は卑怯だと思われるのでしょ… 我々は生みの親であるドクターの指示に従うまでです」

何か言いかけた二人の心境… 目を見たトーレは察し、頭上にある巨大モニターに目を向ける。

そこには依然として、会場の様子とスカリエッティが映し出されていた。

「発信源はまだ特定出来ないのか…!?!」

「やってます…!」

「けど、ジャミングが酷くては…!」

六課の方でも、はやて不在でありグリフィスの許 彼らなりにスカリエッティが映像を発信しているであろうアジトの場所を探していた。

「ダメ…! 送ってる場所が多すぎる…!」

アルトとルキノに続き、シャーリーも完全にお手上げ状態となり、焦燥感がより一層込み上げる。

（くそっ…!）

「放映網を乗っ取ってミッド全域に中継するなんて…!」

公開意見陳述会 会場の映像は、ミッドチルダ中に送られていた。スカリエッティの狙いは何であるかはまだ分からないが、彼らは自分達がやることをし、その中継を見ているしかない。

【どうしたんだい？ いつもの君なら“出演料は貰える”のか…
“勝手に撮るな”とでも言うだろうに、随分と無口になっているね…？】

饒舌に喋り続けるスカリエッティとは対照的に、ダンテは普段とは違い、完全に口を噤んだ状態にある。

「ダンテさん…」

その映像を見ていたグリフィスは、不意に彼の名を口から漏らし…

「…おじちゃん…？」

女子寮の方で寮母のアイナと共にいるヴィヴィオもその映像を見ていた。

【まあ、この際だからはつきり言おう。君をこの世界に呼ぶ手引きをしたのは私だ】

「……漸く認めやがったな…」

【別に否定はしていなかったし… 第一、言わなかったただけだよ】

スカリエッティとダンテのやり取りを、横槍を入れずにただ見ているだけになっているはやてやシグナム達も実に白々しい奴だと思い、眉間にシワを寄せる。

「大した頭もねえカエルが言ってたのも信じてみるもんだな…」

【先日のダゴンの件なら、私が口を滑らせるように伝えておいたのさ】

やや低い声質で言うダンテに、スカリエッティは付け足すかのよう
に返し、会話は続く。いや、会話といっても下手に動けないダンテ
に向けてスカリエッティが一方的に喋っているだけだが。

——ちくしょう！！ スカリエッティの野郎、話が違っじゃねえか
！！ 強くなつて生き返った今なら勝てるって言ってたのに！！

（あの“ダゴン”という悪魔のは、仕向けたものだったと言うのか
…？）

一週間前に聖王教会で、どうやって生き返ったのか聞き出そうとし
ていたダンテとシグナムだが、尋問する前にダゴン自らが口を滑ら
せたかのように言ったことをシグナムは思い出しつつ、ダンテの背
中を通して薄ら笑いを浮かべるアグナスとスカリエッティに目を向
けた。

「…いつからだ…？」

ミッド全域に映像が送信されているのもスカリエッティとアグナス
から聞かされていながらも、

「…いつから俺と坊やのことを見てた？ どうやって俺と坊やのこ
と知りやがった！？」

【ズバリ聞くねえ…】

そんなことは関係ない。そう態度で現すダンテがスカリエッティに問い掛けた。そのセリフに、アグナスは一瞬だけ体をビクつかせ、何がおかしいのか再び薄ら笑いを浮かべる。

【せっかくだから答えてあげるとしよう。私が君達の存在を知ったのは高々 半年ほど前になるかな？ 実に興味をそそられたよ…】

そう言うと、モニターにはスラム街を歩くダンテや、黒いノースリーブを着て、首に白の長いマフラーを巻いた“右腕にギプスを付けた”ネロが映し出される。

「半年…？」

スカリエッティが口にした言葉に、はやては引っ掛かった。確か、先日 モニターを通して見たのは“一年前”のネロとダンテが戦っている映像だったはず。それではつじつまが合わない。

【ちなみに、これは今から一月前のもので…】

「半年だと！？」

【…そうさ】

記録映像のものがいつのものなのか説明している最中だったが、ダンテの問い掛けにスカリエッティも待っていたと言った様子で応えた。

【先ほど言っただろう？ 私は君達を連れてくる“手引き”をしただけだね…】

「……どういうことだ！？」

やたらと自分の言葉を強調するスカリエッティに、ダンテは脳内処理を働かせながらも少しばかりの時間を掛けて聞き返す。

「まま、ま… まだ分からないのかい…？」

余程おかしかったのか、滑稽だったのか。いずれにせよスカリエッティの前にいたアグナスはダンテに向けて口を開くものの、彼はアグナスに目を向けない。いや、耳に届いていないのかも知れない。

【簡単なことだよ… 結果は至ってシンプルだ…】

モニター越しに、スカリエッティの歪んだ笑み、その耳障りな声までもがダンテに… はやて達に、六課にいる皆に… いや、ミッドチルダ中にまで響き渡る。

【私はね… “記録”されたものを“見つけた”だけなんだよ…】

「記録…？」

「見つけた…？」

逃げることも出来ず、ただ話を聞いているしかないはやてやカリム達だが、スカリエッティが口にした言葉を復唱し、“まさか”と思った。

だが、その考えは的中することになってしまう。

【君達は監視されていたのだよ!!】

部屋中に……いや、ミッド中に響き渡るのは、明かされた意外なまでの真実。

【“時空管理局”から、ずっとね!!!!】

〈次回予告〉

Talking: スカリエッティ & ナンバーズ (2 番以外)

スカリエッティ「教えてあげようじゃないか…!」

ウーノ「明かされる秘密…」

トーレ「司令塔である我々が知らされていたこと…」

クアットロ「あの時に…」

チンク「ドクターは知っていた」

セイン「彼らの存在を…」

セツテ「二人の存在」

オットー「混血の異端者」

ノーヴェ「人間を超えたヤツら…」

ディエチ「あいつは人間じゃなかった…」

ウェンディ「人間じゃないなら、何なんスか?」

デイド「悪魔… でしょうか…?」

S e c t i o n : 1 4 \ I n f e c t e d V e n o m 漫透する毒牙 \ (前

突きつけられたら真実。それは虚言か、それとも誠か…

「…何だと…？」

スカリエッティが言ったことが理解出来ないでいるダンテは、束の間の静寂を突き破り、静かに口を開いた。

【だから今 言っただろう？ 君たちはずっと監視されて…】

にやけ面のままでいたスカリエッティは、話の分からないやつだとしても言いたげに目を瞑って首を横に振る。だが、モニター越に伝わるダンテの視線に気づき、彼は瞼を開けた。

「……信じられないとも言いたいようだね」

【当たり前だろ。テメエみたいな… 直接会いに来ないヤツなんかが言うこと信じられるワケねえ】

暗い部屋の中にいるスカリエッティは、目の前にあるモニターに映るダンテ… ひいては会場にいるアグナス、そしてレジアスを庇うように立っているゼストや他の人間達を見た。

「…フッ」

無言でこちらを睨み付けるダンテの姿を、何もする事の出来ない者達を見ていると、スカリエッティは口元を吊り上げて短く笑う。

「信じられない、か… まあ、私のような犯罪者なら尚更か…」

溜め息を吐くスカリエッティ。モニターの向こう側にいるダンテも見透かすように無表情であるが、そこでアグナスは唐突に口を開いた。

【スス、スカリエッティ… 見せてやったらどうだ…？】

「ッ…！」

「動くんじゃないよ」

頭上に浮かぶモニターの映像に、一瞬スバルの体がピクリと反応してしまいが、彼女の前にいるノーヴェが構えるガンナックルの機械音により正気に連れ戻される。

（スカリエッティ…！！）

【ああ、もちろん…】

なのはの隣にいるフェイトも歯を食い縛り、下手に動けない状況で苛立ちが込み上げる。

「…そのつもりだよ」

モニターには映っていなかったが、スカリエッティの斜め後ろの位置には戦闘機人であるウーノがいた。彼が指を弾き、指示するとウーノがキーボードを叩く。
そして…

「おい…」

新たに映し出されたモニターを見たダンテは、目を見開き不意に声を漏らす。

『あれは…』

『ダンテ…さん？』

会場にいるカリムとはやての目に飛び込んできたのは、丸い円の中で木剣を持って佇む“オールバックでモノクルをかけた銀髪の男”。

【いい顔だね…】

実に満足げなスカリエッティが嘲笑うかのように言うが、その言葉はダンテの耳に届いてはいない。

…

「ちょっと、父さ〜ん… 速すぎるよ〜」

地面で大の字になっている幼少のダンテは、荒い呼吸のまま空を見上げたままぼやく。

「俺“達”、まだ子供なんだから手加減し…」

「立て」

学校から帰ってきたばかりだと言うのに、毎日やらされる剣の稽古のキツさを嘆くものの、静かに… だが、低い声がダンテの耳に届

く。

「言ったはずだ。私をこの円の中から出してみろと」

オールバックの髪型の男性： 擬人化能力で人間の姿になっているスパイダが右手に握る木剣で地面に描いた線を差す。

「父さ…」

「…ダンテ」

いつまでも続くのにダンテは愚痴しか零してばかりだったが、上体を起こしている彼の隣から聞こえてきた声。幼少のダンテと同様に声変わりもしておらず、“双子”らしくそっくりな声。

「あれ”やるぞ”」

「あれ”つて…”」

稽古を始めて、もうかれこれ一時間に差しかかるうとしていた。稽古の内容は、日が沈むまでの一時間の間に父を円の中から出すというものだった。しかし、ダンテは兄と共に攻めようともしスパイダは一歩たりとも動かず、二人の木剣を一本の木剣で全て防ぎ、そして弾き返している。

「まだ完成してねえだろ…」

「父さんに太刀打ちするなら、やるしかない」

腰を下ろしているダンテの隣で、木剣を杖代わりにして立ち上がる

バージル。そして、そこで彼は構えを取りながらも横目で一度ダンテに目を向けた。

「……分かったよ……」

昨日のテストで自分は頑張ってもCだったが、A-で「今日は良くなかった」とイヤミを言う兄。いつもはA+の成績で「これくらい当然だ」と言い、テストがDの自分を見下す兄。

「…やるよ。やらないで諦めるのはしゃくだしよ?」

「諦めようとしていたクセに偉そうだな」

「うるせえ」

それでも、コイツといればやれる、どんな強いやつが相手でも。そうダンテは思い、バージルと共にノーガードで立つ父に向かって飛び込んだ。

「…」

地面すれすれに剣の切っ先を向け、低い姿勢で下段の構えのバージル。肩に担ぎ、そこから大きく振りかぶるダンテの二人が叫びながらも駆ける姿を無言で見るスパイダ。

「はあああっ!!」

「うらあっ!!」

木剣を振り上げたバージルと、振り下ろしたダンテだが、スパイダ

の肉眼では捉えることの出来ない神速の剣が一瞬で二人の剣を弾く。

「まだ…！」

「こっからだ！！」

一瞬 顔が強張ったものの、空中で態勢を整えたダンテとバージルは再び地を強く蹴り、跳ぶ。

「ちっ…！」

（あの時…）

過去の記憶を蘇らせていたダンテは、つい舌打ちしてしまう。

——…いいコンビネーションだ。明日からは次の段階に進めるぞ

がむしゃらに振り回していた剣は全て円。父親と一旦 間合いを取り、バージルのが振るう木剣の柄尻をダンテが突くことで強力な剣撃を生み出し、漸くスパイダをよろめかせて円の外に出すことが出来た。

——え、結局 明日も…？

——分かりきってただけだな

と言うことは、今日までやっていた稽古よりもハードな内容になる。ハシャいでいたダンテは冷めてしまい、バージルは相変わらず冷めた表情のままのセリフ。

——聞くけど、明日は何を…

木剣の柄尻を指に乗せてバランスを取る遊びをしながらもダンテが聞こうとするものの、

――…父さん？

スパイダは二人ではなく、後方の遙か上空を見ていた。

――どうかしたの…

ピッ…！

今度はバージルが聞くが、その瞬間にスパイダは神速の剣を振るい、何事もなかったかのように家に向けて歩き出す。

――え… ちょっと、本当にどうしたの？

――何もないみたいだけど…？

――帰るぞ

スパイダが剣を振るった上空をダンテとバージルは目を凝らして見るものの、何もない。そして余計なことを言わないままにいる父の背を追うようにしてダンテとバージルも歩き出す。

（マジかよ…）

スパイダがこちらに剣を振るった瞬間、凄まじい剣風によって映像は途切れた。だが、この映像を見せられたダンテは監視されていたことに納得しつつ、腑に落ちない。

「気分はどうだい？」

【……別に……】

「それしか返せないのかな？　それとも、まだ納得出来ないのかい？」

ウーノは自分の前にいるスカリエッティの背中と、モニター越のダンを無言で見詰める。

——時は遡り、約半年前——

「ドクター……それは？」

「ウーノか……」

浮かび上がってモニターには無数のデータがあるのをスカリエッティは興味深げに見ていたところだったが、ウーノに声を掛けられて彼は軽く振り返る。

「“最高評議会”から送られてきたものでね。彼らが管理局のデータベースから抜き取ってきたものらしい」

「はあ……」

「ただ、パスワードの解読はこちらでやれということだろう。引っかかっている……私一人でも問題ないだろうが、なにぶん量が多い」

無数にデータがある中には、モロに“トップシークレット”の赤字がある。スカリエッティの頭脳を持つてすれば、解析するなど容易いことだろうが、彼がウーノを呼んだ理由は手伝って欲しいからだった。

「……最高評議会が…ですか…？」

「ああ…」

「かなりの量ですね… これは時間が掛かりそうです」

「気になるなあ…」

スカリエッティはまるでプレゼントの包みを必死に開けようとする子供が、中々開かないその中身が何なのか楽しみにしているように、だが、その表情とは程遠く歪んだ笑みを浮かべていた。

「…クアットロも呼びますか？」

「そうだね」

評議会から「お前も満足するものだろう」とメッセージも添えられていた。評議会としては、そのデータを研究に役立てるとのつもりのようなが、彼らの束縛から逃れるためにこの時のスカリエッティは暗躍している。彼ら“最高評議会”は何れは始末される運命にあると、ウーノはそう思いつつ創造主スカリエッティに従ってデータの解析を始める。

データ解析を始め 早数分が経過。幾つかの解読データがモニターの端に出されていた。

「お呼びですか？」

「クアットロ。早速だけど…」

「分かってますわ、ウーノ姉様」

薄暗いラボの中を妖しく照らす黄色い照明がぼんやりと灯っているが、クアットロは軽快に。彼女特有の甘ったるい口調でキーボードを打っている手を止めたウーノと、一心不乱にキーボードを叩き続けるスカリエッティの元に近付く。

「ところで、何のデータなんです？」

「詳しくはまだ分かっていないけど、管理外世界の観測データね。取り敢えず出て来たデータが…」

如何にも愛想笑いといったカンジで微笑んでいるクアットロがモニターを覗き込むと、

「…これよ」

新たなモニターが展開され、銀髪に無精髭を蓄え、黒い服の上に赤いコートを羽織っている男。銀髪で深い紺色のコートを羽織り、袖を捲り上げた右腕にギプスをつけている年若い男が映る。

「まあ。これは随分と男前ですこと…」

フォルトウナの街中… とある建物の屋上で響き渡る“歌姫”の聖歌を聞いていたダンテと、シャッターが半分ほど閉まっている店の前で20代後半くらいの茶髪の男性から青い包みを受け取るネロ。

その画像を目にしたクアットロは、わざとらしくそう言うが、ウーノに手を動かすように促され作業を手伝う。

「で、この二人がどうかしたんですか？」

「さつきも言ったでしょう。まだ詳細は…」

クアットロはいつも通りの調子であるが、彼女の姉であるウーノは冷めた様子で返そうとしたその時である。

「……魔剣士……」

スカリエッティがボソリと言った。

「はい？」

「ブラッド・オブ・スパイダ……」

地面に剣を突き立て、柄尻に両手を当てがい、頭から二本角を生やした10mはあろう石像。その石像の両腕に乗って銃を突きつけ合う銀髪の男 二人の映像をウーノは見詰め、クアットロは何の事が聞こうとすると彼は振り返り、答える。

「…彼らは… 魔剣士の血族だよ」

スカリエッティは天を仰ぎ、大袈裟なまでに両手を広げる。その後ろでは、宙に舞い上がったダンテの胴体に“脚で食らいついて”撃ち合いを始めるネロの姿が映っていた。

…

【考えてみたまえ。君達のあれだけ強大な力を… 管理局が見逃すワケがないだろう？】

頭上にあるモニターにちらりと目を向けるトーレ。彼女の隣では両手にブレードを握るセツテもいるが、彼女は自分達より低い位置にいるのはとフェイト。そして“柄と柄尻に鎖が巻かれた双剣”を地上本部の壁に突き刺している人型兵器を見たまま無言でいる。

【有名なのは“裏社会”だけだと思ってたいたのかな？】

(…流石のやつでも…)

普段ならば、減らず口を叩くはずのダンテも無言。自分達的主から突きつけられた話に動揺しているのか。そう思うトーレの脳裏には、数ヶ月前の記憶があった。

——約5ヶ月前——

「お呼びですか？」

スカリエッティに呼び出されたトーレがラボの中に入ると、彼は相変わらず急かしくキーボードを打っているようだったが、あるデータを見せる。

「ああ、よく来たね。君に見てもらいたいものがあるんだよ…」

ナンバーズの実戦指揮を担当する彼女は、その稼働歴の長さに伴い

実戦経験も豊富である。その彼女を呼んだのは他でもない。

「…これをどう思う？」

“ネロとダンテ”の戦いを見せたかったからだ。

「これは…？」

「ある管理外世界で観測されたデータだね…」

【…その刀を返しな】

どこかの建物の一室。壁に亀裂が走り、粉塵が巻き上がる場所に向けて赤の男が声を上げた瞬間、

「…！」

青白い衝撃波が飛び出した。その光景にトーレは微かに眉を動かすが、モニターの中の男は自分を狙ったであろう衝撃波を跳躍してかわし、石で出来たベッドの屋根の上に飛び乗る。

【何の事だ…？】

【お前が持つてんだろ】

虚を突いたように粉塵から飛び出す銀髪の若い男。しかし、彼の行く手を阻むように赤の男が二丁銃を連射し、飛び退いたネロとの間合いを詰めて剣と剣がぶつかり合う。

【返すってんなら…！】

【ぐっ！！？】

罅迫り合いから突き飛ばされ、態勢を立て直すネロに向けて赤の男……ダンテは言い放つ。

【…見逃してやるぜ？ 坊…】

「っ！？」

（速い…！！）

そう言いかけた時った。今度はネロがダンテとの間合いを詰め、殴り飛ばしたのは。

【俺も甘く見られたらもんだな…】

（なんだ、あの魔力は…）

瞳から真紅の光を放ち、全身に膨大な魔力を纏ったネロは右手に握った閻魔刀を肩に担ぐ。その姿に、その声に、乱れつつある映像にトーレは少しばかり驚くが、さしたるものではないと思っていた。

【…それでも“坊や”だつて言う気か？】

巻き上がった煙が晴れ、瓦礫を退けるダンテが姿を現すが、彼の服は袈裟懸けに掛けてバツサリと斬られていた。殴ったのは誤りであり、閻魔刀を持ってして斬り掛かったのだとトーレは理解する。それは、自分の目では追いきれていないことを意味するものでもあった。

【…これだから最近のやつはヤダねえ…】

（傷が癒えていく…？）

いや、それ以前に服の胸元には縦に斬り裂かれたような後があった。まるで“心臓を貫かれた”ような。

ネロに心臓を貫かれた跡と、今 斬られて台無しになった服を見ながらもダンテは埃を払い、剣を杖代わりにして立ち上がる。

【…忠告だ】

【うらあっ！…！】

悠々と喋るダンテだったが、自分の妨げとなる男に… 避けては通れぬ男にネロは剣を振り下ろした。

【…年上は敬え】

【くっ…！】

再び剣同士がぶつかり、火花を散らす中でモニターの映像は更に乱れ始める。

…

「君の感想を聞きたいんだが… どうだった？」

二人の戦いを見終わったトーレは、数秒の沈黙を破り、口を開く。

「…確かに、凄まじい力です。正直…」

あの男達の力は、オーバースの力を持つ自分よりも上だろう。それも遙かに。そう思うトールは焦燥感を感じながらも、一步一步き出して部屋の中を回るスカリエッティを目で追う。

「あの二人は何者なのですか…？」

自身の背後に“騎士”とも“武者”とも言えるものを出現させたあの男は、自らが姿を変えて“変身魔法のようなもの”を使ったあの男は。

「彼らは人であり、人ではない…」

勿体ぶるように語るスカリエッティ。そこで彼は立ち止まり、振り返る。

「人間が足を踏み入れてはならない世界から来た“魔導生物”との混血… 悪魔だよ…！！」

『悪魔…』

時は現在に戻り、我に戻るトール。彼女の脳裏に、その記録映像の後に見せられた“最新の記録映像”の記憶もある。

——それは今から半年以上前のものでね。ついでだが、これは“昨日”のものだ

そこには薄茶色のジャケットを着て、右腕に包帯を巻いた銀髪の男

が映し出された。

——右腕に変身魔法を使っていた…

——あれは変身魔法ではないよ。そんな生易しいものではない

何やら畑を耕しているようだったが、何かを感じ取ったらしく鍬くわを持ったまま突然姿を消す。

——因みに魔力付加なしの身体能力だよ

——魔力なしで…ですか？

いや、跳んだだけだった。だが推定でも、そのネロの跳躍力は10m…20mはあるだろうか。ただ、“神”と戦った時ならばもつと高く跳んでいたが、彼女はまだそこまで見せてもらってはいない。

——鋭い蹴りだね

数体出現したスケアクロウに向けて鍬を投げ飛ばし、ネロは無慈悲なまでの蹴りを繰り返す。その映像にスカリエッティは笑みを零すが、トーレは口を閉ざしていた。

——男が戦っているのは、この管理外世界の魔導生物ですか？

——いや…

スタ袋に戻ったスケアクロウに背を向けて歩き出すネロだが、よく見れば まだ蠢うごめいている。

——…これが“悪魔”…

袋が集まり、《メガ スケアクロウ》となった悪魔が跳び上がる。回転しながらも大鎌で振り返らないネロに迫るが…

——“魔界”の住人さ

振り返り様… ネロが右足を振り上げた。その蹴りは荒々しくも神速と言えるほど。縦一文字に分断されたメガ スケアクロウを無視して鍬を拾い上げ、ネロは歩き出す。

【君達に破壊されたサーチャーの数だが、いくつか知ってるかい？】

(…やつが本領を発揮していないとは言え…)

【四桁だよ。もうすぐ五桁に突入するほどのね？ …まあ、それは良しとして…】

宙を舞ったスケアクロウの大鎌が観測用のサーチャーに命中し、映像が終わってしまった。完全にダンマリをこいているダンテだが、彼はトーレが思い出していたものと全く同じ記録映像のネロの姿を食い入るように見ている。

【この蹴り…】

【に、に… “似ている”とおお… 思わないかい？】

スカリエッティに続いて、会場にいるアグナスは、やや興奮しているかのようだった。証拠に呂律が回っていない。

【きき、君の“兄”に…！】

アグナスの言葉にダンテは反応し、眉が微かに動く。

【“クォーター”とはいえ、曲がりなりにも魔剣士スパイダの血を引くもの…】

【いい、い… 遺伝だね】

（魔剣士…）

イノメスカノンに酷似した“クライム（犯罪）”形態のパンドラを構えているデイエチ。彼女の両隣には護衛役としてオットーとデ
イードもいるが、自分の隣に展開したモニターから視線を移し、デ
イードが握る赤い双剣を見詰める。
ツインブレイズ

〓一週間前の廃棄都市〓

『デイエチ。帰るぞ』

「了解…」

バインドで動きを封じられ、ビアンコアンジェロに運ばれようとしているネロの姿を左目に内蔵されたカメラをズームにして見ていた
デイエチだが、チンクからの通信によりパンドラの銃口を上げ、帰
還する支度を始める。

「気を付けろって言ってたけど、全然 大したことねえな」

「あたしら総動員でやれって言うからどんなやつかと思ったスけど

…」

拘束されてももがき続けていたネロだったが、ノーヴェがトドメに喰らわせた両足蹴りによって肋骨が折れ、肺に突き刺さったのだろう。吐血した跡があるが、明らかに血の量が異常である。

「良かった… もう、この剣 拾って来る時なんか、かなりヤバかったし…」

「セイン!!」

地面に潜水し、拾って来た抜き身の閻魔刀を持った右手を軽く上げるセイン。しかし、その刀を何気なく見たチンクは直感で察し、セインに飛びかかる。

「チンク姉？」

「ちよつ、チンク姉!? 急になに…」

無理矢理 閻魔刀を被い飛ばし、離れた場所で声を上げるノーヴェとウエンデイが何事かと思うが、

「…チンク姉？」

彼女の傍にいるセインは分かった。

「くっ…!」

（あの剣…!!）

閻魔刀が狂暴な魔力を纏い、彼女の手に火傷のようなものを負わせ

ていたことに。

「チンク姉！！ …その怪我、あたしのせいで…！」

「構うな！！ …今は…！！！」

右手に走る痛みを堪えながら、バツ！ と顔を上げるチンク。彼女と共に青白い炎のような魔力を纏った閻魔刀を追うようにセインは顔を上げるが、

「え…」

そこには、地に這い蹲るトーレとセツテ… 拘束されていた“はず”のネロがいた。音もなく、そして気配も魔力も感じ取らせずにバインドを外し、戦闘機人を二人も倒したネロは右手を突き出して閻魔刀を掴み取る。

「トーレ姉…？」

「トーレ！！ セツテ…！」

不意に声を漏らしたセインだが、何が起きたのか分からない。少し目を離れた隙に二人も“破壊”されたのだから。俯せに倒れ、体中にあるケーブルがショートし、時折 電流が走っているトーレとセツテの間で歩を進めるネロ。

「二人とも離れろっ！！！」

瞼を閉ざしたまま、《デビルトリガー》も発動させずに佇むネロに悪魔が飛びかかった瞬間。セインと同じで状況が理解出来ていない

ウェンディと、叫ぶノーヴェに向けてチンクは声を張り上げた。

「IS発動……!!」

彼女のIS（先天技能）はランブルデトネーター。触れた金属を爆発物へと変えるものである。

掛け声と共にチンクが翳した左手の前には黄色い無数の歯車が交差する《テンプレート》が展開。

（二人から距離は離れている……!）

先ほど 一瞬とはいえ閻魔刀に触れた。その閻魔刀も今は持ち主であるネロの手にある。爆発してもトーレとセツテ、ウェンディとノーヴェには被害はないと確信しつつISを発動させるが……

「……つつ……!!?」

（爆発しない……!）

金属である筈の閻魔刀が爆発しない。狼狽し、目を見開くチンクだが、そうこうしてる間に悪魔の右腕の中に閻魔刀は吸収されてしまった。

「うそ……!」

『チンク姉……!』

『ディエチ……! 砲撃のチャージを再開しろ……!』

ビルの屋上にいるディエチの目には信じられない光景が映っていた。ネロを拘束していたバインドが“切り刻まれた”ように細切れになり、トーレとセツテの懷に飛び込んで“何か”した。何をしたのか

は分からなかったが、恐らくは腹を殴ったと思われる。何せ二人の体が思いつきりくの子に曲がったのだから。

【チンク姉!!】

【来るな!! そいつから距離を取れ!!】

『ポイントまで姉が誘い出す!!』

『でも!!』

そして無数の人造悪魔が飛びかかったが、これも全く見えなかった。ネロの手と足が微かに動いたように見えたが、それよりも悪魔の頭が消し飛ぶ所の方ばかりに彼女の目は行っていた。

ノーヴェが叫び、ウエンディがライディングボードを構えるが、20mほどの距離があっても安全とは言えない。

【セインは下がれ!!】

『早くしろ!!』

ネロが起き上がってまだほんの数秒しか経ってはいない。戦闘には向いていないセインをディーブダイバーで地面に潜らせ、両手にステインガーを構えるチンク。倒れているトーレとセツテから引き離すべくオットーのレイストームがネロを襲うが、突如としてデイドが態勢を崩した。

【デイド!!】

『…分かった!!』

意識を失い、頭から地面に落ちそうになったデイドをオットーが

キャッチするが、彼女が見上げた先には《ツインブレイズ》を奪ったネロが。

【テムエツ!!】

『加減するな。フルパワーでやれ!』

『うん…!!』

ノーヴェの怒号が電子音声としてディエチの耳に響く。空中で無防備なネロにビアンコアンジェロが槍から轟音を響かせながらも襲い掛かる。しかし…

【……It's beginning…!】

眩くかのように言われた言葉と共に、白き天使は携えた槍ごと真つ二つに斬り裂かれた。黒の名を持つ狩人が手にする双剣の刃は赤から青へと変わる。その者の“魂”の色へと…

…

【プライバシーの侵害って言葉、知ってるか?】

ダンマリを続けていたダンテだが、ポーカーフェイスを持続させたまま唐突に口を開く。それもかなりダルそうに。

「あ、喋ったッス」

【君にそんなものは通用しないだろう？】

【もも… 文句なら、かかか、か… 管理局に言え！】

地上本部に來た最初の時のような減らず口を叩かなくなっていたダンテが言葉を發したことにウェンディは少しばかり驚く。

「管理局、管理局… さっきからそればっかだな」

呆れたようにダンテが溜め息を吐くが、彼の姿をスカリエッティとアグナスは滑稽とでも言うように笑い、少しばかり体力が回復したはやて達は未だに頭が着いて行けていなかった。

【事実だよ】

尚もスカリエッティは言うが、正直な話 はやて達は動揺している。スカリエッティが言うように本当に管理局がダンテとネロを監視していたのなら、“彼らの出身世界”を知っているということになる。

（せやけど…）

だが、スカリエッティが言っていることが真実である保証はない。このようにミッド全域に自分とダンテの会話を聞かせることで民間を煽って何になるのか。彼らのような存在を…

「……あれ…？」

「主？」

そこではやての脳裏に横切るのは、先ほどアグナスが言っていた言

葉。

「まさか…」

（救済！？）

「はやて？」

「どうかなさい…」

“ 墮落したこの世の…” 彼はそう言いかけていた。 もしやスカリエ
ツティの狙いは「救済」の建て前で世界を破壊することにあるので
はないか、そう思案するはやての顔を隣にいるカリムとシグナムが
覗き込む。

（…？）

「なんか…」

一人思案していたはやてだが、彼女は僅かばかりの異変に気づく。

【まだ信じない気かね？】

「…暑^{あつ}ない？」

「そう言えば…」

「そう言っただろ。それと…」

緊迫した状況にあるが、はやて達と同様に気温が上がっていること
を察している者も数人いる。魔力を吸い取られたことが堪えたのか、
ゼストは今でもかなり呼吸が浅い。彼の影にいるレジアスはどうか

分らないが、ダンテは首筋に手を当てて差すり、

「上にいる“臭え”やつは何だよ」

ドンッ！！！！

ダンテが“臭い”と言った途端。彼の顔前： 一步前の場所に“赤い柱”が突き刺さる。いや、柱ではない。天井を突き破った“尻尾”だろうか。

「ダアアンテエエー！！！！」

そうこうしてる間に天井は融解し、蜘蛛と蠍を掛け合わせたような“炎の悪魔”が顔を覗かせる。

「あれって……！」

会場にいる人間は一斉に悲鳴を上げ、パニックに陥る。その中でもはやて達は冷静な部類に入るだろうか。焦っていないと言えば嘘になるが、天井から飛び降りた悪魔は地響きを起こしながらダンテの前に着地する。

「ファントム……！！」

「シグナム？」

掠れたような声を出したのはシグナムだった。聞き取れるかどうか厳しくも、かなりの怒気を感じさせる声にはやて達も彼女を見るが、無理もないだろう。

【やはり気付いていたか…】

「ささ、流石だね」

スカリエツィとアグナスが言ったのにダンテは返さず、「当たり前だ」と言わんばかりに鼻で笑う。一方でシグナムは、ベリアルとファントムに死傷された人々を助けることが出来なかった経験がある。それはフェイトも同様だが、近くにいただけで身を焼かれそうな熱気に成す術はない。

「久しぶりだな、ダンテエエ…!!」

しかも、ファントムとの距離が1mもないダンテなら尚更のはず。しかし、彼は汗一つ掻かずにファントムを… いや、ファントムの先を見据える。

「テメエを殺す為に地獄から帰って来たぜ…! ギャハハハハハハ
—————!!」

「くっ…!」

ファントムの大声でよく聞こえないが、アグナスが「少し出番が早まったが良いだろう…」と言っていたように聞こえるが、シグナムは拳を握り締め、ファントムと向き合っているダンテの背中を見る。

「ダンテさん…」

「あの悪魔…!」

【紹介が遅れたね… 彼の名はファントム…】

外にいるのはとフェイトが頭上のモニターを見上げれば、ファントムの映像がアップで映されながらもスカリエッティの声が響く。

【魔界貴族の中でも最上位に位置する悪魔… 幽玄なる火炎蜘蛛、ファントムだ…!!】

【きき…君達は、だ、だ、“第一級危険視アンノウン”なんて、なな… 名前ですよ…呼んでいるようだがね?】

スカリエッティが説明し、管理局が付けたファントムの名称を付け加えるアグナス。彼らの音声が伝わる中で、ファントムは尻尾がトグロを巻くようにして仕舞い、蠍から蜘蛛の姿になった。

【ヒヤハハハッ…!】

青い目を複数に持つファントムが二本の牙を生き物のように蠢かせるが、ダンテ目の前に敵がいようと態度は崩さずに伸びてきている顎の無精髭に触っている。

【ビビって声も出ないか!? 情けねえな、ダン…!】

【その足、どうした?】

人質を取られているせいで動けないダンテを嘲笑うかのようなファントムだったが、右前足が一本足りないのをダンテは見ている。

【そっぴやべリアルも“尻尾”が無かったが… どっかに忘れて来たのか?】

「あ…！」

「そう言えば…」

ウェンディのエネルギー弾に囲まれているティアナとキャロも思い出した。自分達が戦っている時は気付かなかったが、ダンテがベリアルと戦っていた時に分かったこと。

ベリアルは尻尾が“千切られた”ような痕があった。

【先日 色々とあつてね…】

【スカリエッティ…！！】

スカリエッティがそう言うと、新たなモニターが展開し、ネロが闇魔刀でファントムの前足を斬り落とす画像が表れる。しかし、彼のその行動が気に食わなかったのか。

【余計なものを見せるな…！！】

ファントムの目が“赤”に染まり、熱気が一層に増す。

【あのガキはコイツの次に殺す…！！　ズタズタに引き裂いて、後片も残らないまで焼き殺す…！！】

【おっと、それは失敬…】

そう言うと、スカリエッティはネロが映っていたモニターを消す。

「今のって…」

だが、その映像を見たフェイトの目には、モニターの片隅に自分が倒れているのを見つけていた。

「やつぱり……」

（あの時にネロが……）

彼は覚えていないと言っていたが、ネロが自分達を守る為にベリアルと戦っていたのは間違いではなかった。しかも、空から飛来したファントムとも。自分などよりも遥かに重傷だったあの怪我は、自分達を助ける為に負ったものだったのだろうか。

（へえ……）

「坊やにやられたか……」

呟くように言ったダンテは、「あいつもやるな……」と付け足し、不敵に短く笑う。

「昔の俺でも傷付けられなかったのに……」

「テメエエ……ッ！！」

良いことを聞いたと、ダンテは態度で表す。7年前に自分が戦った時は、小さな傷を付けるのがやっとだったと言うのに、ネロは“斬り落とした”のだから。だが、それを良しとしないものがある。

「自分が今　どんな状況か分かってるのか!？」

ファントムである。ダンテに倒され、ネロに前足を斬られて退散し、再び相見えた魔剣士の血族。人質を取られても動じず、笑っているような男を良しとしない。

「まあな…」

ドンッ！！！！

またダンテは笑った。その瞬間、ダンテの足元から火注が立ち上る。

『ダンテさん！！！！』

バリアジャケットを装着しているとはいえ、確実に耐えられないだろう。はやて達が声にならない悲鳴を上げ、会場にいる他の人間が自分達の所まで伝わってくる熱気から逃れようと騒ぐ。

【ファントム…】

「良いだろ、どうせ！」

鬱憤を晴らしたファントムだが、スカリエッティとアグナスは呆れているよう。

「俺は立場ってものを分かせてやったただけだ！」

「わわ、分かってないね…」

耳障りな笑い声が地上本部一帯に響き渡るが、二人が言いたいのはそのではない。

「や、や、や… 奴が…」

【彼なら“この程度”の炎など、ものともしないよ】

「アア!？」

アグナスが言葉につかえるので、スカリエッティが割り込んで話す。

【忘れたのかい？ 何せ彼は…】

憤慨するかのようにファントムの口調が荒くなる。そして、ファントムが振り返り様に見たのは…

【…“地獄の業火”に堪えた男だよ…!】

「なっ!!?」

無傷のダンテだった。バリアジャケットの耐久性を持っでも耐えられる筈がないのに、次第に弱まって行く火注から視線を移し、静かに口を開く。

「…ザコは退いてな」

…

「…暇だな」

時は戻り、2日前のこと。

（坊やはどっか行っちゃまし…）

彼は聖王教会から戻り、はやてから借りた陸士服のボタンを全開にして隊舎の食堂にいる。無論 ネクタイは締めていない。

（美人の姉ちゃんに預けて来ちまったし…）

隊長陣のはやて達に連れられてカリムに会いに行つたが、エボニーとアイボリーを“保管”してもらう為に渡し、現在はピザとストロベリーサンデーも食べ尽くし、椅子の背凭れに身を任せている。

——その銃、ちゃんと扱ってくれよ。分解とかしたら、俺でもキレるから

——いや、しませんから…

——丁重に預かるだけって何度も言ってるじゃないですか…

数時間前に愛用の二丁銃をシャツハが受け取り、あまりの重さに驚いていたが、心配しなくても大丈夫であるとはやてが言葉を加える。彼女達はダンテがキレたらどうなるか知らないが、山を消し去る程の魔力を込めた弾丸を撃ち出す男である。引き吊った顔だったのをダンテは覚えていた。

「…訛っちゃうな…」

前線メンバーは、明日 公開意見陳述会が行われるというので忙しそうにしていた。ここにはいない。しかも、今夜には地上本部の方に行くらしい。溜め息混じりに言ったダンテは、自分の部屋でギターケースに入れてあるリベリオンを取ってこようと立ち上がった。

「…よお」

「こんにちは…」

いつになく人が少ないように感じる隊舎の廊下を歩き、外で適当な運動… もとい暇を潰していたダンテだったが「詰まんねえ」の一言で終了し、部屋にでも戻ろうとしていた時、ぱったりヴィヴィオと鉢合わせする。

（姉ちゃんは二人とも手一杯だったから…）

「一人でどうした？ いつもなら寮母の…」

「アイナさん、いま いそがしいって」

それならザフィーラが相手をしている筈だが、そつちははやてに呼ばれたらしく、現在ヴィヴィオは一人ぼっちらしい。

「坊やに相手してもらってたんじゃないのか？」

「おにいちゃん、いない」

ネロが取り合っていたのではないかと思うが、どうやら違うらしい。相変わらずダンテがネロのことを“坊や”と呼ぶが、そのこともここ数日でヴィヴィオは理解していた。

「あいつ、どこいったんだよ…」

自分がカリムと話していた間はネロがヴィヴィオと“犬耳と尻尾のある子供”… 要するにフェイトの使い魔であるアルフの相手をしていただが、六課に帰って来た一時間ほど前に姿を眩ましている。

「…もしかして、遊ぼうとしてたのか？」

見れば、ヴィヴィオの手にはボールがある。完全に一人遊びをしようとしていたようで、ダンテへの返事として一度頷く。

「また坊やのバイクにでも乗せてやりたいところなんだが…」
（参ったな…）

先日 街に行った時はネロがバイクを運転し、後部座席にダンテ。彼の膝の上にヴィヴィオが座る形だったがそのような無茶な乗り方をしたのはさて置き、勝手に乗ったらネロが怒るだろうと思い、違う案を出そうと頭を捻る。

「…ボール遊びか…」

…… 2分後……

「あれって…」

「ダンテさんとヴィヴィオ？」

廊下を歩くダンテとヴィヴィオの姿をアルトとルキノが見つけるが、ヴィヴィオは少しばかりスネているように見えた。

説明するが、ヴィヴィオとダンテがボール遊びをしていたものの、勘がいい人ならば察しがつくだろう。

「どうかしたの？」

「…おじちゃんがボール無くした」

「無くした？」

簡単に言えば、リフティングしていたダンテをヴィヴィオが煽て、調子に乗った彼がボールを思いっきり蹴り上げたのである。

「海に落としたんですか？」

「いや、あつちに……」

無くしたと言っても、小ざつぱりした隊舎の前でボールを見失う筈がない。二人は屈んでヴィヴィオの話を聞き、ダンテからボールの行方はどこに聞くと彼は天井を指差す。

「あつちつて……」

「屋上……じゃないですよね？」

「いいや」

それなら無くした内に入らない。ダンテと話が噛み合わないが、

「……ちょっと待って下さい……」

「まさか……」

「その“まさか”だ」

漸く一つの解答に辿り着く。

「……宇宙まで飛んでったばいな」

顔をヒクつかせる二人に「真つ二つにならないように加減はしたんだけどよ」と補足はするものの、ヴィヴィオがズボンの裾を引っ張っているのに気付कि、ダンテはその場を跡にする。

「まけんし……」

時は再び戻り、アイナと共にモニターを見ているヴィヴィオが呟く。

【ギヤアアアアアアアア！！！！！】

「見ちゃダメ！！」

ファントムの下に潜り込んだダンテは、リベリオンを突き立てつつも片腕一本でファントムの体を持ち上げる。モニター越しに会場の人間の悲鳴が聞こえ、溶岩のような血を噴出する悪魔を見せない為にアイナがヴィヴィオの目を塞ぐ。

「テ……メエエ……ッッ！！」

「何だ……」

目が赤と青に点滅するファントムがジタバタともがき、背中の尻尾を振り回す。会場が荒れ狂い、ガラスが割れる中でダンテは口元を吊り上げ、

「……思ってたのより軽いな。筋肉しか詰まってねえと思ってたけど、中身はもつとシヨボいもんかよ……」

「ガアッ！！？」

悠に数トンはある筈のファントムを剣に突き刺したまま振り払い、
ガラス側の方に投げ飛ばす。

「貴様…！」

「ダン…ッ…！！！」

盛大な音をたてながらガラスが割れ、危うくファントムの下敷きになりかけたアグナスが声を荒げ、火球を吐き出そうとするファントムだが…

「っっ！！！！」

幽玄の名を持つ最上級悪魔が目にしたのは、リベリオンの切っ先に
禍々しい真紅の魔力を纏った狩人の姿。

「そろそろお開きだ…！」

（なっ…！！？）

その言葉を皮切りに、ファントムの頭が消し飛ぶ。だが、彼は死に
際に確かに目にした。

（“スローネ”なんてレベルじゃねえ…！！）

ダンテの殺気が作り出した、彼の中にいる悪魔…“四本角”の悪魔
を。

} 第15節予告 }

Talking: ダンテ

聞いて損はしないって言ってたけど、聞くだけ無駄だったな。あいつの耳障りな声でノイローゼにでもなっちゃうかと思ったよ。つか、体中が痒いんだけど…これがアレルギーってやつか？ ジンマシン？

え？ あ、あれ爆発すんの？ 馬鹿だな。俺が考えもなしに動いたと思ってるのかよ。大丈夫だって、ソッコーで引っこ抜いて投げ飛ばすから。

え？ だんまり？ いや、喋るのがダルかったただけだけど… どうかしたのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1756j/>

～ Devil May Cry 《storys MID-CHILDA》 ～

2010年10月10日23時55分発行